

D J 27住居跡（第 9-3図）いずれも須恵器で、坏2、大甕1の各破片を得た。坏は回転糸切り・無調整のもので、大甕は内外とも叩き目が顕著である。平安時代と思われるが、時期の特定はなしえない。

D J 50住居跡（第 9-2,3図）床面上からは、すべてロクロ不使用の土師器を得た。甕は長胴と思われるもの8（口縁部外4、底部4）、球胴と思われるもの3からなる。口縁端部が直口気味になるものと、そうでないものの二者がある。球胴のものは中～小型である。調整技法は他に共通し、刷毛目・横ナデ・篋ケズリ・篋ミガキが盛行する。球胴の体部外面には篋ミガキが顕著に認められる。肩部の段乃至稜には、顕著なものと、痕跡化したものの二者がある。

坏は4個体分得た。いずれも丸底で、体・底部境界の段は明瞭に認められ、小型のものである。体部外面は横ナデ後篋ミガキ、底部は篋ケズリのみのもので、それに篋ミガキが加えられるものがある。内面はいずれも篋ミガキ後黒色処理される。

埋土中からは、ロクロ不使用土師器甕底部1、坏2を得た。いずれも床面上出土のものによく類似する。他に須恵器中～小型壺1も得た。内外とも叩き目がよく残り、内面のそれは同心円状や青海波状のものである。

埋土中出土のものも床面上のものと同様に見做すと、この組み合わせは国分寺下層式の典型例に近いと思われるので、一応そのように見做しておく。なお床面上出土のものみの土器の組みあわせ（須恵器欠落）をとると、国分寺下層式期の若干古い部分となる可能性をもつ。いずれにせよ奈良時代半～後半のものと考えておく。

D J 62住居跡（9-4図）埋土中からロクロ不使用土師器甕1のみを得た。肩部に軽い稜の走る長胴型で、口縁端部は軽く直上する。口縁は内外とも刷毛目後横ナデ、体部外面は刷毛目後篋ミガキ、内面は篋ナデがそれぞれ施こされる。組成が不明なので正確は期しがたいが、一応国分寺下層式相当のものを見做しておく。

E A 12住居跡（第 9-4～7 図）極めて良好な組成の形で多数を得た。床面上からはロクロ不使用土師器のみを得た。甕は長胴8、中～小型2、球胴4の計14個体分からなる。長胴のものは最大径が胴部中位にあり、肩部に軽い稜をもち、かつ張り出しの顕著でない底部をもつ。調整技法は刷毛目・横ナデ・篋ミガキ・篋ケズリなどからなり、他に共通する。口縁端部が直上気味になるものが目立つ。中～小型のものも器形以外の諸点は長胴に共通する。体部外面の篋ミガキは入含である。球胴のものも、口縁端部の形状・調整技法は長胴のそれに共通する。体部外面の篋ミガキが顕著である。なお体部外面全面に赤色顔料が塗彩され、かつ口縁部内外面に縦位の赤色顔料による線描が施こされるものもあり、特徴的である。

坏は3個体を得た。いずれも小型・丸底で、体・底部境界の稜乃至段は極めて下位にある。

体部外面はナデ・刷毛目の後に篋ミガキが加えられ、底部は篋ケズリあるいはその後に篋ミガキが加えられるものなどがある。内面に入念な篋ミガキの後に黒色処理が行なわれる。

次に埋土中出土のものをみると、ロクロ不使用土師器甕は、長胴6、中～小型のもの2、球胴のもの3の計11個体分を得た。体部下半外面に篋ケズリが目立つとも見える。同じく坏は3個体出土し、床面上出土のものにほぼ同一である。同じく小型手づくね土器(盃状)1も得た。手指の押圧による凹凸が激しい。須恵器は坏1のみを得た。径13cm前後、器高3cm前後と小ぶりなものである。ヘラ切り・無調整である。

以上の(埋土出土のものも総合した)土器組成は国分寺下層式のそのの典型例と見做しうる。とりわけ球胴甕の口縁部の赤色線描・盃状の小型手づくね土器・ヘラ切り・無調整の須恵器などの組みあわせは、この該型式土器の指標になしうるものである。なお床面出土のもののみ(須恵器欠落)を採れば、国分寺下層式の若干古い部分に相当する可能性をもつ。いずれにせよ奈良時代半～末にかけこのものと見做して大過あるまい。他に床面上から砥石・鉄製刀子各1も得た。

E A 21住居跡(第9-8～10図)床面上・カマド中からは、ロクロ不使用土師器のみを得た。甕は長胴のもの6、中～小型のもの3、球胴のもの3の計12を得た。長胴の最大径部位・口縁端部形状・底部形状などはE A 12住居跡のものに極似する。器面調整技法の刷毛目・横ナデ・篋ナデ・篋ミガキ等も同様である。中～小型のものの内面は篋ケズリ様のものが施こされ、特異かつ特徴的である。球胴のものには良好な資料がないが、これも先との共通点が目立つ。とりわけ口縁部内外両面への縦位の赤色線描などは同一といってもよい。坏は体・底部境界に段乃至稜をもつ丸底のもの3と、それをもたず半球状のもの1、同じくそれをもたずかつ篋ケズリによって平底風にされたもの1の計5が出土した。器面調整技法は、最前者では体部横ナデ後篋ミガキ、底部篋ミガキ、半球状のものは全面篋ミガキ、最後者は体部横ナデ後篋ミガキ、底部篋ケズリが施こされる。内面はいずれにあっても入念な篋ミガキと黒色処理が行なわれる。

次に埋土出土のものをみると、各種のものがある。まずロクロ不使用土師器は、体・底部境界に稜をもつ丸底の坏1、平底風のもの2の計3個体を得た。床面上他出土のものの特徴に一致する。ロクロ使用のそれとしては、回転糸切り・手持篋ケズリ調整した坏1(内面篋ミガキ)口縁部～体部上半に叩き目をもち、下半を篋ケズリした小型甕1などを得た。

須恵器は坏が主体であり、手持篋ケズリ調整のもの1、回転篋ケズリのもの1、篋切りのもの1、回転糸切・無調整のもの2、その他口縁部のみのもの3の計8を得た。

床面他出土の土器組成は、国分寺下層式期のそれに大略合致する。とりわけ赤色線描の球胴甕の存在は貴重である。埋土出土のものには若干新しい要素も混在するので、床面土出土のものとは区別しておく。ただしこの種の須恵器組成は、平安時代初期のそのの特徴を良好に示すものである。

E C 56住居跡（第9—11図）床面上からは、まずロクロ不使用土師器（坏1・甕1）2を得た。坏1と思われるものは細片であるが、内外とも入念に篋ミガキされる。長胴甕は、下半のみで、外面篋ケズリ・内面篋ナデ、底面篋ケズリが施こされる。

ロクロ使用土師器は長胴甕1、中～小型のそれ2の計3を得た。外面にはロクロ成形痕・下半に篋ケズリが顕著であり、内面にはカキメをもつものもある。

赤焼土器は坏1であり、回転糸切・無調整である。器形は須恵器のそれに共通する。

須恵器は坏3、大甕破片3からなる。前者のうち篋切2（可能性あるもの1を含む）、回転糸切り1を含む。大甕は内面に叩き目が少ないもののみである。

他に用途不明の有孔の土製品1を得た。破片でもあり詳細不明である。

以上の各遺物が組成をなすか否かは若干疑問のあるところであるが、少なくとも須恵器坏の切り離し技法の組み合わせは、平安時代初期の特徴に合致しており、一応その時代と見做しておく。

E D 27住居跡（9—10図）床面上他からは、ロクロ使用土師器甕2、須恵器大甕破片1、坏破片2をそれぞれ得た。前者は、口縁が単純に外反するものと、外反後直上するものの二者からなる。後者は内面の叩き目の顕著でないものである。最後者は回転糸切り・無調整である。

埋土中からは、同様の長胴甕、回転糸切・無調整の須恵器坏1などが出土している。

以上の組み合わせは平安時代のものであるが、時期の特定は避けておく。

E E 50住居跡（9—12図）床面上からはロクロ不使用土師器のみが出土している。長胴甕は肩部に稜が走り口縁端部がやや直上するものを2個体得た。器面調整は刷毛目・篋ミガキ・横ナデが盛行し、他に共通する。底部張り出しも不明瞭である。坏は体・底部境界に軽い稜の走るやや深めの丸底のものである。体部横ナデ後一部篋ミガキ、底部篋ケズリが施こされ、内面は密な篋ミガキと黒色処理が行なわれる。

埋土中からも、上と同様の長胴甕1、中～小型のそれ1、鉢（平底で、坏と同様の稜をもち、内面黒色処理）3などが得られた。最後者の外面は入念に篋ケズリ後篋ミガキされる。

以上の土器組成は国分寺下層式のそれに極似し、奈良時代半～後半という年代を想定しておく。

E I 62住居跡（第9—13図）床面上その他からはロクロ不使用土師器を得た。甕は長胴1、中～小型のもの1の2個体である。器形の特徴・口縁端部の特徴・器面調整のそれは他に共通する。他に盃状の小型手づくね土器1がある。

以上の土器組成は大略国分寺下層式のそれに合致する。とりわけ盃状の手づくね土器はこの型式の指標の一つになりうるものであった。奈良時代半～後半を想定しておく。

E I 50 P.(第 9—13 図)ロクロ不使用土師器長胴甕 1 を得た。最大胴径の部位・口縁端部の形状・肩部の稜・底部の形状等の器形上の特徴、刷毛目他の調整技法は他に共通する。国分寺下層式類似のものと見做しうるので、一応奈良時代半～後半を想定しておく。

以上のように本遺跡出土の遺物類は、国分寺下層式想定のもの（奈良時代半～後半）、平安時代初期のもの、時期特定はできないが平安時代のものの三者に大別しうることになる。その様相は最近明らかになりつつある北上川中流域の該期の土器群のそれにほぼ一致するものであり、何ら特異な現象は認められない。とりわけ国分寺下層式相当のもの類例としては極めて良好なものといえ、その点を強調し例示しておく。

古代の遺物に関する補足

文中に国分寺下層式相当、あるいはその古い部分云々の記述をしたが、それについて補足する。まず国分寺下層式の古い部分とは、筆者らの土器区分の仮称 7-a 群に相当するもので、水沢市玉貫遺跡、同石田遺跡 C i 30 住居跡、他の出土資料を標式とする。^(註1) 器種組成は土師器甕(長胴・中～小型・球胴)、甌(多孔式・無底式) 坏、高坏、壺などからなるが、高坏・甌の影がうすい。甕は前代に比し肩部無段・底径の大なもの・最大胴径が中位にあるズングリ型のもの・底部張り出しの不明瞭のものが増加する。坏は大型に加え小型のもの・平底風のもの・体～底部境界の段の形式化したもの、などが増加する。球胴甕口縁への赤色線描も開始される。須恵器共伴例は稀である。大略以上のものである。

次に国分寺下層式相当とは、同様に仮称 7～6 群に相当し、水沢市石田遺跡 Da 30・Dd 03 住居跡、江釣子村猫谷地 BF 21 住居跡、北上市尻引遺跡第 1・4 号住居跡、江刺市力石 II 遺跡 C-1 住居跡、同兔 II 遺跡 K-1 住居跡、同落合 III 遺跡 E-1 住居跡、紫波郡紫波町稲村遺跡 H-10 住居跡、北上市藤沢遺跡、水沢市東大畑遺跡等の出土資料が該当する。先に示した器種組成・器形・施文の特徴がより顕著になり、坏の無段・平底化・小型化傾向もより顕著になる。そして決定的特徴として、日常容器的須恵器が、器種組成の中にきちんと組み込まれることがあげられる。須恵器の器種には種々異同があり、一様ではない。

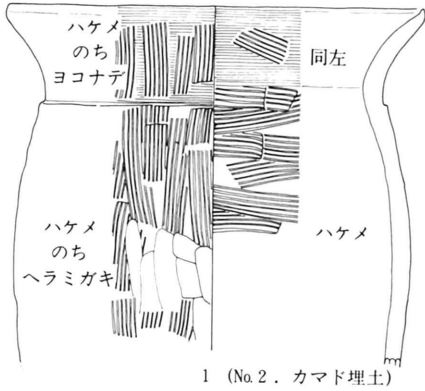
大略以上がその内容である。これらには一応 8 世紀半～後半(末) という仮の年代観を与えている。これらの土器群と本遺跡出土資料を対比させて、既述のような一応の区分を行なったものである。^(註2) なおこれらの略述はすでに行なったところであった。^(註3)

註1 岩手県文化財調査報告書第56集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書一Ⅶ—(石鳥谷・花巻地区) 昭和56年 岩手県教育委員会・日本道路公団。

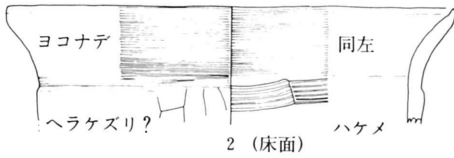
註2 古い部分としたものについては、8世紀前半代にまでさかのぼりうるのではないかと考えている。今後の資料の増加にまちたい。なお、国分寺下層式期を8世紀代の全般にかかわるものと見做す見解が宮城県においても公表されている由である。それらとの比較検討が必要である。

註3 註1に同じ。

以上の結果を時期別に示すと第9-14図のようになる。遺構の組みあわせの変遷その他については別にふれてあるので詳述はしない。岩手県南部の奈良時代後半～平安時代初の集落遺跡には、連続性を示すものと、そうでないものがある。当地域の猫谷地・尻引遺跡などは、本遺跡とともに前者の好例である。連続性の異同も検討されるべき課題である。

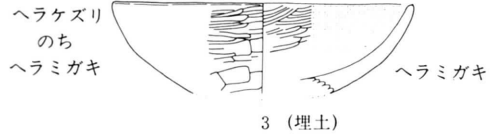


1 (No.2. カマド埋土)

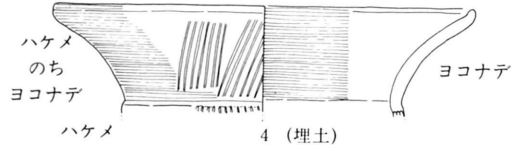


2 (床面)

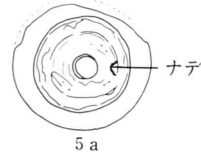
D A 24住居跡 (1・2)



3 (埋土)



4 (埋土)

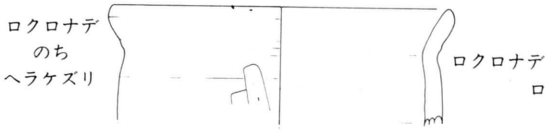


5 a



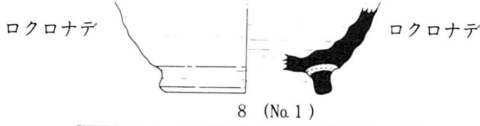
5 b. (床面)

D D 18住居跡 (3~5)

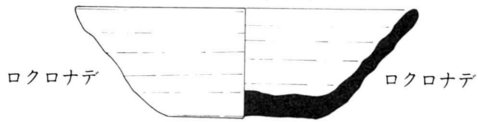


6 (b層)

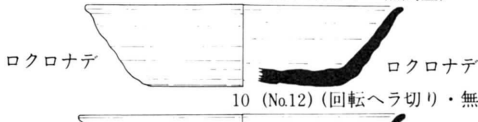
D G 24住居跡 (6)



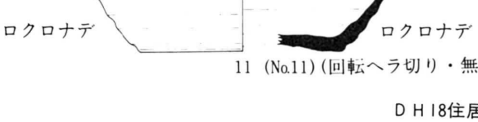
8 (No.1)



9 (回転糸切り・無調整)

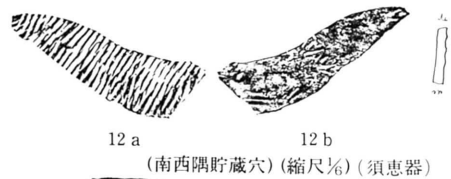


10 (No.12) (回転ヘラ切り・無調整)



11 (No.11) (回転ヘラ切り・無調整)

D H 18住居跡 (7~13)

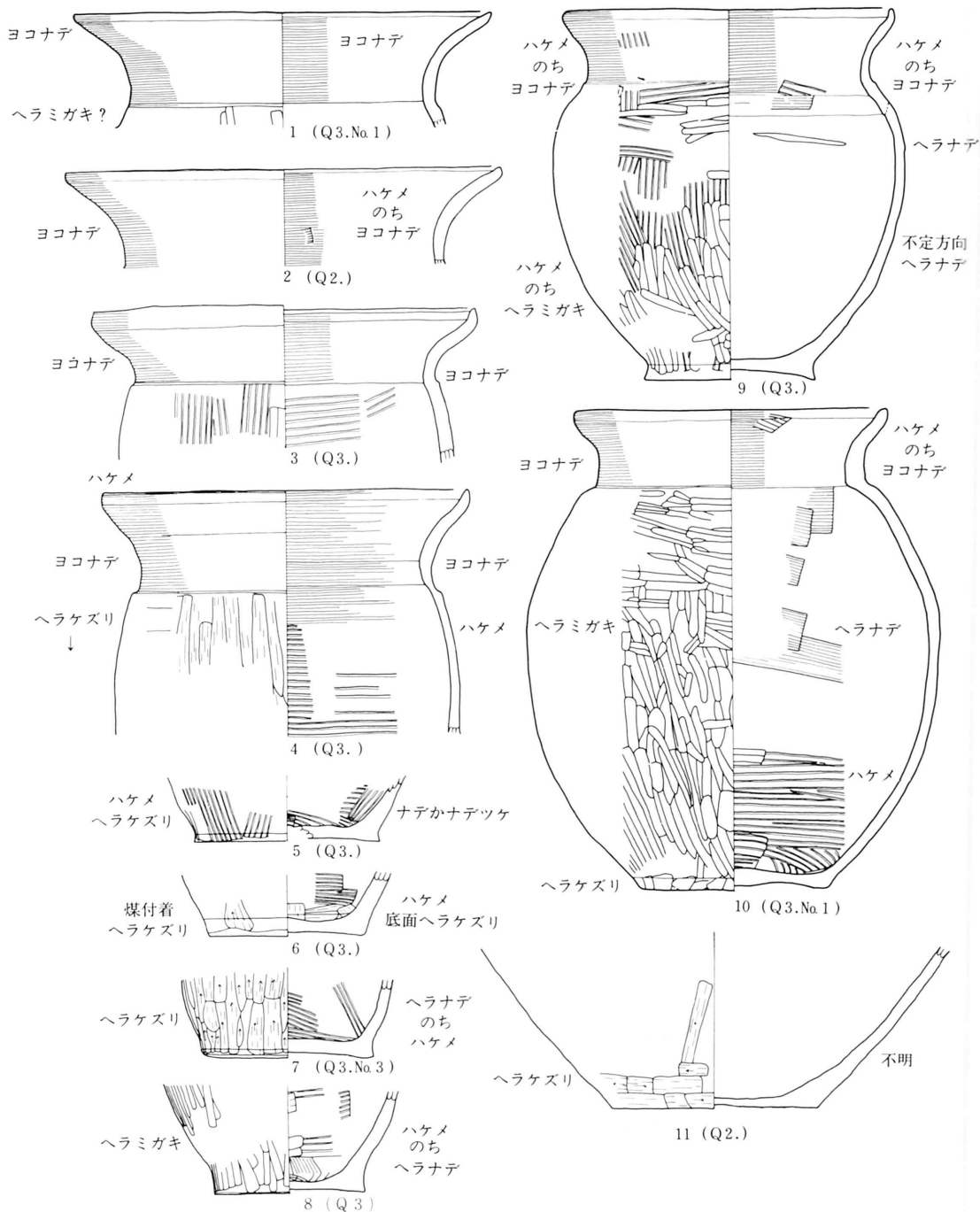


(南西隅貯蔵穴) (縮尺 $\frac{1}{6}$) (須恵器)

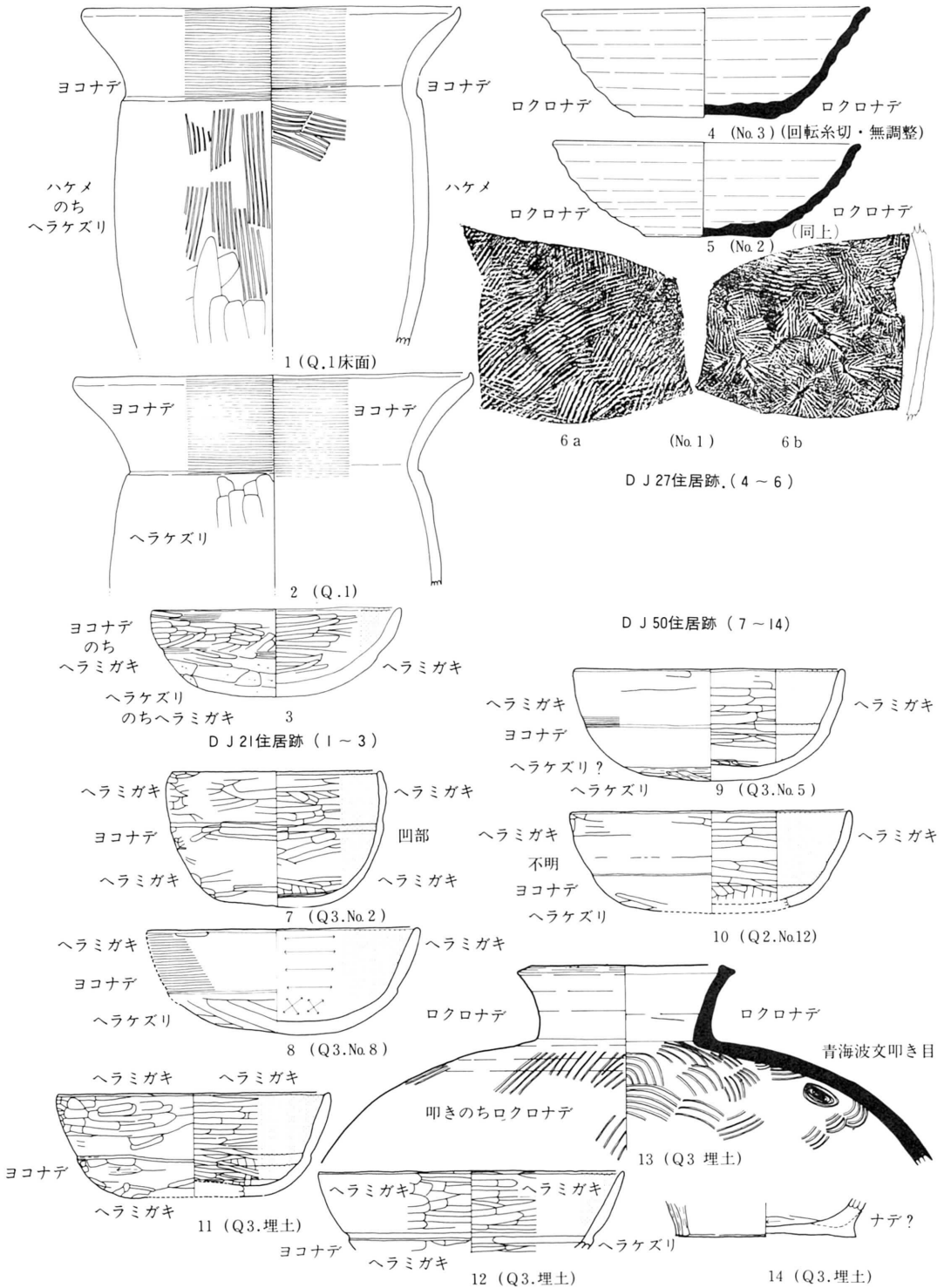


13 a (No.2) 13 b (縮尺 $\frac{1}{6}$) (同上)

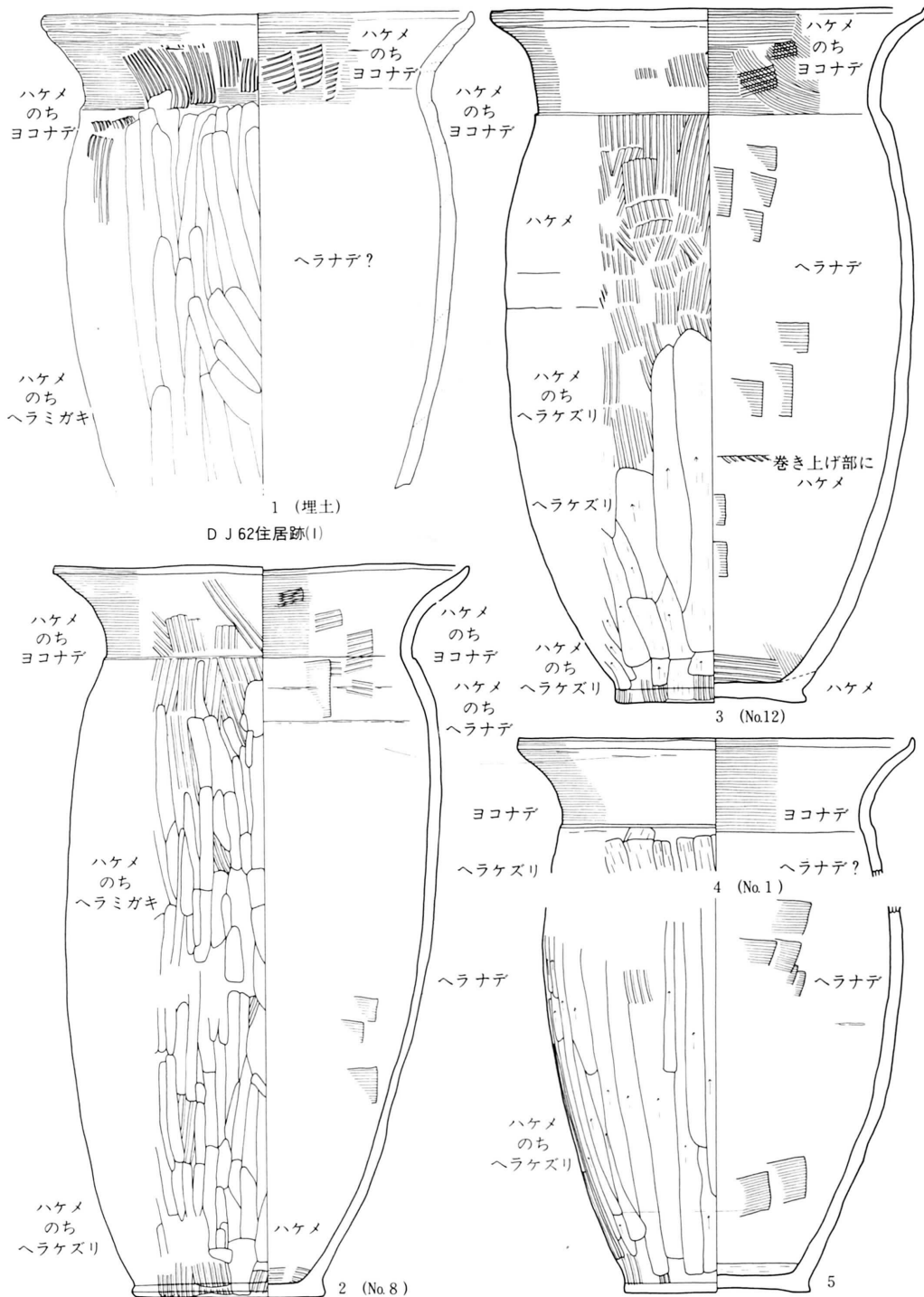
第9-1図 D A 24住居跡・D D 18住居跡・D G 24住居跡・D H 18住居跡出土土器
(以下の縮尺は約 $\frac{3}{10}$)



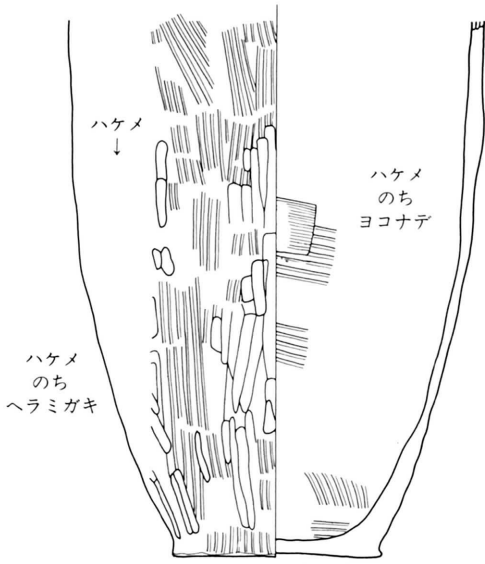
第9-2図 DJ50住居跡出土土器(1)



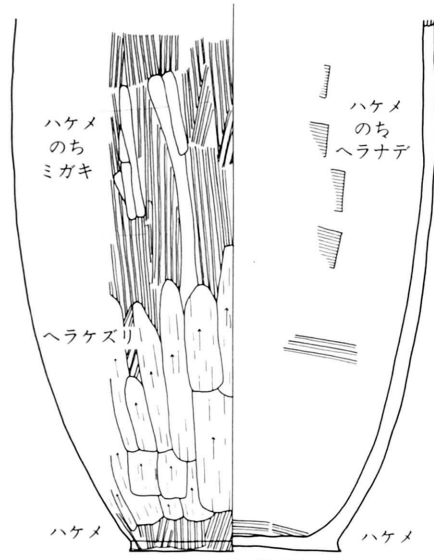
第9-3図 D J 21住居跡・D J 27住居跡・D J 50住居跡出土土器



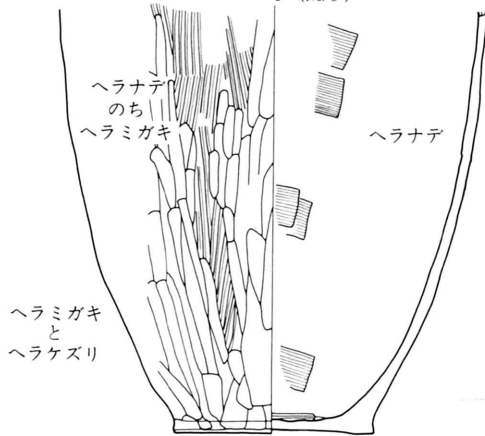
第 9 - 4 図 D J 62住居跡・E A 12住居跡出土土器(I)



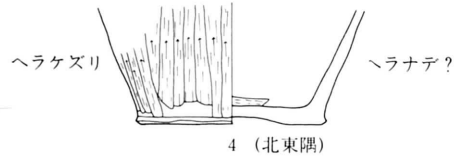
1 (No. 6)



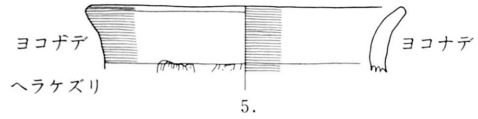
3 (No. 7)



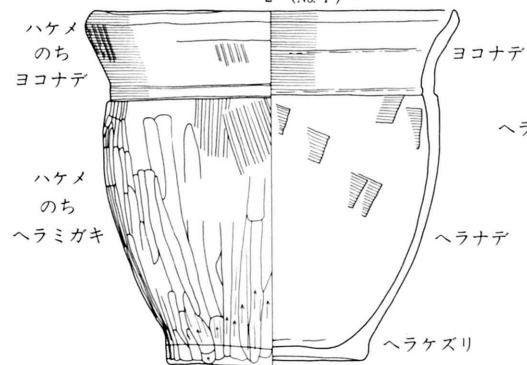
2 (No. 4)



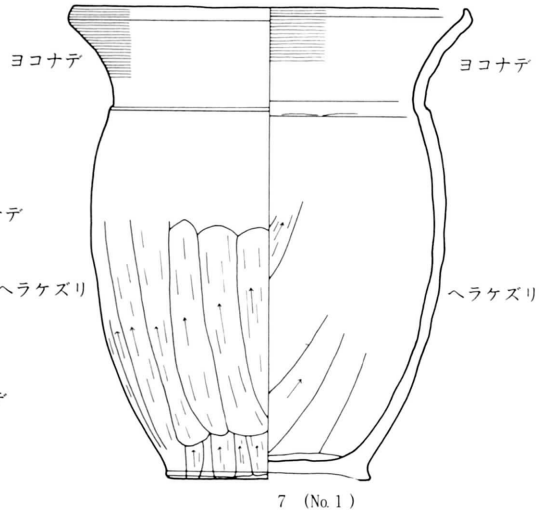
4 (北東隅)



5.

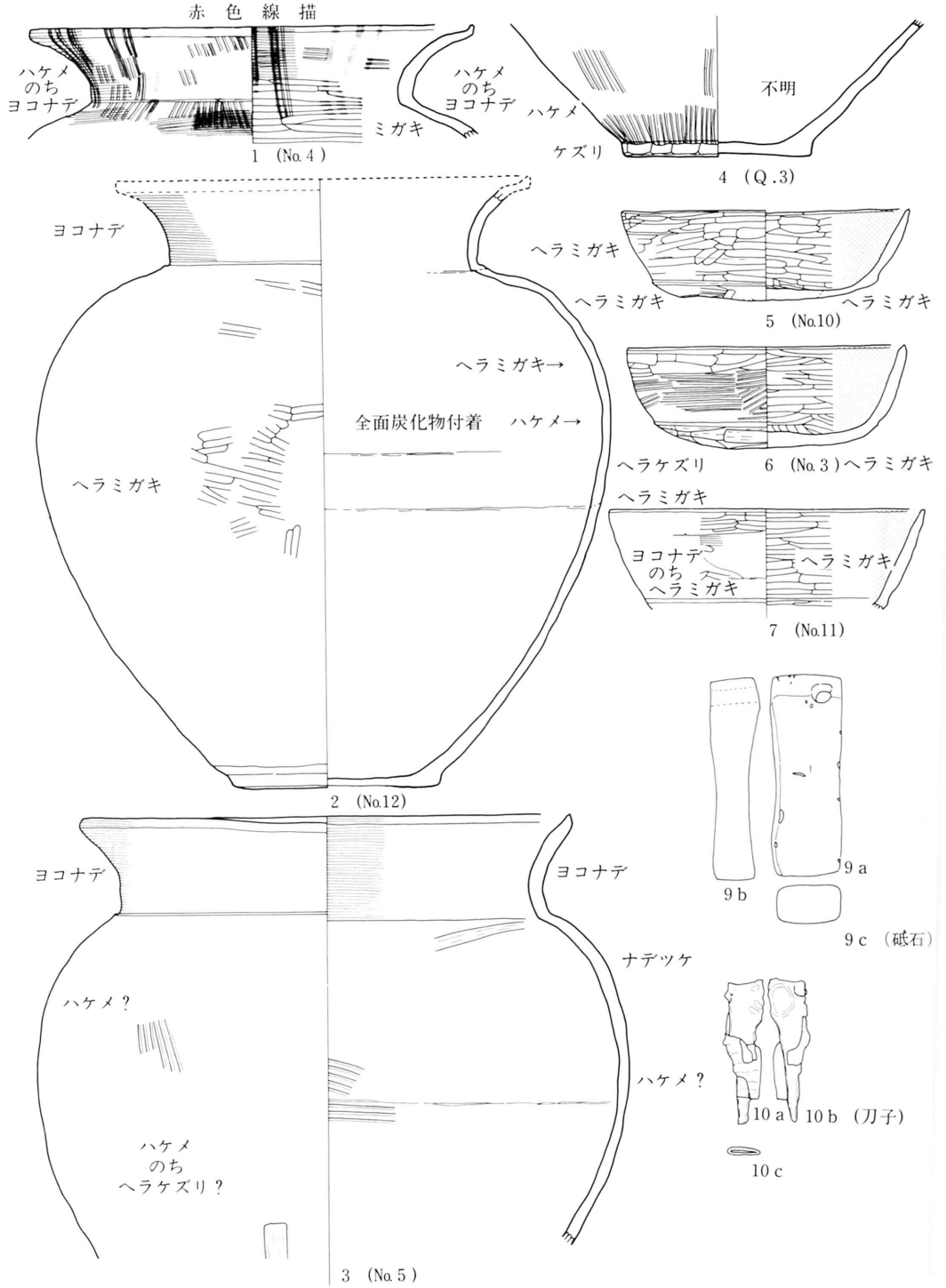


6 (No. 1)

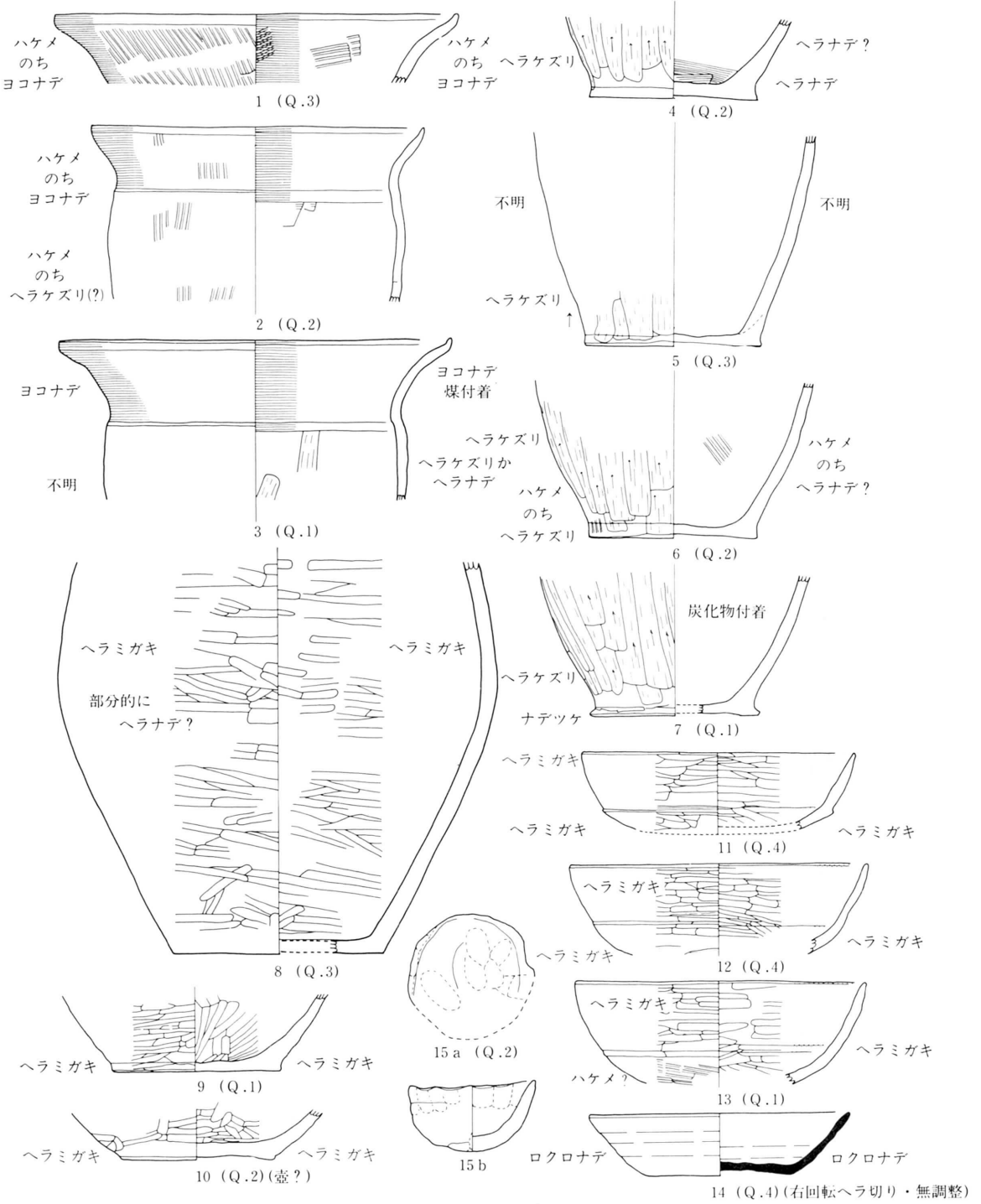


7 (No. 1)

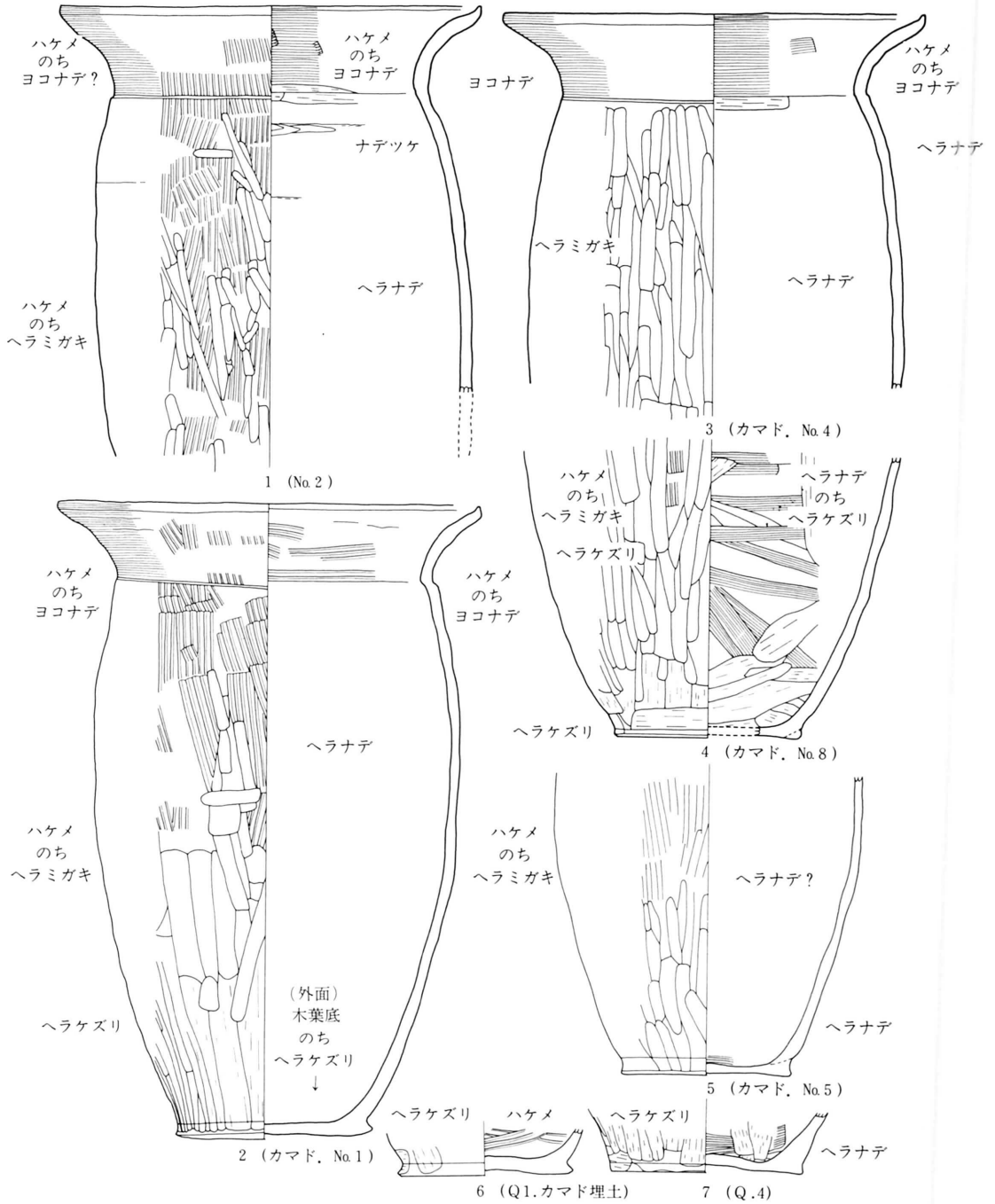
第9-5図 E A 12住居跡出土土器(2)



第 9 - 6 図 E A 12 住居跡出土土器(3)・石器・鉄器

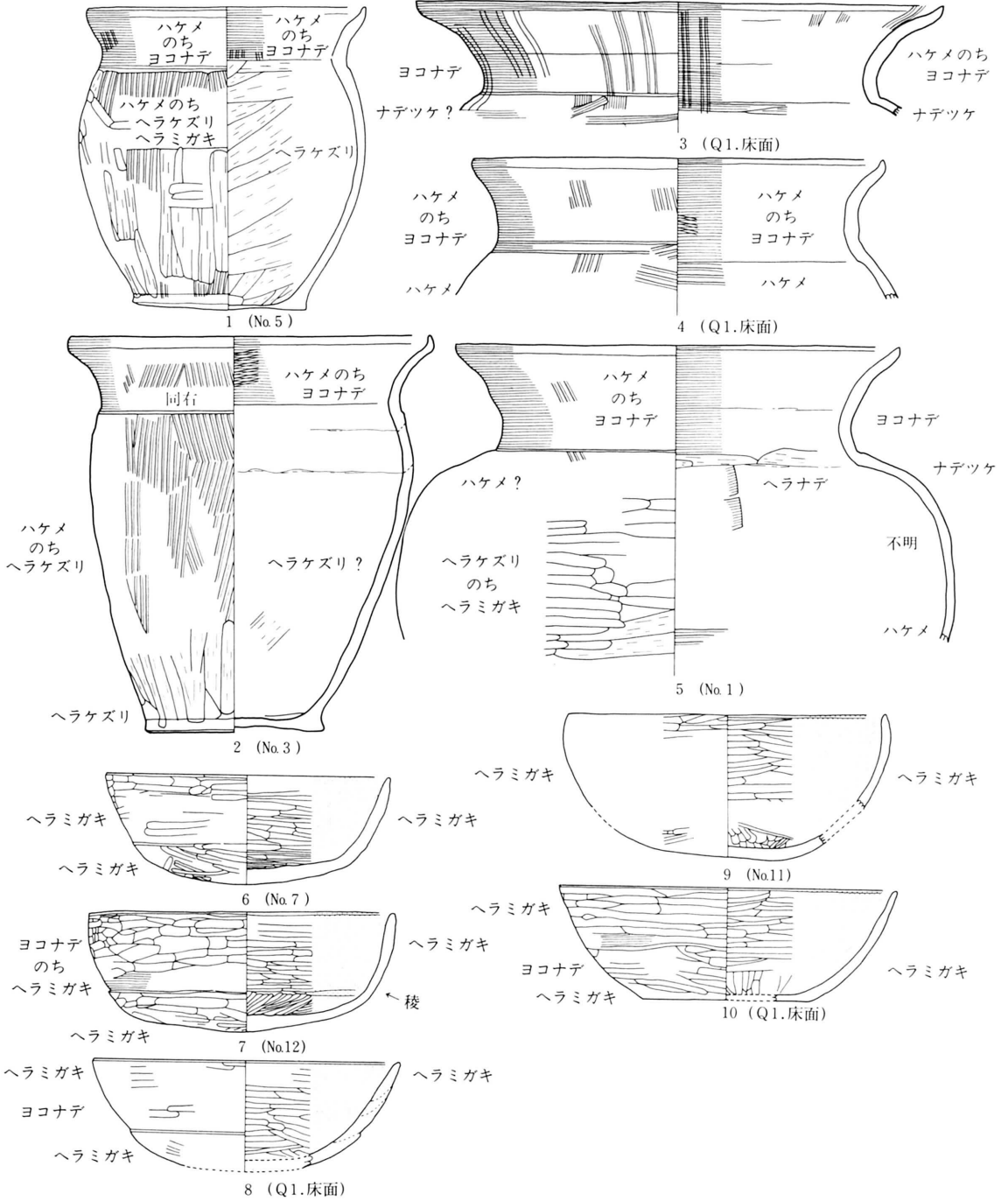


第9-7図 E A 12住居跡埋土出土土器 (4)

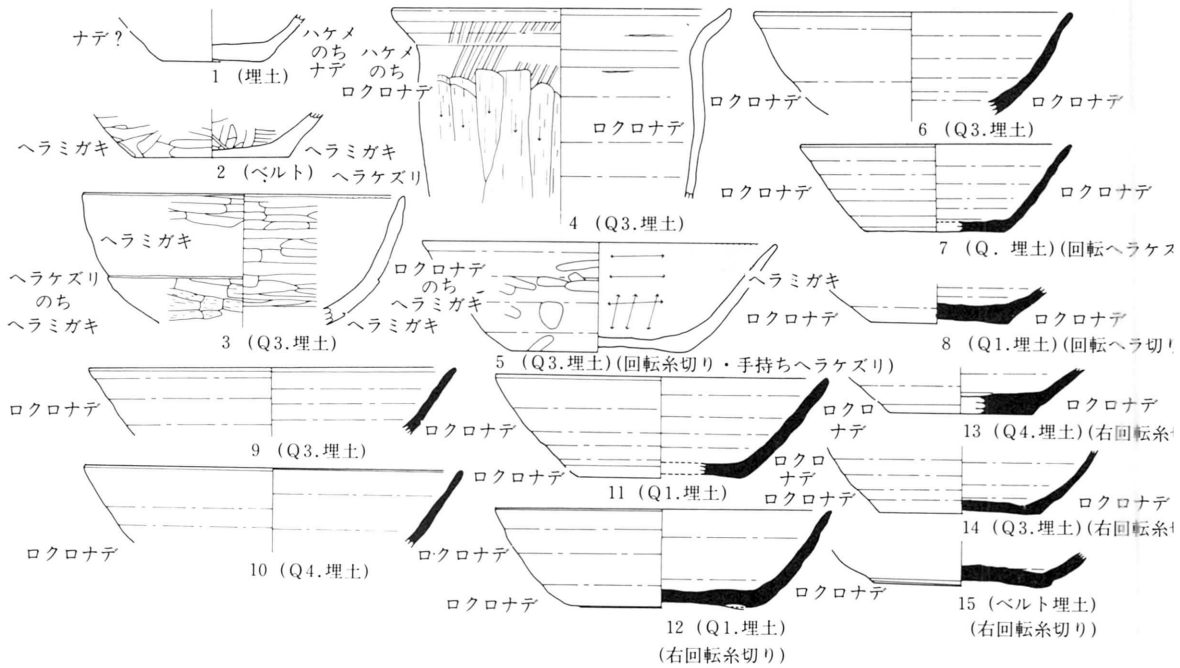


第9-8図 E A 21住居跡出土土器(I)

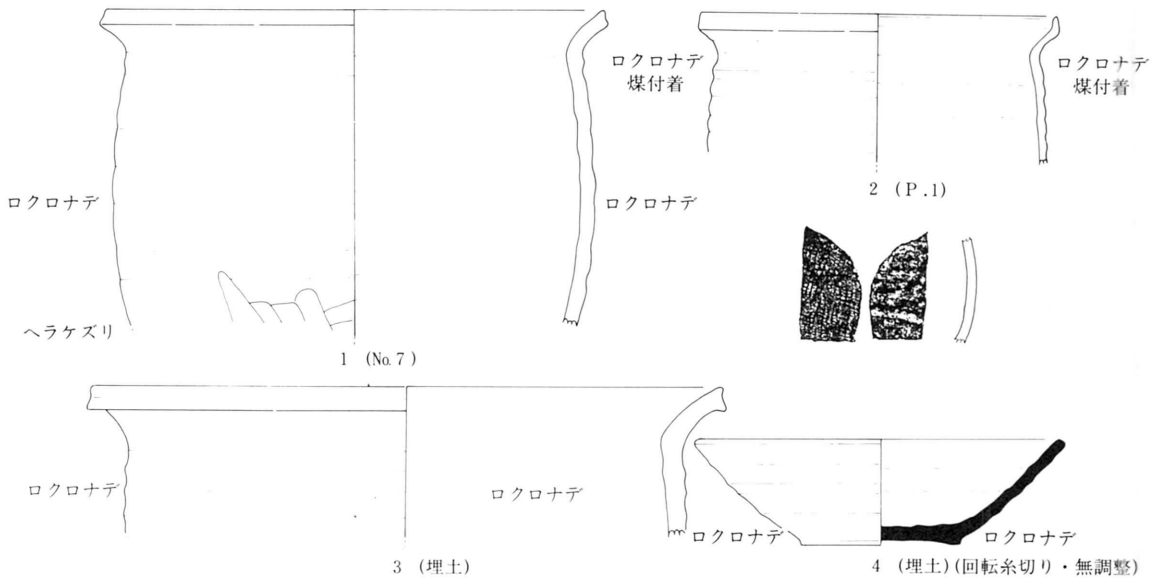
赤色線描



第9-9図 E A 21住居跡出土土器 (2)

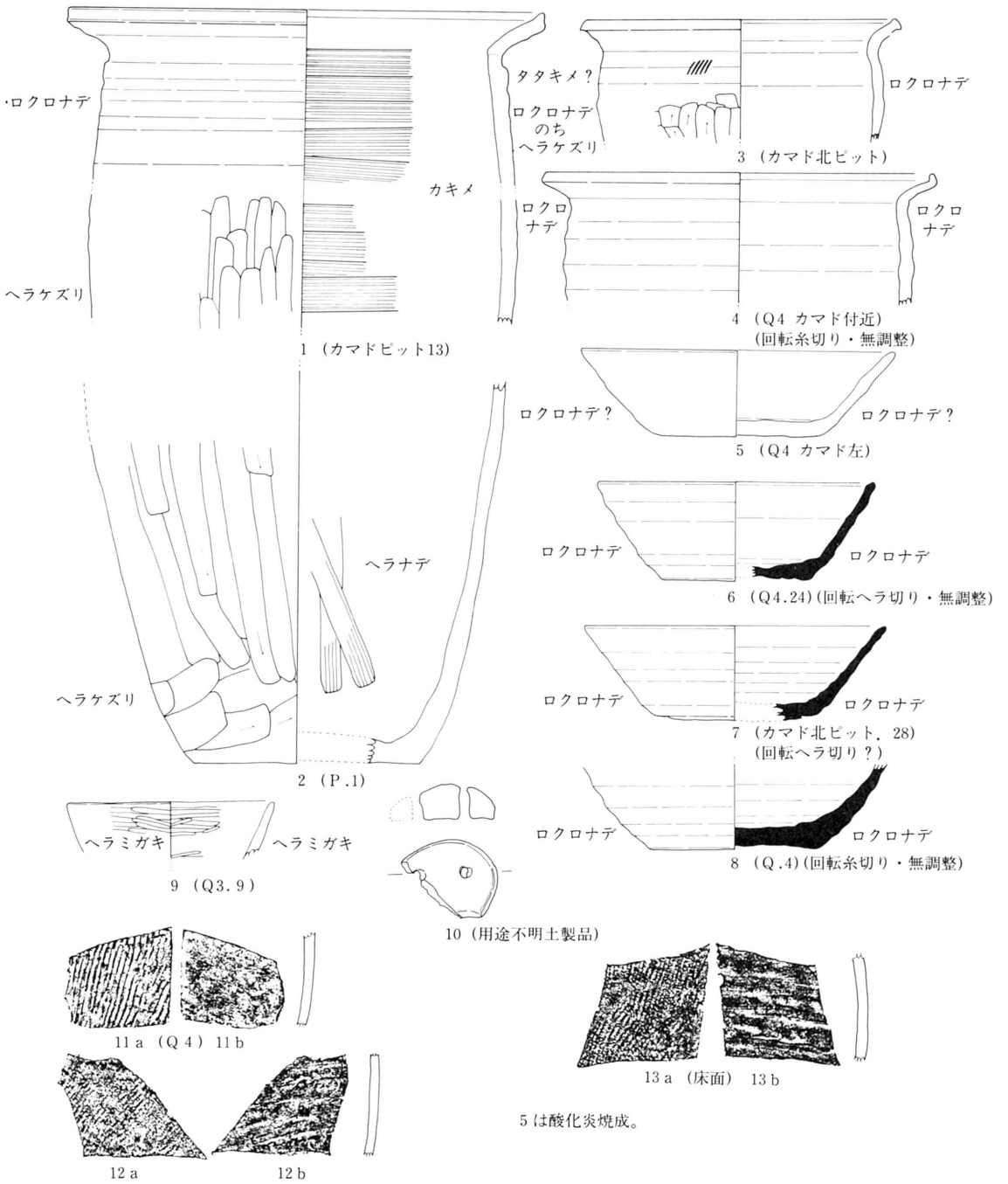


E A 21住居跡(3) (11は手持ちヘラケズリ)

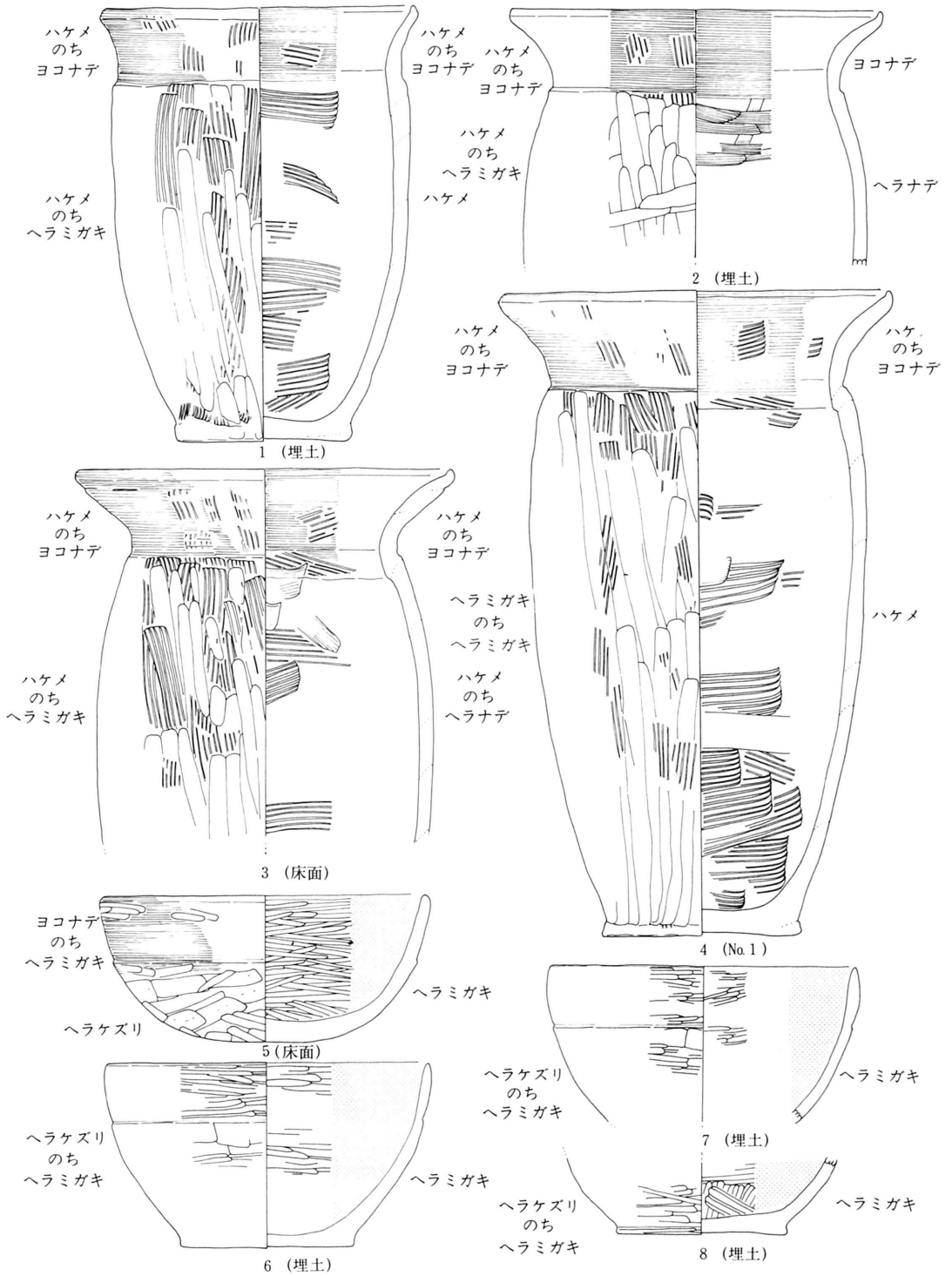


E D 27住居跡

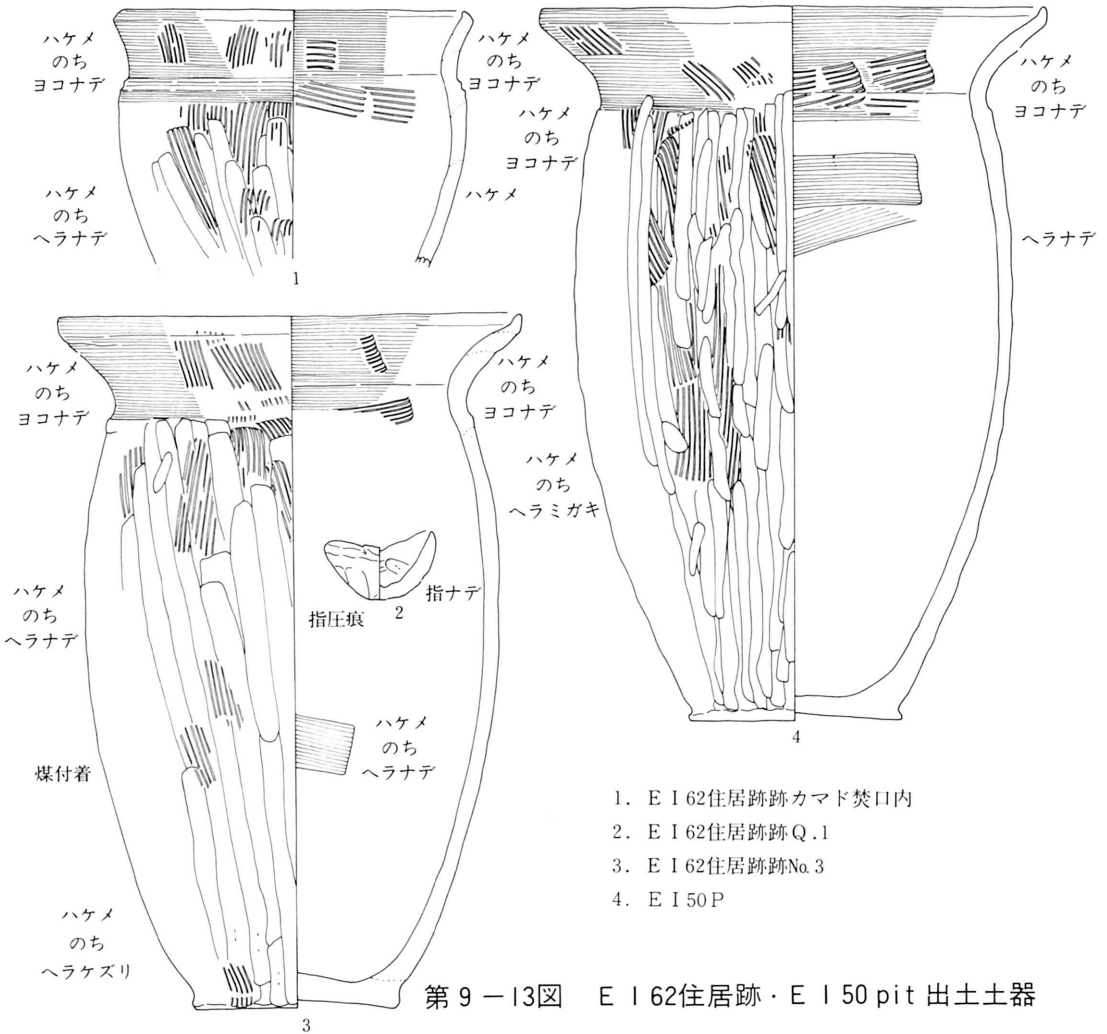
第9-10図 E A 21住居跡(3)・E D 27住居跡出土土器



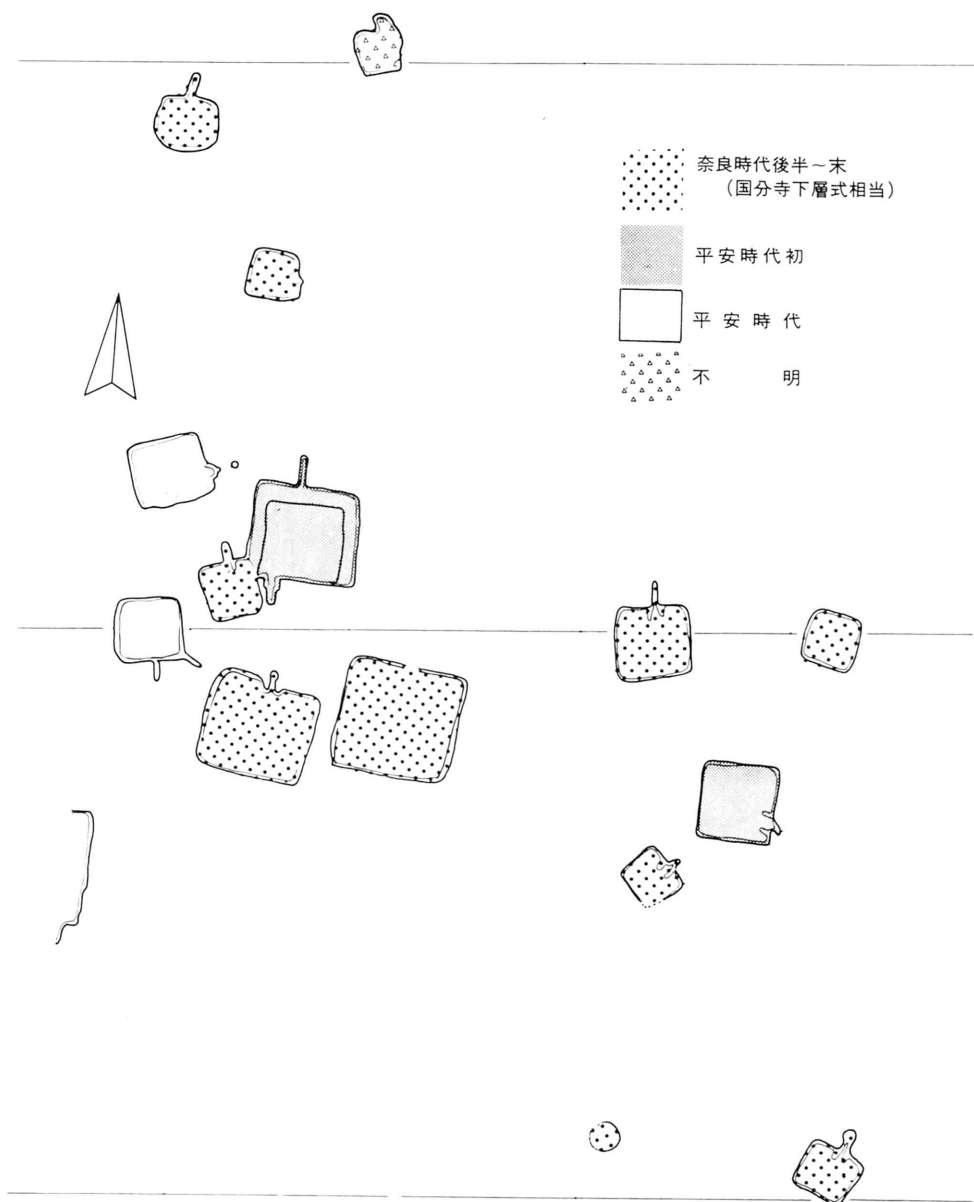
第9-11図 E C 56住居跡出土土器他



第9-12図 E・E 50 住居跡出土土器



第9-13図 E I 62住居跡・E I 50 pit 出土土器



第9-14図 時代別遺構区分模式図

C. 近世墳墓出土遺物（第10-1図）

発見された遺物は陶器と鉄製品、古銭である。このうち一括資料として取り上げられているものは次の4例である。

- ①祥符通寶（7）、寛永通寶（18）
- ②小刀（5）、毛抜（6）、永楽通寶（11）、火葬骨骨片
- ③永楽通寶（12、半欠）、不明銭（10）
- ④陶器（1、3、4）、寛永通寶（13、14、15、16、17）

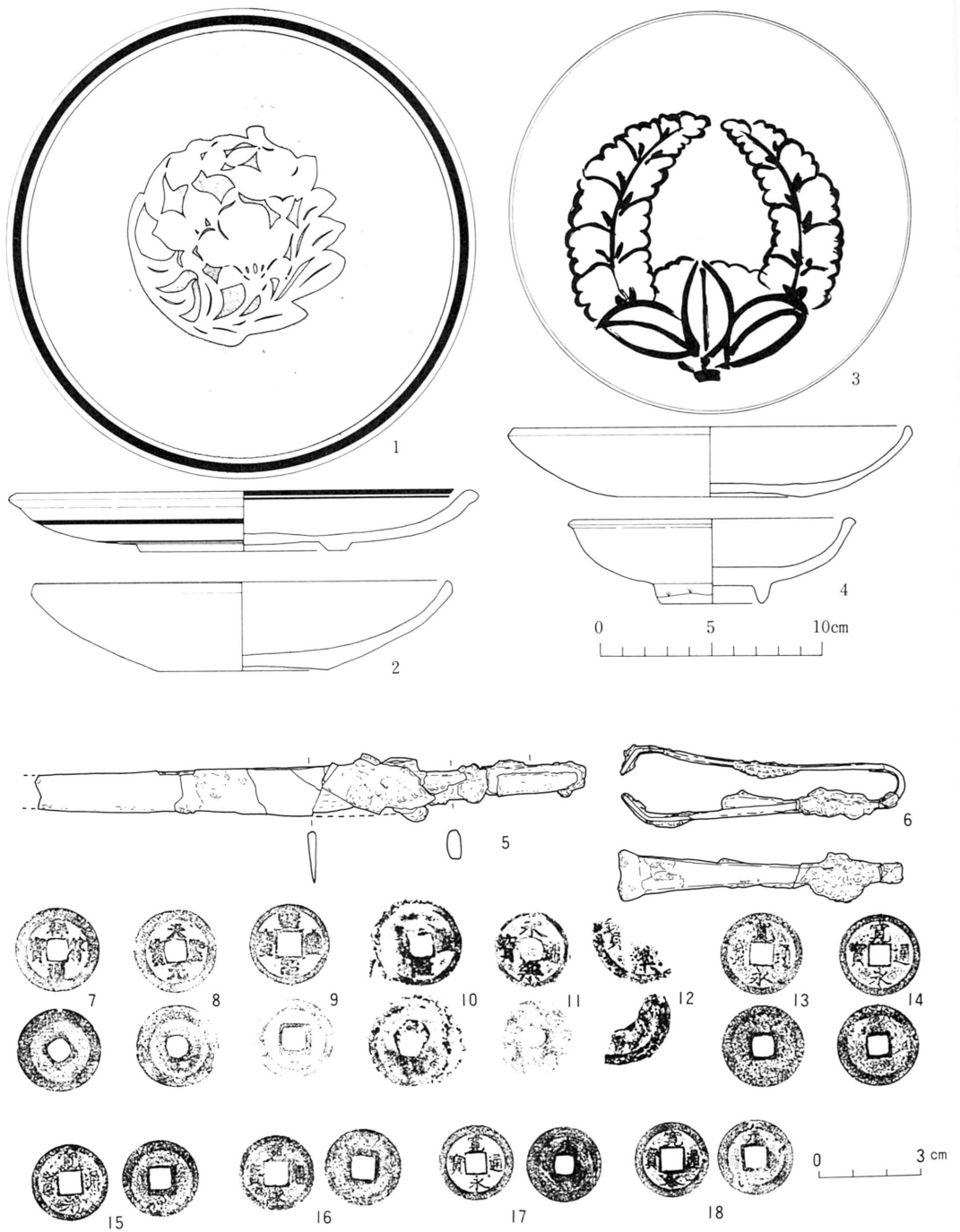
①はFH50グリットで発見され、②が第19配石遺構の下位から発見されたものである。写真によると小刀は切先を下に立った状態で出土し、その右方向には古銭が見られる。永楽通寶は火熱を受けて歪んでおり、小刀、毛抜には火葬骨骨片が付着している。③はFH50グリットから発見されたもので、両者とも火熱を受けて融着し、大きく変形している。10には両面に融着した痕跡が見られ、本来は3点以上埋納されたものと思われる。④はおそらくEH50南北ベルトから発見されたものであろう。図版71によると陶器1、3は上向きで上下関係にあり、4は若干下位で下向きになっている。1の右上方と4の右方には古銭が出土している。土壌等の掘り込みは確認されなかったが、かなり深い地点から発見されたものようである。

1は全面に施釉された紫野風の背の低い皿である。やや肉厚で口縁端部が外方に挽き出されている。高台は幅の広い削り出し高台でどっしりと安定感がある。釉は畳付を除く全体に施され、灰白色をなし細かい貫入が見られる。口唇部から外面にかけて白色釉が掛けられ流れ模様をなす。文様は内面の2重圏文とみこみの桔梗が黒の吹掛絵付によって描出されている。外側は体部中央と底部近くに3重の円文がめぐる。なお、内面には6個の小さな目痕を残している。

2、3は素焼きの内轡皿である。口縁部はゆるやかに内彎し、口縁端部が若干肥厚し、僅かに上方に挽き出されている。底部は上げ底ぎみで、2には木質様の付着物が見られる。色調は内外共に淡褐色をなし、胎土には細砂が認められる。器肉は前者が僅かに肉厚であるがほぼ一様で、全面にロクロ成形痕を有す。なお、後者には肉底いっばいに墨書あるいは下絵によると思われる「登り藤」が描かれている。絵の筆法は粗雑であるが、全体的にはまとまっており、手なれた手法と見られる。

4は比較的高台の高い皿で、あるいは向付であろうか。口縁部は九口で若干外方に挽き出され、体部が急激に内彎する形をなし、みこみが広い。高台は削り出し高台でU字形をなす。内外両面とも緑褐色に発色しガラス光沢をなし、細かい貫入が縦横に走る。口唇部のみは白色釉を上掛けしている。胎土は灰褐色で焼きしまっており、釉の上からロクロ痕が観察できる。なお内面には4個の小さな目痕を残しており、中央部には亀裂が入っており使用されなかったものと見られる。

鉄製品は小刀、毛抜きの2点である。小刀は先端部を欠くもので、長さが16.3cm以上、茎の



第10-1図 近世墳墓出土遺物

長さが 5.0cm で、刀身に対する茎が小さい。かなり錆化が進んでいるが表面部分はほとんど腐蝕せず薄く剥落していることから地金を巻いて仕上げたものと考えられる。峰は丸棟で、両区造りと見られる。毛抜きは長さが 8.5cm で、孤部の幅が 1.5cm である。錆瘤が著しいが孤部は先端に向ってゆるやかに造り出し、急激に屈曲する。腕部はゆるやかな曲線を描く。

古銭は渡来銭 5 点、寛永通寶 6 点、不明銭 1 点の合せて 5 種 12 点である。渡来銭は初銭年によって北宋 3（祥符通寶、1008 年、天聖元寶、1023 年、熙寧元寶、1068）、明 2（永樂通寶 1403 年）に分けられ、いずれも中国銭で、篆書体の熙寧元寶を除いて階書体である。この中の不明銭と永樂通寶 2 点は火熱を受けて歪んでいる。なお、不明銭は篆書体の「元」が見られ渡来銭の可能性が強い、寛永通寶はいずれも新寛永で背元 2 点が含まれている。

第 2 部 要 約 編

A. 縄文時代

(a). 時期別の遺構占地状況

検出された多数の遺構を、その出土遺物から想定された時期によって区分すると第 1 図のようになる。少なくとも本遺跡（の調査範囲内）は、縄文時代前期末から遺構を伴うような利用のされかたを始め、それが晩期前半頃まで断続的ながら続いたことを示す。それらに若干の補足をしておく。前期末（大木 6 式期）の遺構は大型住居跡（複数）・ピット類の組みあわせで構成される。大型住居跡は北部を東西に長く占地し、ほぼ同一地点に営まれる。ピット類は三様の在り方を示す。即ち、①大型住居の南北両側縁に沿って設けられるもの、②大型住居跡の南方で、斜面に面した部分を疎に占地するもの、③北東部の斜面下位（裾部）の低位置を占地するもの、の三様である。①、②は D タイプを主体とし、③は E を主体とする。このような、ピット自体の形状の異同と占地の異同が対応する事実は、少なくとも前期末頃には、両者の用途対象物等に何らかの異同があったことを示唆することも解釈できよう。既にふれたように今後の類例の増加をまつべきであろう。また①のあり方は、大型住居の機能想定に一定の手掛りを提供するものとも考えられる。

中期初頭（大木 7 a 式期）の遺構構成は、大型住居跡・通常規模の住居跡・ピット類からなる。前代に比し若干の変化が見られる。即ち、大型住居跡は前代のそれよりやや南方寄り（地形に沿ってやや東南方寄り）を占地している。通常規模のものは大型住居の南北両側に位置している。ピット類のあり方には二様がある。前代の①に共通する大型住居の長軸縁辺（とりわけ南縁）沿いに営まれるものと、大型住居の南方の平坦部から段丘崖までの範囲に集中的に営まれるものである。この時期から、貯蔵穴設置区域が限定されてきたかのようである。ただし、遺物の項目でふれてある如くに、大木 7 a 式期には一定の時間的巾が想定されるところであり、ピット類にもまた同様の考慮が必要なことは明らかである。しかしここでは、大木 7 a 式期という時期にこの現象が顕著になってくる点を重視して、先のようにのべておきたい。なおピット類に重複が多いことは、この種遺構も占地上に一種の規制が存在したことを示すものかもしれない。これは 7 a 式期に限定されず、各期に共通する特徴といえることができる。

中期前葉（大木 7 b 式期）はピット類のみが検出されているにすぎず詳細不明というしかない。ピット類は前代と同様の区域に営まれるものが多く、集落内での空間利用の原則にそれほど大きな変化が生じなかったものと思われる。ただし、前代よりも若干南方部分をより多く利用している事実はある。

中期中葉のうち、大木 8 a 式期にはピット・住居跡の組みあわせが復活している。大木 8 b 式期にはピット類のみが見られる。8 a 式期の住居跡は前期末の大型住居と重複する形で北部を占地

しピット類は他と同様の貯蔵穴域内に営まれる。より南の段丘崖寄りの部分に多いと見ることでもでき、先に指摘した傾向が未だ継続しているとも考えられる。

後期以降の種類はピット類のみで、しかもその数が極めて少なく小型化し、かつその形態もAタイプやEタイプを主とするという前代までとの 顕著な相違を示す。これは別にふれてあるとおり岩手県内全県的な傾向に一致するものであり、中期末以降の各種の原則変化を示唆するものとして記憶さるべきであろう。晩期にEタイプが主体をなす点には既にふれたが、本遺跡に限らず、晩期の浅いピットには、土器等が存在する例が多い。その器種を見ると、注口土器、台付鉢型等のものを含み、貯蔵機能を必ずしも想定させないものである。したがって、晩期の浅いピット類には貯蔵穴以外の機能、たとえば信仰関係のそれを想定することもできよう。晩期の貯蔵穴と思われるものは、前代までと同様にフラスコ状をなすものである。ただしその規模は顕著に小型化している。

以上をまとめると、①遺構（とくに大型住居とピット類）の占地をみると、南部により新規のものが多くなることからすると、北部→南部へと利用地区が動いていったことが知られる。

②大型住居跡とピット類の関係を見ると、前期末・中期初頭の両期には、大型住居の周囲に近接し、かつその長軸縁辺に沿ってピット類が配されていた可能性がある。なお大型住居内(屋内)にピット類が付設されていたか否かについては記録を欠く故に確言できない。前期末の遺物を出土するピットが同期の大型住居と重複している例は存在するので、その可能性は皆無ではない。

③大型住居やピット類は、集落内でそれが構築される地域が限定されていた可能性がある。前者は二期のそれが大略類似地点を占地している点、二期のそれぞれに重複・拡張の事実が見られる点などにあらわれている。後者はピット（貯蔵穴）域ともいべき形で集中的に営まれ、その密集現象は、中期初頭に始まっている。

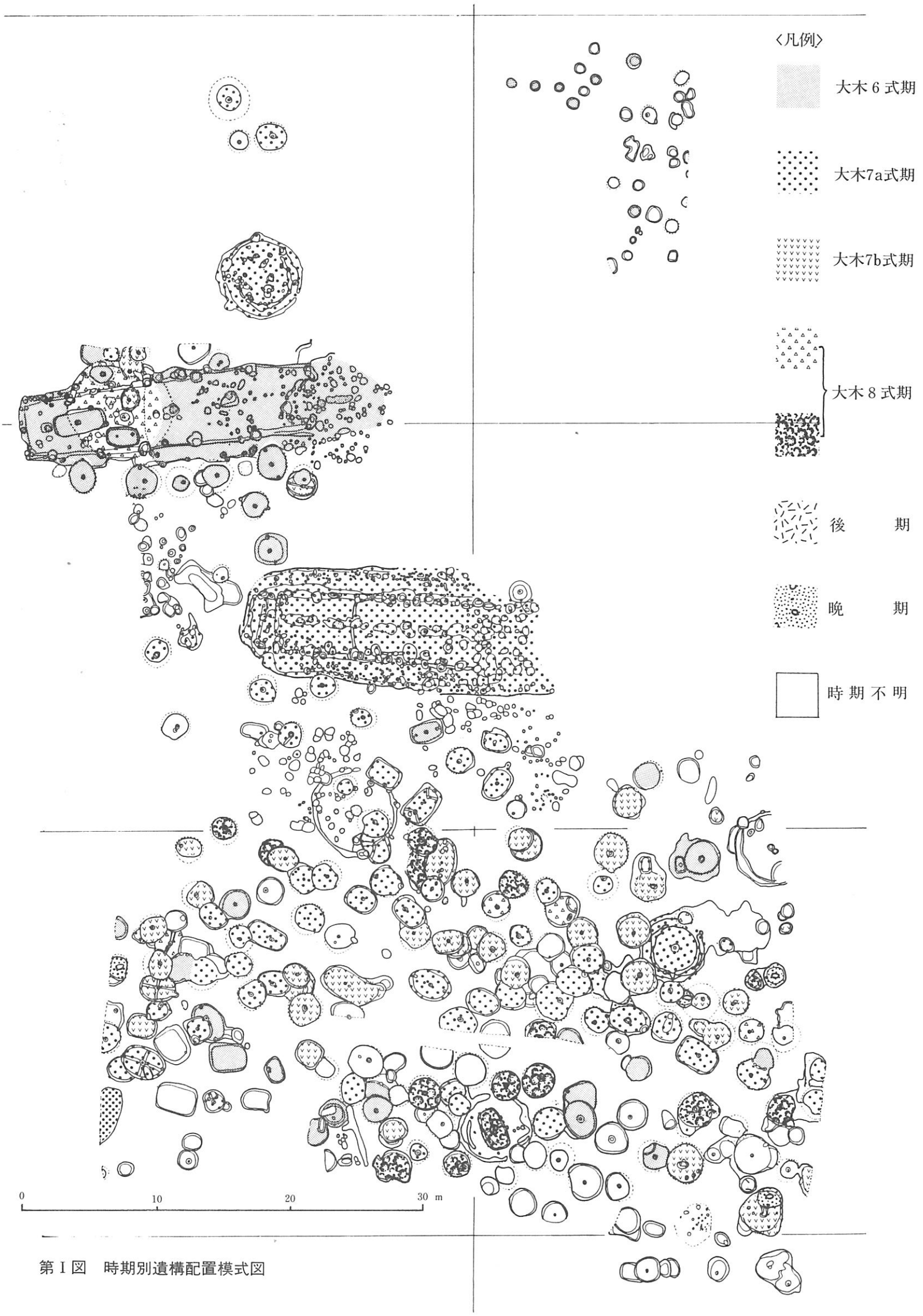
④前期末のピット類に占地の異同（平坦部と斜面裾部）があり、それが形状異同に対応し、両者の機能の異同を反映している可能性がある。

⑤通常規模の住居の占地は地形に沿った平坦部周縁に多い点以外の詳細は不明である。とりわけ南部の貯蔵穴域内に分布する住居の時期を決定できないことは、遺憾である。

⑥遺物包含層は北端部近くの北東面斜面に形成されている。二次堆積のためにその性格の判断には慎重であらねばならないが、各期のものが混在している事実は、包含層形成の地点（あるいはその原因をなす投棄の行為が行なわれる地点）も他と同様に各期を通じて限定されていた可能性がある。

(b) 所謂大型住居跡について

(1) 所謂大型住居跡の岩手県における検出は本遺跡（鳩岡崎）を端緒とするが、その本報告未刊のうちに数多くの類例が知られるようになり、現在までのところ16遺跡の例が蓄積された。



第1図 時期別遺構配置模式図

さらに既往の調査例の中にもその可能性あるものが含まれるので、大略20遺跡前後がその数となろう。それらの一部をあげると大略以下になる。

①早期 二戸市長瀬B遺跡、②前期前半 二戸市中曾根・松尾村長者屋敷の2遺跡、③前期後半 松尾村野駄・同長者屋敷、江釣子村鳩岡崎の3遺跡、④中期前半 二戸市荒谷A・一戸町馬場平Ⅱ・安代町荒屋Ⅱ・松尾村長者屋敷・雫石町塩ヶ森・江釣子村鳩岡崎の6遺跡、⑤中期後半 軽米町吠屋敷・松尾村長者屋敷・盛岡市繫Ⅲ・都南村湯沢の4遺跡、⑥後期 北上市丸子館・同八天の2遺跡、⑦晩期 安代町曲田Ⅰ・松尾村寄木の2遺跡。

以上の他にその可能性を指摘されているものに、盛岡市大館町・紫波町西田・石鳥谷町大地渡の各遺跡（いずれも中期中葉）、大迫町観音堂遺跡（中期後半）、松尾村釜石環状列石などがあり、さらに金ヶ崎町千貫石No3の1遺跡で、重複と報告されている例にその可能性を認めることもできる（中期中葉）。

このように岩手県においては所謂大型住居は、早期中葉以降（吹切沢式併行頃）から晩期前半ごろまで連続と存続し、かつその分布を見るといずれも内陸部に限定されていることが知られる。岩手県内陸地方に存在する地形区分等を若干考慮して整理すると、中曾根・荒谷A・馬場平Ⅱは馬淵川流域（吠屋敷も同様に見做しておく）、荒屋Ⅱ・曲田Ⅰは米代川流域、長者屋敷・野駄・寄木・釜石環状列石は竜ヶ森分水嶺以南地域、塩ヶ森・繫Ⅲは雫石川流域、大館町は雫石川流域であるが、より北上川水系に近い地域（北上川流域と見做されるべきか）、湯沢・大地渡は北上川中流域のより脊梁山脈沿いで、支流水系（葛丸川など）沿い、西田・八天は北上川水系直近の地帯、丸子館・鳩岡崎は支流水系の和賀川の南北岸、などに分布する。観音堂は同様に支流水系沿いであるが北上川東岸に位置することになる。内陸地方では北上川水系の上・下流の両地域に類例を欠く。今後の検出に期待すべきものと考え、現時点での解釈はひかえる。今後は地域区分をも念頭においた整理も必要とされよう。

いずれにしても上記の二項目をこの種遺構の特色の一つとして指摘しておく。

(2) 所謂大型住居跡の変遷

先に示した大型住居跡の分類とその変遷については、既に三浦謙一・高橋文夫両氏の予察、^(註1) 中村良幸氏の研究発表などによって、一定の見通しが与えられている。ここでは各氏の業績に導びかれつつ、そのあらしを整理する。まず中村氏は住居跡の形態と炉跡の形状を指標とし、^(註2) 次の基準を設けた。即ち①住居跡の形態 A、隅丸長方形・隅丸台形（樽形）B、長方形・長楕円形、C、円形・卵形・多角形、②炉跡の状態 a、屋内に炉の痕跡が無い、b、屋内に複数を有する（地床炉・石組炉共）、c、屋内に一箇しかもたない（同前）、というもので、さらに①・②の組みあわせは6つに大別でき、A-a；早期（長瀬B）、A-b；前期前半（長者屋敷他）、B-b；前期前半～中期後半（塩ヶ森・鳩岡崎他）、B-C；中期中葉 B・C-a；前期前半？～晩期（西田・丸子館他）、C-c；中期末葉～晩期（八天他）となることを示した。

そしてこの6つのタイプは炉跡の状態からでも時期区分をすることができ、a—早期、b—前～中期後葉、c—中期末～晩期となる。住居跡の状態でもA—早・前期前半、B—前期後半～中期後葉、c—中期末～晩期と区分できる。つまり、大型住居と呼ばれるものは時期的にA—a、B—b、C—cの基本的な組みあわせでつくられ、事実上三区区分されているようである、とした。

次に三浦・高橋両氏は若干くわしく述べている。即ち、早期；隅丸長方形で屋内炉をもたない。通常規模の住居跡と相似し、規模が主要な識別要素となる（長瀬B）。前期前半；異なる特徴のものが複数併存する。いずれも長者屋敷例である。即ち凸辺台形・樽形で、中軸線に沿って対になる形で配置される「定位置地床炉」をもつものと、長方形乃至長楕円形で、中軸線に沿って複数の「定位置地床炉」が直線的に配置されるものの併存である。後者が所謂「ロングハウス」型である。通常規模の住居跡とは規模・形態・付属施設のあり方が大きく異なるものである。前期後半；所謂「ロングハウス」型のもののみであるが、長軸方向の規模には差がある。

（長者屋敷・野駄・鳩岡崎）。中期中葉；形態に若干の変化がある。まず所謂「ロングハウス」型で所謂「ベッド状」施設を有するもの（鳩岡崎）と、やや楕円形気味の形態と、中軸線上に直線的に複数の炉がならぶもの（塩ヶ森・荒屋Ⅱ他）の2種がある。埋設土器を伴う石囲い炉も出現する。中期中葉；長方形乃至楕円形の形態と、中軸線に沿って複数の直線的に並ぶ炉跡をもつ。地床炉のみのものと、埋設土器を伴う石囲い炉も加わる例とがある（荒谷A・長者屋敷・馬場平Ⅱ・繫Ⅲ）。中期後葉～末葉；形態・炉跡ともに大きく変化する。即ち、楕円形（一部に円形）が基本形態となり、炉の数は原則的に単基となる。この結果通常規模の住居との識別要素は規模のみとなる。また複式炉はこの時期に出現する（吠屋敷・繫Ⅲ・長者屋敷・湯沢他）。後期；楕円形の形態をもち、それに縮小化を意図した10回の建て替えが行なわれている。「壁柱」らしきものも見られる（八天）。晩期；円形の形態で、壁や張り出し部が礫によって構成される（寄木・釜石環状列石）。ただし礫の使用は大型住居に限定されるものではない。石囲い炉である。これらを体制上の変化で区分すると①早期、②前期前半～中期中葉、③中期後葉以降の三区区分が可能で、①・③は通常の型の住居との相違は規模の面のみ現われ、②では両者の間には構造上の相違が認められる。

大略以上のようにまとめ、最後に「(前略)「大型住居址」の変遷の過程を三区区分できることは、各時期に共通する典型的な「大型住居址像」を描くことの困難さをあらわしているといえよう。(後略)」と述べている。以上の指摘はまことに適切なものといえよう。

所謂大型住居跡の分類と変遷は以上の各氏の要約に尽きると思われ、ほぼそれに賛意を表しておく。今後この種の遺構の検討にあたっては、単なる規模のみならず、その属性の確認が不可欠ということになる。通常規模のものとはまったく異なる属性を有するものと、単に規模の差の還元できるものを同列に扱えないのは明らかである。いずれにせよ、従来大型住居なる汎称のもとにまとめられてきたものには、複数の性格のものが混在する可能性が強いことは留意

さるべきである。性格に関連して、同様の留意のもとに扱われるべき可能性をもつものに、紫波町西田遺跡で典型的に検出された「柱穴状ピット群」がある。これらもその規模、とりわけ柱のそれはまことに大規模であり、「大型」の範疇に十分含めうるものである。この遺構群は如上の「大型住居跡」とは異なり竪穴形式はとっていないと思われるが、その規模からして、同種のものを見做しうる。類例は八天遺跡にもあるらしい。前記中村氏の学史回顧でも指摘されているとおり、今後はこの種の遺構も「大型住居」の中に含めて検討されるべきであろう。最後者の柱穴状ピット群は、性格検討の突破口になしうる可能性が大であり、有効に活用されるべきであろう。

(3) 大型住居跡、とりわけ所謂「ロングハウス」タイプの性格について、

以下には所謂「ロングハウス」タイプの住居跡の性格についての諸説を見ておく。その前に前記中村氏によるこの種遺構の特徴・特異点の指摘を紹介しておく。^(註4)

- ① この種の遺構は東北地方北部で大木2式あるいは円筒下層b式期に出現し、中期中葉から後葉には消滅し、最盛期は前期末葉～中期前葉である。
- ② 北陸地方では中期前葉に石組炉をもって出現し、中期中葉に規模が縮小する。
- ③ 東北・北陸地方の内陸部に分布が集中し、日本海側の海岸に立地する例でも貝塚の量は極めて少ない。
- ④ 小河川近く、あるいは湧水地をもつ台地・段上に多く立地する。
- ⑤ そのほとんどすべてに拡張又は建て直しを行なっている。前者は長軸線上の台地の中央方向に長く、後者はほぼ同じ場所に行なわれる。
- ⑥ 炉跡は地床炉・石組炉を問わずいずれも長軸線上にほぼ一直線に並び、その使用が著しい。
- ⑦ 住居の壁高の高いものが多い。
- ⑧ 埋甕や特殊ピット、貯蔵穴状のピット、配石状(凹石・磨石)などの内部施設をもつ。
- ⑨ パン状・クッキー状炭化物を出土するものがある。
- ⑩ その周辺に多数のフラスコピットや中小の住居跡が作られるものが多い。
- ⑪ (大型住居跡を有する遺跡は)多くの土器・石器を出土し、石器類は前期においては、北方では半円状扁平打製石器、南方では磨石・凹石等が多く、利器は石匙が多いが目立つ。

まとめとして内陸の様相を有すること、時期的変遷が見られること、炉の使用法に特色があること、パン状炭化物の出土等を重要点として掲げている。ここに指摘された諸点はまことに適切なものばかりであろう。本調査例も多くの点で一致しているのは当然である。なお⑤に関連して、高橋文夫氏も、その行為が単なる建て替え以上の意味を持つとのさらなる指摘を行なっている。⑤は「ロングハウス」タイプに限らず後期の円形プラン(八天・丸子館)のものにも共通する内容でもある。^(註4)

次にこの種遺構の性格についての仮説を見ると、まず渡辺誠氏の一連の業績がある。氏は縄

文時代の植物質食料・加工技術に関するテーマを追究し続けてきていることは既に有名であるが、その成果の一つとして、縄文時代の貯蔵穴と長方形大型住居に関する見解がある。註6にしたがいそのあらましを見ると長方形大型家屋址の問題と題する章において「(前略)長期保存という点では、地下茎・球根類よりも堅果類の方がはるかにすぐれている。そしてこの貯蔵場所は、乾燥した屋根裏こそふさわしい。近年東北日本の日本海側で相次いで発見されている長方形大形家屋址は、まさにこの好例といえよう。(後略)。」と述べ、大型住居跡堅果類の長期保存のための貯蔵場所・乾燥場所説というべき説を展開している。また貯蔵穴について「縄文前期から中期にかけて発達した定住的円形集落には、しばしば貯蔵穴が発見されている。しかしこれまで記してきた堅果類には、長期保存という目的からみてふさわしくない。むしろ一冬分のための生貯蔵か、地下茎・球根類の貯蔵こそふさわしい。また千葉市加曾利南貝塚の貯蔵穴のように、クリの充満した例もみられるが、これは甘味を増すために翌春まで埋めておく民俗例と対比することができ、一種の加工法とみることができる。」と述べ、縄文前期から中期にかけての貯蔵穴に、比較的短期の利用期間を想定している。これは傾聴に値しよう。渡辺氏の立論の根拠は、堅果類のアク抜き技術を主とする民俗事例の検討・植生分布その他の検討を経た上で得られたものであり、興味深いものであろう。

渡辺氏の説の延長上にあると思われるものを前記中村良幸氏が述べている。氏も同様に植生分布(花粉分析によるその変遷を含む)、堅果類の食用化の民俗事例(アク抜きの過程における水さらし・火熱・灰汁などの重要性を指摘している)、石器組成土器形態等を総合的に検討し大型住居跡冬期間における堅果類のアク抜き作業等の共同作業場説ともいうべきものを述べた。そしてその成立と消滅への過程を次のようにまとめている。「(前略)東北地方北部は冷温帯落葉樹林と暖温帯落葉樹林の境にあたる堅果類の豊富な地域であった。冷温帯に属する堅果類の食用化を完全にし、その生産性を大型住居跡によって共同作業という形で増大させ、過酷な冬を乗り越えてきた。しかし中期中葉頃から本格化する低温化は大規模集団化した集落の維持を困難にさせてきた。(後略)。」さらに共同作業から個別作業への転換の見通しと、個々の住居(作業小屋)における労働の一施設として複式炉の性格を想定している。

新野直吉氏は、秋田県杉沢台遺跡に関連して次のようにのべている。「(前略)そして35棟の中で長径30m×短径9mの超巨大住居跡(調査番号S I 07)と長径16m×短径6.6mの巨大住居跡(同S I 06)とがあった。中には数個の炉があり、極めてよく用いられた痕跡を見せていて、数十人の人々の生活にたえる規模をもっている。中期以後にはすでにこのような大住居跡の調査例もあって、それは通常集落の集会場などに擬せられてきた。しかし、この巨大住居跡は時々集会になどに使われたものではなく、常時居住の用に供せられたものと認められている。(中略)。小さい住居は二人用と考えられ炉さえないものもある。あるいは夫婦用のものであったかもしれない。(後略)。」とし、通常住居説ともいえるものをのべている。

以上の他に集落の集会場説というべきものも古くから唱えられてきている。

これからの諸説の中では、渡辺・中村両氏の説が一定以上の説得力をもつものといえよう。本遺跡における遺構の組みあわせ—大型住居(その周囲に貯蔵穴を伴った)、通常規模住居、貯蔵穴(域)、遺物とりわけ石器組成—断面三角形磨石・半円形打製磨石・磨石・凹み石等が優越し、石鏃等が少ない、などの諸特徴も、その背後に植物質食料の処理等の影をうかがわせるものである。ここではあくまでも現段階における一つの可能性として、堅果類と主とする植物質食料の処理・貯蔵施設をその性格として想定しておく。

最後に中村氏が指摘した共同労働(大型住居・複数炉)→個別労働(通常住居・複式炉)という図式に関連する可能性をもつ現象にふれておく。それは貯蔵穴の部分で既にふれた中期末葉以降の集落内における貯蔵穴のあり方の変化、即ち集落内に貯蔵施設域をもつものの他に、集中区域をもたず、個別の住居に附属するかのようなあり方を示すものも増加する点である。これと先の変化がいかに対応するかは今後の課題であるがあえてここでふれておく。

註1 三浦謙一；岩手県における「大型住居址」の変遷について、高橋文夫；岩手県「大型住居」系列住居址群時期別変遷概念図(代表例)

以上は「縄文時代検討会 テーマ、大型住居跡について 資料所収 1981年」なおこの資料には東北・北陸地方の大型住居跡の類例多数が示されている。筆者もそれに多くを負っている。

註2 中村良幸；東北地方における縄文中期社会の発展と崩壊——いわゆる大型住居跡と複式炉の関連を通して 岩手考古学会昭和56年12月例会発表要旨。

註3 胆沢郡金ヶ崎町千貫石・長根前遺跡 金ヶ崎町教育委員会 1973 P11

註4 「ロングハウス」なる話は既に民族学における用語として存在しており、それはたとえばマレーシア連邦サバ州(ボルネオ島北端部)などのかつての焼畑耕作地帯に見られる高床で、長軸20m以上の、竹床・竹壁、ニッパヤシの屋根の建物をさしている。その意義について下元豊氏は次のようにふれている。「(前略)私の滞在しているこの村はサバの北端、クダット地区にあるマトンゴン村で人口500人ほどの村である。村といっても日本のように行政区分がはっきりしているわけではなく、丘と丘の間に点在する幾つかの集落が集まって村らしきものを作っているといった方がよい。本来はロングハウスが2、3カ所にあり、その付近のジャングルを切り拓いて陸稲、トウモロコシ、バナナ、タロ栽培中心の焼畑耕作を行っていた。およそ5年から10年でそのロングハウスは放棄され、また別の場所へ移ってしまうというパターンを繰り返しており、当然村の人口移動がかなり激しかったことが想定される。(中略)ところが近年になり政府の指導でヤシ栽培が普及しはじめてくると、その管理のため住居の定着化が始まった。同時に土地の個人所有が起り、それは焼畑用地の狭小化につながっていた。ロングハウスの成立要因の一つに焼畑耕作があげられることから、それはロングハウスの崩壊にもつながっていった。(後略)。(下元豊 芋飯文化 シリーズ食文化の発見[世界編] 1、粒食文化と芋飯文化、日本観光文化研究所編、柴田書店発行 1981年、P.155~156)

ロングハウスなる語には既に如上の対象と意義が存在するのである。したがって混乱をさけるためには別の名称を与えるべきであろうし、それは早急に実施さるべきであろう。ましてや所謂柱穴状ピット群に対してもロングハウスなる呼称が与えられつつあり、ロングハウスそのものの対象に変化が生じつつあることを考慮すれば、それは急務といわざるをえない。

註4 岩手県埋文センター文化財調査報告書第20集 東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書 松尾村長者

- 屋敷(Ⅱ)(財) 岩手県埋蔵文化財センター 日本道路公団 1981年
- 註5 渡辺誠 縄文時代の植物食 雄山閣出版 1975
- 註6 渡辺誠 縄文時代におけるブナ帯文化 地理 第26巻第4号古今書院 1981年所収
- 註7 高橋文夫 岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第12集 東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書
松尾村長者屋敷遺跡(Ⅰ)(財) 岩手県埋蔵文化財センター・日本道路公団 1980年
- 註8 新野直吉 古代史上の秋田 さきがけ新書① 秋田魁新報社 1981年

(c) ピット類の特徴について

ピット類の個別説明は既に遺構編において終えた。以下には特徴と思われるものの若干を示してまとめしておく。なお以下の記述は、一定以上の規模を有し、かつそれ自身の特徴(形態その他)や伴出遺物の比較的明白なものを資料として採用したもののみによっており、あくまでも本遺跡における傾向・大勢を示すにすぎない。とりわけ堆積状況については、実測図を欠く例が多いことから、それが明白な例からの類推的なものである(A表)。

(a)、形態・属性 これについては別に示した分類基準に尽きるので再述はしないが、若干の項目についてのみ補足する。まず床面上に残存する施設に関しては、土器等の埋置例は存在しない。若干例に見られた床面上の凹みをその痕跡と見ることもできるが確実ではない。土器類の多くは、横転位で検出されたものが多いようである。この点は土器埋置例の多い関東地方などとの大きな差異であろう。

床面上の凹み、小ピット類、溝類の性格については、現在排水施設関連の機能が想定されている。本遺跡に見られたものにもその機能を果たしたものが存在したであろうことは十分に考^(註1)えうる。しかし、壁がほぼ垂直に立ち上がる(A・B・Cタイプ)ものに見られる、とりわけ中央と両端部にそれをもつものについては、排水以外の何らかの機能、たとえば上屋構造に関連する機能などを想定したい。開口部周辺(外周)に小ピットを伴うかのような例にも、同様に上屋構造関連のもの^(註2)の存在を想定しておきたい。

壁面上(天井部)に何らかの施設を有する例は存在しないらしい。開口部に何らかの施設、たとえば段状につくり出し(蓋をするかのような)た例も、確実なものは存在しない。後者については秋田県内にその類例が知られている。なお筆者らが調査した岩手郡滝沢村清水沢遺跡^{しみずさわ}における空洞のままに検出されたフラスコ状ピットには(削土作業を実施した業者の話によると)板状の礫(石)が伴ったらしく、この種のものに蓋が付されていたことは十分に可能性をもつものであろう。なお清水沢例の底面・天井部には工具痕が残存した。底面のそれは放射状に残存し、興味深い。ちなみにその痕跡は巾5~7cm、長さ10~15cm程度のも^(註2)が多かった

(b) タイプ別個数 その形状が比較的明確なピット280前後を基礎として、各タイプ別の個数を見るとB表のようになる。その比率を見ると、A : B : C : D : E = 12.1 : 9.2 : 5.0 : 44.3

29.4となり、所謂フラスコ状ピットたるDタイプがその半数近くを占め、この形態のものが本遺跡のピット類の主体をなすことは明らかである。また各タイプとも、床面上に小ピットその他の何らかの施設を有するものが多い点も明らかである。各タイプのブロック別分布状況を見ると、顕著な傾向性は見てとれない。CブロックにEタイプが多い点は、北東部斜面裾部にこのタイプのものが集中したことの反映であった。この立地・形態上の特徴の背景は十分に検討されるべき点については別にふれてある。

(c) 時期別各タイプ個数 同様のものを時期に対応させて見るとC表のようになる。ただしA・C表に示した時期は本文中に示した可能性の一時期のみを抽出した若干流動的なものであり、あくまでも大勢・傾向程度のもを示すにすぎない点に留意してほしい。

前期末においてはA : B : C : D : E = 15.8 : 18.4 : 7.9 : 36.8 : 21.1となり、Dを主体として各タイプがほぼ併存する。中期初頭においてもほぼ同傾向があるが、Dが60%を越えその比率を増大させている点が目立つ。中期初の傾向は中期中葉まで継続する。これはこの種遺構が従来前期末～中期にかけての特徴的存在視されてきたことの具体的事例といえよう。

中期後半以降はそれ以前とは大きく様相を異にする。ピットの絶対数が減少し、かつ形態も変化するらしい。しかし、Dタイプは晩期にまで存続し、この種ピット存続の息の長さを示すといえよう。また晩期のEタイプなどの遺物出土状況を考慮すると、この期のこのタイプに他とは別の機能想定が必要なことを物語るといえよう。

以上のようにこの種ピットはDタイプを主体として存続するが、そのあり方は時期によってタイプの変遷がありうる、その画期はは中期中葉以降にある、との見通しを得ることができた。この具体相についても後にふれてある。

(d) ピットの埋土の堆積状況について このテーマに活用しうる遺構数は少ないが、類推をまじえて検討すると、堆積状況の実測図を完備した144のピットのうち、何らかの形で不自然さを堆積状況に残している例は99 (68.8%)、一応自然と見做しうるもの45 (31.1%)となる。前者の大半は土砂(焼土・パミス・火山灰)の投棄と遺物の投棄と見做すのが妥当と思われるものであるが、若干例に遺構内で火を用いる行為(生活行為)が行なわれた可能性もある。後者の例はEタイプ・後～晩期に多いという傾向がなくもない。これも前出の異機能想定理由の一つである。いずれにせよ本遺跡の遺構には、その廃絶後に遺物を含む土砂の投棄が比較的頻繁に行なわれた可能性を指摘しておく。同様の事例は岩手県内外の多くの遺跡において見られるところでもある(紫波町西田他)。実例図を欠き不明とした例が95と極めて多数にのぼる事実が一方には存在するが、半数近くの遺構を資料として得た結果を、他に敷衍して類推してもあながち不当とばかりはいえないと思ひ、以上の如く指摘した。なおここで不自然としたのは土砂の性状・包含物・基盤の自然層序(とりわけそのレベルと堆積層のレベル)の対比を通し

A 表 (1) (凡例; ?実測関なし、○人為的、○自然的埋没)

No.	名称	タイプ	時期	No.	名称	タイプ	時期	No.	名称	タイプ	時期
1	CA56p.1	E		?38	CD15f.p.	D-2?	中初(7a新)	×75	DJ09f.p.	D-2	中初(7a)
2	CB53p.1	〃	前末?(6?)	?39	CD18f.p.	D-6?	?	○76	DI06p.	C-4?	〃
3	〃 p.2	〃		?40	CI21f.p.1	D-2?	前末(6)	×77	DI09p.	C-2?	〃
4	BC56p.1	〃		○41	CI21f.p.2	^{A-3か} _{B-2}	前末?	○78	DJ12f.p.	D-1	〃
5	〃 p.2	〃	前末?(6?)	?42	CI24f.p.1	E-1	?	○79	DJ50p.1	C-2	〃
6	〃 p.3	〃		?43	〃 f.p.2	D-2?	中前?	×80	〃 p.2	E-1	?
7	CB59p.1	〃		?44	CI27f.p.1	D-1?	中初(7a新)	○81	DJ59f.p.	D-1	中前(7b)
8	〃 p.2	〃	前末?(6?)	?45	〃 f.p.2	D-2?	前末(6)	○82	EA03p.1	A-2	中中(8b)
9	CB65p.1	〃		?46	CI30f.p.	E-1?	〃	○83	〃 p.2	B-2?	中前(7b)
10	〃 p.2	〃		×47	CJ24p.	B-4?	中前(7b?)	○84	〃 f.p.3	D-3?	中中?(8b?)
11	CC56p.1	〃	前末?(6?)	?48	CJ30f.p.	C-2?	前末(6)	○85	EA09f.p.	B-5?	中初(7a)
12	CC59p.1	〃		×49	DA15f.p.	B-3	前末(6)	○86	EA15f.p.1	D-1?	中中(8b)
13	CC62p.1	〃		○50	DA24p.	B-1?	〃	○87	〃 f.p.2	B-3	〃
14	CC65p.1	〃		?51	DB 101	E-1	?	?88	EA18f.p.	D-2	〃
15	〃 p.2	〃		?52	〃 102	D-1	〃	○89	EA21f.p.	D-3	中前?(7b~8a)
16	〃 p.3	〃		?53	〃 103	?	〃	×90	EA50f.p.1	A-1?	中中(8b?)
17	〃 p.4	〃		×54	DB12f.p.1	B-5	6と7の	×91	〃 f.p.2	D-1?	中前(7b?)
18	CD56p.2	〃		○55	〃 f.p.2	D-2	いずれか?	○92	EA59f.p.	D-6	〃(7b~8a?)
19	CD59p.1	〃		?56	DB15f.p.	D-5?	前末(6)	?93	EA65p.2	D-6	前末~中初?
20	〃 p.2	〃		?57	DB18f.p.	D-7?	〃	×94	EA68f.p.	C-2?	前末?
21	CD62p.1	〃		○58	DB21f.p.	D-2	〃	95	欠		番
22	〃 p.2	〃		○59	DB24f.p.	D-5	〃	○96	EB03f.p.	D-2?	中前(7b)
23	〃 p.3	〃		?60	DB30f.p.	B-2?	〃	○97	EB09f.p.1	D-4	中初(7a)
24	〃 P.4	〃		?61	DC24遺構	A-1?	?	○98	〃 f.p.2	D-2	〃
25	CD65p.1	〃		?62	DD15f.p.	A-2?	前末?(6か7a)	?99	EB12f.p.	〃	〃
26	CE59p.1	〃		?63	DF24f.p.	D-3?	中初(7a)	×100	EB12p.	E	古代?
27	〃 p.2	〃	前末?(6?)	?64	DF21p.1	E-1?	〃	○101	EB15p.	D-2	中中(7b~8a?)
28	CE62p.1	〃		?65	DG12f.p.	D-2	〃	○102	EB15f.p.	D-5	中初(7a)
29	〃 p.2	〃		?66	DG18f.p.	〃	〃(7a新)	×103	EB18f.p.	D-2	前末?
30	CE65p.1	〃		○67	DH06f.p.	C-3	前末(6)	○104	EB21f.p.	D-3	中前(7b)
31	CF59p.1	〃		○68	DH09f.p.	D-3	中初(7a)	○105	EB24p.1	A-1?	?
32	〃 p.2	〃		?69	DH15f.p.1	A-2?	前末~中初?	○106	EB50f.p.1	D-1	中中(8a)
33	CF62p.1	〃		?70	〃 f.p.3	D-2	中初(7a)	○107	〃 f.p.2	D-2	〃
34	〃 p.2	〃		?71	DH24f.p.	〃	?	○108	EB53f.p.2	〃	中初(7a)
35	〃 p.3	〃		×72	DH50f.p.	B-2?	中初(7a)	○109	EB59f.p.	〃	〃(7a新)
36	CG59p.1	〃		×73	DI03f.p.	D-3	〃	○110	EC03f.p.1	D-5	中前(7b)
?37	CB18f.p.	D-2?	中初(7a新)	○74	DI62f.p.	D-1	前末?	×111	〃 f.p.2	D-1	?

A 表 (2)

№.	名 称	タイプ	時 期	№.	名 称	タイプ	時 期	№.	名 称	タイプ	時 期
×112	〃 p.3	A-1	中前 (7b)	?149	ED53 p.2	〃	中中(7b~8a?)	○186	〃 f.p.3	D-1	前 末 ?
?113	EC06f.p.1	B-1	中初 (7a)	×150	〃 p.3	A-1?	前末~中初?	○187	EE74f.p.	〃	中初(7a?)
×114	〃 f.p.3	D-2	中前 (7b)	×151	〃 p.4	〃	中初(7a)?	?188	EF03f.p.1	〃	?
○115	EC12f.p.1	〃	中初(7a新)	○152	ED59f.p.1	D-1	〃 ?	?189	〃 f.p.2	〃	〃
○116	〃 f.p.2	D-3	?	○153	〃 f.p.2	〃	中前 (7b)	?190	EE06p	E-1	〃
○117	EC15 p.1	C-2	中初 (7a)	○154	〃 f.p.3	A-2	〃 ?	○191	EF09f.p.	D-3	〃
○118	EC18f.p.1	D-2	〃	×155	ED68p.	E-1	中中 (8b?)	?192	EF12p.	D-1	中中(7b~8a?)
○119	EC21f.p.	〃	〃	○156	ED71p.	〃	晩 期 ?	?193	〃 f. p.	$\frac{A-2}{D-2}$ か	前末~中初
?120	〃 p.2	A-1	?	○157	EE03 p.1	B-2	中初(7a?)	?194	EF15p	E-1	中前(7b?)
○121	EC24 p.1	B-5	中中(8a?)	?158	〃 f.p.2	D-2	〃 (7a新)	?195	〃 p.1	B-1	前 末 ?
×122	EC27 p.1	D-3	前末?	○159	EE12 p.1	B-2	中前(7b?)	○196	EF08p.1	E-1	?
×123	EC27 p.1	A-1	〃	?160	EE15f.p.1	D-2	〃	○197	EF24p.1	C-1	前 末 ?
○124	〃 f.p.2	D-1	中初(7a?)	○161	EE18f.p.1	D-2	中初(7a新)	○198	〃 p.2	〃	?
○125	〃 f.p.3	D-3	中前(7b?)	×162	EE21p.	E-1	前 末 ?	×199	EF27p.1	B-5	中初(7a)
○126	EC50f.p.1	D-2	〃	×163	〃 p.1	A-2	中 初 ?	○200	〃 f. p.	D-2	〃
×127	〃 p.2	C-2	〃	?164	〃 p.2	B-2	前 末 ?	?201	EF50p.	D-1?	?
○128	EC53f.p.1	D-3	前末~中初?	×165	EE24 p.1	E-1	古 代 ?	○202	EF65p.1	C-2	中初(7a)
○129	〃 f.p.2	D-2	中初(7a)	○166	〃 p.2	E-2	〃	○203	EF71f.p.1	B-2	〃
○130	EC56 p.1	A-4	中中 (8?)	○167	〃 p.3	A-1	〃	○204	EF74f.p.1	D-2	〃
×131	〃 f.p.1	D-2	中前(7b~8?)	○168	EE27p.	A-2	〃	?205	EG03p.1	E-1	〃 (7a新)
○132	〃 f.p.2	〃	中初 (7a)	○169	EE50f.p.1	B-1	中初(7a新)	?206	〃 p.2	D-1	〃 (7a)
○133	EC62f.p.	A-2	中前(7b?)	○170	EE53f.p.1	D-2	〃 (7a)	?207	EG06f.p.1	D-2	中中(8b)
?134	EC71 p.1	E-1	?	?171	〃 p.1	A-2	中中(8?)	?208	〃 p.2	A-2	?
?135	ED03f.p.1	A-2?	〃	?172	〃 f.p.1	A-1	前 末 ?	?209	〃 f.p.3	D-1	〃
?136	ED15 p.1	B-2	中前(7b?)	○173	EE59f.p.1	D-6	中初(7a新)	?210	EG09p.1	C-1	〃
?137	〃 p.2	〃	中初 (7a)	○174	〃 p.2	A ?	晩 期 ?	?211	〃 p.2	?	〃
?138	〃 p.3	A-1	中前 (7b)	×175	〃 f.p.3	B-2	中初(7a新)	?212	〃 p.3	〃	〃
×139	ED18f.p.	D-1	中初?	×176	〃 f.p.4	D-2	中 期 ?	?213	〃 f.p.4	D-1	中初(7a a)
○140	ED21f.p.1	B-1	〃 (7a?)	×177	EE62f.p.4	〃	中初(7a新)	?214	〃 f.p.5	D-2	前 末 ?
?141	〃 f.p.2	D-2	中前(7b?)	○178	〃 f.p.2	D-3	〃	?215	EG12p.1	E-1	中 初 ?
○142	ED24f.p.1	〃	〃	×179	EE65p.1	E-1	晩期(B-C)	?216	〃 p.2	C-1	?
○143	〃 p.2	B-5	〃	×180	〃 f.p.2	D-2	中前(7b)	×217	EG21p.	E-1	中 初 ?
×144	ED27 p.1	D-1	晩期 ?	○181	〃 p.3	E-2	〃	×218	EG50f.p	〃	〃
?145	〃 p.2	E-1	?	○182	EE68f.p.1	D-3	〃	○219	EG50f.p.	D-2	中中(8b)
○146	ED53f.p.1	D-2	中前(7b?)	○183	〃 f.p.3	D-2	中中(8a?)	?220	EG53f.p.	〃	〃
○147	〃 f.p.2	E-1	中初 (7a)	×184	〃 f.p.4	〃	中前(7b?)	?221	EG56p.1	A-1	前 末 ?
×148	ED53 p.2	D-1	前末~中初?	○185	EE71f.p.2	〃	?	?222	〃 p.2	B-1	〃

No.	名称	タイプ	時期	No.	名称	タイプ	時期	No.	名称	タイプ	時期
○223	EG62f.p.	D-1	中中?(8b?)	×242	EH68f.p.	D-3	?	?261	E J 53 p.1	A-1	?
○224	EG68p.	E-2	?	○243	× f. p.1	D-5	×	?262	× p.2	A-2か D-2	×
○225	EG71p.	A-1	中中?(8b?)	?244	EH71f.p.1	D-1	×	○263	E J 59f. p.	D-1	晩期(B-C?)
×226	× f. p.1	D-2	× ×	○245	× f. p.2	D-2	前末?	×264	E J 62 p.	A-1	?
?227	EG74f.p.3	D?	前末?	○246	EH74f.p.	D?	中前(7b?)	×265	E J 68f. p.	D-3	中前(7b?)
?228	EH03p.	E-1	?	?247	E I 03f. p.	D-3	中中(8b?)	○266	E J 71 p.	E-1	晩期(C1?)
?229	× f. p.1	D-2	×	?248	E I 06 p.	E	×	?267	F A 59 p	E-1	?
?230	EH06f.p.1	×	中初(7a)	?249	E I 12 p.1	×	?	○268	F A 62 p.1	D-2	×
?231	× f. p.2	D-1	中前(7b)	?250	× p.2	E-1	×	○269	× p.2	E-1	×
?232	EH09p.	E	?	×251	E I 24 p.	×	×	?270	× p.3	A-1	×
?233	EH12p.1	E-1	×	?252	E I 50f.p.1	D-2	×	?271	F A 68 p.1	E-1	×
?234	× p.2	×	前末?	?253	× p.2	E-1	古代?	○272	× f. p.3	D-2	×
○235	EH21p.	E-2	?	?254	E I 53f.p.1	D-1	?	×273	× f.p.2	D-3	×
?236	EH50p.	C-4	中中(8b?)	?255	× p.2	E-1	×	×274	F A 71 p.1	A-1	×
?237	EH53f.p.1	E-2か D-1	中初(7a新)	○256	EH56f.p.1	D-2	中前(7b?)	○275	× p.2	A-2か D-2	×
?238	EH56p.	D-2	?	?257	E I 59f. p.	×	×	?276	C I 33f. p.	?	後期?
○239	EH62f.p.	×	×	?258	× f.p.2	×	?	?277	C J 33f. p.	?	中中(8b?)
?240	EH65f.p.1	A-1	後期?	○259	E I 62f.p.2	×	前末?	×278	EG56f.p.1	D-2	×
○241	EH65f.p.2	A-2	前末?	○260	E I 65f. p.	D-3	中前(7b)	×279	E H 65 f. p.	×	?

(B表) ピット群タイプ別個数 (明確なもののみ)

	A タイプ				B タイプ				C タイプ				D タイプ				E タイプ						
	A-1	A-3	A-3	A-4	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	C-1	C-2	C-3	C-4	D-1	D-2	D-3	D-4	D-5	D-6	D-7	E	小計	
A			1			1		1		1				1	4				1			38	48
C																							
D	1	2			1	2	2		1	2	1	1	4	5	4		2			1	3	32	
E	15	11		1	5	8	1		4	4	4		1	27	51	14	2	3	2		39	192	
F	2	1													3	1					3	10	
小計	18	14	1	1	6	11	3	1	5	4	7	1	2	32	63	19	2	5	3	1	83	282	
計	34				26				14				125				83	282					

14.2

	A タイプ		B タイプ		C タイプ		E タイプ		E タイプ
C	2.9%	C	7.7%	C	7.1%	C	4.8%	C	45.8%
D	8.8	D	23.1	D	28.6	D	12.8	D	3.6
E	79.4	E	69.2	E	64.3	E	79.2	E	47.0
F	8.8	F	0	F	0	F	3.2	F	3.6

C 表

	前 期 末			中 期 初			中 期 前 葉			中 期 中 葉			中 期 後 ~ 末			後 期			晚 期			古 代			小 計			
	C	D	E	F	C	D	E	F	C	D	E	F	C	D	E	F	C	D	E	F	C	D	E	F				
A-1			3				2			2						2									1			10
A-2		1	1				1			2						2									1			7
A-3	1																											1
A-4										1						1												1
B-1		1	2				3																					6
B-2	1	1	1				1	3		3																		10
B-3		1								1						1												2
B-4																												23
B-5								2		1						1												1
C-1			1																									4
C-2	1						2	2		1																		1
C-3		1																										6
C-4										1						1												1
D-1		1	1				1	1	6				1	3		5									2			2
D-2	2	1	5				2	4	17	1	12		8												2			21
D-3			1				3	1		6			2															52
D-4																												13
D-5										1																		1
D-6																												94
D-7			1																									1
E-1	1		2				1	6		1			1			1									3			17
E-2			5							1															1			24
小計	11	10	17	3	13	46	2	1	34	24			24												1			
計																												

して、異常と思われるものを一応不自然即人為の反映とかなり短絡的に結論づけた。なお実測図は欠くが写真等から判定しうるものも一部活用した。

(e) ピット類の構築位置について 各時期を通じて、ピット類には重複の事実が多い。これはその構築位置決定に、何らかの規制が存在したことの反映とも考えられる。貯蔵施設域的なものの設定と、その内部における構築位置の決定に何らかの規則性が存在したとすると、この種のものには二重の規制下にあったこととなる。

(f) 壁の補強的措置について 検出したピットのうちの若干例に、隣接するピットとの重複部分に礫・粘土等が存在した。これには調査者によって、重複・接触により脆弱化した部分の補強的措置と見做されており、筆者らもそれは妥当と考えた。

(g) 遺物の残存状況について 遺構と本来的な対応関係にあるという遺物は少ない。若干例の土器類（横転位中心）が該当する程度であり、一般的に遺物の残存は少ない。これはこの種遺構の一特徴と見做しうる点であり、この種遺構は少なくとも廃棄時には空の状況であったことを思わせる。これはこの種遺構の機能想定上、消極的ながら一資料を提供するものであろう。

なお本遺跡の **DD15 f. p.** の堆土下位より出土した植物種子については、巻末にその鑑定結果を掲げた。その出土状況その他の詳細は、写真以外の資料を欠く故に不明である。

註1 氷瀬福男 秋田県内におけるフラスコ状ピットについて 秋田地方史論集 半田教授退官記念会編 昭和56年

註2 筆者（石川・相原）らが村教委の依頼により調査したものである。昭和53年

(d) フラスコ状ピット類他の機能・用途について

この種遺構の機能・用途について簡単にふれておく。それにあたりこの種ピットについての学史を回顧すると、まず岩手県におけるこの種遺構の機能・用途についての最初の論考は草間俊一氏によるものである。その要旨は以下のとおりである。「(前略)この種の堅穴は大きさが小さいのに、深さが大である上に、底部に向って末広がりになったフラスコ状を呈しているものが多いのが特色である。結論を先にいえばこれも住居として掘られ、住まわれたものであるということで、その大きさや深さなどから貯蔵穴と考えたり、動物を捕獲する落とし穴または墓壇と考えるのは当らない。ただこの堅穴が埋まって行く過程において、墓壇として用いられた場合があると考える。この種の堅穴が住居跡であるとする理由は(中略)この深い堅穴の床面に厚さ5センチ内外の炭化物を含む層が一面に敷きつめられたように存在することで、これらの遺物の存在はそこでの生活を無視しては考えられない。その生活とは「ほどあくを敷いて寝

る、生活である。`ほどあくを敷いて寝る生活、とは岩手県などでごく最近まで冬山で狩りをしたり、炭焼きなどで寝る場合、地面で簡単な焚火をして地面を温めてから、その焚火を踏み消してその上に熊の皮などの獣皮を敷いて寝る生活のことで、そうすると地面のぬくもりが残っていて温く寝られるとのことである。そして冬の寒さをしのぎ、また翌年使用すると云うように数年使用したものと考える。従ってこのような堅穴は冬だけの「ねぐら」として使用したものであった。(中略) それがある程度埋まって浅くなった時に、普通の堅穴住居のように日常使用する場合もあった。(中略) これを貯蔵穴乃至動物捕獲の落とし穴などと考える見解は、岩手県で筆者の担当して調査した限り、その埋没の状態からして考えられない。ただこのような小堅穴を埋没を繰返しながら使用した過程で、また穴が廃棄され残存している状態で、墓塚として使用されたこともあったと考えられる例もある(後略)。」以上のように氏の推定の骨子は、冬期間のねぐら説ともいうべきものであった。なおこの論考において氏は、この種遺構の①形態規定、②存在状態、③類例、④存続期間などについても言及しているが、極めて適切な指摘が多い。とくに②の存在状態についての指摘は重要であった(後述)。

草間氏の論考以後には、この種遺構を考察の主題にすえた論考は発表されておらず、若干の報文中でふれられている程度であった(註2)。

昭和40年代以降に激増する大規模事前調査はこの種遺構の類例の多量の蓄積を結果したが、岩手県においてはそれらの多くに「貯蔵穴」的な機能想定を行なう例がほとんどであった。しかしながらそれらは厳密な検討をへたものとは必ずしもいいえないものが多かった。

全国的視野のもとにこの種遺構を検討した論考は堀越正行氏のものであろう。現在未完のこの論文はこの種遺構の学説史的回顧・検討を主とし、その史的意義にまで及んでいる。ここでは氏の整理に従がい、この種遺構の機能・用途論を見ておく。氏によると以下のような用途の各説が存在した。即ち①墓塚説、②採掘塚説、③ねぐら説、④捨て穴説、⑤犬小屋説、⑥落とし穴説、⑦倉庫説、⑧貯蔵穴説等である。①についてはこの種遺構には二次的な転用が見られる程度であり、本来のものとはいえないとした。また本来の墓塚はこの種遺構(即ち氏の「小堅穴」)とは形状等が異なることも指摘した。②についてはこの種遺構の整形性・小規模性・狭口形態をもって妥当ではないとした。③は先にふれた草間氏の説であるが、「(前略)小堅穴と焚火が有機的関係をもっているかの再検討が必要であろう(後略)」とし、この説を他地域の小堅穴へ汎論することをひかえた。④については小堅穴廃棄後の二次的な活用の一面の指摘にすぎないとしてしりぞけた。⑤については、犬骨の検出例が無い点・深い円筒状小堅穴や他の小堅穴にその可能性を認めがたい点を取り、しりぞけた。⑥については、落とし穴と見做さるべき他の土壌とは形状等が異なる故をもって否とした。⑦については、貯蔵庫と想定されているものが、いずれも円筒状小堅穴なる点や、何を貯蔵していたのかという点まで言及していないなどの不備があることから評価を柵上げしている。⑧については、各地における遺物残存例や土器の存在例などを総合して、「(前略)木の実を主とした植物質食料を貯蔵した(と考えられる)

小竪穴を「貯蔵穴」とし、貯蔵庫の一使用法と理解しておきたい（後略）。」とし、貯蔵穴説が現段階においてはもっとも合理的な解釈とした。

遺物の出土状況その他の検討を主とする考古学的方法に加え、一種の実験的方法をも加味して、この種遺構の機能想定を試みたものに氷瀬福男氏の論考がある。この論考も別にふれてあるとおり論点が多岐にわたっているが、機能に関するものとしては、ピット内の年間の温湿度の測定結果からする推定が記されている。「（前略）フラスコ状ピットの温湿度は、夏期で摂氏15度・90%以上、冬期で口縁部に蓋をすると摂氏2度・90%以上と一定である。（中略）。この温湿度は、野菜を越冬させるために必要な温湿度である摂氏0～3度、90%以上に近い数値を示している。（中略）梨ノ木塚遺跡のフラスコ状ピットから、底面直上で栗が多量に検出された例は、このピットの機能を示唆してくれるものではないだろうか。栗のほか、ドングリ・クルミなどの貯蔵も考えられる。山館上ノ山・柏子所・鳴滝・萱刈沢・館下Ⅰ・大畑台遺跡の発掘調査では、ドングリ・クルミが検出されている。（後略）」と、貯蔵穴説にたっている。

以上のようにこの種遺構についての機能想定のうち、現在もっとも有力なそれは「貯蔵穴説」といえよう。なお西日本におけるこの種遺構（袋状ピット）は早くから「貯蔵穴」視されてきたところであった^(註5)。

本遺跡を含む岩手県内のこの種遺構の特徴も大略如上の各説の指摘に合致するものが多く、やはり貯蔵穴類似のものに見做して大過なからう。少数ながらも木の実類の実物の出土例も蓄積されつつある。たとえば盛岡市仁反田遺跡においては多量の炭化クルミが出土しているし、雫石町塩ヶ森Ⅰも同様である。また安代町赤坂田Ⅰ遺跡においてはトチ出土が知られている^(註6)。今後さらに良好な遺構が検出されるのであろう。ただし別にふれたように、この種遺構に遺物残存例が少ない点は検討されるべき課題である。タイプEとした浅いもの、とりわけ晩期のそれには、貯蔵穴との機能想定は必ずしも必要でない。広義の信仰関連・儀式関連のものである可能性がある。したがって晩期のEタイプを除くその他のものを、以下には「貯蔵穴様ピット」などと汎称することとする。その場合、諸先学の指摘したように、それらが二次的に墓塚などに転用された可能性も当然記憶されるべきである。二戸市大淵遺跡の類例をひくまでもなく、その事実は厳然として存在するのであるから。本遺跡における一對の耳栓の出土例(E H65 f. p. 2)は当初墓塚の存在を思わせるに十分な資料と思われた。しかしその出土状況（相互にレベル差が存在する）や、本遺跡における遺構からの遺物出土状況（その多くが投棄され、遺物の種別による投棄のされ方の異同も看取できない）などの検討の結果は、墓塚説に否定的とならざるを得なかった。

註1 草間俊一 日本原始時代生活についての一考察—フラスコ状竪穴に関して—

森嘉兵衛教授退官記念論文集「社会経済史の諸問題」 法政大学出版社 所収

註2 草間俊一他 岩手県稗貫郡天神ヶ丘遺跡 大迫町教育委員会 昭和49年

- 註3 掘越正行 小竪穴考(1) 史館 第5号 昭和50年5月
 〃 〃 (2) 〃 第6号 1976年 〃
 〃 〃 (3) 〃 〃
 〃 〃 (4) 〃 第9号 1977年
- 註4 氷瀬福男 秋田県内におけるフラスコ状ピットについて
 「秋田地方史論集」半田教授退官記念編 昭和56年2月
- 註5 南方前池遺跡調査団 岡山県山陽町南方前池遺跡—縄文式末期の貯蔵庫発見—私たちの考古学7 考古学研究会 1956年
- 註6 財団法人岩手県埋蔵文化センター四井謙吉氏・本沢慎介氏の教示による。本沢氏によると2基の浅目のフラスコ状ピットからの出土とのことである。
- 註7 前記の本沢氏の教示による。炭化したクルミが木の葉とともに出土している由である。
- 註8 赤坂田Ⅰ遺跡 岩手県埋蔵文化センター文化財調査報告書第15集、岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(昭和55年度分)(財)岩手県埋蔵文化財センター 昭和56年 所収
- 註9 渡辺誠氏は縄文時代前期から中期にかけて発達した貯蔵穴に対し、堅果類の短期間貯蔵(一冬分のための生貯蔵や、クリ類に甘味を増すために翌春まで埋めておく措置)や、地下茎や球根類の貯蔵用の機能を想定している。このようなものであれば、遺物遺存例が少なくなりかつ、それが所謂一回使いすて的な扱いをうけたとすれば、その数が、極めて多くなることとなり、検出状況と合致する。検討に値する見解であらう。

(e) 岩手県における貯蔵穴様ピット類のあり方について

先にその機能を「貯蔵穴」類似のものとして推定したピット類のあり方の諸相について若干の整理を試みる。再述になるが貯蔵穴様ピット類としてまとめたものは、本遺跡における分類のA～Dタイプ[●]のものすべてである。Eタイプとしたものにはその機能を想定していない。

(a) 貯蔵穴様ピット類の変遷 貯蔵穴と思われる各ピット類は縄文時代の各期に複数タイプが併存するのが常態であるが、各期には主体的形態が存在し、結果的に時期的変遷を示すことになる。その概要を示す。まず貯蔵穴様ピット類の存続期間については、現状では早期に属する確実例は知られておらず、前期初頭が初現期らしく、それはフラスコ状ピットであるらしい^(註2)(二戸市上里遺跡)。このことは先にふれた草間俊一・掘越正行両氏の、岩手県・東日本のフラスコ状ピットの初現期についての「前期末」という指摘に修正をせまるものである。初現期云々関連の問題は、類例の追加により変更されるのが常である。フラスコ状ピットはこれ以降晩期まで存続するが、前期末から規模・構築数がともに拡大・増加しはじめ、中期初頭には激増し、その傾向は中期中葉～後葉頃まで続く。江釣子村新平遺跡・本遺跡、大迫町天神ヶ丘遺跡、盛岡市仁反田遺跡は中期初頭頃までの好例であろうし、紫波町西田遺跡は中～後葉のそれであろう。袋状あるいはピーカー型などといわれるものも混在するが、圧倒的多数を占めるのはフラスコ状のものであり、その強い整形性の検討も必要とされるであろう^(註3)。

中葉後葉以降晩期にかけての貯蔵穴様ピット類には変化が見られる。それはフラスコ状ピッ

トに加え袋状またはピーカー状のものが増加する傾向が顕著になることと、総体的に規模の縮小化の傾向もみえることである。規模縮小化傾向は晩期のフラスコ状ピットにもっとも顕著であり、所謂すづまり的プロフィールをもつものがほとんどを占める。その好例は九戸村川向Ⅲ遺跡^(註4)に見られ、また安代町曲田遺跡も同様である。縄文時代のフラスコ状ピットはその初現期・終末期の両者ともに従来の見通しに変更が生じたことになる。^(註5)

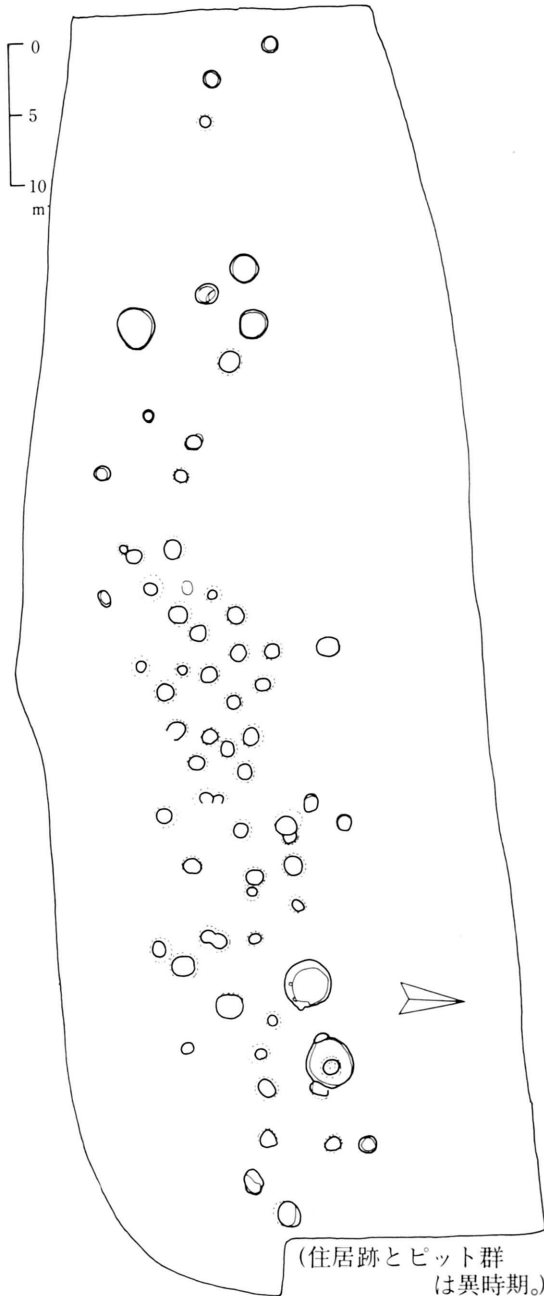
(b) 集落内における貯蔵穴様ピット類のあり方について 次に集落内におけるこの種ピットのあり方を概観しておく。その場合に前記氷瀬氏論文に良好な要約があるので最初にそのあらましを紹介しておく(前掲書P.15~18)。「(前略)現時点では三つのパターンが認められる。住居群の外側に群在する例(Aパターン)、住居群内と住居内に付設されるものが混在する例(Bパターン)、大部分が住居内に付設される例(Cパターン)、である。Aパターンは杉沢台・大畑台Ⅰ期・館下ⅠAグループ・山館上ノ山・宝竜前遺跡で認められる。(中略)。Bパターンは下堤・大畑台Ⅱ期・館下ⅠBグループ・鹿野戸遺跡が認められる。(中略)。Cパターンは大畑台遺跡のⅣ期に認められる。(中略)。Cパターンとした例は、大畑台遺跡の第Ⅳ期のみで、一般的あり方なのかどうか疑問な点もある。Aパターンは縄文時代前期から中期に認められ、円筒式土器文化との接触の強い地域に類例が多い。またB・Cパターンは、中期以降大木式土器文化との接触が強くなると類例が多くなる傾向が認められる。(後略)。」

また林謙作・桜井清彦両氏による次のような整理・予察も極めて参考になる。「(前略)県内の中期以降の集落を見ると、1、貯蔵施設が住居・墓地などと隔たった場所に集中する場合。言い換えれば住居・墓地等と貯蔵施設の集中地区の間に沢などの境界となる地物が見られる場合。2、貯蔵施設の配置される区域と住居・墓地等の配置される区域の間に、境界となる地物の認められぬもの。a、おなじ平面の上で、住居・墓地・貯蔵施設が、それぞれ別の区画にわりつけられている場合。b、貯蔵施設・住居が入りまじっている場合。の都合三種類の区別をすることができる(後略)。」そして岩手県内の集落でもっとも例が多いのは2aであるとし、北上市滝の沢(前期末)、本遺跡、紫波町西田(中葉中葉)、石鳥谷町大地渡(中期中葉)の各遺跡を類例としてあげた。さらに1・2bは少数であり、1の類例に盛岡市仁反田、2bの確実例として都南村湯沢森等があるともべている。そして杉の堂遺跡に関連させて「(前略)、B地区で発見した円形土壙群が貯蔵施設であり、住居跡が独立したブロックを構成するという確証が得られれば、杉の堂遺跡も2aのグループに属することとなる。上にあげた例から見ると中期末を境にして集落の構成が変化したようにも考えられるが、杉の堂遺跡が2aに属することが確実となれば、岩手県内の縄文期の集落のもっとも基本的なかたちは、一貫して2aのようなものであったことが証明されるわけである(後略)。」と述べ、予察的見解を明らかにしている。以上の各氏の指摘は極めて示唆に富むものといえる。氷瀬氏の各パターンは、林・桜井両氏の2に含めることもできよう。以上のような見解に、とくに林・桜井両氏の見解に導びかれながら

岩手県内の類例の整理を試みる。

1、貯蔵施設が自然的地物によって住居・墓地などから離れた場所に集中するもの。居住域・墓域と貯蔵施設域が自然的境界により隔てられているもの。類例は盛岡市仁反田遺跡（前期末～中期中葉、(註7)一戸町田中1遺跡（中期中葉、(註8)赤坂田I遺跡（後期、(註9)九戸村川向III遺跡（晩期前葉））その他のものがあげられる。貯蔵施設の群在化が顕著になって以降の各期に見られる

第II図 九戸村川向III遺跡（晩期）



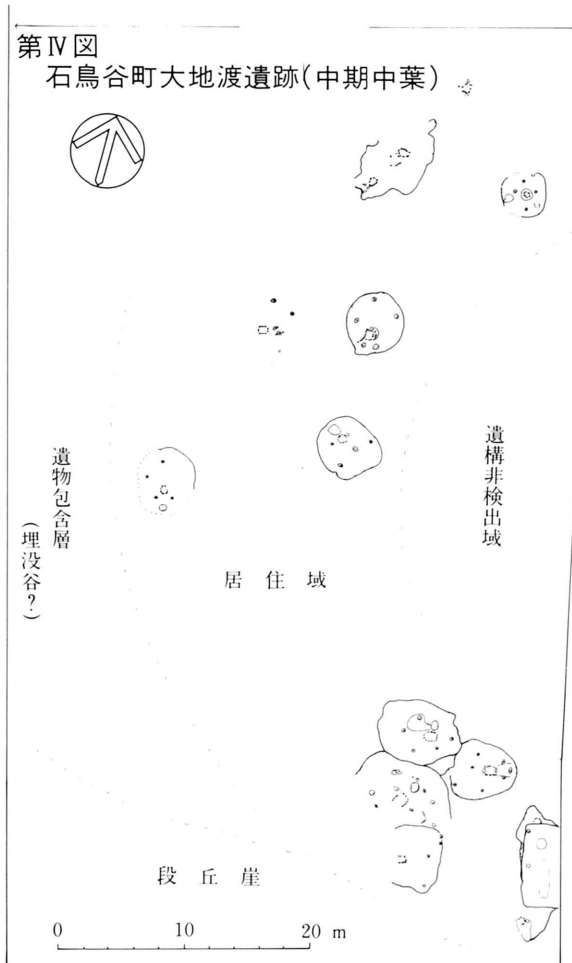
ことになる。

2a、貯蔵施設の配置区と、住居・墓地等とそれとの間に何らの境界的物事もなく、それぞれが同一面上に相互に独立した区画を占地するもの。居住域・貯蔵施設域・墓域等と平面の使い分けが行なわれるもの。類例は極めて多いが、北上市滝の沢遺跡（前期末～中期中葉以降）、本遺跡、江釣子村新平遺跡（前期末～中期中葉以降）、大迫町天神ヶ丘遺跡（中期中葉～前葉）、雫石町塩ヶ森I、紫波町西田遺跡（中期中葉）、江釣子村猫谷地遺跡（中期末～後期中葉、(註11)）などがあげられる。前出の杉の堂遺跡での見通しが正しければ、この類型も1と同様の各期に存続したことになる。なお石鳥谷町大地渡遺跡（中期中葉、(註13)）もこの類例に加えて大過ないと思われる。居住域のみがたまたま調査範囲にあたった結果と思われる。同様に九戸村田代遺跡（中期中葉～後葉、(註14)）も同様の事情と考えられる。またこの類例中の本遺跡・塩ヶ森I遺跡等には大型住居跡を含み、それと貯蔵施設のあるものの間に対応関係・附属関係を想定しうるものもある。したがって、大型住居を伴う場合には、貯蔵施設域以外でもそれらが嘗



なまれることに留意しておくべきであろう。

2b、上のうち、貯蔵施設と住居が入りまじって存在するもの。これらの中には、住居1棟とピット複数の対応関係（2aの大型住居とピット間に見られた如き）を示すかのようなものと、

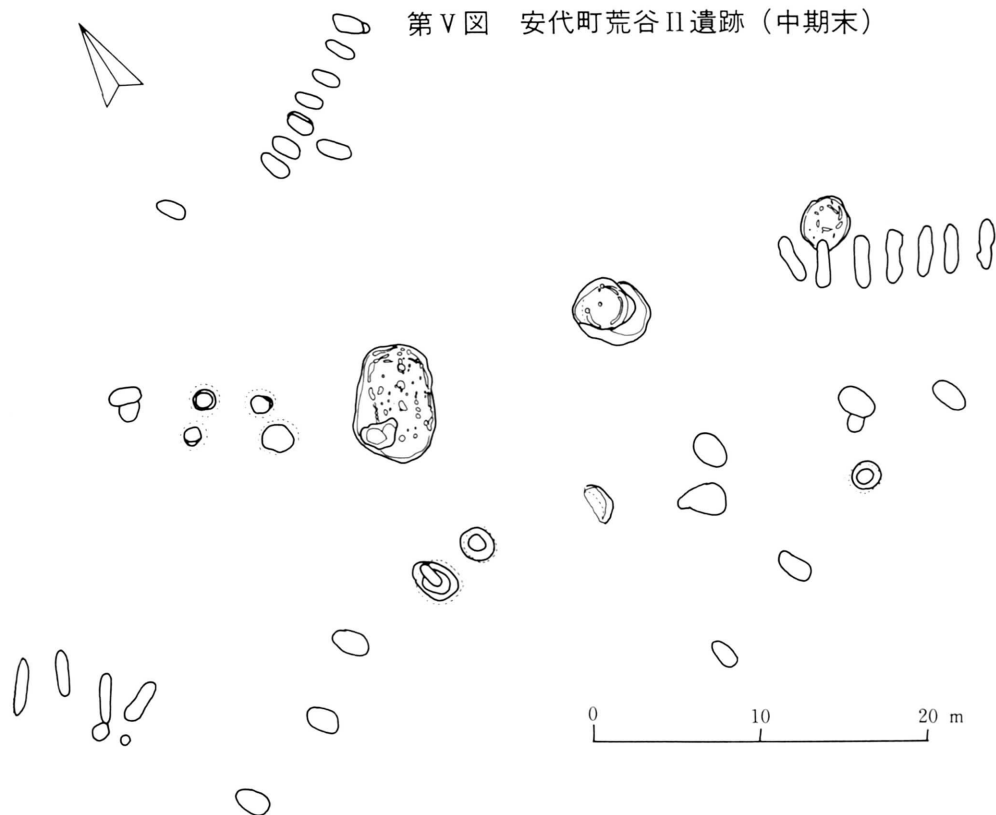


かなり乱雑なもの両様がある。後者の類例は都南村湯沢遺跡(中期末葉)、安代町曲田I遺跡(註15)(晩期)、などにある。前者の例としては安代町荒屋II遺跡(中後後葉)、同越戸II遺跡(中期末、註16)、などがある。軽米町吠屋敷I遺跡(註17)の後期関連のものもこれに該当する可能性があるが、ピット類の密集区域もあり、2a・2bの両様の特征をもつ。整理の進行によってより明確になるものであろう。なお荒屋IIの住居の1つは大型住居に該当すると思われるもので、その西隣に4基前後のピットが分布する形をとる。(註18)

以上の三類型に大別可能と考られるが、これらの他に、大型住居の好例が出土している一戸町馬場平遺跡においては、屋外に貯蔵穴は密集せず、わずか

に一基が(環状をなして配置されられると思われる)住居跡の内側の部分に検出された例がある。しかもそれはこの種の通常規模よりかなり大型であるらしい。このような例も紹介しておく。また本遺跡の前期末の遺構の組みあわせが一見2bに該当しそうにも見えるが、時期不明とされた遺構の中に該期のものが存在する可能性もあり、ここに含めないでおく。(註19)

岩手県における貯蔵施設のあり方は前記の三大別が可能であり、そのうち主体をなすのは2aということになる。1は2aの変異の中にも含まれる可能性があるだろう。とりわけ調査域が限定される最近の調査の性格が、1の如き現象をひきおこしているとも考えられるからである。1と2aを組みあわせると、何らかの形で居住域他と貯蔵施設域が区分される(集落内部における面



・場の使い分け）傾向は、前期末以降晩期まで一貫して維持されたことになる。前掲書における林氏らの見通しは多分に蓋然性の高いものであろう。その中に、おそらくは時代的な特徴を伴って（中期末以降という）2b的なあり方が加わってくるものであろう。

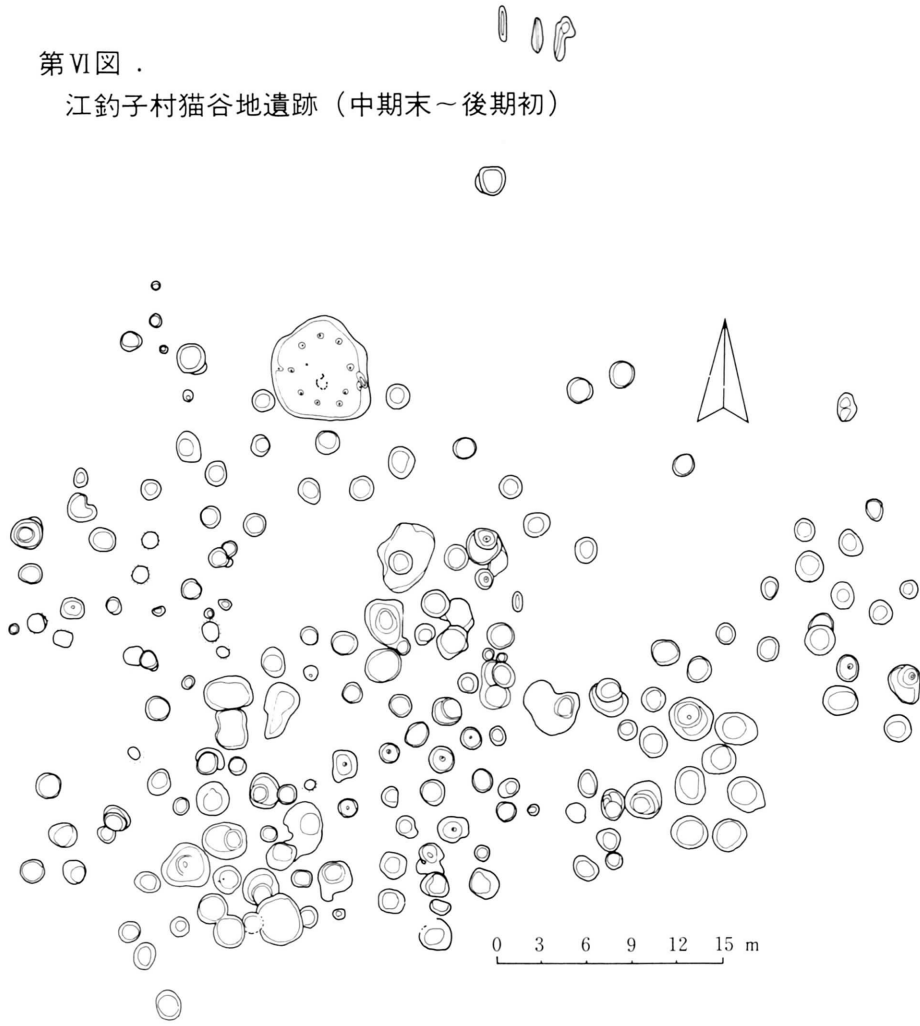
これを貯蔵施設の密集化段階（共有財産）から個別化段階（個別財産）への移行・変遷と短絡的にまとめることはひかえるが、その背景は十分に検討されてよい。それにはまず大型住居の動向や炉の変化、石器組成の特徴等の関連の基礎的データを蓄積することが急務であらう。

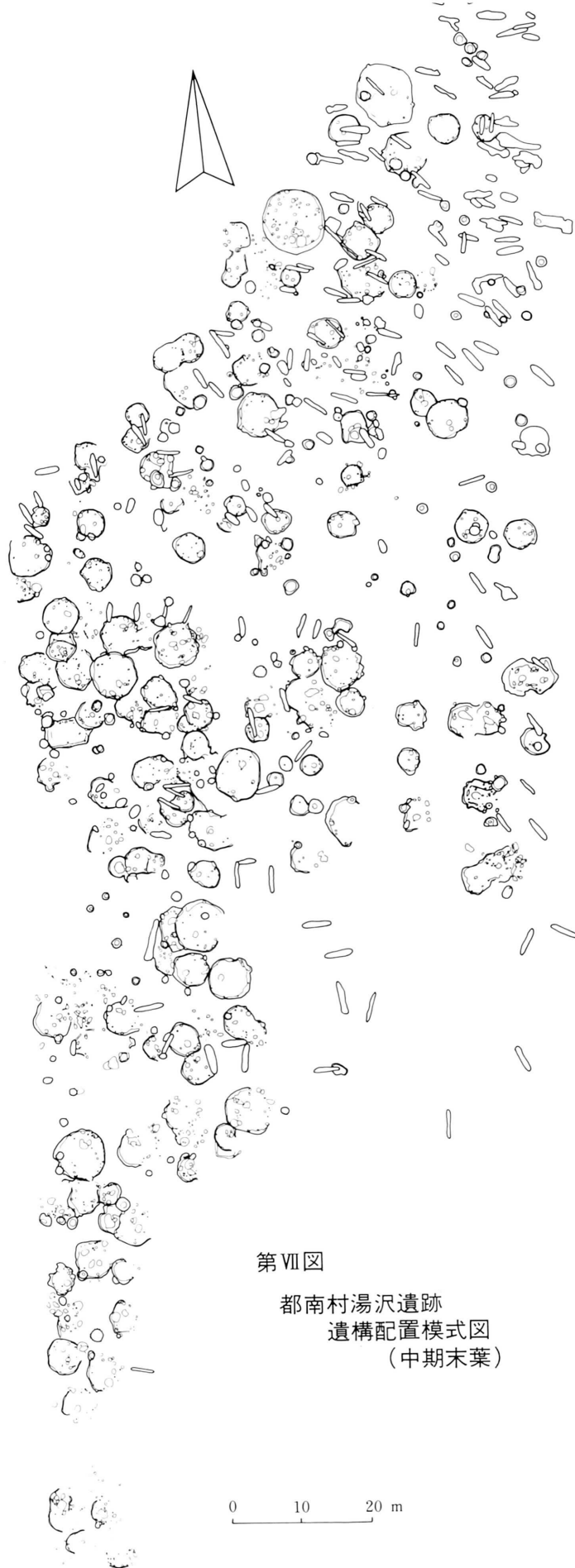
以上は屋外貯蔵施設との前提での検討であったが、最後に屋内に存在する貯蔵穴の状況を見ておく。草間氏論文によると、盛岡市小屋塚第8号竪穴内には第9号竪穴が伴うとされた。

最近の屋内検出例は、一戸町馬場平2遺跡C-3住居跡内、雫石町塩ヶ森遺跡第1号住居址他などに知られており、大型住居に分類しうる住居の床面中に営なまれるものである。したがって本遺跡の大型住居 C J24 住居跡の床面中 C J30 f. p.、C J24 p. なども住居に伴った可能性なしとしない。通常規模の住居跡内に営なまれた確実例は筆者は知らない。しかし氷瀬氏論文にもその存在は指摘されているのであり、今後の類例蓄積に期待したい。

第VI図 .

江釣子村猫谷地遺跡 (中期末～後期初)





第Ⅶ図

都南村湯沢遺跡
遺構配置模式図
(中期末葉)

0 10 20 m

- 註1 以下の記述の概要は筆者が、日本考古学協会昭和56年度大会シンポジウムⅠ、北関東を中心とする縄文中期の諸問題、第Ⅲ部袋状ピットの様相と地域性 2 集落構成における袋状ピットの在り方 岩手・西田遺跡の報告にあたって、関連事項として口頭発表している。それにあたっては、財団法人岩手県埋蔵文化財センター瀬川司男・遠藤勝博両氏から資料提供をうけ、三者が協議し、報告内容を作成したことを明記しておく。ここで改めて両氏に深甚の謝意を表する。
- 註2 蛇王洞Ⅱ式類似資料他を多量に出土した田老町小堀内遺跡に該期ピット（ビーカー型）にその可能性が想定されたことがあるが、その後修正されたい。筆者実見による。
- 註3 フラスコ状という強い整形傾向下にある理由についても諸説がある。草間氏は前掲書において「(前略)、フラスコ状を呈したのはなぜかと考えると、もとは桶状に垂直に掘るので用は足り、それが本来であったが、時には内部が狭いので周りを掘り広げることもあったためと推定される。しかしその場合、土が崩れない限り上から下まで垂直に掘り広げる必要もなかった。(後略)」と述べている。また続けて、廃棄後の土圧によってよけい上部の方せばめられたのではないかも想定している。氷瀬氏は前掲書において「(前略)フラスコ状に穴を掘った理由は (ア)温湿度を一定に保ちたい、(イ)ピット内への出入りや、周囲での生活で口縁部の土が崩れるのを防ぐため、頸部を長くする(土層を厚くする)必要があったと考えられる。(後略)」としている。この問題については今後も検討が必要であろう。
- 註4 岩手県埋文センター文化財調査報告書第26集 川向Ⅲ遺跡発掘調査報告書 畑地帯総合土地改良事業関連発掘調査(昭和55年度) (財)岩手県埋蔵文化財センター・岩手県二戸土地改良事業所。
- 註5 筆者実見による。
- 註6 林謙作・桜井清彦 M・まとめ、岩手県水沢市文化財報告書第4集 杉の堂遺跡—第3次発掘調査概報—水沢市教育委員会 1981年
- 註7 調査区域内には堅穴住居跡は検出されていないが、本沢慎介氏の教示によると近接地点に居住域の可能性ある遺物敷布地等が存在する由であり、こう分類した。
- 註8 高田和徳氏の教示によると、段丘の斜面上位に土城群が密集し、下位に堅穴住居跡や配石遺構が分布する由である。住居は大木9式期、土城群の大半は中期のものらしい。
- 註9 赤坂田Ⅰ遺跡 岩手県埋文センター文化財調査報告書第15集 岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(昭和55年度分) (財)岩手県埋蔵文化財センター 昭和56年 所収によると、住居跡は下位平埋面、ピット類は上位平埋面上を占地している。
- 註10 岩手県埋文センター文化財調査報告書第26集、川向Ⅲ遺跡発掘調査報告書 畑地帯総合土地改良事業関連発掘調査(昭和55年度) (財)岩手県埋蔵文化財センター・岩手県二戸土地改良事業所
- 註11 西田遺跡 岩手県文化財調査報告書第51集 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅶ、岩手県教育委員会 昭和55年
- 註12 描谷地 岩手県教育委員会調査。
- 註13 大地渡遺跡 岩手県文化財調査報告書第56集、東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書—Ⅶ—(石鳥谷・花巻地区) 岩手県教育委員会、日本道路公団、昭和56年、所収
- 註14 註10所収
- 註15 岩手県埋文センター文化財調査報告書第2集 都南村湯沢遺跡(昭和52年度) (財)岩手県埋蔵文化財センター 昭和53年
- 註16 荒屋Ⅱ遺跡 岩手県埋文センター文化財調査報告書第21集 東北縦貫自動車道関係遺跡発掘調査報告書 (財)岩手県埋蔵文化財センター 日本道路公団 昭和56年所収
- 註17 註16に同じ。
- 註18 註16に同じ

註19 高田和徳の教示による。

註20 草間俊一 日本原始時代生活についての一考察 —フラスコ状堅穴に関して— 森嘉兵衛教授退官記念
論文集「社会経済史の諸問題 法政大学出版局所収

(f) 石器製造跡について

検出された遺構は約15cm下がった地域の溝と柱穴である。遺構と遺物の関係は、約 1.0m離れた溝1と溝2の間から石器の素材が大量に発見され、あたかも溝にかこまれた遺構に伴った遺物の様相を呈している。しかし、溝1は柱穴8において屈折しており堅穴柱居跡の周溝とも見られ、必ずしも遺物群に伴うとは断言できない。また、柱穴は4×3mの方形に配されている如くであるが、遺物群はその西端に位置しており、直接関連するとは見られない。以上のことから両遺構とも石器製造跡に関連する遺構とは考えられなく、現段階では石器製造跡を遺構として理解するには困難なようである。

発見された遺物は石器類をはじめ、石核、剥片、碎片等である。石器類は遺物群の中の16.6%に過ぎず、過半数が剥片である。遺物群の中には台石あるいは叩き石が見られなく、この地で剥片採取が行なわれなかったのではないかと考えられる。また、碎片の出土量は25点(8.5%)と少なく、石器を作成した場所ではなかったことを示唆するものではないかと判断される。

しかし、剥片等の石器素材の占める割合は 213点 (81.0%) で、通常のあり方とは見られなく、何らかの形で石器製造跡に関連するものと推測される。なお、ここでは剥片等が多数発見されており、剥片離技法等についてまとめておくことにする。

出土した剥片は 197点で、縦長剥片、横長剥片の両様認められる。目的剥片以外では表皮除去剥片、打面形成剥片、調整剥片等が含まれると考えられる。目的剥片は 146点で計測可能なものは 102点である。縦長剥片は9.1×6.7cm、横長剥片が6.5×9.8cmを書大とし、2.9×2.0cmを最小とする。度数分布では長さ(縦)、幅(横)ともに3つの山からなっており、ある程度の規格性が認められ、大、中、小の3区分が可能である。長さは大(5.6~7.0cm)が20点(19.7%)、中(3.2~4.0cm)が43点(42.2%)、小(2.1~3.5cm)が23点(22.6%)で中が約半数を占める。幅は大(6.1~7.0cm)が15点(14.7%)、中(4.6~5.5cm)が22点(21.6%)、小(3.2~4.0cm)47点(46.1%)で、小がほぼ半数近くを占めている。この規格性は高畑遺跡の接合資料37点についてもほぼ同じ傾向が見られ、上深沢遺跡では全般的に小さいものが多く、これよりも1段階小さいものが存在するようである。

接合資料及び石核、剥片等から剥離技法を見ると、自然面を打面とするものが主流を占め(55.4%)、平打打面をもつものが27.7%である。目的剥片における作業面は主要剥離面と同一方向から剥離されるものがほとんどで(86.9%)、90度方向から剥取されたもの(9.7%)、反対方向から剥離されたもの(1点)が見られる。

高畑遺跡の接合資料では自然面を打面とするものが24.1%、平相打面をもつものが51.9%で、主流を占めるものが逆になっている。しかし、接合資料①の剥離技法は「原石面から加撃」するもので、接合資料②は「最終剥離面を新たな打面」とするもののようであり、前者は主流をなす自然面を打面とする剥片に通じ、後者は作業面を打面とする石核に相通ずるものと見られる。また、接合資料③では反対方向から剥離されたものが認められ、数の少ない点を含めて技法上では共通していると言えるであろう。

石材は泥岩類（硬質、珪質、硬質凝灰質、珪質凝灰質）、凝灰岩類（泥質珪質、石質細粒、珪質石質極細粒）、粘板岩類（チャート質、ホルンフェルス）、流紋岩類（斑斑質、鉄石英）、両輝石安山岩、めのう等で、泥岩類、凝灰岩類が大多数（89.8%）を占める。このうち石核、剥片、碎片、剥片石器の占める割合は、泥岩類が62.5%、53.8%、40.0%、41.1%で、凝灰岩類では31.3%、41.4%、24.0%、41.1%である。全体では前者が50.7%、後者が39.1%で、極めて近似した比率を示し相関関係が認められる。

当遺構は石器製造跡として調査されたものであるが、遺物の分布地域が帯状に限定されており、遺構では必ずしも石器製造跡を積極的に示すものではなかった。また、遺物においても明瞭な台石あるいは叩き石が発見されず、碎片の占める割合が少なく石器製造跡を裏付けるものではない。ただし、素材としての剥片等の多さは通常のあり方ではなく近くに存在したであろうことは言えるものであろう。従って石器製造跡であった可能性を完全に否定するものではなく破壊された石器製造跡の一部、あるいは石器製造跡からの二次堆積（人為、流入）地域などと捉えられ、発見された遺物は石器製造跡に関連した遺物と理解される。

B. 古 代

(1) 堅穴住居跡について、本遺跡においては、奈良時代後半～末と、平安時代の二つの時代の遺構（堅穴住居跡）が検出されたことは、既に本文中にふれたとおりである。ここではそれらの岩手県古代の住居跡変遷上の位置についてふれておく。

岩手県中央から県南地方の古代の堅穴住居跡については、次のような変遷観が成立する。

(a)、古墳時代末期～奈良時代初期 四隅に軽い丸味を有する所謂隅丸正方形のプランと、対角線上に乗るように配置された4～6本の支柱穴、北壁略中央に付設されたカマド・煙道などをもつ構造である。その一斉性はかなり強く。ただしそのより古期の段階には、長大な煙道の付設にはかなりばらつきがありそうである。カマド焚口部には長めの礫を門の字状に配置する。それより古期と思われる例では、カマド本体部内外両面にも礫を用いるものがあり、さらにカマドの対辺（所壁南壁）中央直下にも柱穴様のものをもつものもある。これは関東の鬼高期の堅穴住居跡にも共通する構造である。建物主軸方位は、^(註1)磁北に略一致→やや西に偏す、という変遷をたどるらしい。一辺8～6mの長大なものと、5m以下の通常規模のものが組みあわせの形で存在する。^(註2)

(b)、奈良時代半～後半期、プラン・支柱穴配置などの要素は前代に共通するが、建物主軸方位はさらに西に偏する。カマド袖部への土師器類長胴の甕型を中心とするが、若干の変化はある)。の埋置が特徴的措置としてとられ、この期の指標になしうる。おそらくは芯としての機能を期待されたものであろう。支柱数は千本が多いが、6本のもの、その存在が不明確なものもまた多い。前代に比し不均整なプランのものも多く、斉一性は弱まった印象を与える。

(c)、平安時代以降、前代に比し種々の点で大きな変化が見られる。^(註3)

①柱穴配置 支柱穴は4本と思われるが、そのすべて、あるいは2本がいずれかの壁直下に寄るものが増加する。寄る壁の選択には何ら傾向性はない。甚しい場合は、カマド本体直近の位置に穿つ例もある。住居内の有効利用面積拡大の工夫と見做して大過ないであろう。また、支柱配置の不明確なものが増加する。

②側壁、板材を用い、^(註4)腰板乃至壁、風のものをつくる例も散見し始める。それらの四隅には支柱穴様のものが伴う。

③カマド付設部位、北壁も存続するが、それより圧倒的多数の例で東壁・南壁に付設される。その場合はいずれかに若干偏する。甚しくは隅に付設されるものもある。カマド構築法には種々あり、板状礫を用いるもの、甕を煙道部に埋置するものなども見られる。所謂くり抜き式のものが多い。

このような変遷観を以て本遺跡例を見ると、その特徴は大略合致するものといえよう。とりわけ、奈良時代としたもののカマド袖部への土師器埋設や、平安時代の東・南壁カマドの存在などはその好例といえよう。

註1 岩手県埋蔵文化財センター高橋与右衛門氏によると、支柱穴と壁までの距離を指標にすると、住居の構築規模に一定の規則性を看取できる由である。その詳細は水沢市 膳性 遺跡の報文に発表されるであろう。

註2 磁北は時間の経過とともに変化しているので、流動的なものを指標に一つの傾向性を云々するのはおかしいとする議論があるが、現在の磁北を単なる分類の指標としてのみ扱っているのであり、その批判はあたらない。そのような傾向の背景の検討にまで進むべきことはいうまでもない。

註3 岩手県地方の平安時代には、政治の力からする人々の移動がかなり頻繁であったと思われる。(それは古墳時代に発した可能性もあろう)。したがって住居跡の変化の背景に人々の動きを考慮すべきことはいうまでもない。そのような指摘もすでに存在したところであったし、胆沢城出土の漆紙文書中の人名などもその必要性をさらに強く要請するものである。

(2)、住居の立地について、本遺跡の古代の集落が村崎野段丘面上に立地することは本文中に既に述べた。この立地について若干の補足を行なう。胆沢扇状地においては、古代の集落立地にはかなり明白な傾向性が存在する。それは、より限定的立地傾向→立地選択対象地の拡大の傾向、具体的には、古墳時代～奈良時代(低位段丘縁辺、段丘面上の微高地)→平安時代以降(低位段丘面、河岸低地上の自然堤防上、中段段丘面上)という動きである。^(註1)そして平安時代を境として、種々の新しい現象が増加することも知られている。それはたとえば、集落の構成要素の変化(堅穴住居に加え、周囲の大溝・堀立柱建物・配置の規格制等々)、窯跡その他の通常集落とは異なる性格のもの^(註2)の追加、などである。

本遺跡を含む北上市周辺の動きを概観すると、胆沢扇状地ほどに調査の手がおよんでおらず未詳な点が多いが、立地に変遷がある点では共通する。しかし、その変化の顕在化の時期は胆沢扇状地におけるよりも若干早かった可能性がある。^(註2)集落の構成要素のうち、大溝は尻引遺跡^(註3)においては奈良時代末期までには出現していた可能性があるし、本遺跡・藤沢遺跡のように中位への進出が奈良時代後半には開始していた可能性があることなどがそれである。この現象の解釈のためには現段階では資料不足であり、速断は壁けておく。しかし、奈良時代半～後半期は、種々の変化の目立つ時期であり、岩手県地方にとって重要な意味をもつ期間であったろうとはいいうるのである。今後の資料蓄積に期待したい。

註1、胆沢町小十文字遺跡の例もあり、如上の指摘はあくまでも傾向性のそれである。

註2、上記の例もあることから、胆沢扇状地における変化顕在化の時期も、奈良時代後半とすべき可能性もある。

註3、文化財調査報告書第17集、尻引遺跡調査報告書、北上市教育委員会 昭和52年。

C. 近世墳墓

今回の調査で発見された墳墓は杉木立の中にあつて、稲荷神社が祀られており古来聖域と考えられていたもので、現状でも墳丘状の高まりと、ほとんど埋没している周溝が確認されていたものである。以下当遺構の構造と年代についてまとめ、若干の考察を加えてみたい。

(1) 鳩岡崎遺跡近世墳墓のまとめ

調査の結果、東西に長い方形台状を呈する高塚墳墓であることが判明した。それは周溝と配石遺構を伴うもので、周溝を含む規模が約27×17mをなす。高さは0.3～0.8mで、周溝底部からは1.7～2.7mを計測する。墳頂部はほぼ平坦で、約20×8mの隅丸長方形をなし、西半を中心に川原石が葺石状^(注3)に散在している。この川原石は積土上位に認められるもので、盛土終了後に持ち込まれたことを示している。中には円形配石、環状配石、大石中心の円形、環状配石直線状配石をなすものが見られる。

このように墳丘上で川原石の発見された例は、新平塚群（北塚、東塚、西塚）、寶積古墓群、^(注1)（1号墳、2号墳、3号墳）、阿惣沢^(注2)の墳丘、虚空蔵遺跡^(注3)（第1号、第2号、第3号）、墳館遺跡^(注4)（第1号墓、第3号墓、第6号墓、第8号墓、第9号墓）等である。このうち阿惣沢、虚空蔵遺跡では「敷きならべてある」「全面を覆ってある」と説明されており、これを含む前4者では「葺石」と考えられている。これに対し、寶積古墓群、墳館遺跡では全面を覆うものではないようであり、後者では直接火葬骨埋納土壌の上に位置するものではないが「土壌の上に集石したり、墓石風に石を立てたり」したものではないかと考えられており、後世の移動を考慮しながら両者の関連を指摘している。

当遺跡では稲荷神社が祀られていたこともあつて、その基盤あるいは石碑の根石の存在も考えられ、また木根に集積されたものが検証されており後世の所産によるものも含まれていると見られる。ただ、墳館遺跡の第1、第3号墓でも円形配石、環状配石、大石中心の円形配石、直線状配石等が確認されており、同様に火葬骨埋納施設に関連するものと捉えられよう。

周溝は1周するもので、幅が2.5～3.0m、深さが1.0～1.5mの箱葉研堀状をなすもので、調査されたものの中では新平塚群に次いで、大規模なものである。埋葬施設は遺構として検証されたものではないが、遺物の中には火葬骨片の付着しているもの、あるいは火熱を受けて変形しているものがあつて、火葬墓が考えられる。火葬骨及び遺物によっては複数が想定されるものである。また、皿3枚、寛永通寶5点は全く火熱を受けた痕跡が認められず、しかも積土のかなり下位からまとまって発見されており土葬墓が推測される。

発見された遺物は陶器、鉄製品、古銭等18点で、年代決定は容易ではない。火葬墓に伴うと見られるものは一括資料の②、③である。小刀、毛抜きについては比較資料も少なく年代決定

資料とはならない。古銭は両者とも永楽通寶であり、寛永通寶が含まれていない事からすると寛永通寶発行（1626年）以前か、発行後でも量産される以前と推測される。

これに対し土葬墓に伴うと見られる一括資料④は陶器及び寛永通寶である。寛永通寶はいずれも新寛永で中には背元のものが含まれており、少なくとも寛保元年（1741年）以降のものである。陶器については比較資料が少なく断定できないが、地方産の可能性が濃厚である。絵付技法（吹掛絵付）によると明治30年（1897年）以降であるという。^(注6)

以上の事から当遺構は中世末から近世初期にかけて火葬墓として構築され、近世、近代に入ってから土葬墓として再利用されたものと理解されるものである。

- 注 (1)岩手県江釣子新平塚群遺跡 江釣子村教育委員会 昭42
 (2)口内町寶積古墓群の調査 菊池啓治郎『古代』23. 昭32
 (3)花泉阿惣沢遺跡調査概報 草間俊一 岩手史学研究21. 昭31
 (4)岩手県雫石町虚空蔵遺跡 雫石町教育委員会 昭38
 (5)東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 岩手県教育委員会 昭55
 (6)『原色陶器大辞典』淡交社（昭48）

(2) 大型墳丘墓について

古墳状の大型な高塚(土壇)をなすものには、経塚、十三塚、高塚墳墓等がある。経塚には虚空蔵遺跡の如く遺物が発見されなく「特殊構造の形式を持てる経塚」と考えられているものと南館遺跡の「覆石型態」をもつ一字一石経塚とがある。十三塚には立花十三菩提塚のように両端に重層土壇を配するものや、一大十二小なるものなどがあるという。

岩手県内における大型墳丘墓の発見例は別表のとおり24例である。平面形は①円形となすもの（4例）、②方形を基調とするもの(12例)、③長方形を基調とするもの(7例)で、方形を基調とするものが多い。規模は①が直径6～7mで、②は一辺5～6m前後、8m前後、10m前後の三段階のものが見られ、3例、4例、5例と相半ばしている。③はいずれも長辺が10mを越すもので、中には20mを越すものも含まれている。高さは0.5～2.0mで、1.0m前後のものが多く、積土は旧表土に周辺の土を盛り上げた程度のものである。

これらのうち葬法の明らかなものは17例（土葬墓が5例、火葬墓が12例である。土葬墓は8～12mの方形を基調とするもので、方形をなすイタコ塚、梅ノ木古墓群1号墓では截頭方錐形をなすと考えられている。埋葬施設は旧表土面から掘り込まれた1.7×1.5mほどの長方形の土壇で、深さが約1.0mである。いずれも単独一体の埋葬である。年代的には南館遺跡1号墳墓、梅ノ木古墳墓群1号墓を除いて近世以降と見られる。

これに対し火葬墓は方形、長方形のものが相半ばし、長方形をなすものは、火葬墓に限られ

遺 跡	遺構名	大 き さ	高 さ	葬 制	出土遺物	備 考
鳩岡崎遺跡		20×8 m	0.3~0.8m	火葬	小刀、毛抜き、永楽通寶2、不明銭1	
楽師堂山墳墓	2号	5×5	0.8	火葬	永楽通寶、木炭、火葬骨	
〃	3号	5×5	0.5			
寶積古墳群	1号墳	8×6.6	0.6~1.1	火葬	木炭、火葬骨、2ヶ所	
〃	2号墳	11×11	2.0	火葬-	刀子2、熙寧元寶、元祐通寶、永楽通寶、木炭、火葬骨所々	
〃	3号墳	9.3×8		火葬	火葬骨	
亀ヶ森		20数m	1.0	火葬		
栞木田段の森		8.6×14	1.0	火葬		
鬼柳古墳群	2号墓	直径 6.4	0.4	(火葬)	木炭若干	
〃	4号墓	6.55× 5.6楕円	0.6			
〃	14号墓	6×6	0.9	(火葬)	木炭若干	
〃	17号墓	直径 7.2	0.6	(火葬)	木炭若干	
南館遺跡	1号墳墓	7.5×8	1.0	土葬	永楽通寶2、寛永通寶1 (封土)	
イタコ塚		8×8	1.5	土葬	永楽通寶2.寛永通寶7.政和通寶1.寛永通寶2 (封土)	
梅ノ木古墳群	1号墓	11.5×11.5	1.2	土葬	脇指、キセル、錫杖、腕、永楽通寶、	火葬追葬2
御在所D遺跡	第1号墓	直径 8	1.0	土葬	釘33、ガラス製珠数玉35、茶碗2	
墳館遺跡	第1号墓	14×17	1.4	火葬		32ヶ所
〃	第2号墓	7×8	1.5			
〃	第3号墓	9.5×18	1.1	火葬	宗通元寶、祥符元寶、不明 (封土)	19ヶ所
墳館遺跡	第4号墓	11.5×10.5	1.1	火葬	洪武通寶、永楽通寶、不明2 (封土)	
〃	第5号墓	9×18	0.8	火葬		2ヶ所
〃	第6号墓	12×23	1.1	火葬		12ヶ所
〃	第7号墓	3.4×16.4	0.8			
安庭古墳		12×14	0.95	土葬		

るようである。この中には10mを越すものが10例存在し、大型のものが多い。ほとんどのものは墳頂部がフラットな面をなし、台状を呈するようである。埋葬施設は墳頂下0.1~0.5mと比較的浅い位置に存し、直径0.3~1.0mの円形で深さ5~20cmの浅い皿状土壌をなす。

複数の火葬骨の発見されたものが7例(58.3%)存在している。なお、1つの大型墳丘墓から32ヶ所の火葬骨が発見された墳館遺跡では、この種のものを「追葬を行った集団火葬墓」と考えている。

(3). 火葬墓の年代について

岩手県内で発見された火葬墓は大型墳丘墓以外では15例存在し、都合27である。これらは、埋葬方法等によって分類すると

- ① 蔵骨器を伴う墳墓3例……西根遺跡、大瀬川B遺跡1号マウンド、2号マウンド
- ② 茶毘所墳墓2例……柳田館遺跡Ff 9 火葬場、十三菩提塚列外塚

③集団火葬墳墓14例……寶積古墓群1号墳、2号墳、亀ヶ森・柵木田段の森、梅ノ木古墓群4号墓、5号墓、墳館遺跡第1号墓、第3号墓、第4号墓、第5号墓、第6号墓、第8号墓、第9号墓、鳩岡崎遺跡

④単独火葬墳墓7例……薬師堂山墳墓2号、寶積古墓群3号墓、南館遺跡4号墳墓、梅ノ木古墓群6号墓、7号墓、8号墓、9号墓

となる。

これらのうち遺物の発見されたものは16例で、古銭の発見例は14である。古銭以外では釘、刀子、毛抜き等の鉄製品と、蔵骨器として使用された土師器長胴甕（西根）、須恵器壺（大瀬川B1）、常滑三筋壺（大瀬川B2）とがある。後者はいずれも蔵骨器を伴う墳墓のもので、古代末から中世初期に位置付けられる。

発見された古銭は初鑄年によって唐1点、北宋10種15点、南宋1点、明2種26点に分類され永楽通寶が25点と圧倒的に多い。これら火葬墓はいずれも渡来銭に限られ寛永通寶が含まれなく、寛永通寶発行（1626年）以前か、発行後でも大量生産される以前が想定される。

葬法別に見ると茶毘所墳墓では柳田館が祥符通寶、景祐元寶、熙寧元寶、政和通寶、紹興元寶で北宋、南宋銭に限られ、列外塚が開元通寶、咸平通寶、皇宋通寶、熙寧元寶、元祐通寶、永楽通寶で唐銭1、北宋銭4、明銭1である。

集団火葬墳墓では墳館3、8が宋通元寶、祥符元寶、元祐通寶、聖宋元寶で北宋銭に限られ寶積2は熙寧元寶、元祐通寶、永楽通寶で北宋銭2、明銭12で両者が混在し、梅ノ木5（永楽通寶8）、墳館4（洪武通寶、永楽通寶）、鳩岡崎（永楽通寶2）の3例は明銭のみである。

単独火葬墳墓では古銭の発見されているものは5例であるが、いずれも永楽通寶で明銭に限定されている。

これをまとめると茶毘所墳墓では大多数のものが北宋銭で明銭が1点含まれ、集団火葬墳墓では北宋銭と明銭が相半ばし、単独火葬墳墓ではすべて明銭に限定されていると言えよう。

すなわち火葬墓は北宋銭と明銭の出土比率によっては①蔵骨器を伴う墳墓→②茶毘所墳墓→③集団火葬墳墓→④単独火葬墳墓という変遷が想定される。

なお、火葬の上限については①によって古代にさかのぼることが確認されており、下限についても全く寛永通寶を伴わない点から近世初期が推察されるが、茶毘所墳墓、集団火葬墳墓、単独火葬墳墓については、同時存在を含めてその時代は不明と言わざるを得ない。

一 要 約 編 一

道 跡・遺構名	大 き さ	高 さ	葬 制	出土遺物・備 考
場岡崎道跡	20 × 8 m	0.3~0.8 m	火 葬	小刀、匕状き、水塚通寶2、不明銭1
養師堂山墳墓	2号	5 × 5	火 葬	水塚通寶、木炭、火葬竹
"	3号	5 × 5		
實積古墳群	1号墳	8 × 6.6	火 葬	木炭、火葬竹2ヶ所
"	2号墳	11 × 11	火 葬	刀子2、熊手元寶、元祐通寶、水塚通寶、木炭、火葬竹所々
"	3号墳	9.3 × 8	火 葬	火葬竹
龜ヶ森	20 数 m	1.0	火 葬	
橋本田2の森	8.6 × 14	1.0	火 葬	
鬼柳古墳群	2号墓	直径 6.4	(火 葬)	木炭若干
"	4号墓	6.55 × 5.6・楕円		
"	14号墓	6 × 6	(火 葬)	木炭若干
"	17号墓	直径 7.2	(火 葬)	木炭若干
南館道跡	1号墳墓	7.5 × 8	土 葬	水塚通寶2、寛永通寶1(封土)
イタコ塚	8 × 8	1.5	土 葬	水塚通寶2、寛永通寶7、政和通寶1、寛永通寶2(封土)
梅ノ木古墳群	1号墓	11.5 × 11.5	土 葬	脇指、キセル、錫杖、筒、水塚通寶、火葬道葬2
御在所口道跡	第1号墓	直径 8	土 葬	釘33、ガラス製珠数土35、茶碗2
墳 館 道 跡	第1号墓	14 × 17	火 葬	32ヶ所
"	第2号墓	7 × 8		
"	第3号墓	9.5 × 18	火 葬	宗通元寶、祥符元寶、不明2(封土) 19ヶ所
"	第4号墓	11.5 × 10.5	火 葬	出武通寶、水塚通寶、不明2(封土)
"	第5号墓	9 × 18	火 葬	2ヶ所
"	第6号墓	12 × 23	火 葬	12ヶ所
"	第7号墓	3.4 × 16.4	火 葬	
安 寝 古 墳	12 × 14	0.95	土 葬	

第3部 分析・鑑定結果

当課では、考古学上の資料の関連諸科学による分析・鑑定を必須のことと考え、過去数年間それを各機関・公所、個人に依頼し実施してきた。本遺跡については以下のものを実施した。

1. 石器の材質同定・産出推定 岩手県立大般渡農業高校・佐藤二郎氏に依頼した。結果は本文中に記入してある。

2. 所謂粉状パミスの分析 所謂粉状パミスなる歴史時代の降下火山灰については近年その関心が高まりつつある。鍵層として用いうる可能性をもつからである。たまたま岩手大学の井上克弘氏も該火山灰を研究テーマの一つとしていることを知り、種々教示をいただいた。さらに東北大学山田一郎氏との連名で詳細な分析結果を論文の形でいただいた。極めて有益なものであり、ここに示すこととした。両氏の学思に深謝する。なお本遺跡においても、古代の遺構の一部の埋土に該火山灰が見られることについては本文中にふれたところであった。

3. DD15 f. p. 出土の植物種子の同定 DD15 f. p. の埋土下層より出土した植物種名その他の同定を東北農業試験場に依頼し、その報告を得たので、それを示す。なお関連事項として三浦新太郎氏の論文の概要を引用・紹介した。

4. 鉄製品の分析 鉄製品の定性分析・定量分析を岩手県工業試験場に依頼した。その結果を掲げた。

5. 須恵器その他の胎土分析 出土土製品胎土その他の定性分析・定量分析を岩手県工業試験場に依頼した。その結果を掲げる。同時に実施した他遺跡の資料も併せ示す。

6. 蛍光X線による土器胎土分析 土器胎土分析（蛍光X線による）を岩手県立博物館赤沼英男氏に依頼した。その結果を示す。同時に実施した他遺跡の資料も併せ示す。

7. 岩石学的方法による土器胎土分析 土器胎土分析（岩石学的方法による）を岩手県立種市高等学校照井一明氏に依頼した。その結果を掲げる。同様に他遺跡の例も併せ示した。

8. 炭化材の樹種同定 古代の焼失家屋その他の炭化材の樹種の同定を、岩手県木炭協会早坂松次郎氏に依頼した。その結果を掲げた。

9. 炭化種実の種名同定 これを村井三郎氏に依頼した。その結果を掲げた。

10. 放射性炭素による年代測定 日本アイソトープ協会に依頼した。その結果を掲げた。

以上の分析結果が今後の研究の基礎的データの一つとなれば幸甚である。

2. 東北地方における奈良平安時代遺跡埋土中の粉状パミスについて

井上 克弘(岩手大学・農学部)・山田 一郎(東北大学・農学部)

I. はじめに 青森県・秋田県・岩手県および宮城県における奈良～平安時代の遺跡埋土中にはしばしば灰白色のシルト質火山灰が見出される。草間(1965)は二戸市堀野において奈良～平安時代の竪穴式住居址埋土中に灰白色土壌を発見し、これが十和田火山灰起源の火山灰である可能性を指摘した。その後、大池(1972)は十和田火山の完新世テフラの層序、分布および編年に関する研究に基づいて、堀野遺跡埋土中灰白色火山灰が十和田の降下火山灰であることを明らかにした。それ以来、東北地方各地で奈良～平安時代の古墳周隴、遺跡埋土中に類似の火山灰が発見され、現在青森県下では十和田a降下火山灰、岩手県下では粉状パミス、また宮城県下では灰白色火山灰として考古学関係の間で呼ばれている。

このたび岩手県教育委員会より盛岡市太田方八丁遺跡、江釣子村猫谷地遺跡および下谷地遺跡埋土中より採集された粉状パミスについて分析を依頼される機会を得た。そこで本報告書では今回分析を依頼された試料を含め、これまで岩手県内の遺跡埋土、黒ボク土壌および泥炭地から採集された粉状パミスの粒往組成・化学組成・一次鉱物組成・火山ガラスの形態組成および強磁性鉱物の化学組成を明らかにしたのでこれらをまとめて報告する。なお比較のため山田・庄子(1981)が行った宮城県下の遺跡、黒ボク土壌および泥炭地より採集された灰白色火山灰についての分析値の一部を引用した。また青森県南部より採集した十和田a降下火山灰、鳥海山の黒ボク土壌中より採集した粉状パミス類似火山灰、山形県～宮城県に分布する約1,000～2,000年前の肘折火山灰および田老町年金保養基地遺跡(周辺に縄文後期遺構有り)埋土中に見出された粉状パミス類似火山灰についても分析を行なった。

II. 粉状パミスの存在が確認されている岩手県下の遺跡と粉状パミスの種類 最近、東北新幹線および東北縦貫自動車道関連の工事が岩手県下をはじめ各地で実施されたため、それに伴って多数の遺跡が発掘された。これまで報告された遺跡発掘調査報告書や現地説明会資料などによれば、埋土中に粉状パミスの存在が確認された岩手県における古墳・遺跡は第1表および第1図の通りである。今後遺跡の発掘が進めばこの数はさらに増えるであろう。

瀬川(1978)は岩手県における縄文時代以降の遺跡と火山灰の関係について詳細にまとめている。これによると岩手県における奈良～平安時代の遺跡埋土中に存在する粉状パミスは次のように整理されている。

- | | | |
|-------------|-----------|--|
| (a). 岩手県北部 | 十和田a降下火山灰 | 二戸市堀野遺跡・二戸バイパス関連各遺跡 |
| (b). 岩手県北西部 | 松尾火山灰 | 安代町深土沢遺跡・浄法寺町天台寺跡・松尾村長者屋敷・野駄遺跡・西根町崩石遺跡 |
| (c). 岩手県中央部 | 盛岡火山灰 | 盛岡市太田方八丁・柿木平・上太田蝦夷森古墳、都南村湯沢遺跡 |

第1表

岩手県において埋土中に粉状パミスが見出された遺跡

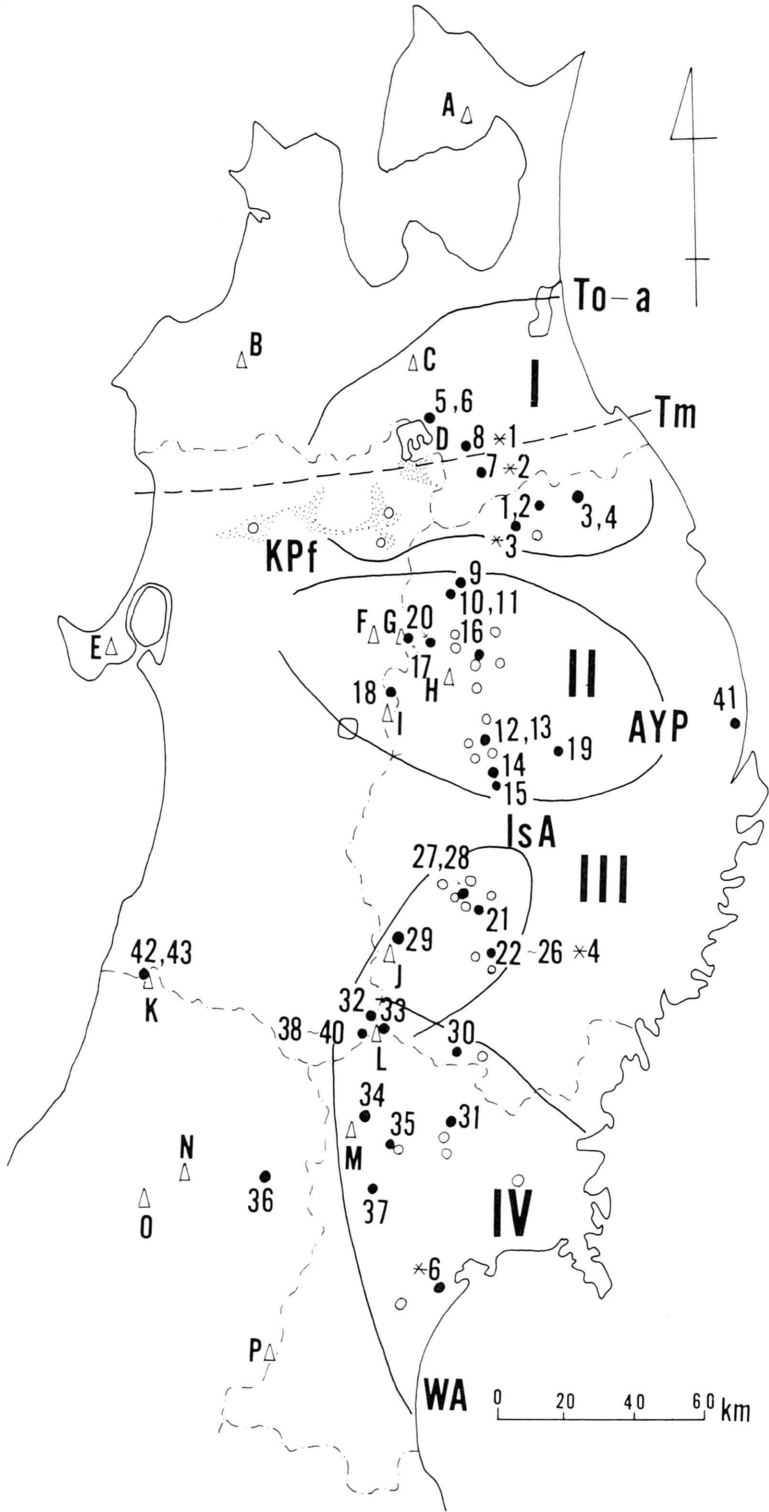
遺跡	所在地	時期	筆者らの区分によるテスラの種類※	文献
上田面	二戸市金田一字上平	奈良～平安	I	(14)
長瀬C	〃 米沢字長瀬	〃 ～中世	〃	(〃)
上里	〃 石切所字上里	縄文前期～平安	〃	(22)
沢内B	〃 米沢字家の上	〃 早期～中世	〃	(21)
大堀	〃 石切所字晴山	〃 晩期～弥生初頭	〃	(24)
堀野	〃 堀野	〃 後期～平安	〃	(1)
川向Ⅲ	九戸郡九戸村大字伊保内	〃 晩期～〃	〃	(38)
君成田Ⅳ	〃 軽米町字君成田	〃 後期～奈良	〃	瀬川氏(私信)
北館A	二戸郡一戸町北館	〃 早期～平安	〃	(17)
〃 B	〃 〃	〃 〃	〃	(〃)
上野D	〃 〃 字上野	縄文～平安	〃	(〃)
田中3	〃 〃 岩館字田中	縄文後期～平安、中世以降	〃	(〃)
田中4	〃 〃 〃	〃 前期～〃	〃	(〃)
子守野A	〃 〃 〃 字子守	〃 〃 ～〃	〃	(〃)
荒野Ⅱ	二戸郡安代町荒野	縄文中期	Ⅱ	瀬川氏(私信)
扇畑Ⅱ	〃 〃 扇畑	縄文～平安	〃	(38)
深土沢	〃 〃	〃	〃	(14)
天台寺院	〃 浄法寺町	〃	〃	(〃)
長者屋敷	岩手郡松尾村大字松尾	縄文前期～平安	〃	(31)
野駄	〃 〃 野駄	〃 早期～〃	〃	(32)
仙波堤・今松	〃 岩手町浮島	奈良～平安	〃	(2)
松川	〃 西根町大更	〃	〃	(19)
崩石	〃 〃 平笠	縄文後期～晩期(?)	〃	(32)
釜崎	〃 玉山村好摩	奈良～平安	〃	(25)
木賊川	〃 滝沢村大字滝沢	縄文早期～晩期	〃	(19)
根堀坂	〃 〃	〃 ～平安	〃	(〃)
厨川柵擬定地	盛岡市前九年一丁目	縄文～平安	〃	(20)
前九年Ⅰ	〃 〃 二丁目	縄文早～中期,(晩?)期	〃	(〃)
太田方八丁(志波城跡)	〃 太田	平安	〃	(18)・(34)
蝦夷森古墳	〃 上太田	奈良	〃	(3)
柿木平	〃 柿木平	〃	〃	(14)
津志田	紫波郡都南村大字津志田	〃	〃	(20)
湯沢(B)	〃 〃	平安(?)	〃	(19)
白沢	〃 矢巾町白沢	縄文早期～平安	〃	(30)
一本松	〃 〃 赤林	縄文～平安	〃	(19)
杉の上Ⅲ	〃 紫波町二日町	平安中期	〃	(20)
藤沢Ⅰ	北上市藤沢	奈良～平安	Ⅲ	斎藤氏(私信)
相去	〃 相去町高前壇	縄文晩期～11世紀前半	〃	(5)
西野	〃 〃 字西野	10世紀後半～11世紀前半	〃	(20)
卯ノ木	〃 鬼柳町卯ノ木	平安	〃	(9)
尻引	〃 二子町尻引	奈良～平安	〃	(11)
下谷地	和賀郡江釣子村下谷地	平安	〃	(33)
猫谷地	〃 〃 猫谷地	縄文後期～平安	〃	(〃)
江釣子遺跡群	〃 〃	奈良～平安	〃	(〃)
長沼古墳	〃 和賀町長沼	7世紀後半～8世紀後半	〃	(8)
上餅田上	胆沢郡金ヶ崎町	奈良	〃	(14)
袖谷地	水沢市	平安	〃	(14)
膳性	〃 膳性	奈良～平安	〃	新田氏(私信)
胆沢城跡	〃 佐倉河字四月	縄文～〃	〃	(12)
林前	〃 姉体町字林前	平安	〃	(23)
機織山Ⅱ	一関市機織山	10世紀代	Ⅳ	(20)
谷起島	一関市	縄文晩期～弥生	〃	瀬川氏(私信)

※Ⅰ；十和田a降下火山灰，Ⅱ；秋田焼山パミス，Ⅲ；胆沢火山灰，Ⅳ；灰白色火山灰

第2表 粉状パミスの採集地点

No.	採集地点	No.	採集地点
1	上田面遺跡住居址埋土	27	下谷地遺跡 SYB+SYII74遺物包含層
2	長瀬C遺跡54F住居址埋土	28	猫谷地遺跡 NY73 DC12住居址埋土
3	君成田IV遺跡J51住居址埋土細粒部	29	胆沢郡金ヶ崎町焼石岳付近(天笠山)
4	〃 粗粒部		黒ボク土
5	青森県上北郡十和田町青撫山黒ボク土A	30	谷起島遺跡 第4層上面ロクロ土師器伴出埋土
6	〃 黒ボク土B		
7	〃 三戸郡田子町川向 黒ボク土	31	宮城県栗原郡志和姫町堀口 御駒堂遺跡埋土
8	〃 〃 新郷村二ノ倉黒ボク土		
9	荒野II遺跡EII-15陥し穴状遺構	32	一関市須川温泉付近 黒ボク土A
10	扇畑II遺跡 表土直下	33	〃 黒ボク土B
11	〃 平安時代住居址はり床中		
12	太田方八丁遺跡 大溝跡埋土	34	宮城県玉造郡鳴子町川渡 黒ボク土
13	〃 (OH77)Sj 74住居址埋土	35	〃 岩手山町中里黒ボク土
14	白沢遺跡 古墳周隍内埋土	36	山形県尾花沢市長根山 黒ボク土
15	杉の上III遺跡 住居址埋土	37	宮城県加美郡小野田町峯菜山黒ボク土
16	岩手郡西根町大更 黒ボク土中	38	秋田県雄勝郡東成瀬村須川温泉付近 ヨシ泥炭地
17	二戸郡安代町八幡平頂上付近 黒ボク土	39	秋田県雄勝郡東成瀬村須川温泉付近 ワタスゲ泥炭地
18	岩手郡雫石町乳頭山付近 黒ボク土		
19	盛岡市区界高原兜明神 黒ボク土	40	〃 ウカミカマゴケ泥炭地
20	岩手郡松尾村御在所湿原 泥炭地	41	下閉伊郡田老町年金保養基地遺跡埋土
21	西野遺跡 住居址埋土	42	山形県飽海郡鳥海山鳥海湖そば黒ボク土
22	胆沢城跡 DIS25 C区SD190(第7層)	43	〃 七五三掛 黒ボク土
23	〃 DIS25 E区SD190(〃)		
24	〃 西辺外郭線 SD040大溝跡 DIS22 SD040	※1	青森県三戸郡新郷村二ノ倉 黒ボク土
25	〃 西辺外郭線 SD040内溝 DIS20 SD018	※2	〃 〃 田子町 黒ボク土
26	〃 西辺外郭線 内溝 SD018東 南土壇	※3	二戸市馬仙峽 黒ボク土
		※4	水沢市佐倉河胆沢城跡埋土
		※5	北上市遺跡名不詳竅穴埋土
		※6	宮城県多賀城市浮島多賀城跡 泥炭地

2—第1図



- (d). 岩手県南部 胆沢火山灰 北上市尻引・相去遺跡、和賀町長沼古墳、金ヶ崎町上餅田遺跡、水沢市胆沢城跡・袖谷地遺跡。

前述の通り、類似の火山灰は宮城県下でも御駒堂、宮沢、西手取、城生、原前南、佐内屋敷、多賀城跡、陸奥国分寺跡など各遺跡埋土中でも確認されており「灰白色火山灰」と呼ばれている(白鳥; 1980、山田・庄子; 1980・1981)。また秋田県には十和田火山起源の毛馬内浮石流堆積物(大湯浮石層)が米代川流域に分布し、大湯環状列石付近の竪穴、鹿角市の鳥野遺跡、源田平遺跡、菩提野遺跡および鷹巣町のくるみ館遺跡を覆っている。現在毛馬内浮石流は十和田 a 降下火山灰と同時期の火砕流堆積物であることが明らかにされている(大池; 1974、富樫; 1978)。青森県～宮城県にかけて広範に分布するこれら火山灰はいずれも灰白色、シルト質で、噴出年代も極めて類似し、14C年代、出土遺物より奈良時代～平安時代の火山噴出物であると推定されている(大池; 1972、瀬川; 1978、井上; 1980、白鳥; 1980、山田・庄子; 1980・1981)。

最近町田ら(1981)は東北地方北部には奈良～平安時代に2種類の広域テフラが分布していることを報告した。すなわちその一つは朝鮮の白頭山から日本海を渡って降灰したもので、青森県～北海道南部に分布し、発見地の名をとり「苫小枝火山灰(Tm)」と命名された。他の一つは「十和田 a 降下火山灰(To-a)」で、大池(1972)による十和田 a 降下火山灰の分布域を大巾に修正し、青森県から福島県南部にまで分布し、東北地方を覆う広域テフラであると考えた。

一方、井上(1980)、Inoue and Yoshida(1980)、山田・庄子(1980・1981)は岩手県北西部～中部に分布する粉状パミスが秋田焼山起源、また宮城県に分布する灰白色火山灰が潟名あるいは栗駒山起源の火山灰であると推定している。

このように東北地方に広く認められる粉状パミスの起源については意見の対立が見られる。すなわち、東北地方の遺跡埋土中に見出される粉状パミスが単一起源の火山灰であるか、多起源の火山灰であるかによって噴出時期が異なってくる。したがって、奈良～平安時代の考古学編年を論じる上で基準層としての粉状パミスの取扱いには注意する必要がある。

Ⅲ. 試料および分析方法

(1). **粉状パミス**; 岩手県および宮城県の縄文時代～平安時代の遺跡・古墳周埋土および東北地方各地の黒ボク土壌・泥炭地より採集した49点の粉状パミスを供試した(第1図・第2表)。

(2). **粒径組成**; 遺跡埋土(19点)、黒ボク土壌(13点)、および泥炭地(1点)粉状パミス $6\% \text{H}_2\text{O}_2$ で有機分解後、よく水洗した。ついで超音波処理(20KHz、150W、10分間)後、PH 4.0で分散させ、篩とピペット法により、粘土($<0.002\text{mm}$)、シルト(0.002～0.02mm)、細破(0.02～0.2mm)および粗砂(0.2～2mm)画分に分画・定量した。粒径組成は無機成分中の重量百分率で表示した。

(3). **一次鉱物組成**; 粉状パミス(29点)中の有機物を H_2O_2 で分解し、水洗後、dithionite-citrate 処理により遊離の鉄三、二酸化物を除去した。超音波処理後、篩別し、0.1～0.2mm画分を得た。本画分をテトラプロモホルム重液(S.g. 2.96)で軽鉱物画分と重鉱物画分に分画した。

重鉱物画分についてはその一部をカナダバルサム中に封じ込み、偏光顕微鏡下で重鉱物の種類を鑑定した。また重鉱物画分についても同様に偏光顕微鏡により軽鉱物の種類を鑑定し、さらに火山ガラスについては屈折率の測定と形態による区分を行なった。

(4). **強磁性鉱物の化学組成**; 粉状パミスより棒状磁石で分離精製した強磁性鉱物をメノウ乳鉢中で粉砕し、水中での選別により精製した。本操作は数回繰り返した。精製した強磁性鉱物 100mg を王水—フッカ水素酸で分解し、分解液について全—Fe、Ti、Mn、V および Zn を定量した。全—Fe は 0—フェナントロリン法、Ti はタイロン法、V は BPA 法によりそれぞれ比色定量した。また Mn と Zn については原子吸光法によりそれぞれ定量した(庄子ら; 1974、Shoji et al ; 1975)。

IV. 結果および考察

(1). **粉状パミスの粒径組成**; 粉状パミスの無機成分中の粒径組成および土性を第 3 表に示した。粉状パミスの粒径組成と土性は一様でなく、地域によって明らかに異なっている。青森県南部～岩手県北部の十和田 a 降下火山灰と考えられるもの (No. 1～7) は細砂～シルト画分が主体で中粒質である。土性は壤質砂土～シルト質壤土である。岩手県北西部～中部の粉状パミス [No. 9～20、瀬川(1978)の松尾火山灰・盛岡火山灰に相当する] は中粒～粗粒質で、土性は砂質壤土～埴壤土である。特に八幡平頂上 (No. 17)、御在所湿原 (No. 20) および西根町大更 (No. 16) の粉状パミスは粗粒質で粗砂含量は約 41～66% と極めて高い。これは八幡平付近の粉状パミスが十和田よりもっと近い所に噴出源があることを示唆している。また八幡平～大更を結ぶ線よりも北部にある安代町や南部にある盛岡市、矢巾町付近のものはより中粒質となっている。さらに岩手県南部～宮城県の粉状パミス [No. 21～35、瀬川(1978)の胆沢火山灰および宮城県下の灰白色火山灰に相当する] は粗砂含量が極めて少なく、細粒質で土性は壤土～シルト質壤土である。

前述の通り、町田ら (1981) は東北地方の粉状パミスがすべて十和田 a 降下火山灰に相当すると考えた。そして噴出源である十和田から主に南の方向に分布し、南方向に向って平均最大粒径を減少させ、約 300km 離れた福島県飯豊山まで分布すると述べている。もし粉状パミスが十和田火山起源の広域テフラであり、大部分が東方に分布したと仮定するならば、粉状パミスの南限は福島付近にあるので、その北限は北海道札幌付近にあると推定される。しかし、Machida (1980)、町田ら (1981) によれば十和田 a 降下火山灰は噴出源の南側にのみ広域に分布している。一般にわが国は強い風系下にあり、卓越風向は西風であるため、火山灰は噴出源の東側に分布する場合が多い。したがって火山灰分布の主軸が南方向にある降灰域はわが国上空の卓越風向に一致していない。

さらに、粉状パミスがすべて十和田起源と考えた場合、火山灰は噴出後分級作用を受けるため南に向って細粒質となるはずである。しかし、第 3 表に示したように、No. 16・17 および 20 のように岩手県北西部～中部には十和田付近の粉状パミスよりも粗粒質のものがしばしば確認さ

第3表

粉状パミスの粒径組成

粉状パミスの粒径組成

No.	粗砂 2~0.2 mm (%)	細砂 0.2~0.02mm (%)	シルト 0.02~0.002mm (%)	粘土 <0.002 mm (%)	土性*
1	19.2	41.3	36.3	3.3	L
2	2.8	25.4	62.7	8.2	S I L
3	7.3	37.6	48.6	6.5	S I L
4	33.4	55.1	10.2	1.2	L S
5	26.7	45.2	24.5	3.6	S L
6	13.3	44.1	35.7	6.9	L
7	29.5	39.9	24.4	5.2	S L
9	26.2	45.7	26.8	1.4	S L
10	31.6	42.9	31.6	3.9	S L
11	22.9	37.4	31.6	8.1	L
12	17.9	41.1	36.3	4.7	L
13	12.6	42.6	37.7	7.1	L
14	12.9	44.2	34.0	8.9	L
15	10.7	29.1	43.0	16.9	C L
16	40.8	30.3	15.7	13.2	S L
17	65.8	15.6	15.4	3.2	S L
18	33.2	42.7	21.0	3.0	S L
19	16.6	49.3	26.8	7.3	S L
20	45.8	30.8	22.3	1.1	S L
21	1.3	53.5	36.9	8.3	L
22	0.1	28.4	66.3	5.2	S I L
24	0.8	47.6	42.3	8.9	L
27	4.9	53.3	34.2	7.6	L
28	2.4	51.6	34.3	11.7	L
29	0.1	58.7	37.5	3.7	L
30	3.4	34.7	48.5	13.4	S I L
31	0	41	49	10	S I L
33	0.2	45.4	48.9	5.6	S I L
34	0	41.0	49.2	6.3	S I L
35	0.4	49.3	43.9	6.3	L
41	1.3	36.9	48.8	13.1	S I L
42	0	49.8	47.8	2.4	S I L
43	22.0	38.4	23.5	16.2	C L

*国際土壌学会法：L S；壤質砂土，S L；砂質壤土，L；壤土，S I L；シルト質壤土，C L；埴壤土

れる。また岩手県南部では急激に火山灰の粒径が小さくなっている。したがって；粒径組成と土性から粉状パミスは少なくとも、①青森県北部～岩手県北部、②岩手県北西部～中部、および③岩手県南部～宮城県の3つに区分される。

また石鳥谷町～花巻市にかけての遺跡埋土中には粉状パミスが確認されていない(瀬川；私信)という考古学上の観察は粉状パミスの起源を考える上で重要な指摘であると考えられる。このように粉状パミスが単一起源でなく、多起源火山灰であると考えられることは黒ボク土壌および泥炭地中の粉状パミスの層厚変化など層位学的な調査結果とも一致している。

(2). 粉状パミスの一次鉱物組成と火山ガラスの形態組成 第4表に29点の粉状パミスの一次鉱物組成と火山ガラスの形態組成および屈折率を示した。粉状パミスの重鉱物含量は地域ごとに異なっており、青森県南部～岩手県北部 (No.1～8、*1～*3)では1～5% (平均3.6%)、岩手県北西部～中部 (No.9～19) では8～41% (平均20.1%)、北上市～水沢市付近 (No.21～29、*4～*5) では5～8% (平均7.0%)、一関市～宮城県 (No.30～33、*6) では1～6% (平均2.8%)であった。山形県～宮城県に分布する約1,000～2,000年前の肘折火山灰 (No.36～37) は重鉱物含量がやや高い。なお田老町年金保養基地遺跡のもの (No.41) は重鉱物含量と一次鉱物組成が岩手県北部～中部の火山灰に類似している。また鳥海山のもの (No.42) は上記のいずれの火山灰とも一致しない。

重鉱物組成は全試料ともシン輝石が主体であり、次いで強磁性鉱物、普通輝石が多い。特に肘折火山灰は普通角閃石が多く、他の粉状パミスと性格が著しく異なっている。肘折火山灰以外の粉状パミスは少量の普通角閃石を含むものがあるが、これらは試料採集の際粉状パミスに混入した他の火山灰に由来するものと考えられる。

軽鉱物組成はすべての試料で火山ガラスが大多数を占め、次いで斜長石が多い。いずれの試料についても石英の含量は極めて少ない。したがって粉状パミスは重鉱物がかなり少ないガラス質の火山灰である。

粉状パミスの火山ガラスの形態はカスプ (cusp) 型、繊維状 (fibrous) 型、平板状 (platy) 型、ベリー (berry) 型の4種類が認められた。山田・庄子(1981)にしたがい、カスプ型は無色で鋭角な多数の角をもつものであり、気泡のないものをA型、少ないものをB型、多いものをC型とした。繊維状型はあたかも繊維が束状になったように見えるものである。平板状型は無色で平板状のものであり、カスプ型や繊維状型よりも厚みがある。ベリー型は茶褐色から黒褐色であり、多数の晶子を有し顆粒状である。

粉状パミスの火山ガラスの形態は地域別に少しずつ異なっている。すなわち青森県南部～岩手県北部のものは平板状のものがやや多く、岩手県北西部～中部のものではベリー型が多い。また岩手県南部～宮城県に分布するものではカスプ型がやや多い。

これらの火山ガラスの屈折率は一部しか測定されていないが、いずれも1,488～1,509で狭い範囲にある。町田ら (1981) は東北地方の粉状パミスが同一起源、同一時期の噴出物であり、

第4表 粉状バミスの一次鉱物組成と火山ガラスの形態

f ₀	重 鉱 物 **1 (比重>2.96)				軽 鉱 物 **1 (比重<2.96)				重 鉱 物 含 量 重 量(%)	火山ガラスの形態 (粒数%)							火山ガラスの屈折率**2
	Hy	Au	H	Op	Uk	Pl	Qz	Vg		W	cusp			qlaty	fibrous	berry	
											A	B	C				
1	51	17	0	32	0	12	0	88	0	3	32	9	3	30	3	23	1.488...1.493-1.502...1.507
2	55	16	tr	30	0	13	0	88	0	4	17	3	0	54	7	18	
3	56	13	<1	30	0	14	<1	85	0	5	<1	0	0	77	1	16	
4	65	12	0	22	0	12	<1	87	<1	1	1	0	0	680	5	15	
8	49	15	0	35	0	4	0	96	0	5	—	—	—	—	—	—	
*1	52	20	tr	28	0	8	0	92	0	4	#42	—	—	42	7	9	
*2	52	16	0	32	0	11	0	90	0	4	#14	—	—	64	12	9	
*3	50	15	1	34	0	13	0	87	0	3	#11	—	—	73	9	7	
9	44	12	0	44	0	15	0	86	0	8	6613	13	6	8	5	3	
10	42	17	3	39	0	49	0	51	1	28	12	1	1	9	4	73	
12	47	14	1	38	0	21	0	74	5	15	38	5	1	0	9	48	
14	41	14	0	45	0	17	0	82	1	16	43	7	3	0	6	41	
15	46	17	0	37	0	17	0	81	2	12	44	9	0	0	3	44	
17	35-5871-170	23-54	0	—	—	19-32	0.62-782-9	—	—	17-41	#44	—	—	25	6	25	
19	56	13	0	29	2	—	—	—	—	17	—	—	—	—	—	—	
21	48	17	1	35	0	20	0	84	0	7	57	6	2	0	8	28	
*4	65	18	0	17	0	30	0	70	0	5	49	10	4	0	7	30	
*5	49	14	0	36	0	27	0	74	0	8	—	—	—	—	—	—	
27	64	15	0	18	3	—	—	—	—	8	—	—	—	—	—	—	
29	55	22	0	23	0	27	tr	72	0	6	20	9	1	2	1	68	
30	45	13	4	38	0	30	1	69	0	6	27	13	2	0	5	53	
31	58	20	tr	22	0	15	tr	76	8	3	55	13	2	tr	5	22	
32	62	17	tr	21	0	11	0	90	0	2	40	20	3	2	3	32	
33	54	16	0	30	0	18	0	81	0	1	36	18	7	0	4	36	
*6	70	16	1	13	0	11	0	89	0	2	44	19	15	0	2	19	
36	18	1	40	42	0	70	2	28	0	27	#57	—	—	1	1	52	
37	25	3	49	23	0	27	1	71	0	12	#75	—	—	3	2	20	
41	55	17	2	26	0	38	0	62	0	17	43	15	3	2	3	35	
42	47	22	0	31	0	2	0	97	tr	1	65	14	3	0	7	10	

**1:Hy、シソ輝石; Au、普通輝石; Ho、普通角閃石; Op、普通角閃石; Uk、強磁性鉱物; Wp、風化粒; Pl、斜長石; Qz、石英; Vg、火山ガラス;

**2:一、大部分の火山ガラスがこの範囲に入る;、少量の火山ガラスがこの範囲に入る。
#、A、B、C型の合計

これが十和田 a 降下火山灰に相当する根拠の一つとして火山ガラスの屈折率が互いに類似している点を挙げている。しかし第 4 表に示したように重鉱物含量、火山ガラスの形態組成から、東北地方の遺跡埋土中の粉状パミスは粒径組成の場合と同様に少なくとも 3 つに区別出来ることを示唆している。

(3). 強磁性鉱物の化学組成による岩質と噴出源の判定 42 点の試料より分離・精製した強磁性鉱物の化学組成を第 5 表に示した。強磁性鉱物の全 Fe 含量は約 45~62%、Ti は約 6~15% であり、いずれもよく精製されている。ただ泥炭中の粉状パミス (No.38~40) から分離された強磁性鉱物は全 Fe 含量がやや低くなり、逆に Ti 含量が他のものに比較して高くなる傾向がある。この傾向は江釣子村の下谷地遺跡 (No.27) のように湿地から得られた試料について同様な傾向が認められる。これは泥炭地や湿地のような還元条件が強磁性鉱物の化学組成に影響を及ぼしたものと考えられる。

泥炭地・湿地からの試料を除くと強磁性鉱物中の微量成分は Mn が 0.402~0.583%、V が 0.090~0.253%、Zn が 900~1.368ppm である。一般的な傾向として Fe 含量と Ti 含量および V 含量と Zn 含量の間には反比例の関係が認められている。また Mn についてみると岩手県田老町の年金保養基地遺跡埋土中の火山灰 (No.41) と鳥海山から得られた火山灰 (No.42・43) では Mn 含量が 0.402~0.451% であり、その他の粉状パミスの Mn 含量に比べて明らかに低い。したがって前述の通り、これら試料のうち No.41 と No.42 は粒径組成や一次鉱物組成が粉状パミスに極めて類似しているが、いわゆる粉状パミスとは異なっている。

a. 強磁性鉱物の V-Zn ベルトと粉状パミスの岩質の関係 庄子ら (1974)、Shoji et al (1975) は日本各地から採集した多数の新鮮な火山灰中に含まれる強磁性鉱物の化学分析を行い強磁性鉱物中の微量成分と噴出源の起源、噴出物の化学的性質との関係を検討した。この結果強磁性鉱物の微量成分である V と Zn 含量が火山灰の岩質と密接な関係にあることを明らかにし、2 図に示すような強磁性鉱物の $V(\%) / Fe + Ti(\%) - Zn(\%) / Fe + Ti(\%)$ とケイ酸含量による火山灰の化学的分類との関係 (V-Zn ベルト) を示した。

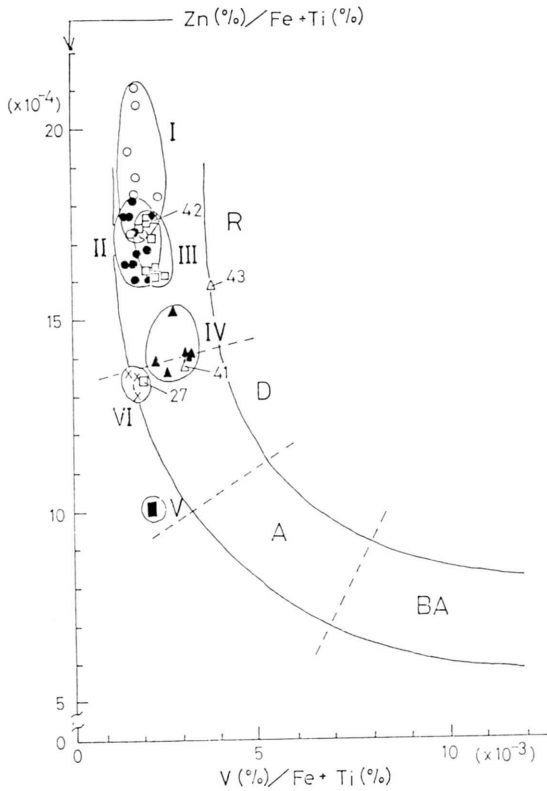
粉状パミスから分離した強磁性鉱物の $V(\%) / Fe + Ti(\%)$ と $Zn(\%) / Fe + Ti(\%)$ は第 2 図のように V-Zn ベルト上にプロットされる。これによれば粒状パミスの岩質は石英安山岩~流紋岩である。第 2 図から明らかなように、全体的にみるとまとまりがなく広い範囲にプロットされているが、これを地域別にまとめてみると 4 つのグループに区分された岩質も少しずつ異なっている。

第 6 表に粉状パミスの化学組成を示した。ここで No.31 と No.34 の分析値は山田・庄子 (1981) より、No.14・15・21 の分析値は岩手県教育委員会・日本国有鉄道盛岡工事局 (1980) の調査報告書より引用した。いずれの化学成分も非常に類似しており特にケイ酸含量が高い。950℃ 基準に換算すると SiO_2 含量は約 67~73% となり、石英安山岩~流紋岩質であり、強磁性鉱物の化学組成から推定した岩質とほぼ一致する。

第5表 粉状バミスより分離・精製した強磁性鉱物の化学組成

No.	Fe (%)	Ti (%)	Mn (%)	V (%)	Zn (ppm)
1	56.13	8.54	0.547	0.106	1,180
2	52.75	6.47	0.500	0.135	1,081
3	58.45	7.71	0.546	0.114	1,368
4	53.73	9.15	0.537	0.105	1,335
5	59.40	8.20	0.575	0.099	1,319
6	60.88	7.76	0.572	0.120	1,292
7	57.54	7.91	0.569	0.124	1,134
8	58.74	8.06	0.577	0.107	1,157
9	56.79	8.49	0.564	0.103	1,080
10	55.84	8.48	0.568	0.090	1,062
11	58.16	7.85	0.549	0.113	1,060
12	55.74	9.44	0.561	0.093	1,161
13	55.15	8.74	0.575	0.106	1,074
14	55.29	9.01	0.561	0.100	1,173
15	59.29	8.40	0.522	0.138	1,092
16	60.05	8.46	0.577	0.136	1,159
17	53.54	9.51	0.583	0.093	1,120
18	56.16	9.46	0.572	0.114	1,142
19	57.46	8.89	0.562	0.138	1,179
21	55.66	8.47	0.550	0.126	1,046
22	53.49	10.28	0.540	0.130	1,120
23	56.21	8.87	0.531	0.143	1,069
24	55.18	9.14	0.541	0.135	1,107
25	52.82	10.95	0.537	0.128	1,133
26	54.45	10.11	0.531	0.113	1,125
27	44.28	14.03	0.520	0.113	786
28	55.82	8.72	0.529	0.159	1,048
29	54.13	9.80	0.548	0.140	1,038
30	56.44	8.70	0.525	0.165	886
31	54.40	9.98	—	0.197	910
32	55.36	9.05	0.565	0.175	981
33	56.93	8.33	0.578	0.146	904
34	55.28	9.68	0.557	0.208	914
35	58.08	8.32	—	0.208	937
36	63.96	3.98	—	0.140	679
37	63.70	3.99	—	0.143	689
38	51.74	13.35	0.540	0.108	844
39	50.40	13.43	0.545	0.106	860
40	48.26	14.48	0.545	0.091	854
41	58.41	6.64	0.440	0.194	900
42	54.78	8.36	0.451	0.136	1,115
43	62.32	6.12	0.402	0.253	1,085

b. 強磁性鉱物の化学組成と粉状パミスの噴出源の関係 庄子ら(1974)は強磁性鉱物のV(%)/Fe(%)とZn(%) / Ti (%)の間には負の相関があり、同一起源のテフラは互いにまとまりが良く、噴出源・噴出時期ごとに区分されることを明らかにした。そこで第5表に示した結果についてV / Fe - Zn / Ti の関係を第3図に示した。岩質の場合と同様に全体的にまとまりが



第2図 強磁性鉱物のV-Znベルトと粉状パミスの岩質の関係

- R; 流紋岩, D; 石英安山岩,
- A; 安山岩, BA; 玄武岩質安山岩
- I; 十和田a 降下火山灰
- II; 秋田焼山パミス
- III; 胆沢火山灰
- IV; 灰白色火山灰
- V; 肘折火山灰
- VI; 泥炭中の灰白色火山灰および湿地中の胆沢火山灰

図中の番号は試料番号。

ない。これは粉状パミスが同一起源・同一時期のテフラではないことを示唆している。しかし、肘折火山灰、泥炭地および湿地中の粉状パミスを除くと、粉状パミスは地域別にまとまりが良く、4つのグループに区分される。すなわち、(I) 青森県南部～岩手県北部、(II) 岩手県北西部～中部、(III) 北上市～水沢付近および(IV) 一関市～宮城県の4グループであり、それぞれ、(I) 十和田の降下火山灰、(II) 秋田焼山パミス、(III) 胆沢火山灰および(IV) 灰白色火山灰の分布域に対応している。このことは粉状パミスがすべて十和田火山起源の単一テフラでなく、多起源テフラであることを示唆している。

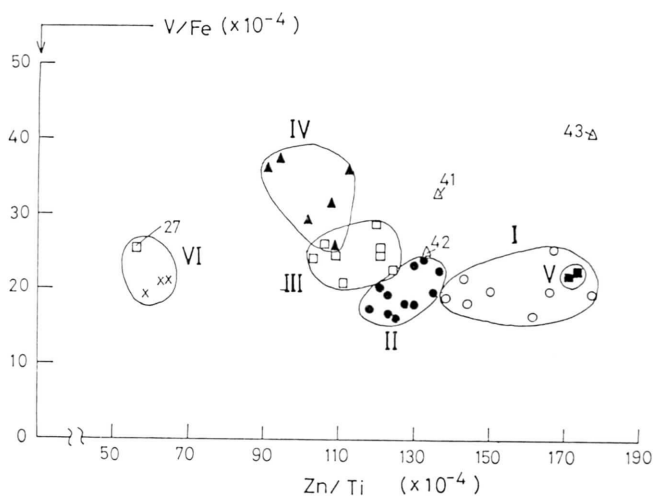
以上の結果より、東北地方の粉状パミスは第1図に示したように分布し、3つの起源、4噴出時期に区分されると考えられる。すなわち、十和田火山起源の十和田a 降下火山灰(To-a)、秋田焼山火山起源の秋田焼山パミス(AYP)、栗駒火山起源の胆沢火山灰(ISA) および灰白色火山灰(WA)である。

第6表 粉状パミスの化学組成

No.	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	MgO (%)	CaO (%)	Na ₂ O (%)
8	70.55	13.95	2.93	0.73	3.02	4.39
14	61.98	16.36	5.01	1.34	3.19	3.34
15	62.68	16.01	6.37	0.82	2.02	3.26
21	65.82	15.03	4.76	1.23	3.14	4.56
31	68.92	13.81	3.23	0.81	2.90	4.58
34	66.32	13.98	2.61	0.71	2.70	4.08

No.	K ₂ O (%)	TiO ₂ (%)	MnO (%)	P ₂ O ₅ (%)	灼熱損失 (%)	Total (%)
8	1.18	0.52	0.11	—	3.36	100.57
14	1.04	0.64	0.14	0.14	7.31	100.49
15	1.02	0.63	0.17	0.12	7.49	100.59
21	1.18	0.40	0.12	0.20	4.06	100.50
31	1.12	0.50	0.13	—	4.18	100.18
34	1.18	0.50	0.11	—	7.56	99.81

なお、瀬川(1978)は岩手県北西部～中部の粒状パミスを「松尾火山灰」、「盛岡火山灰」に区分しているが、両者は同一起源・同一時期のテフラであり、AYRに相当している。また胆沢火山灰と灰白色火山灰は粒径組成、一次鉱物組成などが極めて類似しているため、同一火山灰の可能性もあるが、V / Fe - Zn / Ti の関係図で明確に区分されるため区別した。栗駒山が短時日のうちに2回の噴火を起こし二方に降灰させたことも考えられる。



第3図
強磁性鉱物のV (%) / Fe (%) -
Zn / Ti (%) と粉状パミスの
噴出源の関係凡例は第2図と
同じ。

(4). 粉状パミスの噴出年代 粉状パミスの噴出年代として次のように推定されている。

a. **十和田 a 降下火山灰**; 14C年代について本火山灰の直上と直下の泥炭について1,450±100年、2,170±80年 B. P. が、また本火山灰とほぼ同層位と考えられる毛馬内浮石流堆積物中の炭化物について1,280±90年 B. P. が得られている。また草間(1965)によれば本火山灰が二戸市堀野遺跡の竪穴住居址埋土中に認められることから、大池(1972)は平安時代中期～末期(A. D. 1,000年前後)の噴出物と推定した。

瀬川(1978)は遺跡の年代・出土遺物より7世紀～8世紀末の噴出物であろうと推定している。また鈴木(1981)は「扶桑略記」の記録に基づき、十和田 a 降下火山灰の噴出年代を延喜15年(A. D. 915)と考えている。

b. **秋田焼山パミス**; 本火山灰直下の泥炭について1,480±100年 B. P. の14C年代が得られている。また本火山灰は盛岡市太田の志波城(A. D. 803)の外郭大溝跡を覆い、また「仙北郡史」の記録(村山; 1978)によれば秋田焼山付近でA. D. 807年に大噴火があり、火山灰分布の記載が秋田焼山パミスの分布に似ていることから、井上(1980)はA. D. 800年頃の噴出物であると推定した。瀬川(1978)は遺跡の年代と出土遺物との関係より盛岡火山灰は9世紀後半、松尾火山灰は10世紀初頭の噴出物であると推定した。

c. **胆沢火山灰**; 本火山灰は胆沢城(A. D. 802年)跡を覆っている。瀬川(1978)は岩手県南部の遺跡の年代・出土遺物と胆沢火山灰との関係により、本火山灰の降灰年代を9世紀初頭～9世紀後半であると推定した。

d. **灰白色火山灰**; 灰白色火山灰直下の泥炭より得られた14C年代は1,170±80 B. P. である(山田・庄子; 1981)。また宮城県内の遺跡から推定される年代は本火山灰が多賀城遺跡において、A. D. 780年の伊治公磐麻呂の乱で炎上した多賀城の焼土を覆うこと、陸奥国分寺のA. D. 934年の落雷による七重塔が焼失した時の焼土の下に認められることから、山田・庄子(1981)は本火山灰の噴出年代をA. D. 800～900年ごろ、また白鳥(1980)は10世紀前半ごろと推定した。

以上より十和田 a 降下火山灰は10世紀初頭～11世紀初頭、秋田焼山パミスは9世紀初頭～10世紀初頭、胆沢火山灰と灰白色火山灰は9世紀初頭～9世紀後半に降灰したと推定される。このようにほぼ同一時期に岩質の類似したテフラが十和田、秋田焼山、栗駒山から噴出したことは火山活動の面からも非常に興味をもたれる現象である。

V. **まとめ** 東北地方における奈良～平安時代の遺跡や古墳周墾埋土中にしばしば灰白色でシルト質の粉状パミスが見出される。東北地方各地の遺跡埋土、黒ボク土壌および泥炭地から採集した49点の粉状パミスについて、粒径組成、化学組成、一次鉱物組成、火山ガラスの形態組成と屈折率および強磁性鉱物の化学組成を明らかにした。これらの粉状パミスはいずれも石英安山岩～流紋岩質のガラス質火山灰である。しかし、粉状パミスの粒径組成、重鉱物含量、火山ガラスの形態組成、強磁性鉱物の化学組成は地域別に違いが見られ、4つのグループに区分される。

粉状パミスの産状、層位学的調査とこれらの理化学的、鉱物学および地球化学的諸性質に基づき、奈良～平安時代遺跡埋土中に見出される粉状パミスは十和田火山起源の単一テフラではなく、十和田、秋田焼山および栗駒山から噴出した4種のテフラから構成されると推定した。したがって粉状パミスを考古学編年上の示準層として取扱う場合にはこれらの点に注意する必要がある。

謝辞; 本報告書をまとめるにあたり、試料の一部を御恵与下さった岩手県埋蔵文化財センター、岩手県および水沢市教育委員会の関係各位、また考古学的資料に関して有益な御教示を下さった青森県立郷土館の鈴木克彦、岩手県埋蔵文化財センターの瀬川司男、高橋與右衛門、前岩手県教育委員会の朴沢正耕、岩手県教育委員会の吉田努、北上市教育委員会の斎藤尚己、水沢市教育委員会の新田賢、東北歴史資料館の岡村道雄の各氏に謝意を表する。

文 献

- (1) 草間俊一 (1965) 岩手県福岡町堀野遺跡 福岡町教育委員会
- (2) 草間俊一 (1970) 岩手県岩手町仙波堤・今松遺跡 岩手町教育委員会
- (3) 盛岡市教育委員会 (1970) 盛岡市上太田蝦夷森古墳二報
- (4) 大池昭二 (1972) 十和田火山東麓における完新世テフラの編年 第四紀研究 11, 228-235
- (5) 岩手県教育委員会・北上市教育委員会 (1973) 相去遺跡現地説明会資料
- (6) 大池昭二 (1974) 十和田火山は生きている——まぼろしの有史時代噴火を追って、国土と教育 26, 50-55
- (7) 庄子貞雄・小林進介・増井浮一 (1974) 火山灰中の強磁性鉱物の化学組成と噴出源との関係について 岩鉱誌 69, 110-120
- (8) 草間俊一・玉川一郎 (1974) 岩手県和賀町長沼古墳 和賀町教育委員会
- (9) 北上市教育委員会 (1975) 卯ノ木遺跡発掘調査報告書 文化財調査報告第13集
- (10) Shoji, S., Kobayashi, S., Yamada, I., and Masui, J.-I. (1975) Relationships between the geochemistry of ferromagnetic component and the chemical properties of air-born pyroclastic materials, J. Japan. Min. Petr. Econ., 70, 12-24.
- (11) 北上市教育委員会 (1977) 尻引遺跡調査報告書 文化財調査報告第17集
- (12) 水沢市教育委員会 (1977) 胆沢城跡一昭和51年度発掘調査概報
- (13) 村山 馨 (1978) 日本の火山(1) 大明堂
- (14) 瀬川司男 (1978) 縄文期以後の火山灰と遺跡—岩手県を中心に、どるめん 19, 70-82
- (15) 富樫泰時 (1978) 大湯浮石層と鹿角盆地の遺跡 どるめん 19, 55-69
- (16) 小野剛志・庄子貞雄 (1978) 岩手県北上市付近の火山灰土壌の生成について、第2報。母材と土壌生成 第四紀研究、17, 15-23
- (17) 一戸町教育委員会・建設省岩手工事事務所 (1978) 一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ。一戸町文化財調査報告書第1集
- (18) 盛岡市教育委員会 (1978・1979) 昭和52年度・53年度太田方八丁遺跡発掘調査概報
- (19) 岩手県教育委員会・日本道路公団 (1979) 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ・Ⅱ、岩手県文化財調査報告書第31集・第32集
- (20) 岩手県教育委員会・日本国有鉄道盛岡工事事務所 (1979) 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

岩手県文化財調査報告書第33～35集

- (21) 岩手県埋蔵文化財センター (1979) 二戸市沢内B遺跡 岩手県埋文センター文化財調査報告書第7集
- (22) 岩手県埋蔵文化財センター・建設省岩手工事事務所 (1979) 二戸バイパス上里遺跡現地説明会資料
- (23) 水沢市教育委員会 (1979) 林前遺跡一区画整理に伴う範囲確認調査、岩手県水沢市文化財報告書第3集
- (24) 岩手県埋蔵文化財センター (1979) 二戸バイパス関連大湫遺跡現地説明会資料
- (25) 井上克弘 (1980) 秋田焼山火山噴出物の14C年代、地球科学、34, 116—118
- (26) Inoue, K. and Yoshida, M. (1980) Stratigraphy, distribution, mineralogy, and geochemistry of late Quaternary tephras erupted from the Iwate and Akita-Yakeyama volcanoes, northeastern Japan, Soil Sci. Plant Nutr., 26, 149—166.
- (27) 山田一郎・庄子貞雄 (1980) 宮城県に分布する灰白色火山灰について 宮城県多賀城跡調査研究所年報 1979—昭和54年度発掘調査概報, 97—102.
- (28) 白鳥良一 (1980) 多賀城跡出土土器の変遷 宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要Ⅶ, 1—38.
- (29) Machida, H. (1980) Tephra and its implication with regard to the Japanese Quaternary Period, "Geography of Japan" edited by The Association of Japanese Geographers, 29—53, Teikoku-shoin, Tokyo.
- (30) 岩手県教育委員会・日本国有鉄道盛岡工事局 (1980) 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ、岩手県文化財調査報告書第49集
- (31) 岩手県埋蔵文化財センター・日本道路公団 (1980) 東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書 松尾村長者屋敷遺跡(I) (遺構編1), 岩手県埋文センター文化財調査報告書第12集
- (32) 岩手県埋蔵文化財センター・日本道路公団 (1980) 東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書 松尾村野駄遺跡・寄木遺跡 西根町崩石遺跡 岩手県埋文センター文化財調査報告書第11集
- (33) 岩手県江釣子村教育委員会 (1980) 江釣子遺跡群—昭和54年度発掘調査報告
- (34) 盛岡市教育委員会 (1981) 志波城跡 昭和55年度発掘調査概報
- (35) 山田一郎・庄子貞雄 (1981) 宮城県に分布する新期の灰白色火山灰について 土肥誌、52, 155—158.
- (36) 町田洋・新井房夫・森脇広 (1981) 日本海を渡ってきたテフラ 科学、51, 562—569.
- (37) 鈴木恵治 (1981) 古代奥羽での祥瑞災異 岩手県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅰ, 17—36.
- (38) 岩手県埋蔵文化財センター (1981) 岩手県埋蔵文化財発掘調査略報 (昭和55年度分) 岩手県埋文センター文化財調査報告書第15集

3. 出土植物種子の種名同定結果

(1) 昭和50年9月27日 岩手県教育委員会教育長 畑山新信殿

東北農業試験場栽培第二部長

遺跡出土種子より発芽した植物種名の固定について(回答)

昭和50年9月12日付け教文第190号をもって依頼のありましたこのことについて、別紙のとおり報告します。

鳩岡崎遺跡より出土発芽した植物の育成管理・観察および同定結果について

出土植物の育成管理について、貴委員会から当場に依頼があったので、北上市立博物館から110個体の幼植物を移管した(昭和50年5月7日)。

その後約1週間でシソらしい植物と推定されたので、各地(青森、当場内、本遺跡周辺など合計20ヶ所)から在来シソおよび市販品種を蒐集し、比較対照として同一条件で生育させ観察を続けた。

その結果、同年6月29日に1個体が開花を始め、この時点で茎の形、葉の色調・形態、花の色・構造および植物体の芳香などから、シソ科シソ属シソさらに一般的分類によれば「アカシソ」であることを確認した。

縄文時代中期初頭のフラスコ・ピット底部から出土した本シソが現在のシソに比べ進化および系統分化の面からみて、その特徴が目立ったところである。

さいわい京都府立大学農学部村上道夫教授らが、在来シソについて系統分化の面から研究していたので、本出土アカシソについて詳細な検討を仰いだところである。

この報告結果については、過日貴会から連絡を受けたが、それは一時期の観察結果が主となったため、一・二の修正を要する点が認められた。

そこで当場で実施した育成管理・観察および同定結果について担当者の報告を別紙のとおり添付します。

鳩岡崎遺跡出土種子より発芽した植物の育成管理・観察および同定結果について

昭和50年9月 東北農業試験場栽培第2部作物第2研究室 神尾正義

1. 農北農試へ移管までの経過

1) 発掘出土月日; 1974年11月26日、縄文時代中期初頭のフラスコ・ピット底部から植物種子が発掘され、これらを脱脂綿に包み、プラスチック容器に収納保管した。一冬を経過した1975年4月中旬になって、これら種子が発芽しているのに気付いた(県教育委員会事務局文化課)。

2) 播種月日; 1975年4月19日 発芽種子は鹿沼土、バーミキュライト、川砂およびこれらの混合培地、または現地土壌などの養土を用い合計15鉢に播種された(北上市立博物館)。

2. 幼植物の移管

出土種子より発芽した幼植物のうち、約3分の1の110個体（5鉢）を5月7日に東北農試へ移した。この時点での生育状況は、子葉が展開中のものから、第1葉の出葉始めまたは展開したものなど、個体間に若干生育の差異がみられ、全般にやや軟弱徒長であった（第1表）。

第1表 東北農試移管時の生育状況

鉢番号 *	養 土	無肥料	個 体 数	生 育 状 況
5	鹿沼土：パーミキュライト（1：1）		29	第1葉展開
6	川 砂		48	〃 出葉始
9	鹿沼土：パーミキュライト（1：1）		12	〃 展開
13	パーミキュライト		11	〃 〃
14	〃		10	〃 〃
個体数 計			110	

*北上市博物館で養土を変えて播種した鉢の番号

3. 生育生育経過等

分譲された各鉢は、密植状態であったため、5月8日～5月27日にわたり適宜間引きを行いシードリングケースおよび径15cm素焼鉢に移植した。なお養土としては火山灰土；パーミキュライト；堆肥（3：1：1）を用い、基肥には化学肥料を与えず（化成肥料を加えた培地では、活着不良または枯死したため）追肥として液肥（住友液肥2号）の250培100cc./鉢を3回施用した。

出土植物の育成管理には、十分な注意を払い、さらにその危険分教をはかるため、次の4条件下で養成した。なお各養成場所への個体の配置は任意に行なった。

- ① 育種温室（日覆なし、6月29日までコムギ終夜照明用の散光を受ける。その後は自然日長）
- ② 屋 外（ファイロン屋根 6月16日までは育種温室）
- ③ 病理温室（日覆有り、自然日長）
- ④ 圃 場（5月16日にプラントベッドへ仮植し、その後病理温室で養成して、6月12日本圃に定植）

本出土植物は、移植活着後旺盛に生育し、5～7日毎に次葉が展開して、第4葉が展開する頃には第1葉の腋芽(分枝)が出現した。

1) 花序の抽出について；花序抽出の早晩に養成場所間で大きな差異が見られた。とくに病理温室で養成した個体は6月12日頃から基部の分枝先端に花序抽出が認められ、2～3日後には主茎にも花序が見られた。一方育種温室養成個体は、栄養生長を長く続け、葉数も12葉（地上部節数）以上で、大株となり8月1日に花序が認められた（第2表）。

第2表 養成場所と開花の早晚

養成場所	調査 個体数	止葉葉数 (地上部節数)	花序抽出始 月日 (A)	開花始 月日 (B)	B-A	9月16日 現在
育種温室	13	12 ~ 14	8.1	9.4 ~9.7	34~37	開花中
屋外	40	8 ~ 11	7.18~7.22	8.15~8.23	28~32	開花終
病理温室	10	4 ~ 8	6.12~6.14	6.29~7.4	17~20	〃
圃場	24	4 ~ 5	6.19~6.21	7.2 ~7.5	13~14	開花中

2) 開花時期について

病理温室養成個体は、花序抽出始から17日後の6月29日に下位節の花穂から開花を始めた。この開花の順序は下位節から上位節の穂に漸次進み、また1穂についても下から上方に向かってそれぞれ咲いた。圃場の材料は7月2日に開花を始め、屋外では8月15日に、また育種温室はもっとも遅れ、9月4日になって開花した。

すなわち、これら育成場所間で開花に早晚が見られ、早く咲いた病理温室および圃場養成個体は、地上部節数が育種温室および屋外に比べ少なく(4~8)、また花序抽出始期も早かった。

さらに花序抽出から開花までの日数は20日以内で短かった。このような養成場所の差異による開花の早晚は、生育初期にコムギ終夜照明用の散光を受けたことが主な原因と思われる。

3) 成熟

授精様式は自家授精であり、結実種子は開花後約30日で種子表面が灰褐色となり、数日後には乾燥状態となった。現在一部分の個体については採種を終えた。

4. 在来シソとの比較検討

出土植物は、第1葉が展開し紫色になった時点で、シソらしい植物と推定された。このため各地(青森、当場内および本遺跡近辺など合計20ヶ所)から在来シソおよび市販品種を蒐集し同一条件下で生育させ比較しながら観察した。

しかしこれらの比較材料は、播種期が同一でないため、十分な検討はできなかった。また生育追程を観察している段階で(7月上旬)、本植物はシソ科シソ属シソであることが確認されたので、比較観察結果のうちもっとも特徴的な葉の形態および苞葉などについてのみ在来シソと比較した(第3表)。

まず本出土シソの形態についてみると、葉形は心臓形に近くて、褶皺なく、鋸歯は浅い。葉色は表面が暗紫色で、裏面は赤紫色であったが、花序抽出後急速に退色し、葉質も硬くなった。花序は上からみると苞葉が整然と四方に広がっている。苞葉の巾は在来シソに比べ狭く、しかも淡紫色を帯びていた。

第3表 諸形質の比較

系統	形質	葉の形態				花卉の色	苞葉		がくの形態 ¹⁾	開花始 月 日
		褶皺	鋸歯	色調	葉質		色	大小		
出土アカシソ		無	浅い	暗紫	やや硬い	淡赤	帯紫	小	尖鋭	(6.29 ²⁾ 9.4
在来 アカシソ	遺跡近辺A	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	9.1
	〃 B	〃	〃	紫	〃	〃	淡緑	大	〃	9.1
	盛岡(厨川)	〃	〃	暗紫	〃	淡紫	〃	〃	〃	9.1
	北上立花A	〃	〃	〃	〃	〃	帯紫	中	〃	9.4
	〃 B	〃	〃	紫	〃	〃	淡緑	大	〃	9.8
	青森(三沢)	少	〃	暗紫	〃	淡赤	帯紫	〃	〃	(7.19 ³⁾ 8.24
	軽米	無	〃	紫	〃	〃	〃	〃	〃	8.30
市販品種 アカチリメンシソ		多	深い	赤紫	軟い	〃	〃	〃	波状?	9.13
在来 アオシソ	盛岡	無	浅い	緑	〃	白	淡緑	〃	尖鋭	(7.15 ³⁾ 9.10
	遺跡近辺	〃	〃	〃	やや硬い	〃	〃	〃	〃	9.17
在来 チリメンアオシソ		多	深い	〃	軟い	〃	〃	〃	〃	8.11

注 1) 上唇の辺縁の形状 2) 養成場所による差異 3) ヘテロな集団

比較した大部分の在来のシソの苞葉は、概して広い上、淡緑色であり、出土シソと差異が認められた。以上の形質については、出土シソの全個体に共通していた。

一方開花時期についてみると、病理温室および圃場養成個体は、他のシソに比べ異常に早く開花し注目された。このような早期開花個体は、止葉の中央脈に沿い緑色の帯部がみられ、やや変形したものが多かった。しかも花穂の基部に近い苞葉は異常に発達し、一見小型の普通葉のように見受けられた。

しかしながら育種温室および屋外養成個体は、他の在来シソと同時期に開花し、止葉および苞葉の異常は認められなかった。

在来アカシソについては、9ヶ所から集めたが、前述のように播種、移植時期、幼植物の生育環境などの相違があって、比較検討は十分できなかった。しかしこれら供試在来アカシソのうち鳩岡崎遺跡近辺から播種したアカシソは、本出土シソと類似した点が多かった。

5. 要約

1) 開花時期および期間

シソは短日性植物とされているが、自然条件下では出土シソの開花は6月下旬から始まり9月中旬まで続いた。このような極早生の性質は、在来のシソの一部にもみられ(7月上旬開花)必ずしも出土シソの特異的なものとは考えられない。

2) 止葉の変形と緑線

早期に開花した出土シソの止葉(最上葉)は、ねじれや非相称などの変形がみられ、さらに中央脈に沿って帯状の緑色部が現われた。このような現象は、供試全個体に認められ、著しい特徴のように考えられたが、在来シソの一部にも同様な現象がみられたことから、出土シソ特有の性質とは思われない。なお生育初期に終夜照明を受け、開花が遅れた出土シソでは、このような現象は殆んど認められないか、または極めて軽微であった。

3) 苞葉の形状と色調

大部分の在来シソは、苞葉が比較的大きく、淡緑色であったのに反し、出土シソの苞葉は狭く紫色を帯びていた。この差異は花序抽出時に顕著にみられた。しかしながら類似した形質をもつ在来シソもあり、本形質も出土シソ特有のものとは考えられない。

4) 形質の個体間差異

供試した出土シソは、同一条件で養成した場合、諸形質の個体間差異は極めて小さく、ほぼ均一であると考えられた。これに比べ粗放な条件で栽培されている在来シソの一部には、同一場所に栽植されていたにもかかわらず、開花期や葉形などに著しい差異が認められた。

以上の結果から本出土シソは、比較在来シソと基本的には同一であると思われ、両者間の差異は明確でなかった。しかしながら本観察結果は当代であるため、これらの特徴が遺伝的形質であるか否かは明らかでない。すなわち出土シソは、種子の貯蔵および発芽条件が在来シソと著しく異なっていたと考えられ、この間の環境条件が植物体に影響を及ぼしたのかも知れない。出土シソの遺伝的形質などを明確にするためには、播種から同一条件下で栽培し、多数の在来シソについての比較検討が必要である。

終りに本出土植物の同定などについて当農試環境部主任研究官飯塚典夫氏には絶大なる御協力を賜わり、ここに感謝の意を表する。

(2). なおこの種子に関連する三浦新太郎氏の論文が既に発表されている。以下氏の論文の概要を見ると、①江釣子村鳩岡崎出土の種子(1976年、岩手県文化課より北上市立博物館へ移管)^(註1)は、雑草及び青シソの混入した赤シソであった。

②出土状況は縄文時代前期～中期(大木6～7a)に該当するフラスコ形ピットの下層部。

③それらは現代種との違いは認めがたい。

④それらが遺構埋土中にどのように包含されていたかを検討中、八天遺跡のP-H-7に多くの種子が発見された。

⑤それはアリによって運搬されたものであることが判明した。

大略以上である。したがって、本遺跡出土のシソの種子も縄文時代のものである可能性とも、クロナガアリによって運搬・貯蔵された現代種のものである可能性もまた強くなったといえよう。筆者らも、本種子についてはクロナガアリの仕事と見做したいと考えている。なお氏は続いてクロナガアリの分布・習性などにもふれている。それによると、

種名：アリ科・フタフシアリ亜科・クロナガアリ属・クロナガアリ

分布：日本・朝鮮・中国。日本では従来は宮城県までの記録しかない。

形態・習性：働蟻は、体長5mmぐらい。黒色・頭部に縦しわがあり、^(註2)胸部・腹柄にもしわがある。腹部はなめらかで光沢がある。比較的乾いた土地に見られ、野草の種子を集めて食糧として貯える。4～5月に巣口をあけて羽蟻を送り出し、その後7月まで巣口を開かない。したがって地上活動は、主に7～11月である。巣は縦に深く、通路の途中に小部屋が連なる。

収穫する種子 ①いね科 エノコログサ・ムラサキエノコロ、②いね科メヒシバ ③しそ科エゴマ、④とうだいぐさ科エノキグサ ⑤あかざ科シロザ・シロアカザ、⑥たで科オオイスタデ、⑦たで科イスタデ、⑧つゆくさ科ツユクサ。

などである。いずれにせよ極めて貴重な論文である。考古学のサイドにあるものにとって出土状況の詳細な観察の重要性は常に口にするところであるが、視点を変えるとまた重要なテーマ設定が可能ということを実に示したものといえ、一つの警鐘になろう。以上引用に終止したが、過誤があれば引用者の責任である。末筆ながら氏の学恩に感謝する。

註1. 三浦新太郎 クロナガアリの習性、北上市文化財調査報告27集、八天遺跡（昭和50年～52年度調査）、本文編、附録I 所収。北上教育委員会、昭和54年。

註2. 今回の論文によってそれが岩手県まで拡大したことはいうまでもない。

4. 鉄製品の分析結果

1. 試料 No.1 鳩岡崎遺跡EA12住居跡出土、刀子(?)
 (No.2 太田方八丁遺跡 Oi 33住居跡出土)
 (No.3 “ Lj 21 “)
 (No.4 “ Me 27 “)

2. 定量分析結果(%)

成分 試料	total Fe	Mn O	Si O ₂	Ti O ₂	C
No.1	64.09	t race	2.10	0.078	0.56
No.2	46.57	0.064	25.76	0.340	0.14
No.3	58.09	0.013	6.99	0.084	0.63
No.4	61.78	t raca	3.39	0.268	0.81

3. 粉末X線回折法による定性分析結果

試料	検出鉱物				
	M	G	W	F	Q
No. 1	++	+			
No. 2			++	+	
No. 3	+++	++			+
No. 4	++	+			

M; Magnetite (Fe₃O₄)
 G; Goethite (Fe₂O₃·H₂O)
 W; Wustite (FeO)
 F; Fayalite (Fe₂SiO₄)
 Q; α-Quartz (SiO₂)

検出鉱物については、最強線の強度の順を+++、++、+で表わしおおよその目安とした。

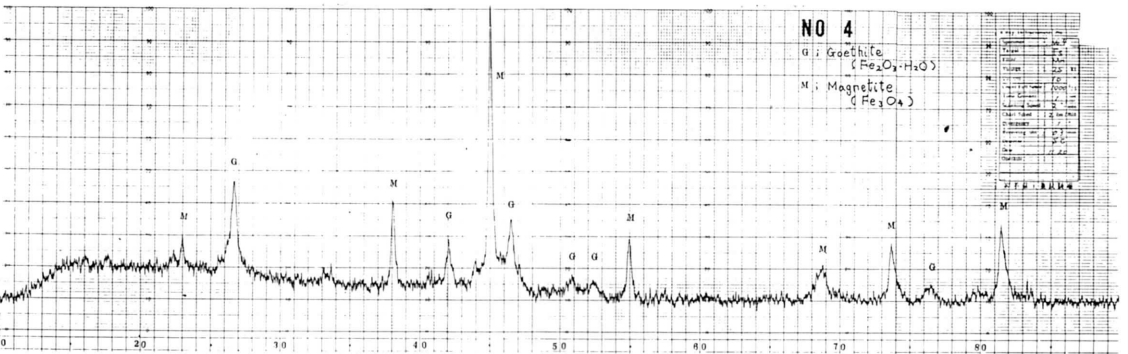
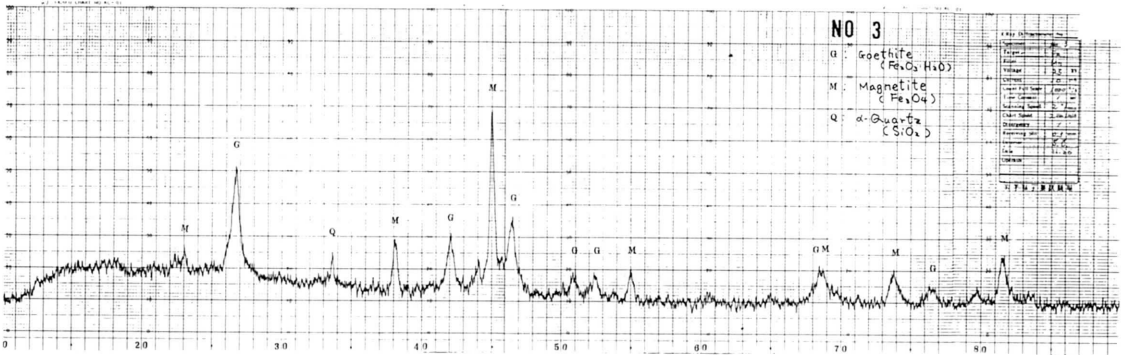
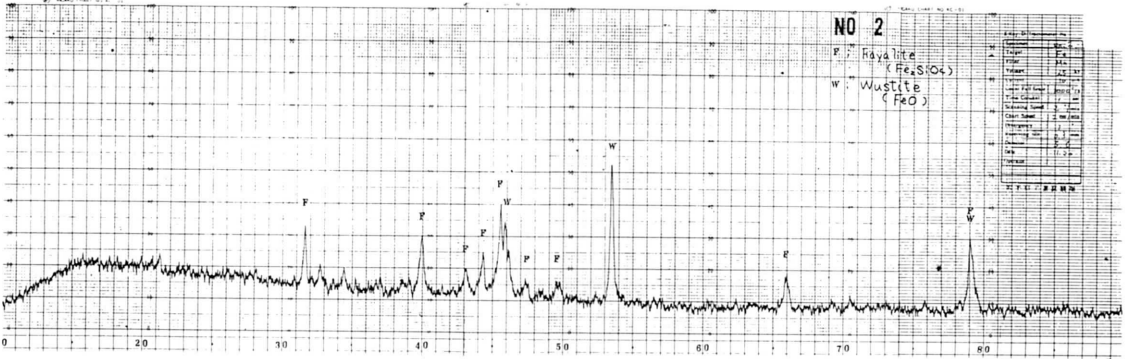
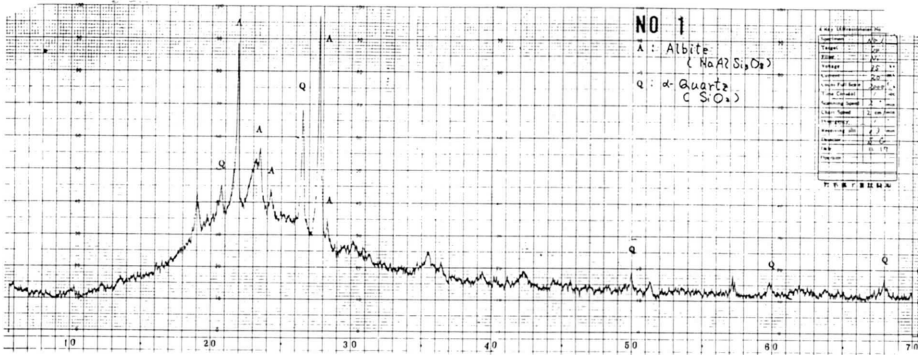
〔測定条件〕 対陰極; Fe, フィルター; Mn, 電圧: 25KV, 電流: 10mA
 時定数; 1 sec, カウントフルスケール; 1000 cps. 検出器; シンチレーションカウンター

4. 蛍光X線法による定性分析結果

試料	検出元素						
	Al	Si	K	Ca	Ti	Mn	Fe
No. 1		○			○		○
No. 2	○	○	○	○	○	○	○
No. 3		○	○	○	○		○
No. 4		○			○		○

〔測定条件〕 対陰極; Cr (軽元素)
 W (重元素).

分光結晶; EDDT (軽元素)・Li F (重元素), 電圧; 50kV, 電流; 40mA,
 時定数; 1 sec, 検出器; シンチレーションカウンター, カウントフルスケール; 10⁴ cps (軽元素)・10⁴ × 2 cps (重元素)



5. 須恵器他各種遺物の分析結果

1. 試料

No. 1	成沢遺跡出土	粉状バミス	No. 7	鳩岡崎遺跡出土	コハク(?)
No. 2	猫谷地	鉄 滓	No. 8	〃	須 恵 器
No. 3	〃	〃	No. 9	〃	土 師 器
No. 4	〃	須 恵 器	No. 10	〃	陶 器
No. 5	〃	〃	No. 11	太田方八丁	須 恵 器
No. 6	〃	〃	No. 12	〃	土 師 器

2. 粉状バミス(No.1)の定量分析結果(%)

H ₂ O ⁻	H ₂ O ⁺	SiO ₂	Fe ₂ O ₃	TiO ₂	P ₂ O ₅	Al ₂ O ₃
5.15	12.56	57.52	3.24	0.374	0.045	14.14
MnO	CaO	MgO	S	Na ₂ O	K ₂ O	
0.096	2.08	0.768	0.055	2.97	0.915	

3. 鉄滓の定量分析結果(%)

成分	total	Fe	MnO	SiO ₂	TiO ₂	C
No. 2	56.80		0.235	7.94	8.04	0.40
No. 3	55.16		0.274	11.77	8.13	0.37

4. 須恵器等の定量分析結果(%)

成分	SiO ₂	Fe ₂ O ₃	Al ₂ O ₃	TiO ₂	CaO	MgO
No.4 須恵器	68.46	3.39	22.86	0.658	0.752	0.392
No.5 〃	64.92	3.63	26.00	0.995	0.231	0.757
No.6 〃	67.75	4.22	23.20	0.708	0.347	0.778
No.8 〃	70.77	2.93	21.57	0.496	0.955	0.407
No.9 土師器	63.30	3.80	19.97	0.742	0.550	1.71
No.10 陶 器	71.51	3.10	20.08	0.920	0.434	0.734
No.11 須恵器	71.03	3.64	20.10	0.465	0.405	0.892
No.12 土師器	68.93	7.19	17.82	0.664	0.579	0.733

5. 粉状バミス等の粉末X線回折法による定性分析結果

試 料	検 出 鉱 物				
	Q	C	M	A	F
No.1 粉状バミス	+			++	
No.11 須 恵 器	++	++	+		
No.12 土 師 器	++				+

Q; α-Quartz (SiO₂), C; α-Cristobalite (SiO₂), M; Mullite (3Al₂O₃・2SiO₂), A; Albite (NaAlSi₃O₈), F; Feldspar group 検出鉱物については、最強線の強度の順位を++、+で表わし、おおよその目安とした。

[測定条件] 対陰極; Cu, フィルター; Ni, 電圧; 35kv, 電流; 20mA, 時定数; 1 sec, カウントフルスケール; 2000cps, 検出器; シンチレーションカウンター

6. 鉄滓の粉末X線回折法による定性分析結果

試料	検出鉱物			
	M	T	G	Q
No. 2	+++	+++	++	+
No. 3	++	+++	+	+

M; Magnetite (Fe_3O_4), T; ferric titanate (Fe_2TiO_4), G; Goethite ($\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{H}_2\text{O}$), Q; α -Quartz (SiO_2).

検出鉱物については、最強線の強度の順位を+++、++、+で表わし、おおよその目安とした。

〔測定条件〕 対陰極; Fe, フィルター; Mn, 電圧; 25KV, 電流; 10mA, 時定数; 1sec, カウントフルスケール; 1000cps, 検出器; シンチレーションカウンタ。

7. 蛍光X線法による定性分析結果

試料	検出元素											
	Al	Si	S	Cl	K	Ca	Ti	Cr	Mn	Fe	Sr	Zr
No.2 鉄滓		○		○		○	○	○	○	○		○
No.3 ヌ		○		○	○	○	○	○	○	○		○
No.4 須恵器	○	○			○	○	○			○	○	○
No.5 ヌ	○	○			○	○	○			○	○	○
No.6 ヌ	○	○			○	○	○			○	○	○
No.7 コハク		○	○		○	○	○			○		
No.8 須恵器	○	○			○	○	○			○		○
No.9 土師器	○	○			○	○	○			○	○	○
No.10 陶器	○	○			○	○	○			○		

〔測定条件〕 対陰極; Cr (軽元素)・W (重元素), 分光結晶; EDDT (軽元素)・LiF (重元素), 電圧; 50KV, 電流; 40mA, 時定数; 1sec, カウントフルスケール; 10^4 cps (軽元素)・ 10^4 cps (軽元素)・ $10^4 \times 2$ cps (重元素), 検出器; シンチレーションカウンタ。

8. 備考

5の定性分析結果中、No.12 (土師器) についての粉末X線回折法による検出鉱物のうち、 α -クォーツの存在は明らかである。その他に、いずれかの長石、又はその混合物が含まれると考えられるが、明瞭なピークが得られないため、その鉱物名を特定することができず、長石類 (Feldspar Group) とした。

(引用者註. チャートの掲載は紙数の都合上割愛せざるをえなかった。)

6. 蛍光X線による出土土器の分析結果

このことについて岩手県立博物館赤沼英男氏に依頼し、以下のような報告を得た。

1. 測定方法 土器片の不純な表面をタングステンカーバイト製のグラインダーを用いて削り落とし、新鮮な切片だけを取り出したものをそのまま試料とし分析に供した。なお測定条件は次に示すとおりである。

対 陰 極 W

電 流・電 圧 50KV—50mA

FULL SCALA 2×10^4 cps

分 光 結 晶 LiF, EDDT

時 定 数 0.2sec

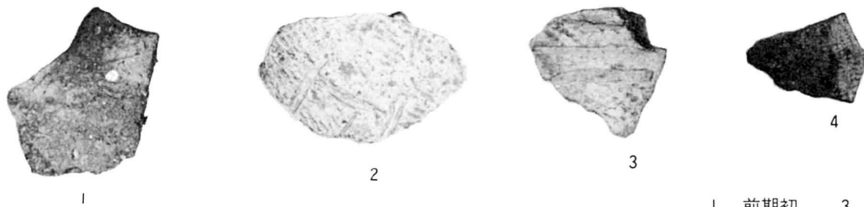
検 出 器 シンチレーションカウンター, プロポーショナルカウンター

(微量元素についてはFULL SCALE 1×10^4 cps, 時定数1secにて測定を行なった)

分析結果については別表測定結果表及びチャートを参照された。

2. 試料一覧表

No.	遺 跡 名	遺 構 名	種 別	No.	遺 跡 名	遺 構 名	種 別
1	太田方八丁	Cgob 住	土師 球胴カメ	21	栗田 I・II		陶 器
2	〃	pd 15住	〃 内黒坏	22	太田方八丁		炉 壁
3	〃	〃	赤焼?	23	栗田 III		磁 器
4	〃	Eb 03住東カマド	須恵 高台付坏	24	〃		縄文
5	〃	Le -33-2住	〃 坏	25	〃	Ch 18-I	〃 早期
6	〃	Jj 12住	〃 〃	26	水沢市見分森		粘 土
7	鳩 岡 崎	EF 24p.	縄文 (前期初)	27	江刺市瀬谷子	土 山 西 隣	〃
8	〃	EA 50p. 1	〃 (大木6式)	28	〃	〃	〃
9	〃	CI 21住拡廻区II	〃 (大木8a 式)	29	〃	〃	〃
10	〃	EJ 71p. 2	〃 (晩期)	30	〃	土 山	〃
11	下 谷 地 B		赤焼? 坏	31	〃		〃
12	〃		土師 内黒坏	32	〃		〃
13	〃		須恵 坏	33	北上市飯豊森 付 近		〃
14	毛 越 地 A		土師賞 〃	34	〃 藤 沢	〃	〃
15	猫 谷 地	DA 62住	I 期 土師	35	紫波町杉ノ上	〃	〃
16	〃	JJ 24住	II a 期 〃	36	和賀町岩崎新田	〃	〃
17	〃	BF 21住	II b 期 〃	37	水沢市石田	Eg 09住	〃
18	〃	BD 62住	III 前 〃	38	〃	DF 59住	〃
19	〃	CI 53住	III 後 〃	39	太田方八丁	Le 33住	炉 壁
20	栗田 I・II		陶 器				

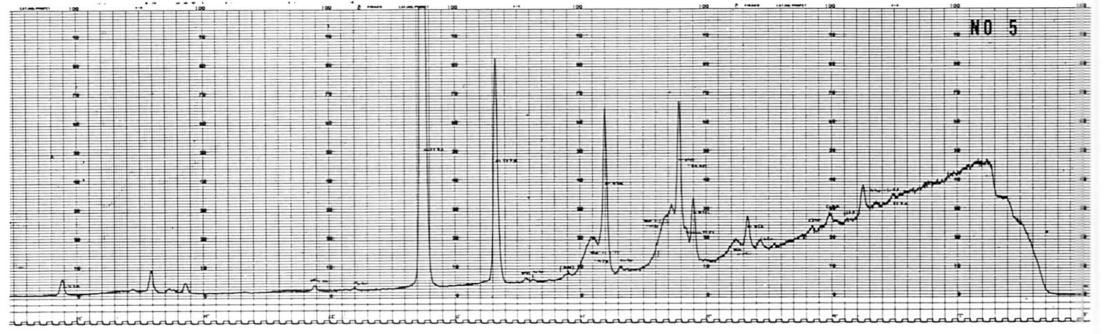
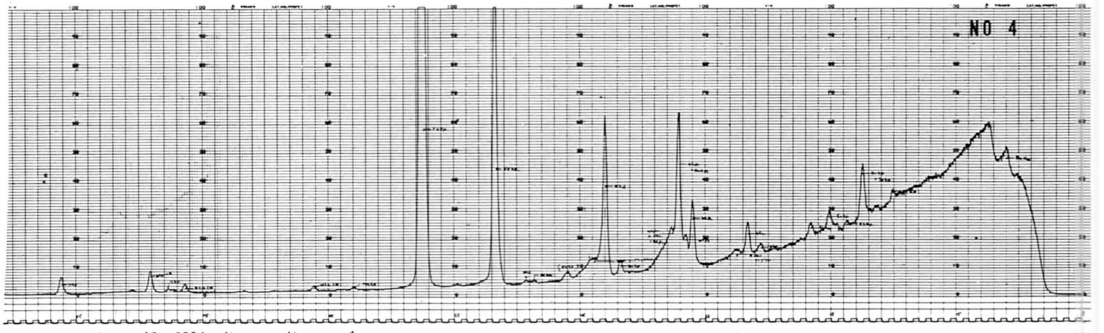
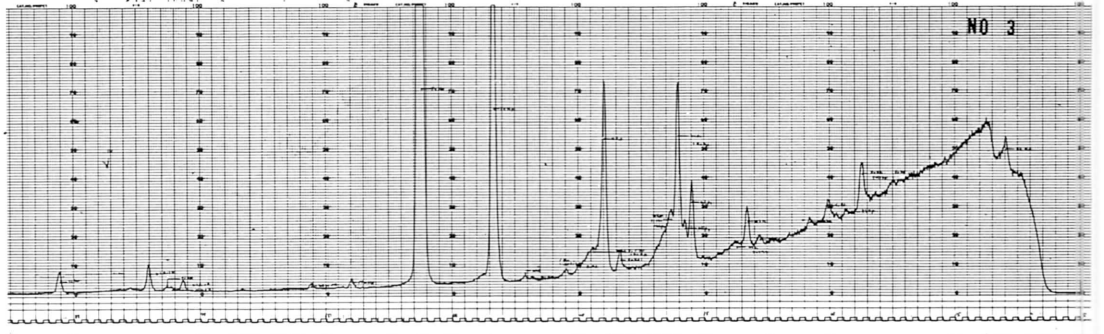
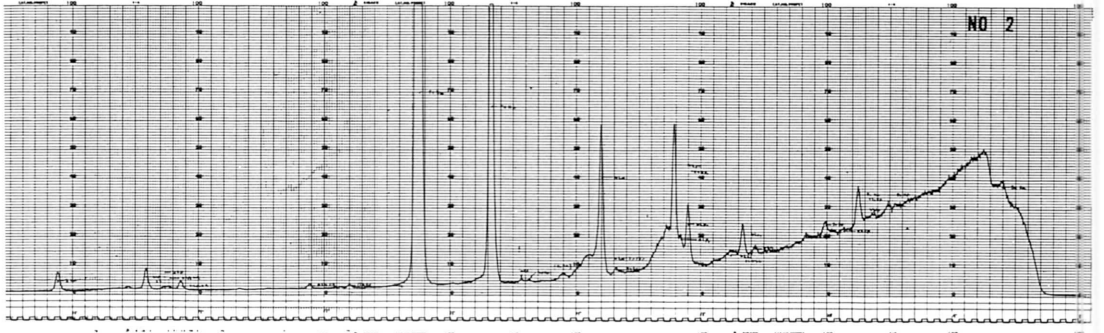
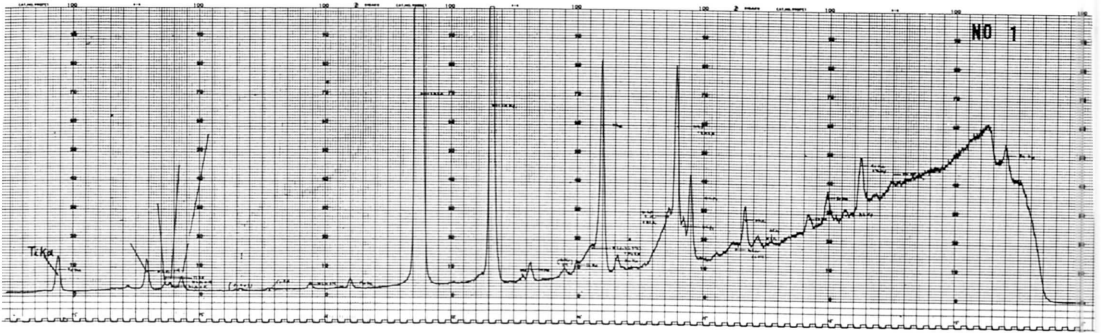


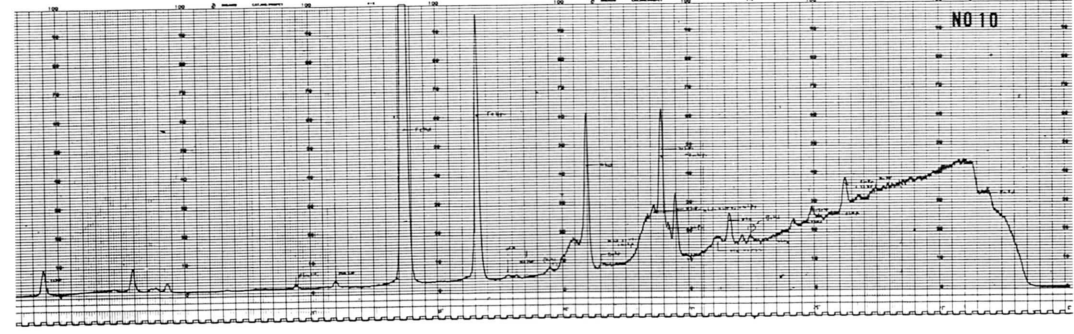
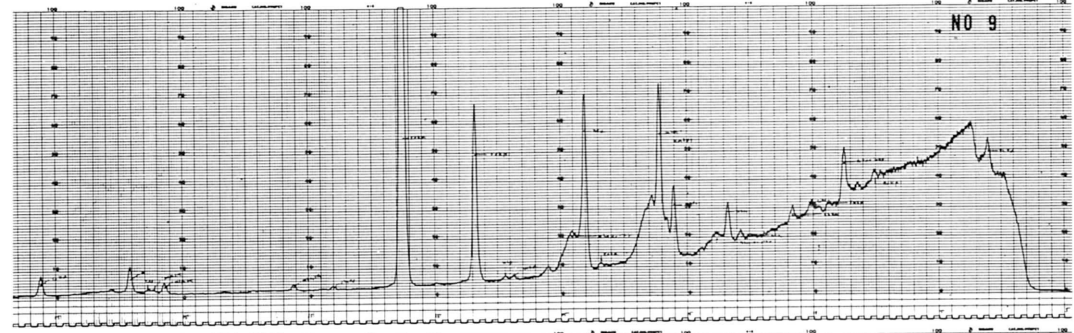
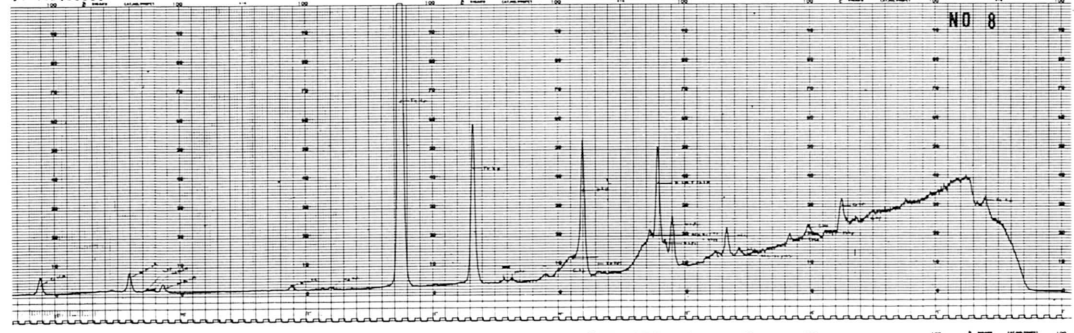
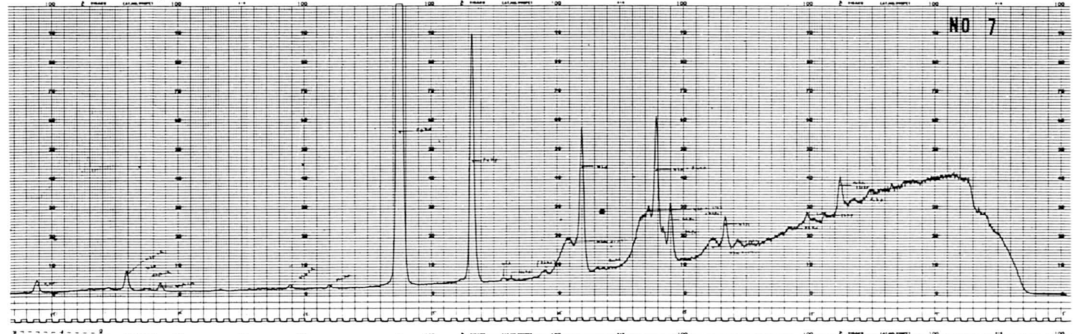
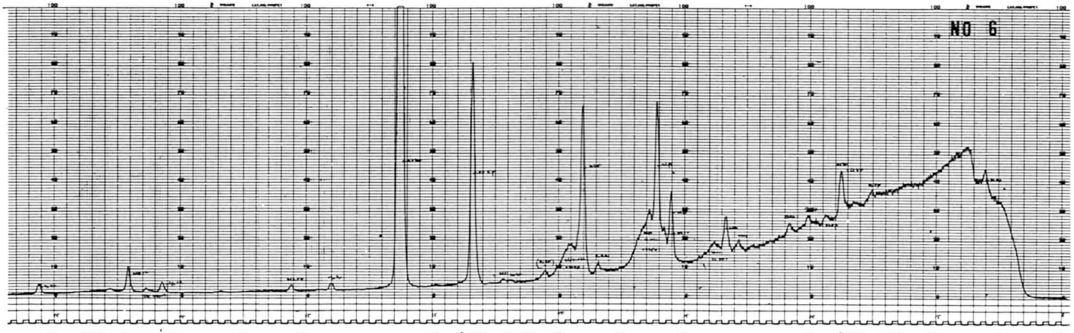
胎土分析試料の一部

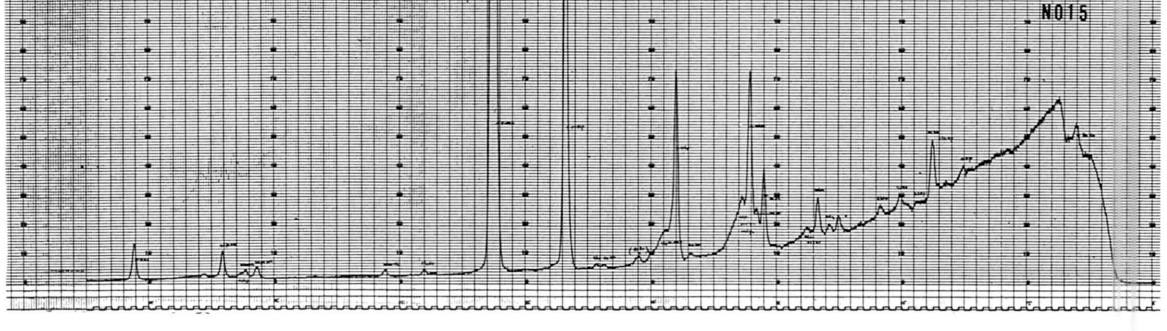
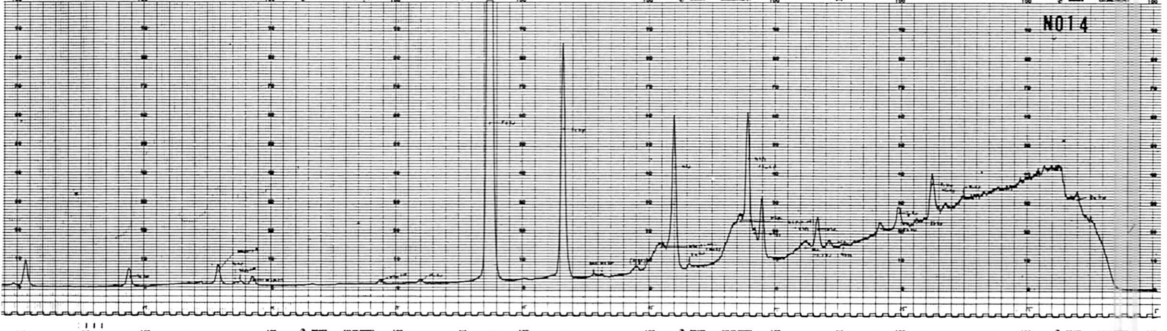
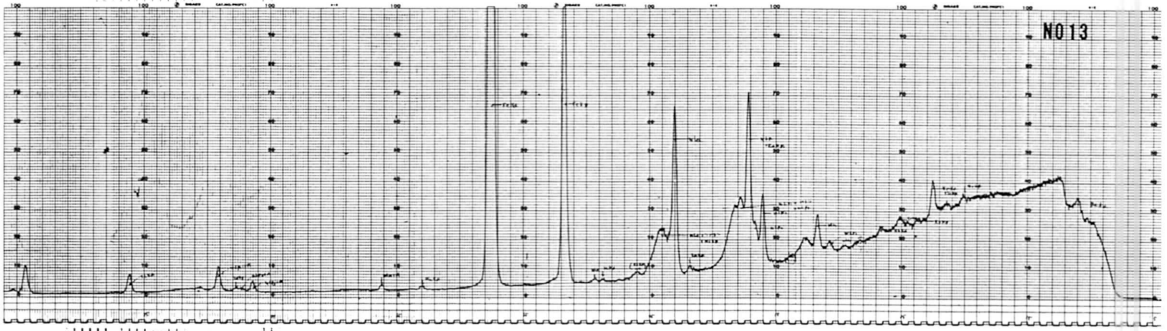
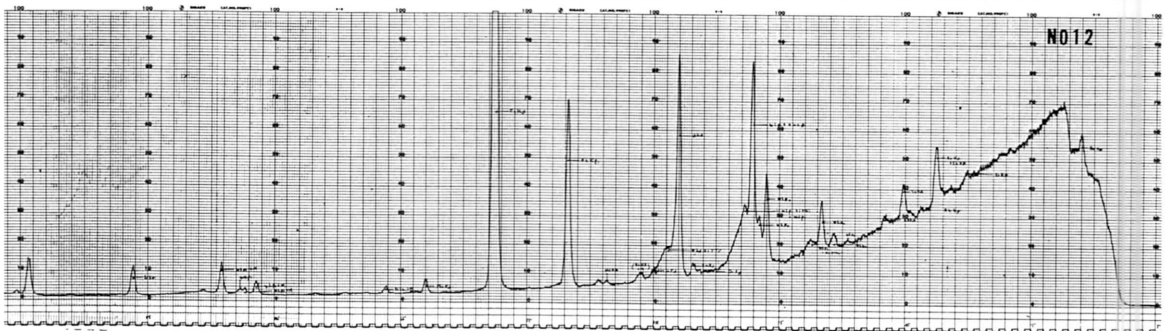
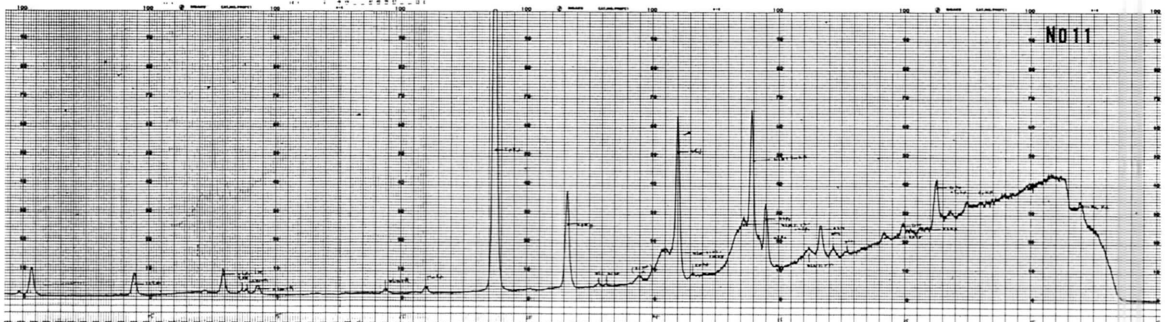
1 前期初 3 中期中葉
2 前期末 4 晩期

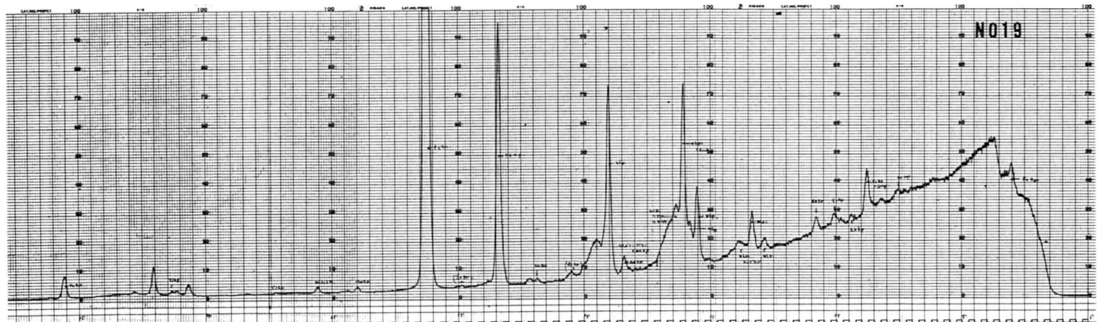
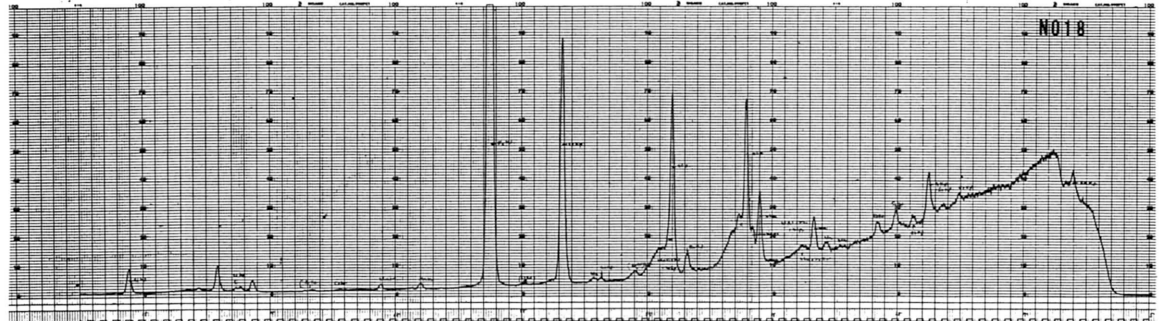
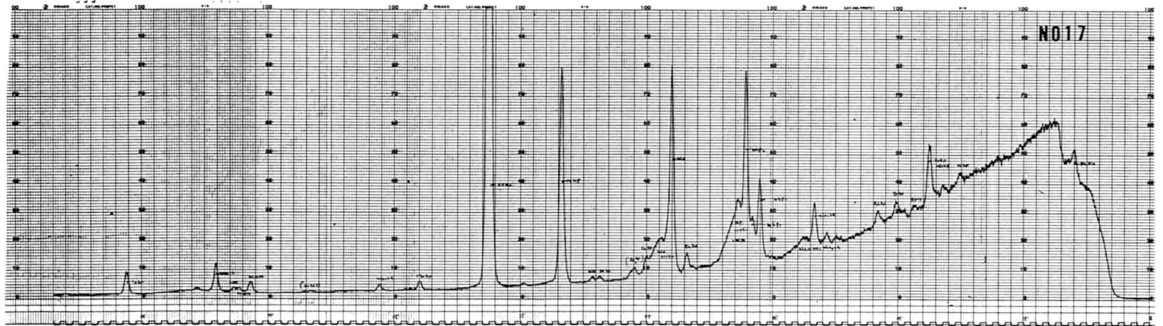
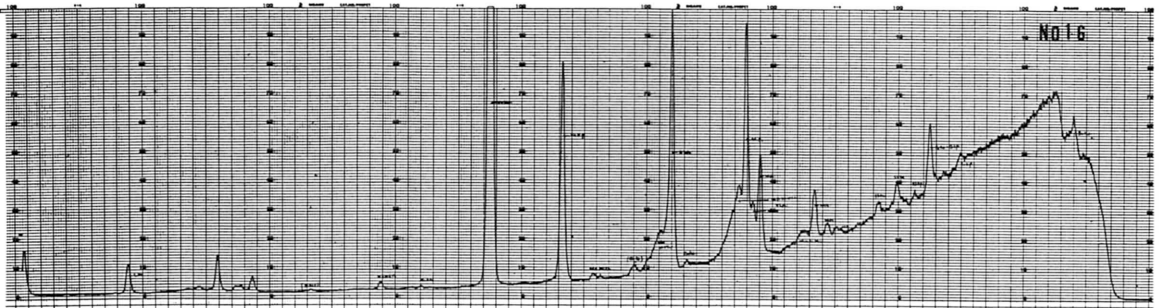
試料 番号	検 出 元 素															
	Al	Si	K	Ca	Ti	Cr	Mn	Fe	Ni	Cu	Zn	Rb	Sr	Zr	Br	Ba
1	○	○	○	○	○	tr	○	○	○	—	○	○	○	○	—	○
2	○	○	○	○	○	—	○	○	○	—	○	○	○	○	—	○
3	○	○	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	—	○
4	○	○	○	○	○	tr	○	○	○	—	○	○	○	○	—	○
5	○	○	○	○	○	—	○	○	○	—	○	○	○	○	—	—
6	○	○	○	○	○	—	○	○	○	—	○	○	○	○	—	○
7	○	○	○	○	○	—	○	○	○	—	○	○	○	○	—	—
8	○	○	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	—	○
9	○	○	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
10	○	○	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
11	○	○	○	○	○	tr	○	○	○	○	○	○	○	○	—	○
12	○	○	○	○	○	tr	○	○	○	○	○	○	○	○	—	○
13	○	○	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	—	○
14	○	○	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	—	○
15	○	○	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
16	○	○	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
17	○	○	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
18	○	○	○	○	○	tr	○	○	○	○	○	○	○	○	—	○
19	○	○	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	—	○
20	○	○	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	—	○
21	○	○	○	○	○	tr	○	○	○	○	○	○	○	○	—	○
22	○	○	○	○	○	tr	○	○	○	○	○	○	○	○	—	○
23	○	○	○	○	○	tr	○	○	○	○	○	○	○	○	—	○
24	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
25	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
26	○	○	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	—	—
27	○	○	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	—	○
28	○	○	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	—	○
29	○	○	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	—	○
30	○	○	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	—	○
31	○	○	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	—	○
32	○	○	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	—	○
33	○	○	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	—	○
34	○	○	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	—	○
35	○	○	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	—	○
36	○	○	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	—	○
37	○	○	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	—	—
38	○	○	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	—	○
39	○	○	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	—	○

(備考：○；含まれる， tr；微量含まれる， —；含まれない)









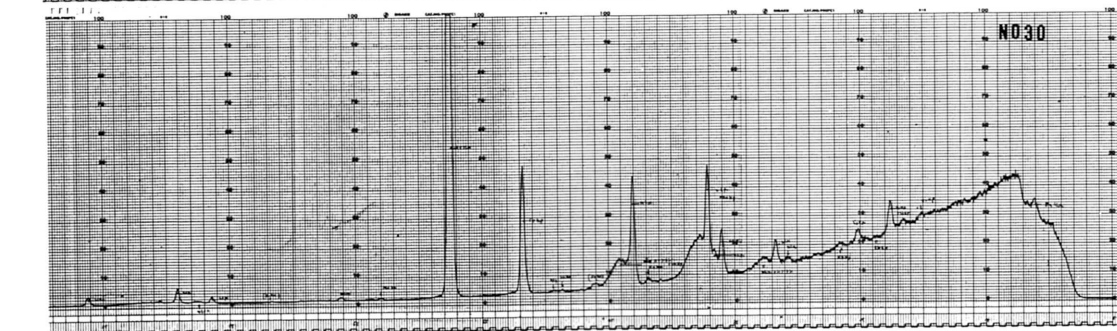
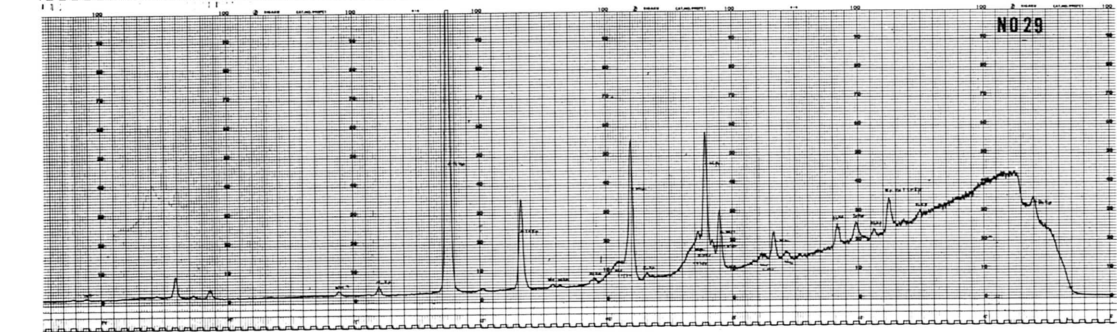
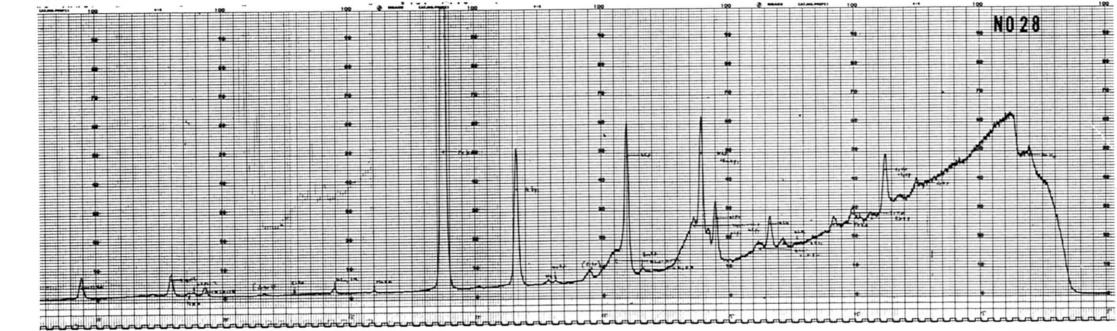
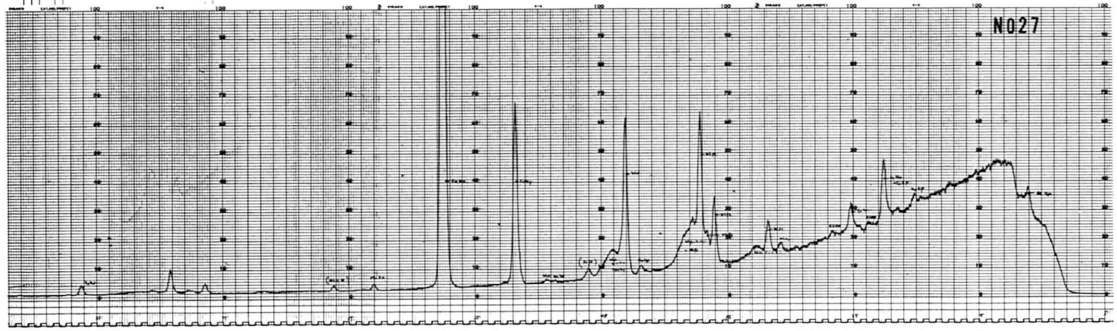
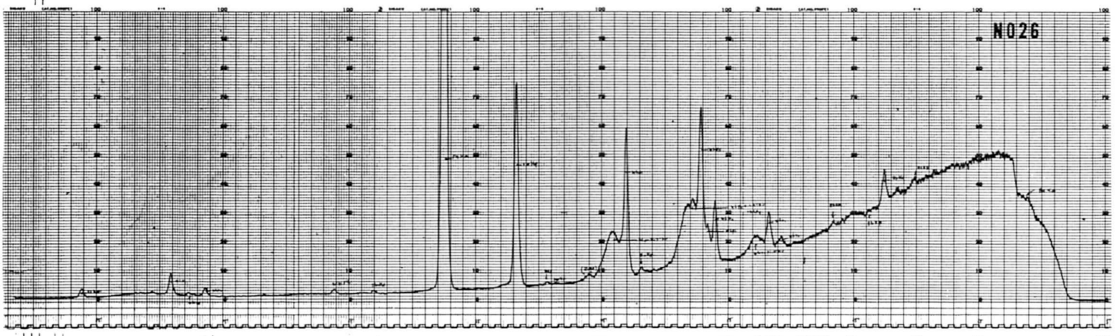
N021

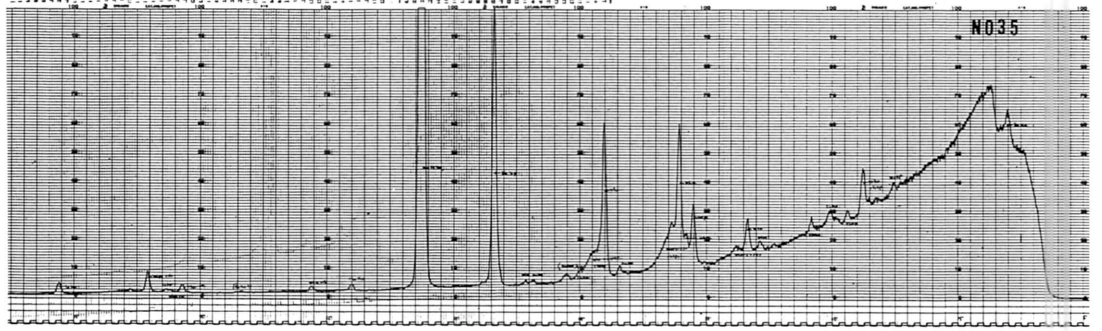
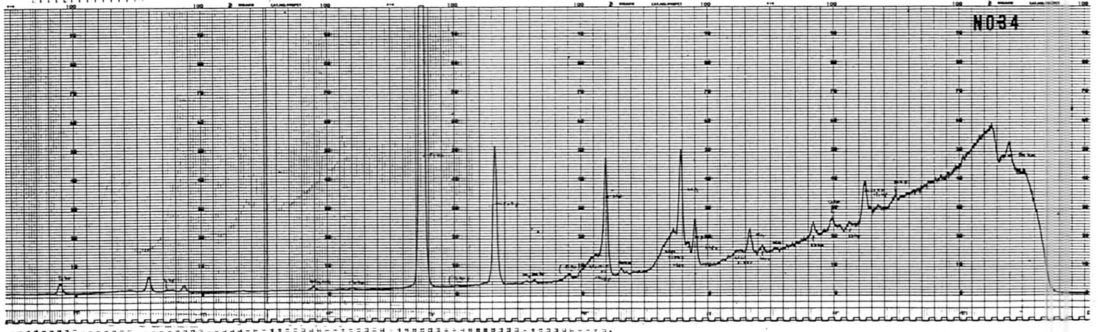
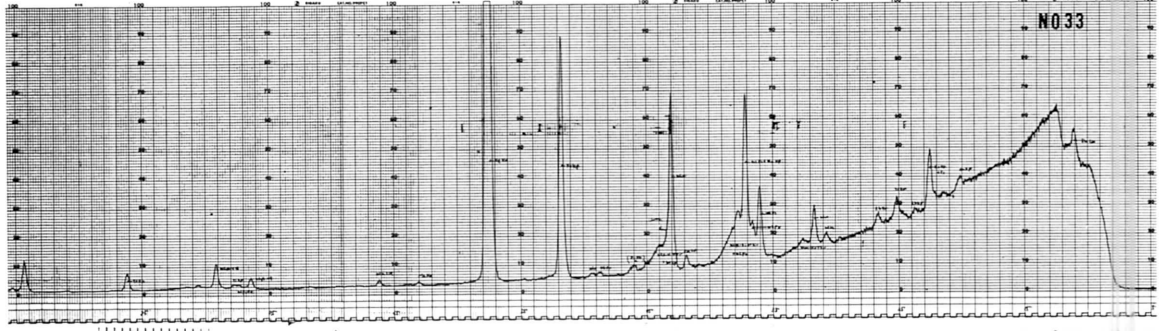
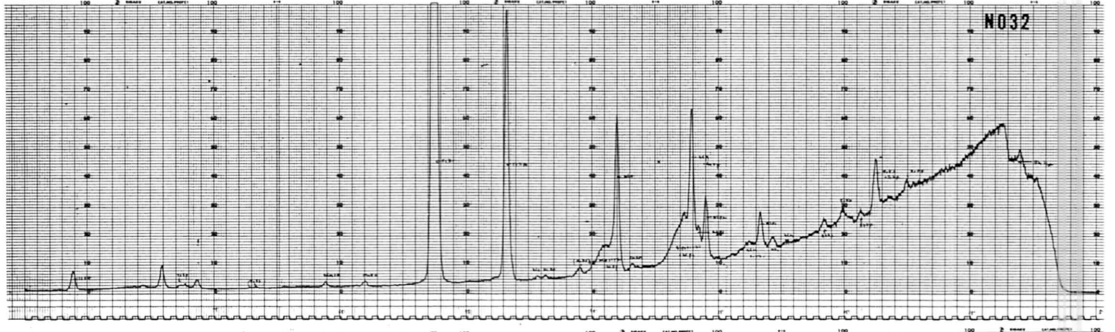
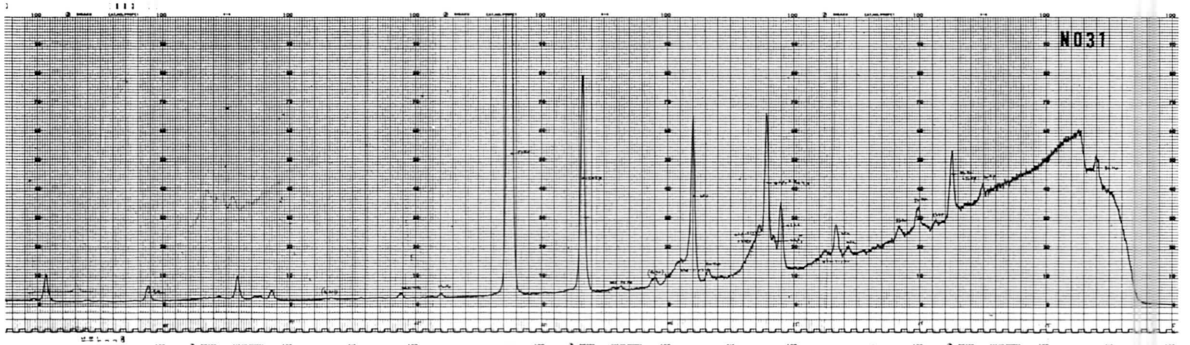
N022

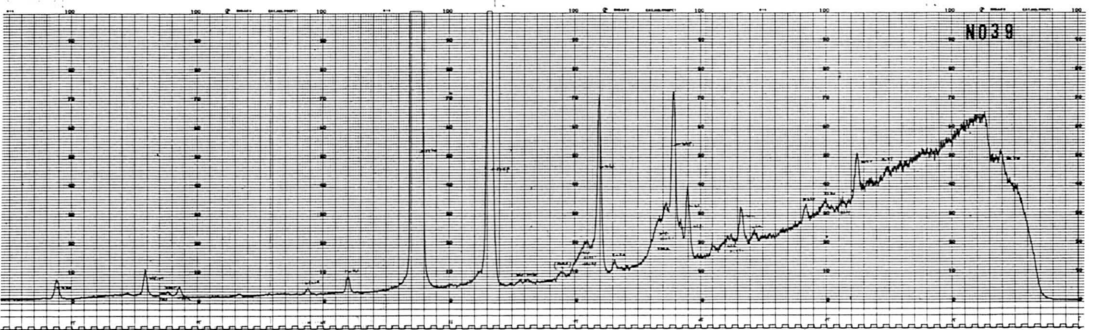
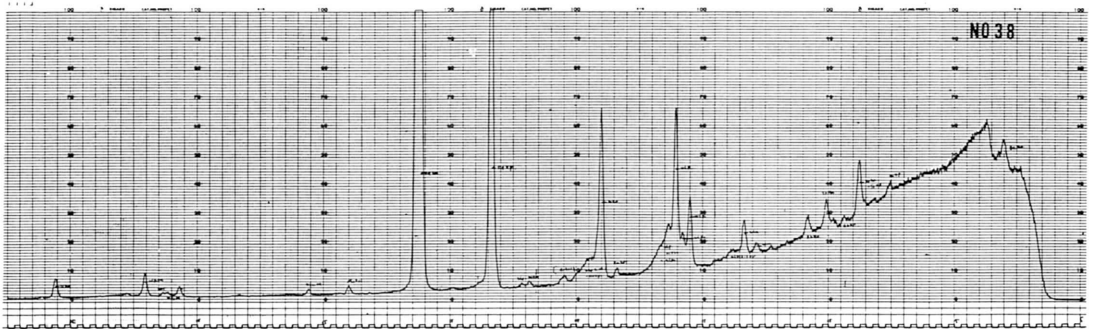
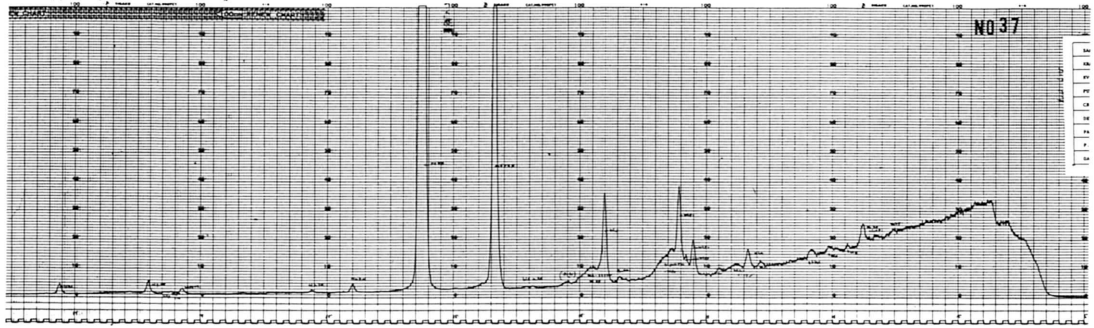
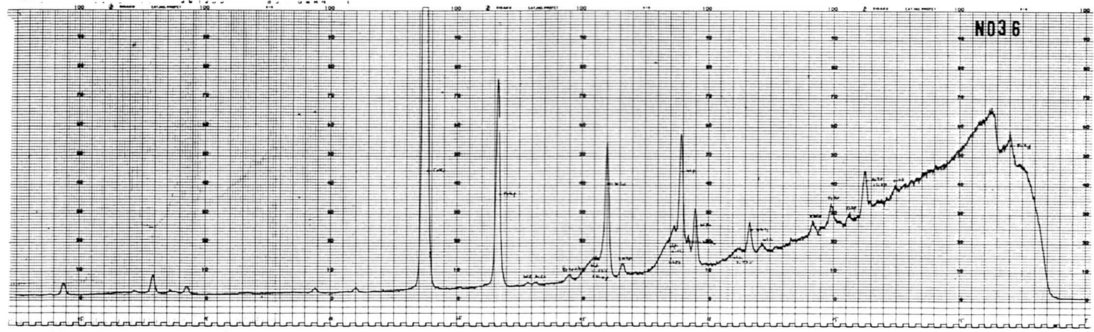
N023

N024

N025







7. 岩石学的方法による土器胎土分析の結果

岩手県立種市高等学校 照井 一 明

I. はじめに：土器の製作地推定のため、岩石学的方法で分析を行なった。また窯跡周辺の粘土も比較のため分析を行なった。

II. 試料：別表のとおり。

III. 分析方法：①試料をカナダバルサムで固定し、100分の3mmの厚さの薄片を各3枚ずつ作成した。粘土はΦ4の標準篩で水洗し、残砂を乾燥した後薄片を作成した。

②偏光顕微鏡を用い、鉱物組成・特徴、岩片の種類・傾度を調べた。

③1つの試料について、それぞれ500～1,000個の粒子について検討を行なった(0.05 mm以下の鉱物は基質として扱った)。

④鉱物、岩種別構成から、粘土の供給源の地質を推定し、製作地を考察した。

IV. 結果：①各試料の鉱物組成・岩片構成・特徴は別表のとおりである。

②須恵器の焼かれた温度は、石英→鱗珪石に再結晶していることから推定すると、 β_2 - 鱗珪石(高温型)の安定な870～1,470℃であろう(例えばN2・H4・H2など)。

③各土器は、石英・斜長石の破片結晶から主に構成されるが、試料によっては、黒雲母・角閃石・輝石(特に斜方輝石)の含有量が増加する。

④岩片としては、チャート・珪岩・ホルンフェルス・花崗岩類・斑岩・安山岩・玄武岩・凝灰岩・苦鉄質火山岩類などがみられる。

⑤土器の多くは、火山ガラスを含んでいるが、これらの供給源は粘土の分析結果から北上川層群の凝灰岩が考えられる。

⑥土器・粘土の組成と地質とを考慮すると、土器の大半は北上川流域およびその周辺の粘土から作られたものである。

⑦各遺跡から出土した土器は、異なった粘土、あるいは産地のものが混じっている。即ち、以下の如くなる。

㉑江釣子村猫谷地

N1, N2, N3, N4, N6…特徴的に火山ガラスを含み、石英・長石類と古生層・花崗岩の岩片を含むタイプ。

N5, N7, N8……………上記の他に安山岩を含むタイプ。

㉒江釣子村鳩岡崎

H2, H4……………火山ガラスを含み、石英・長石類と古生層・花崗岩の岩

片を含むタイプ。

H 3……………上記の他に安山岩を含むタイプ。

㉔江釣子村下谷地

S 1……………岩片に古生層・花崗岩・プロピライトを含み火山ガラスが認められる。

S 2……………古生層の岩片から主に構成され、火山ガラスを含まない。

㉕紫波群栗田

K 1……………古生層の岩片に火山ガラスと安山岩を含む。

K 2……………花崗岩の岩片と火山ガラスから構成される。

㉖平泉町毛越

K 1……………花崗岩の岩片と火山ガラスから構成される。

㉗盛岡市太田方八丁

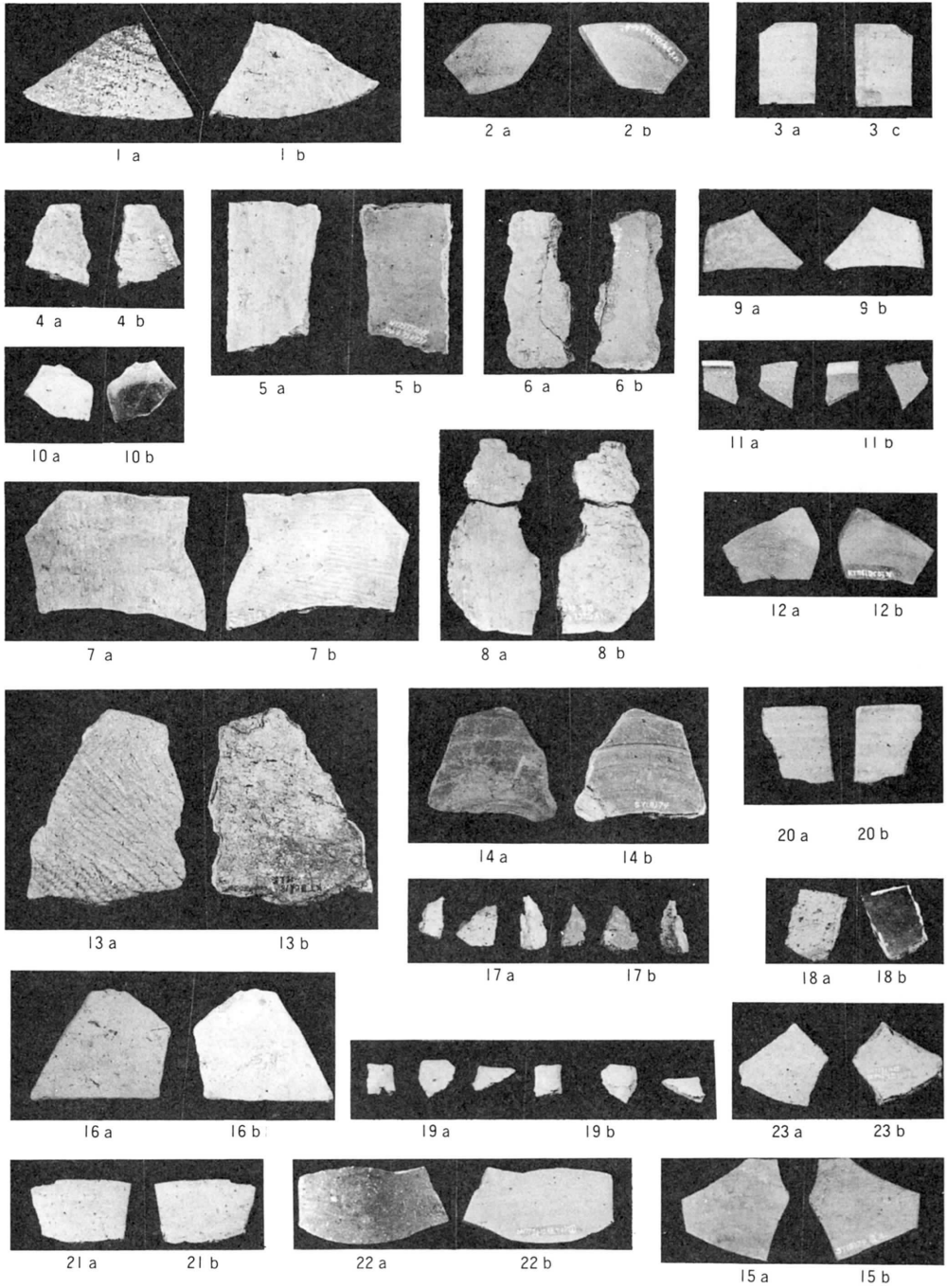
01, 02, 04, 06, 08……………古生層・花崗岩の岩片と火山ガラス及び安山岩・玄武岩を含む。

03, 07……………古生層の風化物からなる粘土。

⑧窯跡の粘土あるいは使用された粘土の大半は鮮新統の凝灰岩・シルト岩、および河岸段丘のシルト岩である。

⑨安山岩・玄武岩を含む粘土の産地としては、古生層・花崗岩などの岩片および火山ガラス(凝灰岩)を特徴的に伴うことから判断すると、北上山地で鮮新統の凝灰岩が分布し、さらに中性～塩基性火山岩類の分布する地質状況が推定され、稲瀬火山岩類分布地域周辺の可能性がもっとも強い(北上川東岸の地域)。

⑩野外の露頭で採集された粘土(No.24—①～34—⑪)の特徴をみると、一般に北上川の西側地域の粘土には火山ガラスが全く含まれないが、あるいは微量である(31—⑧, 32—⑨, 33—⑩, 34—⑪)。角閃石・輝石は含まれる場合と含まれない場合とがある。水沢市見分森の粘土は、火山ガラスを含むが角閃石・輝石を含まない特徴がある。紫波町日詰杉の上(33—⑩)の粘土には、結晶片・岩片・火山ガラスが含まれず、チャート・シルト岩を主として構成される。江刺市瀬谷子の粘土(25—②～⑦)は、チャート・珪岩・花崗岩などの岩片と、石英・斜長石・鉄鉱・ジルコン・緑レン岩を含み、火山ガラスを含むことが多い。凝灰岩や凝灰質シルト岩には輝石や角閃石が一般的に認められる。



胎土分析試料 (縮尺 3分の1)

第1表 試料一覽

通算No.	個別No.	出土遺跡	出土地点・遺構	種別	備考
1	N-1	和賀郡江釣子村猫谷地	B F 21 住	須恵器(大甕)	本部 奈良末~平安初
2	N-2	〃	B D 62 住	〃(坏)	口縁部 平安(9C後半)
3	N-3	〃	C B 03 住	〃(〃)	やや軟質口縁部 平安(10C初)
4	N-4	〃	D A 62 住	土師器(甕)	口縁部 古墳時代(5C?)
5	N-5	〃	J J 24 住	〃(〃)	体部 〃(7C?)
6	N-6	〃	B F 21 住	〃(〃)	〃 奈良末~平安初
7	N-7	〃	B D 62 住	〃(〃)	〃 平安(9C後半)
8	N-8	〃	C I 53 住	〃(〃)	〃(〃)
9	H-2	和賀郡江釣子村場岡崎	D J 50 住	須恵器(甕)	体部 奈良末~平安初
10	H-3	〃	〃	土師器(坏)	体部内黒 〃
11	H-4	〃	近世墳墓	陶器(皿)	口縁 江戸~明治
12	K-1	紫波郡紫波町栗田I	D C 03 N	須恵器(坏)	底部(回転へら切) 平安初?
13	K-2	〃 栗田III	C H 18 一括	縄文土器(深鉢)	体部 早期末
14	S-1	和賀郡江釣子村下谷地B		赤焼土器?(坏)	口縁部 平安後期?
15	S-2	〃		須恵器(〃)	底~体部 ?
16	K-1	西磐井郡平泉町毛越A	F b 27. III L.	赤焼土器(?) (?)	体部 平安末期?
17	O-1	盛岡市太田方八丁	C g 06 住	土師器(甕)	ロクロ不使用 平安初
18	O-2	〃	P d 15 住	〃(坏)	体部内黒 〃
19	O-3	〃	〃	赤焼土器?(〃)	口縁部 〃
20	O-4	〃	E b 03住 東カマド	須恵器(〃)	〃 〃
21	O-6	〃	L C - 33 - 2 住	〃(〃)	〃 〃
22	O-7	〃	J j 12住カマド①	〃(〃)	体部 〃
23	O-8	〃	J j 12住旧カマド	土師器(?)	〃 〃
24	①	水沢市	見分森東森	粘土	平安初の窯跡
25	②	江刺市	瀬谷子土山西隣	〃(亜炭層上位)	〃 〃 〃
26	③	〃	〃	〃(〃)	〃 〃 〃
27	④	〃	〃	〃(亜炭層下位)	〃 〃 〃
28	⑤	〃	〃 土山地区	〃	〃 〃 〃
29	⑥	〃	瀬谷子	〃	〃 〃 〃
30	⑦	〃	〃	〃	〃 〃 〃
31	⑧	北上市	飯豊森付近	〃	成田窯跡と同一面
32	⑨	〃	藤沢 〃	〃	藤沢窯跡 平安初?
33	⑩	紫波町日詰	杉の上 〃	〃	平安の窯跡
34	⑪	和賀郡和賀町	岩崎新田	〃	相去窯跡と同一面
35	⑫	水沢市石田	E G 09 住	粘土塊	奈良末~平安初
36	⑬	〃	D F 59 住	〃	〃

図版および図版説明

——凡例——

- | | | |
|------------|-------------|-----------|
| Q : 石英 | P : 斜長石 | b : 黒雲母 |
| Ho : 角閃石 | Py : 輝石 | g : 火山ガラス |
| t : 鱗珪石 | G : 花崗岩 | Gp : 花崗斑岩 |
| C : チャート | H : ホルンフェルス | An : 安山岩 |
| B : 玄武岩 | S : 蛇紋岩 | T : 凝灰岩 |
| M : 苦鉄質火山岩 | | |

(Q; 石英, Pl; 斜長石, K-F; カル長石, Bj; 黒雲母, Ho; 角閃石, Py; 輝石)

No.	遺跡名	時代	遺構名	種別	肉眼的特徴	鉱物組成						備考		
						Q	Pl	K-F	Bi	Ho	Py			
N 1	江釣子村 猫谷地	奈良 平安	BF 21 住居跡	須恵器 大環 (体部)	(色) 褐色 (組織) 砂質シルト岩状 (鉱物) 石英、長石 > 有色鉱物	+++	++				+	Chert W Granitic Rocks	古生層 + 花崗岩 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 1
					(岩片) レンガ色・白色									
					(色) 暗灰色 (組織) シルト岩状緻密 (鉱物) 細粒の無色鉱物が みられる。	+++	++				+			
N 2	江釣子村 猫谷地	平安 (9世紀後半)	BD 62 住居跡	須恵器 環 (口縁)	(色) 淡灰色 (組織) シルト岩状緻密 (鉱物) 細粒の無色鉱物が みられる。	+++	++					Chert Quartzite V Granite	古生層 + 花崗岩 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 2
					(岩片) 白色									
					(色) 淡灰色 (組織) シルト岩状緻密 (鉱物) 無色鉱物 < 有色鉱物 有色鉱物は柱状白形結晶	+++	+	+			+			
N 3	江釣子村 猫谷地	平安 (10世紀初)	CB 03 住居跡	須恵器 環 (口縁)	(色) 淡灰色 (組織) シルト岩状緻密 (鉱物) 無色鉱物 < 有色鉱物 有色鉱物は柱状白形結晶	+++	+	+			+	Chert Quartzite V mafic Volcanic rocks ?	古生層 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 3
					(岩片) 白色									
					(色) レンガ色 (組織) 粗粒砂質シルト岩状 (鉱物) 石英・柱状有色鉱物 がめだつ。	+++	+			+	+			
N 4	江釣子村 猫谷地	古墳 (5世紀)	DA 62 住居跡	土師器 環 (口縁)	(色) 淡灰色 (組織) 粗粒砂質シルト岩状 (鉱物) 石英・柱状有色鉱物 がめだつ。	+++	+			+	+	Chert Quartzite W Hornfels Granite mafic Volcanic rocks	古生層 + 花崗岩 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 4
					(岩片) 白色・灰色、黒色									
					(色) 淡褐色 (組織) 砂質シルト岩状 (鉱物) 石英および細粒の長石 類、有色鉱物は少量。	+++	++	+			+			
N 5	江釣子村 猫谷地	古墳 (7世紀?)	JJ 24 住居跡	土師器 環 (体部)	(色) レンガ色、黒褐色 白色、黒色が岩片多い	+++	++	+			+	Ande sit Bosalt V Chert Hornfels V Tuff V Porphyrit	安山岩および 玄武岩 + 古生層 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 5
					(色) レンガ色 (組織) 砂質シルト岩状 (鉱物) 石英および細粒の長石 類、有色鉱物は少量。	+++	++	+			+			
					(色) レンガ色 (組織) 砂質シルト岩状 (鉱物) 石英・長石類 > 有色鉱物	+++	++	+	+	+				
N 6	江釣子村 猫谷地	奈良末 平安初	BF 21 住居跡	土師器 環 (体部)	(色) 褐色 (組織) 砂質シルト岩状 (鉱物) 石英・長石類 > 有色鉱物	+++	++	+	+	+		Chert Hornfels V Granite Granophyre Quarz porphyr Dolerite	古生層 + 花崗岩 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 6
					(岩片) 白色、レンガ色 の4mmの礫を含む。									
					(色) 褐色 (組織) 砂質シルト岩状 (鉱物) 石英・斜長石 > 有色鉱物。	+++	++	+			+			
N 7	江釣子村 猫谷地	平安 (9世紀後半)	BD 62 住居跡	土師器 環 (体部)	(色) 褐色 (組織) 砂質シルト岩状 (鉱物) 石英・斜長石 > 有色鉱物。	+++	++	+			+	Chert Quarzporphyrn Andesite (hornite) Dolerite Serpentin (?)	古生層 + 安山岩 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 7
					(岩片) 白色、灰色、レンガ色、黒色									
					(色) 褐色 (組織) 砂質シルト岩状 (鉱物) 石英が多く、長石類は細 粒、有色鉱物はめだたない。	+++	++	+			+			
N 8	江釣子村 猫谷地	平安 (9世紀後半)	CI 53 住居跡	土師器 環 (体部)	(色) 赤灰色 (組織) シルト岩状(セラサイト種) (鉱物) 石英と有色鉱物がめだつ。鉱物 の再結晶の可能性ある。	+++	++					Ande site Porphyrite Chert W Quorzporphyr	古生層 + 安山岩、ひん岩 石英斑岩 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 8
					(岩片) 白色、褐色、レンガ色									
					(色) 赤灰色 (組織) シルト岩状(セラサイト種) (鉱物) 石英と有色鉱物がめだつ。鉱物 の再結晶の可能性ある。	+++	++							
H 2	江釣子村 鳩岡崎	奈良末 平安初	DJ 50 住居跡	須恵器 環 (体部)	(色) 淡褐色(内部黒ぬり) (組織) シルト岩状 (鉱物) 石英と細粒の有色鉱物 が認められる。	+++	++	+	+	+		Chert Qnavtzite	火山ガラス (凝灰岩) + 古生層	Plate 9
					(岩片) 白色、黒色 岩片は多くない。									
					(色) 淡褐色(内部黒ぬり) (組織) シルト岩状 (鉱物) 石英と細粒の有色鉱物 が認められる。	+++	++	+	+	+				
H 3	江釣子村 鳩岡崎	奈良末 平安初	DJ 50 住居跡	土師器 環 (内黒)	(色) 淡褐色(内部黒ぬり) (組織) シルト岩状 (鉱物) 石英と細粒の有色鉱物 が認められる。	+++	++	+	+	+		Ande site Chert Granophyre	花崗岩 + 古生層 + 安山岩 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 10
					(岩片) 白色									
					(色) 淡褐色(内部黒ぬり) (組織) シルト岩状 (鉱物) 石英と細粒の有色鉱物 が認められる。	+++	++	+	+	+				

No	遺跡名	時代	遺構名	種別	肉眼的特徴	鉱物							組成		備考
						Q	Pl	K-F	Bi	Ho	Py	岩	片	成源	
H 4	江釣子村 鳩岡崎	江戸 明治	近世 墳墓	陶器 皿 (口縁)	(色) 濃褐色(うわ蓋使用)	+++	+					Chert Granite Granophyre	古生層 + 花崗岩 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 11	
					(組織) 砂質シルト岩状 (鉱物) 不明	Q : 溶融形を示し、再結晶化が認められる。 Pl : 晶化が認められる。 その他：火山ガラス、鉄鉱									
					(岩片) 白色・黒色 (色) 灰色	+++	+			++					
K 1	紫波町 栗田 I	平安 初?	DC 03 N	須恵器 環 (底部 回転 へ切)	(組織) シルト岩状 (鉱物) 石英と有色鉱物が認められる。	+++	+				++	Andesite Glassy Andesite Chert Tuff	古生層 + 安山岩 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 12	
					(岩片) 白色・レンガ色 (色) 茶色・内部は黒茶 (組織) 砂質シルト岩状 (鉱物) 石英長石が多く、有色鉱物も認められる。	Q : 石英からトリデマイトに再結晶しているものが認められる。 Py : 斜方輝石、多色性が弱い その他：火山ガラス (一部に再結晶が認められる。)									
					(岩片) 白色 > レンガ色 (色) 茶色・内部は黒茶 (組織) 砂質シルト岩状 (鉱物) 石英長石が多く、有色鉱物も認められる。	Q : 花崗岩起源 その他：火山ガラス、鉄鉱									
K 2	紫波町 栗田 III	縄文 早期末	CH 18 一括	縄文 深鉢	(岩片) 白色 > レンガ色 (色) 淡褐色 (組織) シルト岩状 (鉱物) 石英とわずかな有色鉱物が認められる。	+++	++				+	Granite Hornfels Serpentin (?)	花崗岩 + 古生層 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 13	
					(岩片) 白色 > レンガ色 (色) 淡褐色 (組織) シルト岩状 (鉱物) 石英とわずかな有色鉱物が認められる。	Q : 花崗岩起源 その他：火山ガラス、鉄鉱									
					(岩片) 白色 > レンガ色 (色) 淡褐色 (組織) シルト岩状 (鉱物) 石英とわずかな有色鉱物が認められる。	Q : 花崗岩起源 その他：火山ガラス、鉄鉱									
S 1	江釣子村 下谷地B	平安 後期		赤土器 環 (口縁)	(岩片) 白色・灰色 岩片微少量 (色) 淡褐色 (組織) シルト岩状 (鉱物) 石英とわずかな有色鉱物が認められる。	+++	++				+	Chert Granit Quartzite Propylit (or porphyrite)	古生層 + 花崗岩 + プロピライト (又はひん岩) + 火山ガラス(凝灰岩)	Plate 14	
					(岩片) 白色・灰色 岩片微少量 (色) 淡褐色 (組織) シルト岩状 (鉱物) 石英とわずかな有色鉱物が認められる。	Py : 斜方輝石 その他：火山ガラス、鉄鉱 緑レン石。									
					(岩片) 白色・灰色 岩片微少量 (色) 淡褐色 (組織) シルト岩状 (鉱物) 石英とわずかな有色鉱物が認められる。	Py : 斜方輝石 その他：火山ガラス、鉄鉱 緑レン石。									
S 2	江釣子村 下谷地B	平安 後期		須恵器 環 (底面)	(色) 灰色 (組織) シルト岩状 緻密 (鉱物) 石英の他は認められない。 (岩片) 白色	+++	+	+				Chert Tuff (?)	古生層 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 15	
					(色) 灰色 (組織) シルト岩状 緻密 (鉱物) 石英の他は認められない。 (岩片) 白色	その他：火山ガラス(微量— 脱ガラス化)、鉄鉱									
					(色) 灰色 (組織) シルト岩状 緻密 (鉱物) 石英の他は認められない。 (岩片) 白色	その他：火山ガラス(微量— 脱ガラス化)、鉄鉱									
K 1	平泉町 毛越 A	平安 末期	F b 27 III L	赤土器 器 (体部)	(色) 淡褐色 (組織) シルト岩状 軟い (鉱物) 石英・黒雲母の他に柱状の有色鉱物が認められる。 (岩片) 白色(微量)	+++	+	+	++		+	Granite	花崗岩 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 16	
					(色) 淡褐色 (組織) シルト岩状 軟い (鉱物) 石英・黒雲母の他に柱状の有色鉱物が認められる。 (岩片) 白色(微量)	その他：火山ガラス、軽石 珪藻									
					(色) 淡褐色 (組織) シルト岩状 軟い (鉱物) 石英・黒雲母の他に柱状の有色鉱物が認められる。 (岩片) 白色(微量)	その他：火山ガラス、軽石 珪藻									
01	盛岡市 太田方八丁	平安 初期	C g 06	土師器 環 (口縁)	(色) 朱褐色 (組織) 砂質シルト岩状 (鉱物) 石英・長石 > 有色鉱物 (岩片) 灰色、黒色、白色 岩片をかなり多く含む。	+++	++				+	Augite Andesite Glassy Andesite Basalt Propylit Chert (or Tuff ?)	安山岩 玄武岩 + 古生層 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 17	
					(色) 朱褐色 (組織) 砂質シルト岩状 (鉱物) 石英・長石 > 有色鉱物 (岩片) 灰色、黒色、白色 岩片をかなり多く含む。	Ho : 緑色角閃石、Z = 緑色 X = 淡緑色、小型の結晶が多い。 その他：火山ガラス少量 (無色 > 朱色)									
					(色) 朱褐色 (組織) 砂質シルト岩状 (鉱物) 石英・長石 > 有色鉱物 (岩片) 灰色、黒色、白色 岩片をかなり多く含む。	Ho : 緑色角閃石、Z = 緑色 X = 淡緑色、小型の結晶が多い。 その他：火山ガラス少量 (無色 > 朱色)									
02	盛岡市 太田方八丁	平安 初期	Pd 15	土師器 環 (体部 内黒)	(色) 朱褐色(内部黒成り) (組織) 砂質シルト岩状 (鉱物) 石英 > 斜長石 > 有色鉱物。 (岩片) 白色、黒色、灰色 レンガ色	+++	++		+		+	Basalt Propylit Granite Chert Quartzite	玄武岩 + 古生層 + 花崗岩 + 火山ガラス	Plate 18	
					(色) 朱褐色(内部黒成り) (組織) 砂質シルト岩状 (鉱物) 石英 > 斜長石 > 有色鉱物。 (岩片) 白色、黒色、灰色 レンガ色	Py : 斜方輝石 その他：火山ガラス									
					(色) 朱褐色(内部黒成り) (組織) 砂質シルト岩状 (鉱物) 石英 > 斜長石 > 有色鉱物。 (岩片) 白色、黒色、灰色 レンガ色	Py : 斜方輝石 その他：火山ガラス									
03	盛岡市 太田八丁	平安 初期	Pd 15	赤土器 環 (口縁)	(色) 朱褐色 (組織) シルト岩状 軟い (鉱物) 鉱物が認めない。 (岩片) まれに白色細粒 岩片がみられる。	++	+		+			Chert Siltstone	古生層	Plate 19	
					(色) 朱褐色 (組織) シルト岩状 軟い (鉱物) 鉱物が認めない。 (岩片) まれに白色細粒 岩片がみられる。	その他：火山ガラスや火山 岩の岩片を全く含まない。									
					(色) 朱褐色 (組織) シルト岩状 軟い (鉱物) 鉱物が認めない。 (岩片) まれに白色細粒 岩片がみられる。	その他：火山ガラスや火山 岩の岩片を全く含まない。									
04	盛岡市 太田方八丁	平安 初期	Eb 3	須恵器 環 (口縁)	(色) 灰色 (組織) 砂質シルト岩状 (鉱物) 石英 > 長石 有色鉱物は認められない。 (岩片) 白色 > レンガ色	+++	+					Chert Quartzite Quarzporphyr Andesite (斑晶少ないタイプ)	古生層 + (花崗岩類) + 安山岩 + 火山ガラス	Plate 20	
					(色) 灰色 (組織) 砂質シルト岩状 (鉱物) 石英 > 長石 有色鉱物は認められない。 (岩片) 白色 > レンガ色	Q : 波動消光を示すものと、そうでない両者がみられる。 Py : 花崗岩起源を含む その他：火山ガラス、鉄鉱 シリコン。									
					(色) 灰色 (組織) 砂質シルト岩状 (鉱物) 石英 > 長石 有色鉱物は認められない。 (岩片) 白色 > レンガ色	Q : 波動消光を示すものと、そうでない両者がみられる。 Py : 花崗岩起源を含む その他：火山ガラス、鉄鉱 シリコン。									

No.	遺跡名	時代	遺構名	種別	肉眼的特徴	鉍物						組成		備考
						Q	Pl	K-F	Bi	Ho	Py	岩片	源岩	
06	盛岡市 太田方八丁	平安初期	LC 33 —2 住居跡	須恵器 環 (口縁)	(色) 淡灰色 (組織) 砂質シルト岩状 (鉍物) 石英>柱状有色鉍物	+++	+	+			+++	Granite Quartzporphyr Chert Andesite ?	花崗岩 + 古生層 + 安山岩 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 21
					(岩片) 灰色・白色 (色) 灰色(うわ蓋使用) (組織) シルト岩状 緻密	+++	++	+						
					(鉍物) 細粒の石英が認められる。	Ho ; 緑色角閃石 その他; 火山ガラス・ジルコン・緑レン石・鉄鉍								
07	盛岡市 太田方八丁	平安初期	Jj 12 住居跡 カマド①	須恵器 環 (体部)	(岩片) 白色・黒色 (色) 朱褐色 (組織) 砂質シルト岩状	+++	++					Chert Quartzite ▽ mafic Volcanic rocks	古生層	Plate 22
					(鉍物) 石英が多く、長石は細粒、微量の有色鉍物がみられる。	Q ; 波動消光少ない その他; 火山ガラス								
					(岩片) 白色・黒色 (色) 朱褐色 (組織) 砂質シルト岩状	+++	++							
08	盛岡市 太田方八丁	平安初期	Jj 12 住居跡 旧カマド	土師器 ? (体部)	(岩片) 白色・灰色・黒色 (色) 朱褐色 (組織) 砂質シルト岩状	+++	++					Basalt Byroxen Andesite Quartzite Chert	古生層 + 安山岩 + 玄武岩 + 火山ガラス	Plate 23
					(鉍物) 石英が多く、長石は細粒、微量の有色鉍物がみられる。	Q ; 波動消光少ない その他; 火山ガラス								
					(岩片) 白色・灰色・黒色 (色) 朱褐色 (組織) 砂質シルト岩状	+++	++							

粘土資料

No.	採集地	地点	種別	鉍物						組成		備考	
				Q	Pl	K-F	Bi	Ho	Py	岩片	源岩		
24 ①	水沢市	兄分森東森	粘土	+++	++	+					Chert Quartzite ▽ Granite Porphyry	灰色凝灰質 シルト岩	Plate 24
				その他; 火山ガラス, 鉄鉍									
25 ②	江刺市	瀬谷子 土山西隣	粘土(亜炭層上位)	+++	++	+	+	+	+		Rhyolite ▽ Chert ▽ Granite	白色細粒 凝灰岩	Plate 25
				Ho ; 緑色角閃石 Py ; 紫蘇輝石, 多色性の弱い斜方輝石 その他; 火山ガラス, 磁鉄鉍 ジルコン, 緑レン石									
26 ③	江刺市	瀬谷子 土山西隣	粘土(亜炭層上位)	+++	+		+				Chert ▽ Quartzite ▽ Granite	灰色凝灰質 シルト岩	Plate 26 1-2
				その他; 火山ガラス, 緑レン石, 鉄鉍									
27 ④	江刺市	瀬谷子 土山西隣	粘土(亜炭層下位)	+++	++	+		+	+		Chert ▽ homfels ▽ Phylolite	白色軽石質 凝灰岩	Plate 26 3-4
				K-F ; 微斜長石 Py ; 斜方輝石 その他; 火山ガラス, 鉄鉍									
28 ⑤	江刺市	瀬谷子 土山地区	粘土	+++	++	+	+	+	+		Chert ▽ Quartzite Schalstein Tuffeous Rocks	灰色シルト岩	Plate 27
				K-F ; 微斜長石 Ho ; 緑色角閃石 Py ; 斜方輝石 Z = 緑褐色 X = 淡褐色 多色性の弱いタイプもみられる。 その他; 鉄鉍, ジルコン									
29 ⑥	江刺市	瀬谷子	粘土	+++	++	+	++	+	+		Chert ▽ Granite	灰色凝灰質 シルト岩	Plate 28
				その他; 火山ガラス, 緑レン石, 鉄鉍									

No.	採集地	地 点	種 別	鑑 物						組 片	成 源 岩	備 考	
				Q	Pl	K-F	Bi	Ho	Py				
30 ⑦	江 刺 市	瀬 谷 子	粘 土	+++	++	+	+	+			Chert Quartzite ∨ Hornfels ∨ Granitic Raks	灰 褐 色 シルト岩	Plate 29
Q; ほとんどが波動消光を示す。 多くは花崗岩の風化物か。 その他; 鉄鉱, 緑レン石, シルコン。													
31 ⑧	北 上 市	飯 豊 森 付 近	粘 土	+++	++			+	++		Chert ∨ Hornfels ∨ Tuffeous Rocks	灰 褐 色 シルト岩	Plate 30
Py; 斜方輝石 その他; 鉄鉱, 緑レン石 火山ガラスまれ。													
32 ⑨	北 上 市	藤 沢 付 近	粘 土	+++	++			+	+		Chert Hornfels Quartzite Granite Granite Pbrphyry Schalstein	褐 灰 色 シルト岩	Plate 31
Ho; Z=緑褐色, X=淡緑褐色 Py; 斜方輝石, 多色性が弱い その他; 鉄鉱, 緑レン石													
33 ⑩	紫 波 町 日 詰	杉の上付近	粘 土	++	+						Chert ∨ Siltstone ∨ Tuffeous Rocks	褐 灰 色 シルト岩	Plate 32
その他; 結晶破片少なく, 火山ガラスも認められない。													
34 ⑪	和 賀 郡 和 賀 町	岩 崎 新 田	粘 土	+++	+	+	+				Chert (or Tuff ?) Hornfels ∨ Propylit	灰 色 シルト岩	Plate 33
その他; 鉄鉱, 緑レン石													
35 ⑫	水 沢 市	石 田 E G 09 住 居 跡	粘 土	+++	++			+			Chert Quartzite Hornfels Tuffeous Rocks Schalstein illassy Andesite	灰 色 シルト岩	Plate 34
Ho; 緑色角閃石 その他; 火山ガラスまれ。													
36 ⑬	水 沢 市	石 田 D F 59 住 居 跡	粘 土	++	+			+			Siltstone Chert	灰色褐灰色 シルト岩	Plate 35
その他; 火山ガラス, 鉄鉱, 緑レン石。													

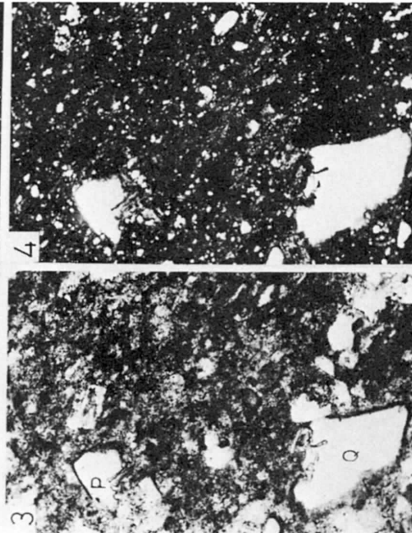
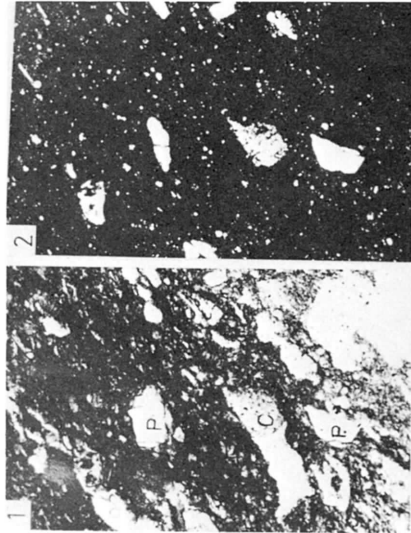


Plate 1

N-1.須恵器(大甕),

出土地:江釣子村猫谷地

- 1:石英,斜長石,火山ガラスおよびチャートがみられる。(平行ニコル)
- 2:同上。(直交ニコル)
- 3:溶解形を示す石英および斜長石。(平行ニコル)
- 4:同上。(直交ニコル)

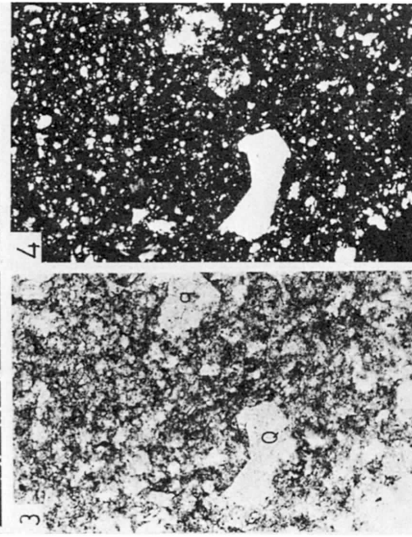
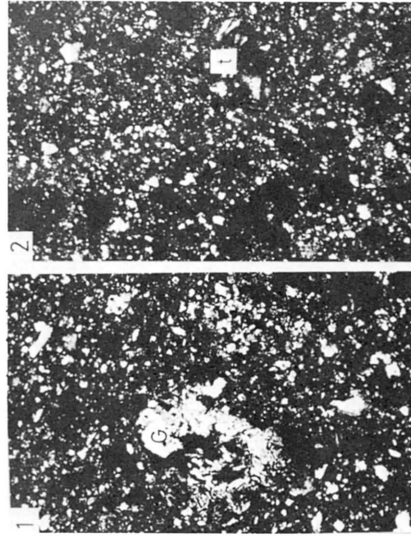


Plate 2

N-2.須恵器(坏),

出土地:江釣子村猫谷地

- 1:文象斑岩。(直交ニコル)
- 2:鱗珪石よりなる結晶片。(直交ニコル)
- 3:石英,斜長石,黒雲母,火山ガラスの他にチャートや珪石も構成されている。(平行ニコル)
- 4:同上。(直交ニコル)

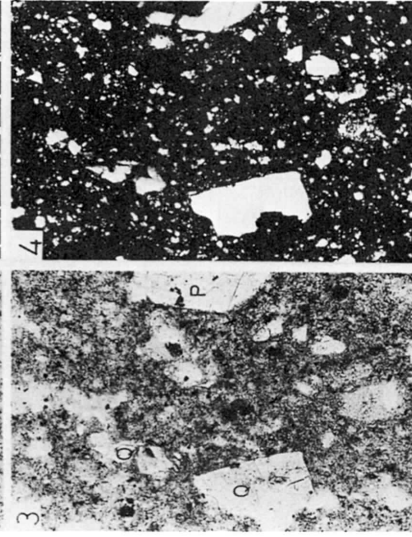
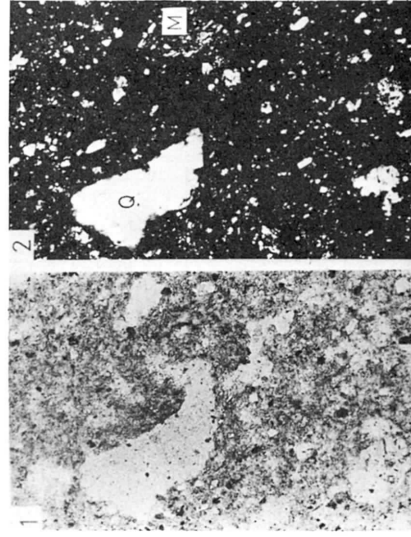


Plate 3

N-3.須恵器(坏),

出土地:江釣子村猫谷地

- 1,3:石英,長石,角閃石,輝石などの結晶片とチャート,苦鉄質火山岩などの岩片より構成される。(平行ニコル)
- 2,4:同上。(直交ニコル)

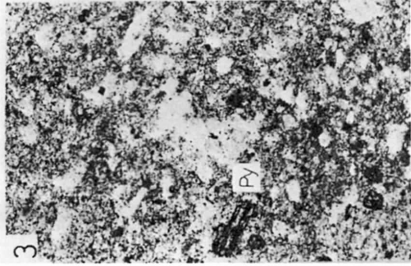
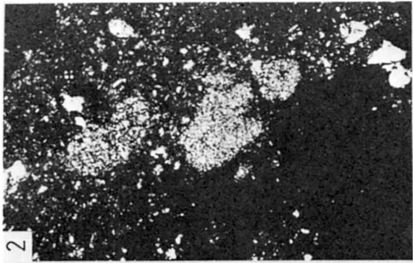
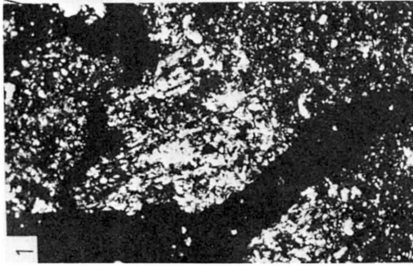


Plate 4

N-4.土師器(甕),

出土地:江釣子村猫谷地

- 1: 苦鉄質火山岩。(直交ニコル)
- 2: チャート。(直交ニコル)
- 3: 石英, 斜長石, 黒雲母, 斜方輝石の他にチャートや珪岩がみられる。(平行ニコル)
- 4: 同上。(直交ニコル)

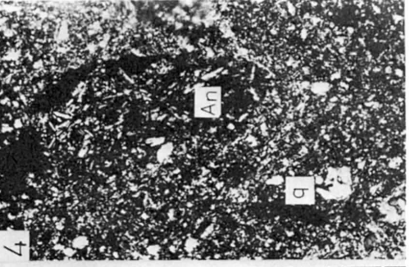
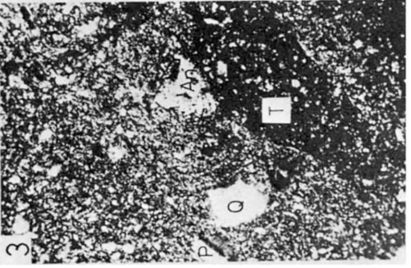
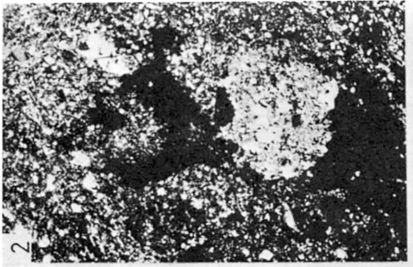
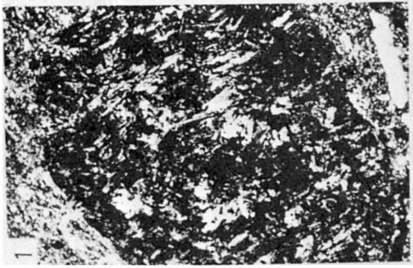


Plate 5

N-5.土師器(甕),

出土地:江釣子村猫谷地

- 1: 玄武岩。(直交ニコル)
- 2: ホルンフェルス。(直交ニコル)
- 3, 4: 石英, 斜長石, 角閃石などの結晶破片と安山岩, 珪岩などの岩片を含む。(直交ニコル)

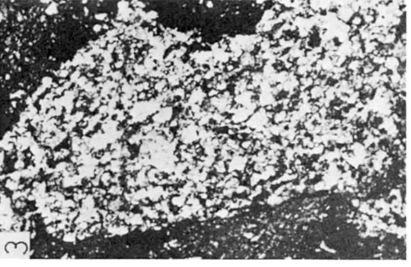


Plate 6

N-6.土師器(甕),

出土地:江釣子村猫谷地

- 1: 粗粒玄武岩。(直交ニコル)
- 2: 石英斑岩, ホルンフェルス化している。(直交ニコル)
- 3: ホルンフェルス。(直交ニコル)
- 4: 花崗斑岩。(直交ニコル)

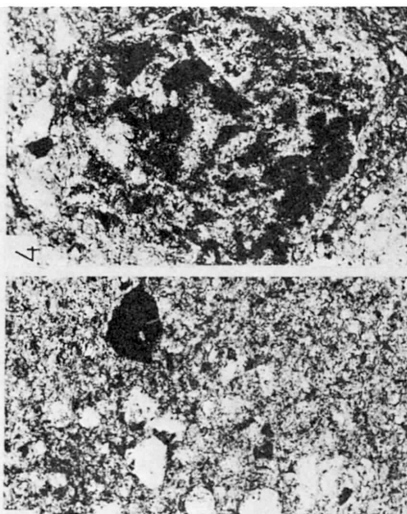
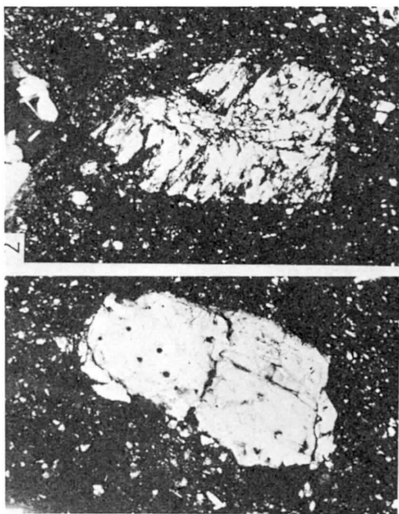


Plate 7

N-7.土師器(甕),

出土地: 江釣子村猫谷地

- 1: 石英。(直交ニコル)
- 2: 蛇紋岩(?).(直交ニコル)
- 3: 石英, 長石, 角閃石および少量の火山ガラスがみられる。(平行ニコル)
- 4: 変質安山岩。(平行ニコル)

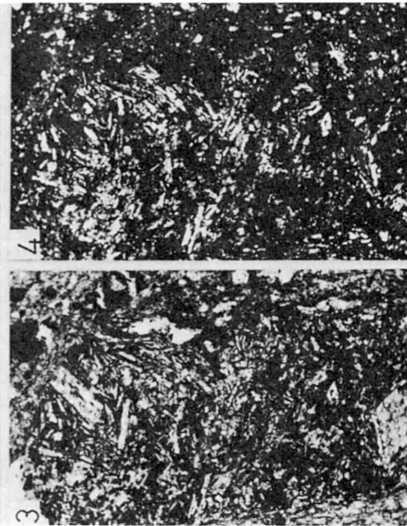
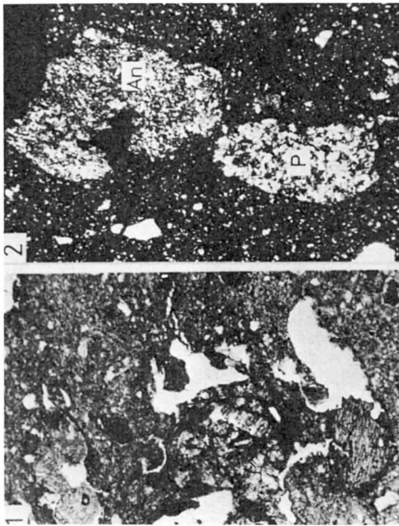


Plate 8

N-8.土師器(甕),

出土地: 江釣子村猫谷地

- 1: 石英, 長石, 角閃石, 輝石, 火山ガラスの破片結晶とチャート, 石英斑岩などの岩片を含む。(平行ニコル)
- 2: 安山岩およびひん岩。(直交ニコル)
- 3: 安山岩。(平行ニコル)
- 4: 同上。(直交ニコル)
- 4: 同上。(直交ニコル)

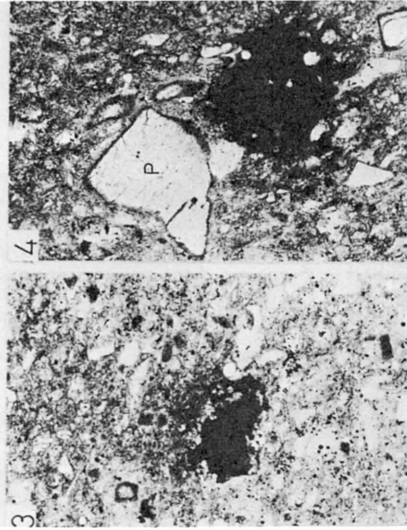
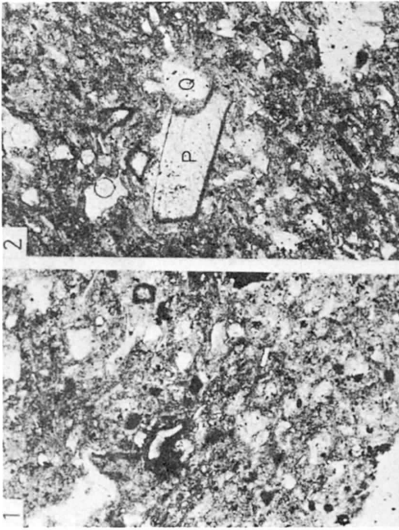


Plate 9

H-2.須恵器(甕),

出土地: 江釣子村鳩岡崎

- 2: 多量の火山ガラスと石英, 斜長石, 鉄鉱などから構成される。石英, 斜長石は周辺部が溶融形を示し, 再結晶の進んでいるものがある。岩片としては珪岩, チャートなどがみられる。(平行ニコル)
- 1, 3, 4: 岩片(黒色)の一部は溶融し, 斜長石(?)の再結晶の生じているものがある。(平行ニコル)

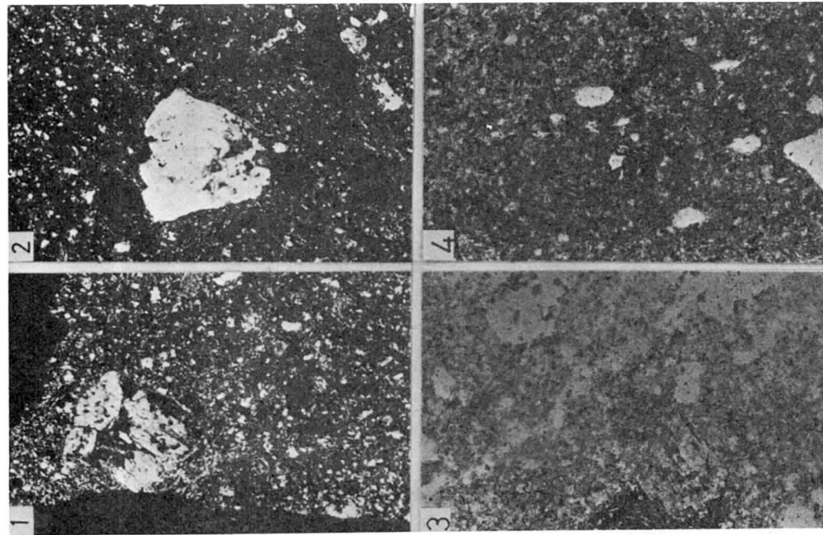


Plate 10

H-3.土師器 (坏)

出土地：江釣子村鳩岡崎

- 1：石英，長石，單雲母，角閃石，綠閃石，火山ガラスなどの結晶破片と花崗岩などの岩片より構成される。(直交ニコル)
- 2：花崗斑岩。(直交ニコル)
- 3：安山岩岩片。(平行ニコル)
- 4：緑閃石。(平行ニコル)

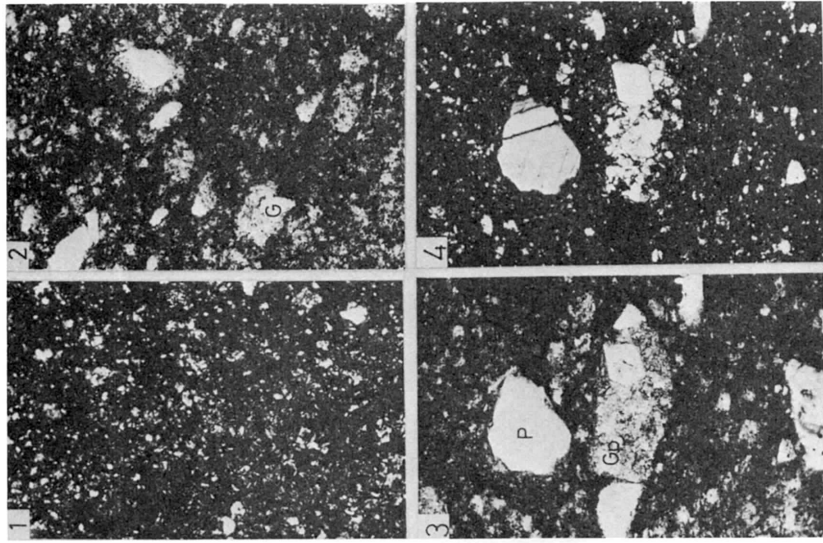


Plate 11

H-4.陶器 (皿)

出土地：江釣子村鳩岡崎

- 1：左上から下中央にかけて結晶化した，うわ葉がみられる。(直交ニコル)
- 2：石英，斜長石，火山ガラス，鉄鉱のほかに花崗岩，チャートなどから構成される。(平行ニコル)
- 3：花崗斑岩。(平行ニコル)
- 4：同上。(直交ニコル)

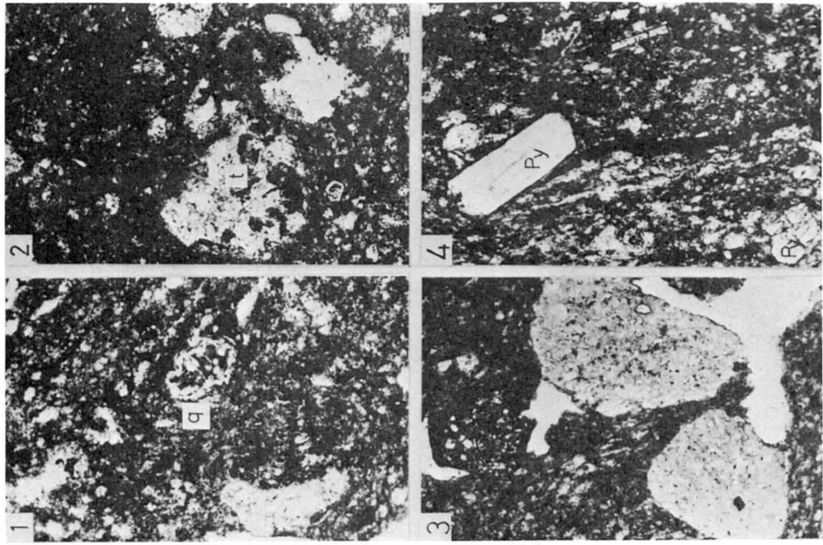


Plate 12

K-1.須恵器 (坏)

出土地：紫波町栗田

- 1：石英，斜長石，斜方輝石，火山ガラスなどの結晶破片のほか，安山岩，チャートなどの岩片を含む。(平行ニコル)
- 2：石英から鱗珪石への再結晶化がみられる。(平行ニコル)
- 3：凝灰岩岩片。(平行ニコル)
- 4：斜方輝石。(平行ニコル)

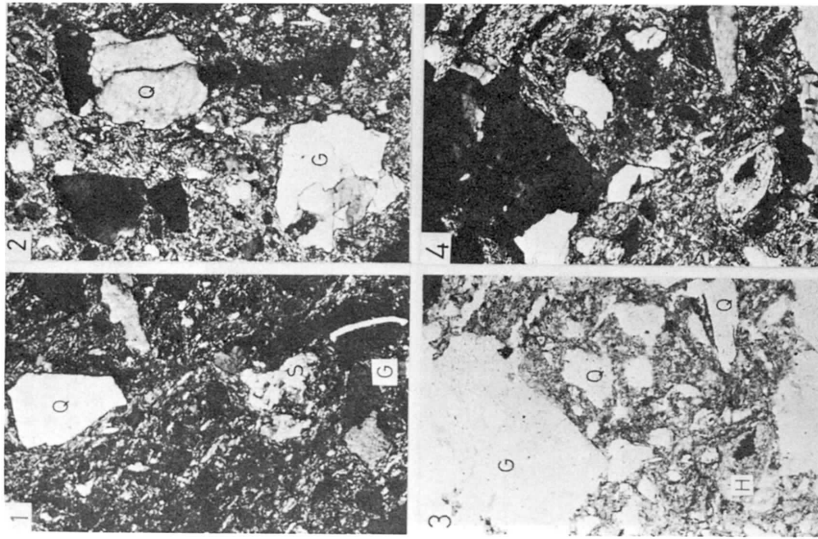


Plate 13

K-2. 縄文土器 (深鉢),

出土地: 紫波町栗田

1, 2: 花崗岩の風化した粘土から作製された土器で、石英、斜長石、黒雲母、角閃石、火山ガラスのほか、花崗岩、ホルンフェルスの岩片が多量に含まれる。(直交ニコル)

3: 同上。(平行ニコル)

4: 同上。(直交ニコル)

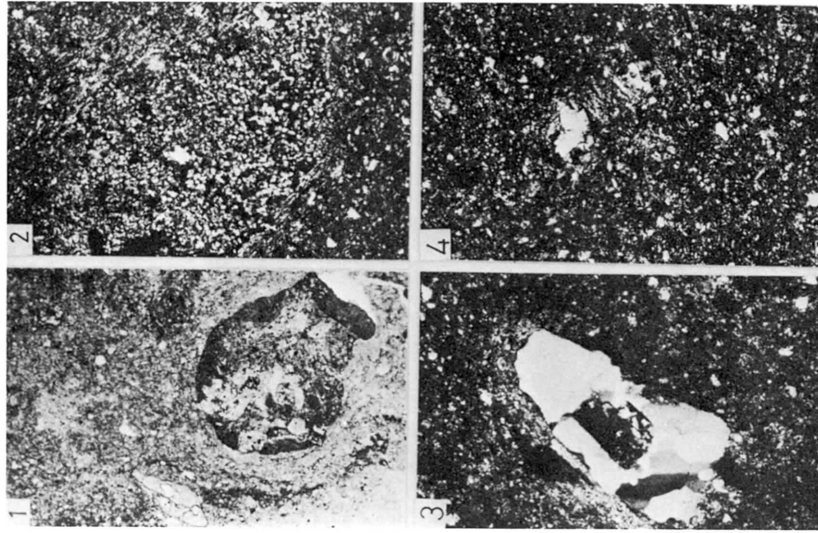


Plate 14

S-1. 赤焼土器? (坏),

出土地: 江釣子村下谷地

1: 石英、斜長石、輝石、火山ガラス、鉄鉱、緑レン石などの鉱物がみられる。岩片はプロピライト。(平行ニコル)

2: チャート。(直交ニコル)

3: 花崗岩。(直交ニコル)

4: 珪岩。(直交ニコル)

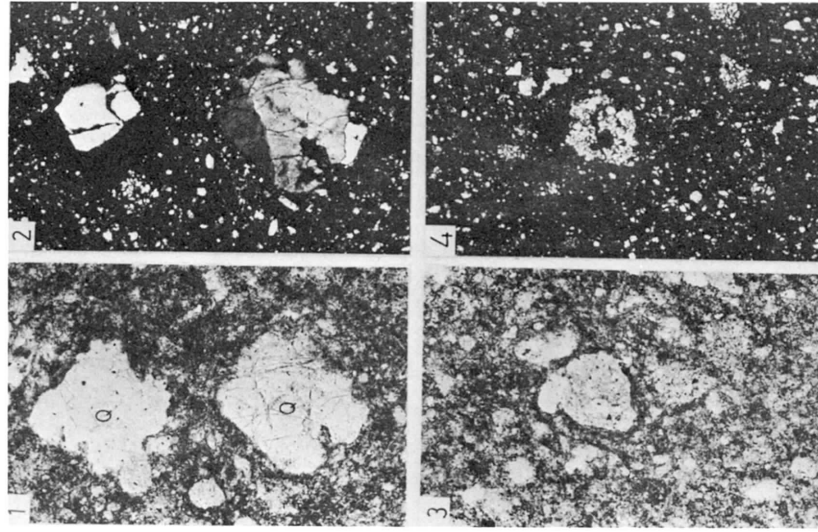


Plate 15

S-2. 須恵器 (坏),

出土地: 江釣子村下谷地

1: 石英、長石、鉄鉱および少量の火山ガラスを含む。(平行ニコル)

2: 同上。(直交ニコル)

3: チャートの岩片。(平行ニコル)

4: 同上。(直交ニコル)

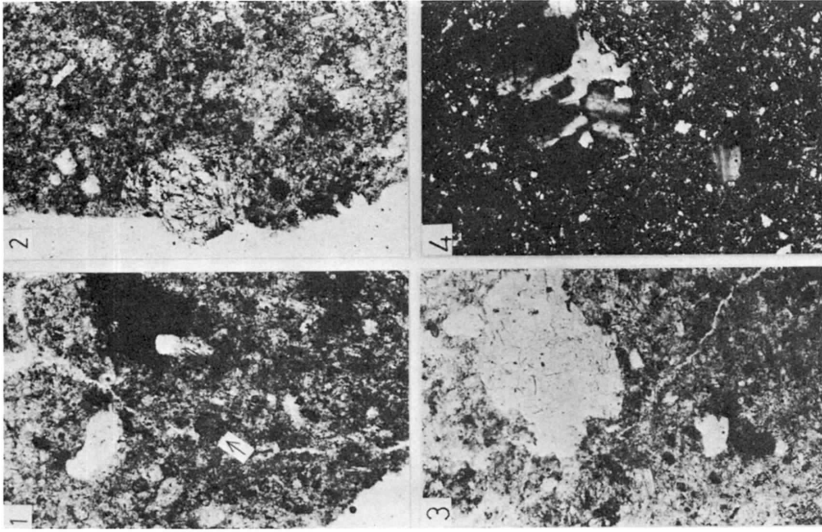


Plate 16

K-1. 赤焼土器?

出土地：平泉町毛越

- 1: 石英、長石、黒雲母のほか、まれに輝石が含まれる。軽石および火山ガラスを多量に含んでいる。しばしば珪藻が認められる(矢印)。(平行ニコル)
- 2: 火山ガラス。(平行ニコル)
- 3: 花崗岩。(平行ニコル)
- 4: 同上。(直交ニコル)

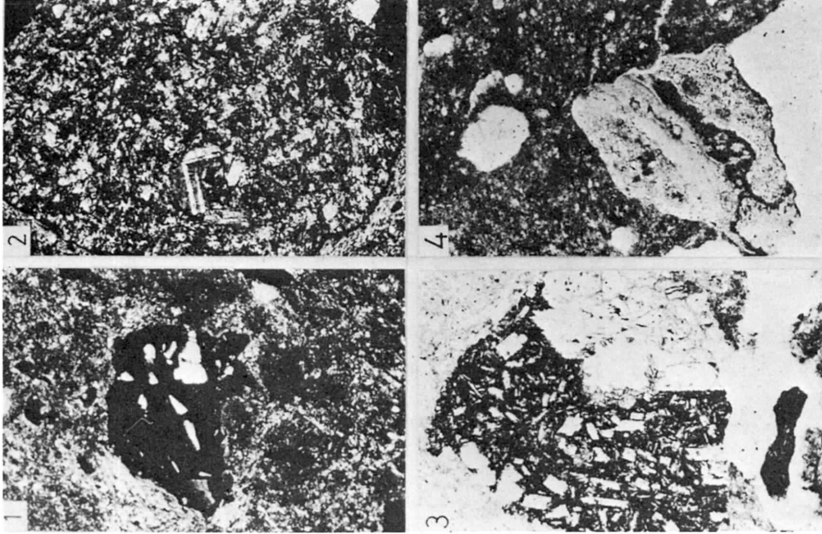


Plate 17

0-1. 土師器(甕)

出土地：盛岡市太田方八丁

- 1: 石英、斜長石、角閃石および少量の火山ガラスより構成され、火山岩やチャートの岩片が多い。中央の岩片はガラス質安山岩。(直交ニコル)
- 2: ひん岩。(直交ニコル)
- 3: 安山岩。(平行ニコル)
- 4: 珪質岩 (流紋岩質凝灰岩またはチャート)。(平行ニコル)

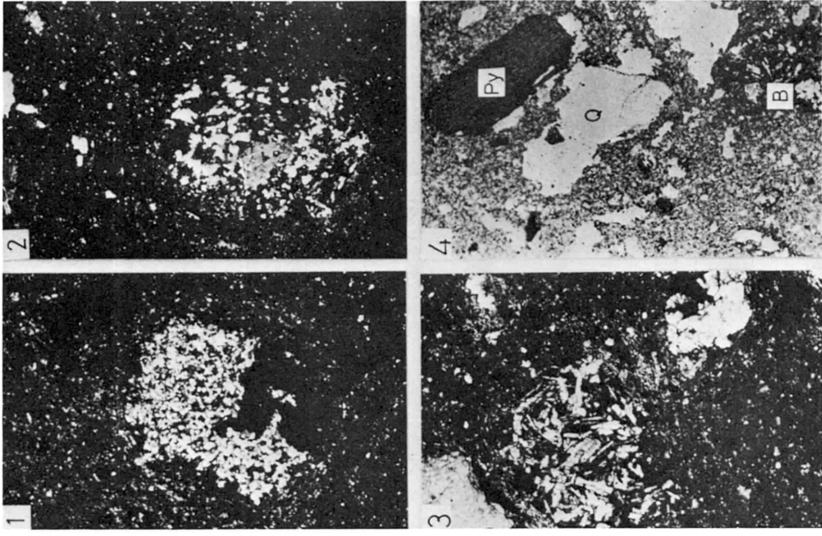


Plate 18

0-2. 土師器(坏)

出土地：盛岡市太田方八丁

- 1: 珪岩。(直交ニコル)
- 2: ひん岩。(直交ニコル)
- 3: 玄武岩および花崗岩。(直交ニコル)

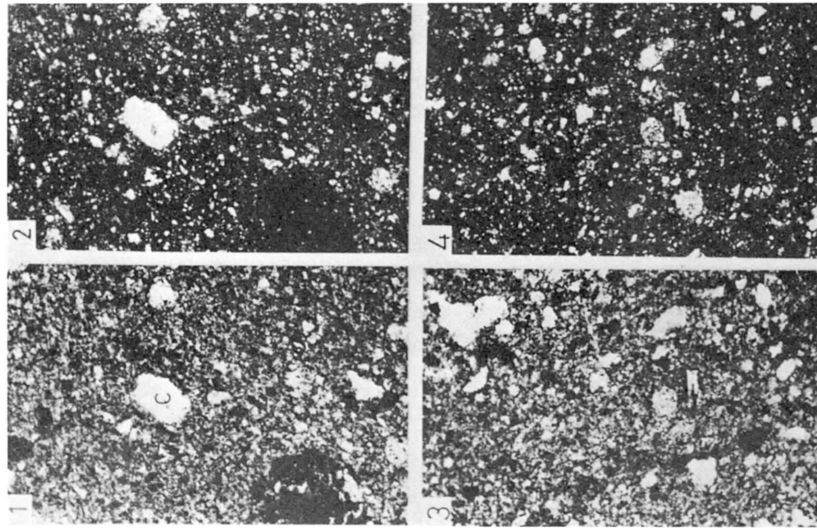


Plate 19

0-3. 赤統土器? (坏),

出土地: 盛岡市木田方八丁

- 1, 3: 石英, 斜長石, 黒雲母, 鉄鉱などの鉱物と, チャートや粘土塊を含む。火山ガラスや火山岩の岩片は全く認められない。(平行ニコル)
 2, 4: 同上。(直交ニコル)

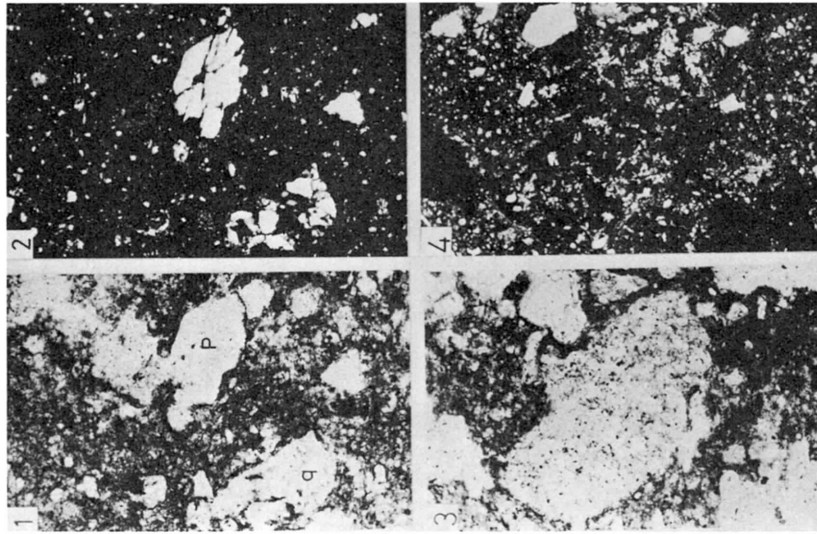


Plate 20

0-4. 須恵器 (坏),

出土地: 盛岡市木田方八丁

- 1: 石英, 斜長石, 火山ガラスなどの結晶破片とチャート, 珪岩などの岩片を含む。(平行ニコル)
 2: 同上。(直交ニコル)
 3: 安山岩。(平行ニコル)
 4: 同上。(直交ニコル)

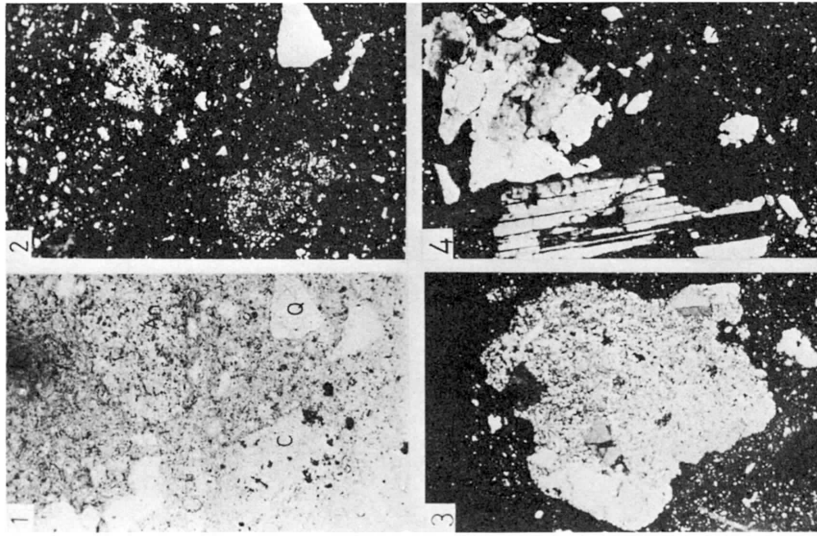


Plate 21

0-6. 須恵器 (坏),

出土地: 盛岡市木田方八丁

- 1: 石英, 長石, 角閃石, 火山ガラスおよび少量のジルコン, 緑閃石などの鉱物からなる。チャート, 安山岩の岩片がみられる。(平行ニコル)
 2: 同上。(直交ニコル)
 3: 石英斑岩。(直交ニコル)
 4: 花崗岩。(直交ニコル)

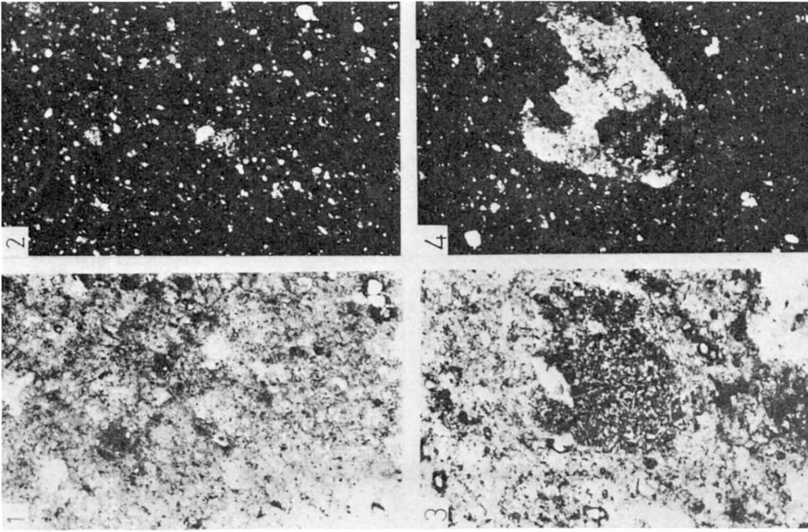


Plate 22

0-7. 須恵器 (坏),

出土地: 盛岡市太田方八丁

- 1: 石英, 長石などの鉱物とチャート, 斑岩などの岩片から構成される。(平行ニコル)
- 2: 同上。(直交ニコル)
- 3: 苦鉄質火山岩。(平行ニコル)
- 4: 同上。(直交ニコル)

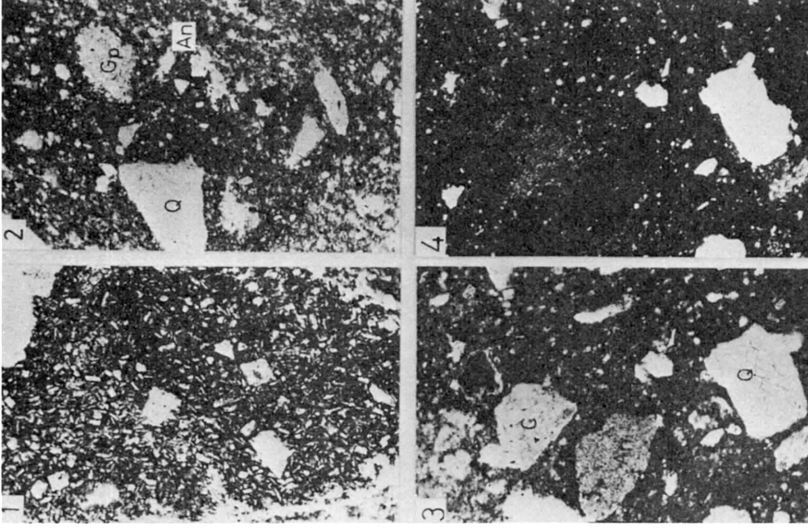


Plate 23

0-8. 土師器(?),

出土地: 盛岡市太田方八丁

- 1: 玄武岩。(平行ニコル)
- 2: 石英, 斜長石, 火山ガラスなどの鉱物破片と輝石安山岩, チャート, 花崗斑岩などの岩片を含む。(平行ニコル)
- 3: チャートおよび安山岩。(平行ニコル)
- 4: 同上。(直交ニコル)

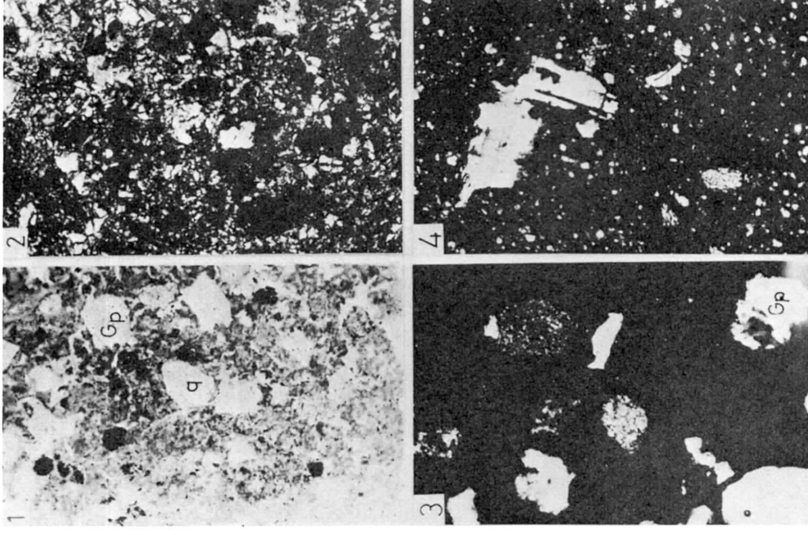


Plate 24

24-1. 窯跡の粘土,

採集地点: 水沢市見分森東森

- 1: 石英, 長石および火山ガラス, 鉄鉱などの鉱物破片よりなる凝灰質シルト岩。岩片としてチャート, 珪岩, 花崗斑岩などがみられる。(平行ニコル)
- 2: 同上。(直交ニコル)
- 3: 花崗斑岩。(直交ニコル)
- 4: 斜長石およびチャート。(直交チャート)

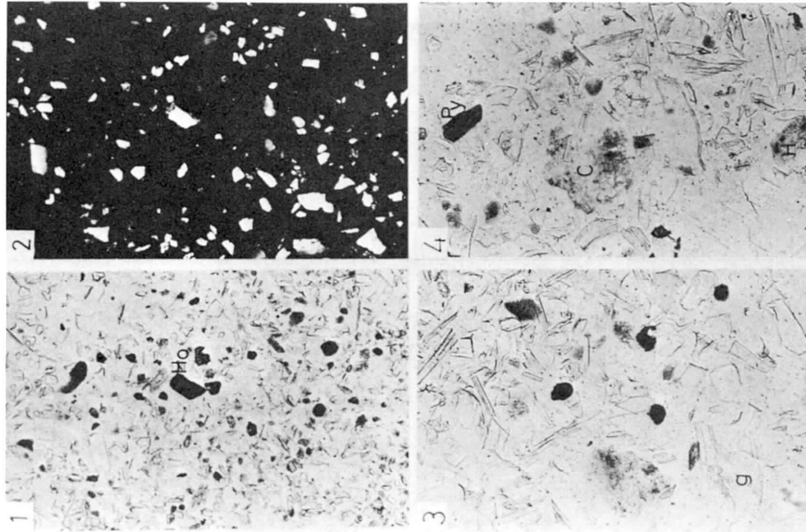


Plate 25

25-2. 窯跡の粘土,

採集地点：江刺市瀬谷子土山西隣

- 1：石英，長石，黒雲母，角閃石，輝石ほか少量のジルコン，緑閃石，鉄鉱を含む凝灰岩。火山ガラスや軽石が多量に含まれる。岩片としては花崗岩，チャート，流紋岩がみられる。(平行ニコル)

2：同上。(直交ニコル)

3, 4：同上。(平行ニコル)

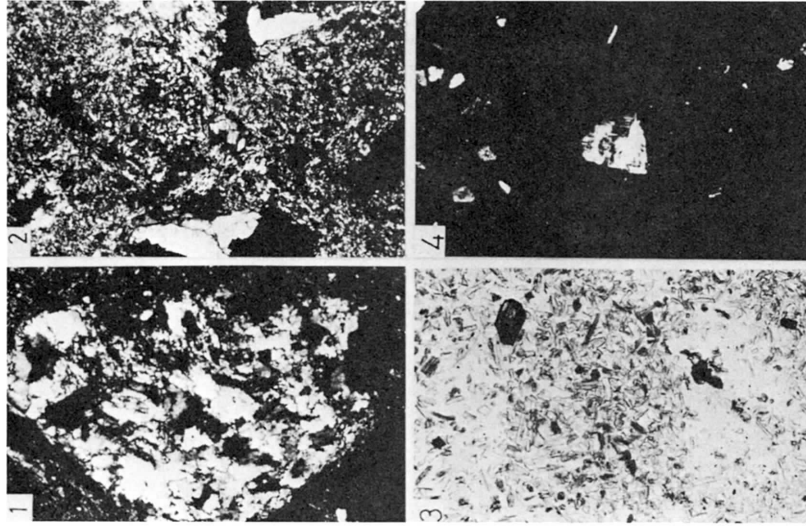


Plate 26

26-3. 窯跡の粘土,

採集地点：江刺市瀬谷子土山西隣

- 1：珪岩。(直交ニコル)
2：石英，斜長石，黒雲母および火山ガラスなどから構成される凝灰質シルト岩。岩片としては花崗岩，チャート，珪岩を含む。(直交ニコル)

27-4. 窯跡の粘土,

採集地点：江刺市瀬谷子土山西隣

- 3：石英，黒石，角閃石，輝石および火山ガラスなどから構成される凝灰岩。チャート，ホルンフェルス，流紋岩などの岩片を含む。(平行ニコル)

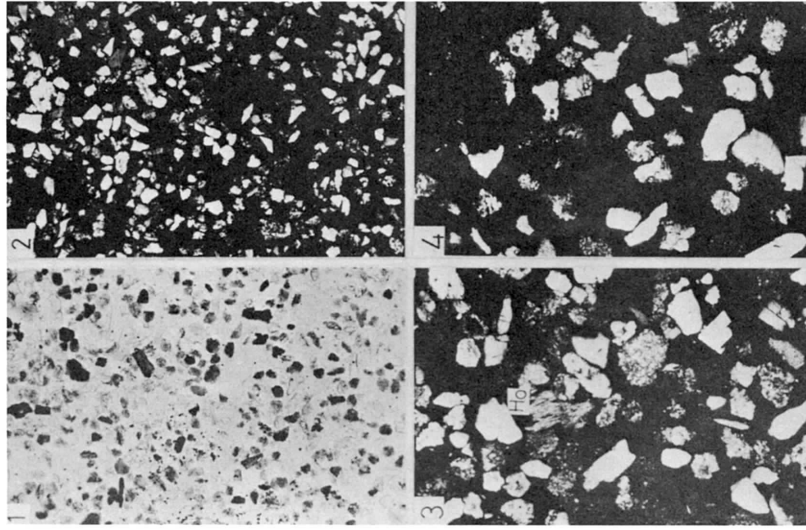


Plate 27

28-5. 窯跡の粘土,

採集地点：江刺市瀬谷子土山地区

- 1：石英，長石，黒雲母，角閃石，輝石，鉄鉱，ジルコンなどの鉱物片を含むシルト岩。岩片としてはチャート，珪岩，苦鉄質火山岩類，凝灰岩，花崗岩質がみられる。(平行ニコル)

2, 3, 4：同上。(直交ニコル)

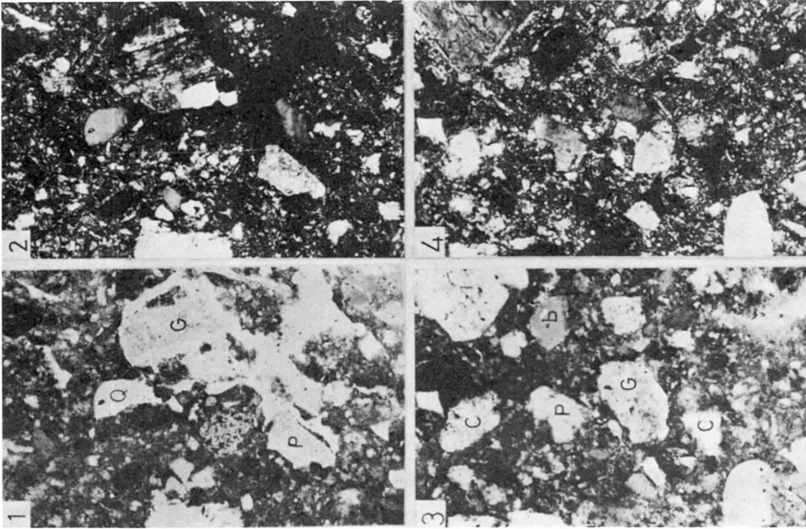


Plate 28

29-6. 窯跡の粘土,

採集地点：江刺市瀬谷子

1,3：石英, 長石, 黒雲母, 角閃石, 輝石などの結晶破片とチャート, 花崗岩などの岩片を含む。火山ガラスは少量含まれる凝灰質シルト岩である。(平行ニコル)

2,4：同上。(直交ニコル)

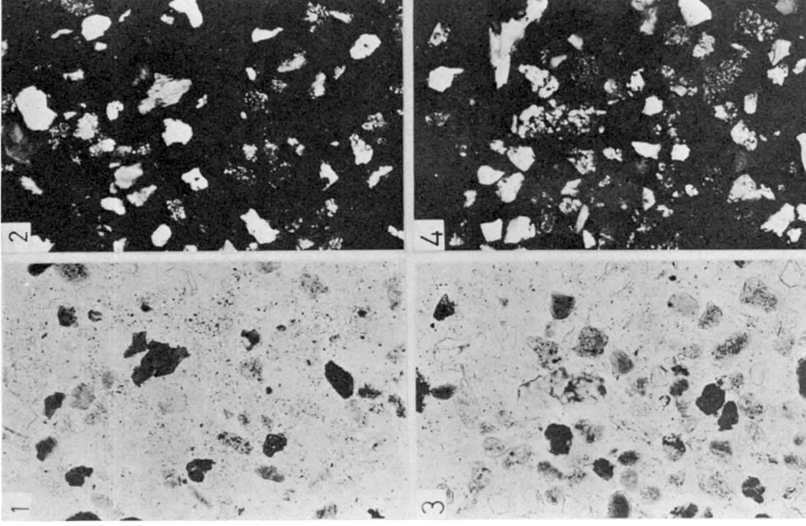


Plate 29

30-7. 窯跡の粘土,

採集地点：江刺市瀬谷子

1,3：石英, 長石, 黒雲母, 角閃石, 緑閃石, シルコリン, 鉄鉱などの鉱物から構成される。岩片は、チャート, 珩岩, ホルンフェルス, 花崗岩質岩などが認められる。火山ガラスは含まれない。(平行ニコル)

2,4：同上。(直交ニコル)

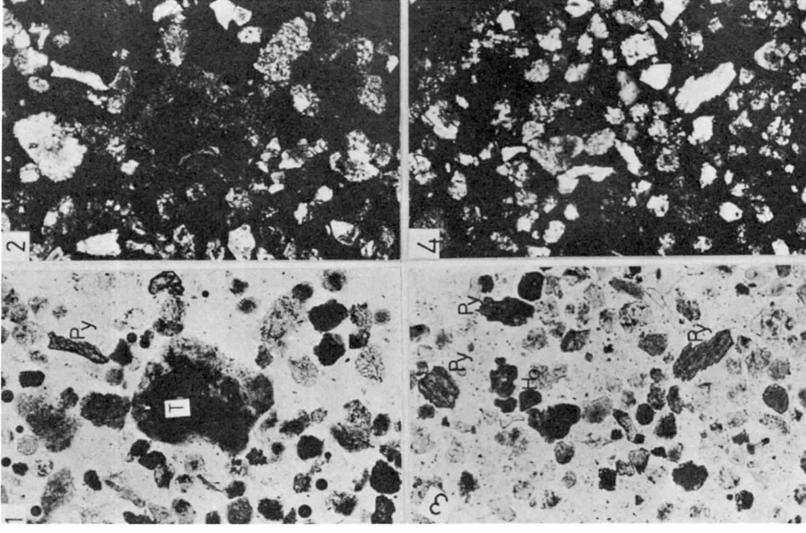


Plate 30

31-8. 粘土, 採集地点：飯豊森付近

1,3：石英, 斜長石, 角閃石, 輝石, 緑閃石, 鉄鉱などの鉱物片からなるシルト岩。岩片としてはチャート, ホルンフェルス, 凝灰質岩などがみられる。火山ガラスはまれにみられる。(平行ニコル)

2,4：同上。(直交ニコル)

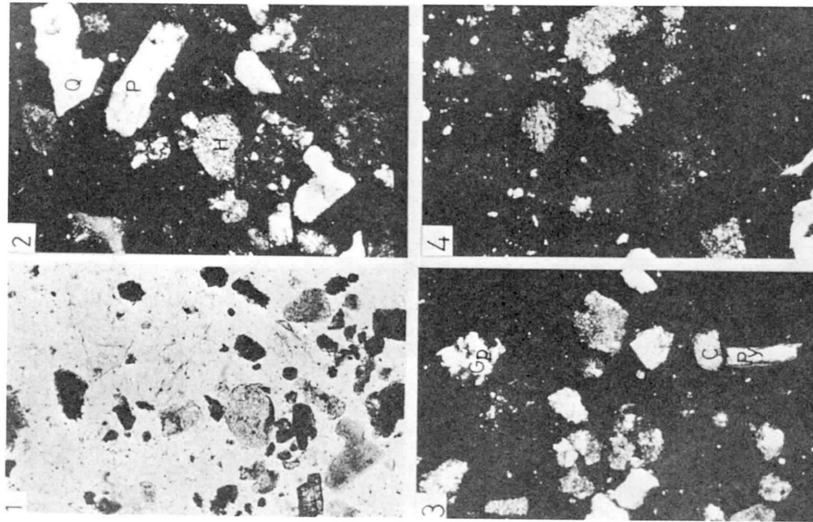


Plate 31

32-9. 藤沢窯跡の粘土,

採集地点：北上市藤沢

1：石英、斜長石、角閃石、輝石、緑閃石、鉄鉱などから構成されるシムルト岩で、火山ガラスは含まれない。チャート、ホルンフェルス、珪岩、花崗岩、花崗斑岩、苦鉄質火山岩などの岩片を含む。(平行ニコル)

2, 3, 4：同上。(直交ニコル)

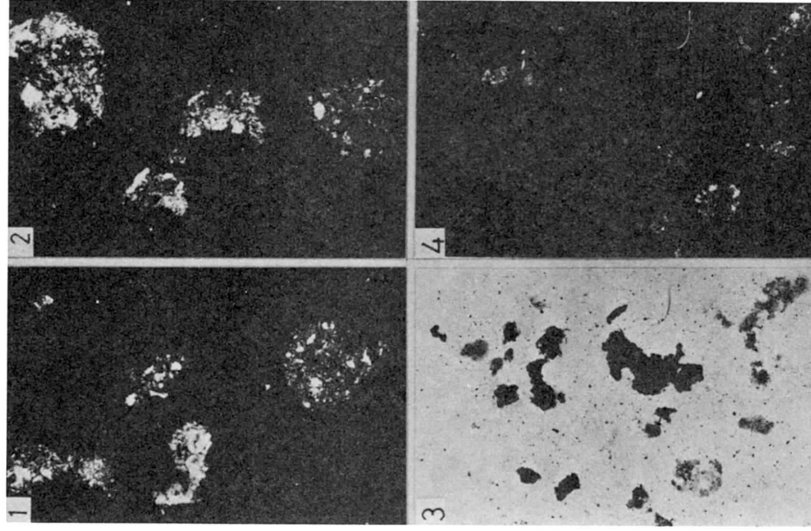


Plate 32

33-10. 窯跡の粘土,

採集地点：紫波町日詰杉の上

1, 2, 4：石英、斜長石を含むが結晶片は少なく、火山ガラスも認められない。岩片は主にシムルト岩質岩、凝灰質岩、チャートなどである。(直交ニコル)

3：同上。(平行ニコル)

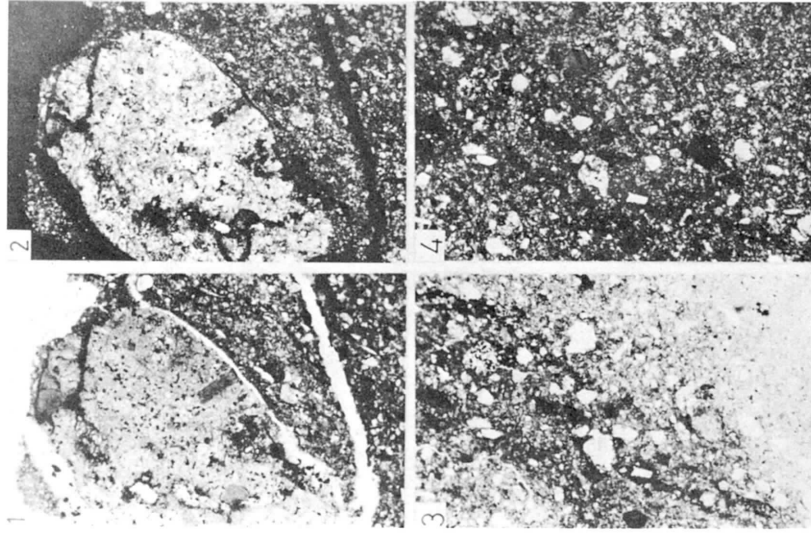


Plate 33

34-11. 粘土, 採集地点：和賀町岩崎新田

1：プロピライト。(平行ニコル)

2：同上。(直交ニコル)

3：石英、長石、黒雲母などの結晶片を主とし、少量の緑閃石を含む。火山ガラスは含まない。岩片としてはホルンフェルス、チャート、凝灰岩(?)などがみられる。(平行ニコル)

4：同上。(直交ニコル)

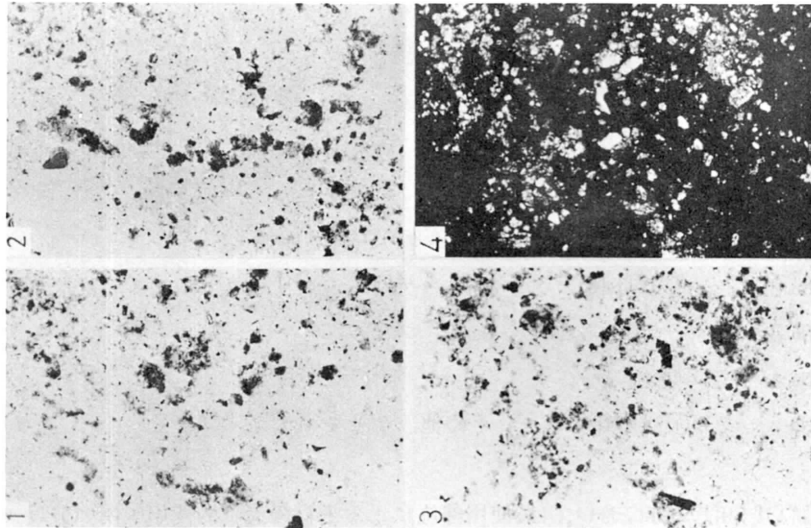


Plate 35

36-13. 粘土,

採集地点: 水沢市石田 D F 59住

1, 2, 3: 石英, 斜長石, 黒雲母のほか少量の火山ガラス, 鉄鉱, 緑レン石よりなるシルト岩。岩片は少ないが, シルト岩質岩, チャートなどがみられる。(平行ニコル)

4: 同上。(直交ニコル)

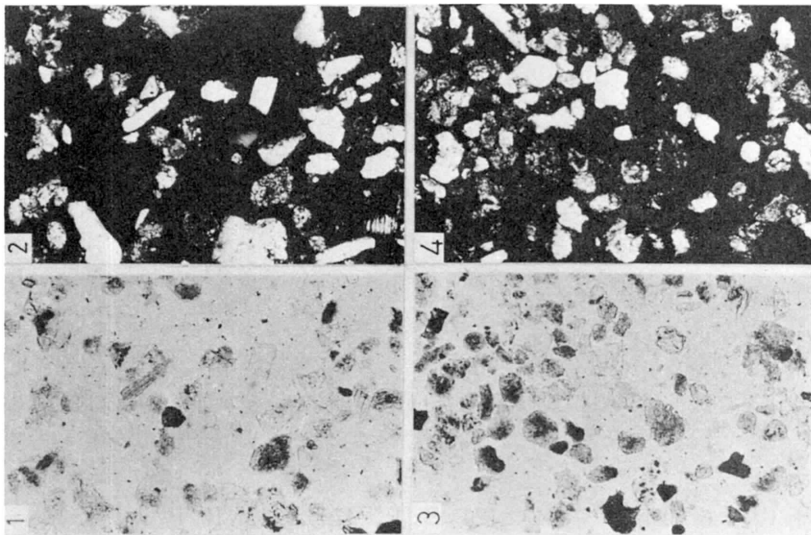


Plate 34

35-12. 粘土,

採集地点: 水沢市石田 E G 09住

1, 3: 石英, 斜長石, 角閃石などの結晶片よりなるシルト岩で火山ガラスはまれである。岩片としてチャート, 珪岩, 苦鉄質火山岩, ホルンフェルス, 凝灰岩を含む。さわめてまれにガラス質安山岩がみられる。(平行ニコル)

2, 4: 同上。(直交ニコル)

8. 炭化材の樹種同定

①EI 62住居跡	No. 1・No. 3	クリ		
②EA 12住居跡	No. 1	クリ	No. 6	クリ⊕針葉樹類
	No. 2	クリ⊕不明木	No. 7	ケヤキ・クリ・マツ・クス・雑木類
	No. 3	ク	No. 9	クリ
	No. 4	ク		
	No. 5	クリ⊕雑木類	その他	ケヤキ・ナラ・クリ

註 水沢市石田遺跡Df 59住居跡においては、使用部位による木材の選択的使用・使い分け—
具体的には、クリとケヤキ—とも見える事実も報告されている。本遺跡においても同様の検討
を加える必要がある。

岩手県文化財調査報告書第61集、東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書—Ⅶ—(石田遺跡)岩手県教育委
員会・日本道路公団(昭和56年)。

9. 炭化種実の種同定

No. 1	CG 56Ⅱ層出土	オニグルミ
No. 2	DH 18住居跡貼床Ⅲ pit 1	モモの仁
No. 3	DJ 21住居跡北カマド煙出し	同 上

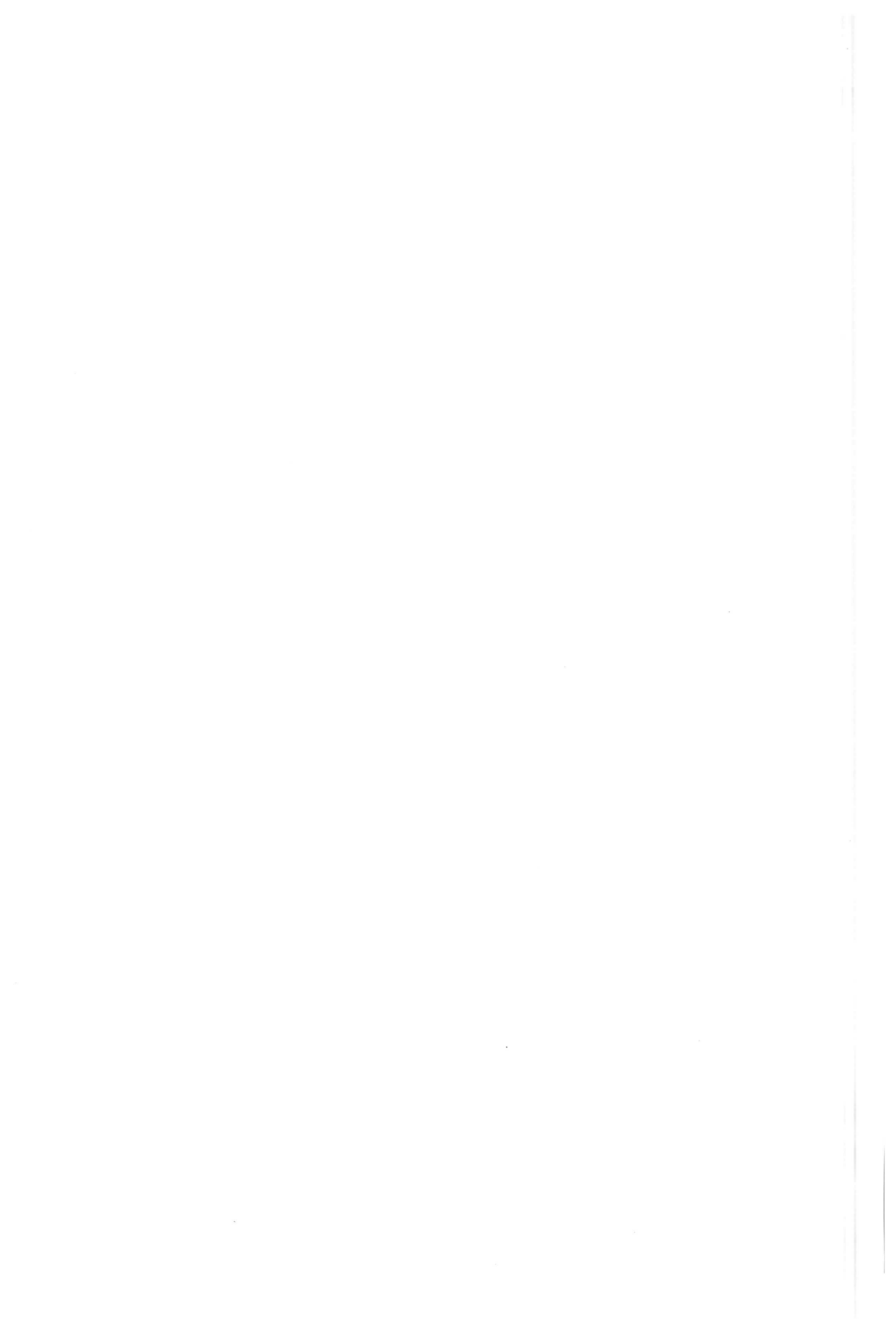
10. 年代測定結果 以下にC-14試料についての(社)日本アイソトープ協会からの測定結果
を示す。

No. 1	CJ 24住居跡 (大木 6 式期)	4840±120 y B. P. (4700±115 y B. P.)
No. 2	EA 12住居跡 (国分寺下層式期)	1330± 75 y B. P. (1290± 70 y B. P.)
No. 3	DJ 50住居跡 (ク)	1370± 80 y B. P. (1330± 80 y B. P.)
No. 4	EI 62住居跡 (ク)	1250± 60 y B. P. (1220± 55 y B. P.)
No. 5	DE 18住居跡 (大木 7a 式期)	4600±155 y B. P. (4460±150 y B. P.)

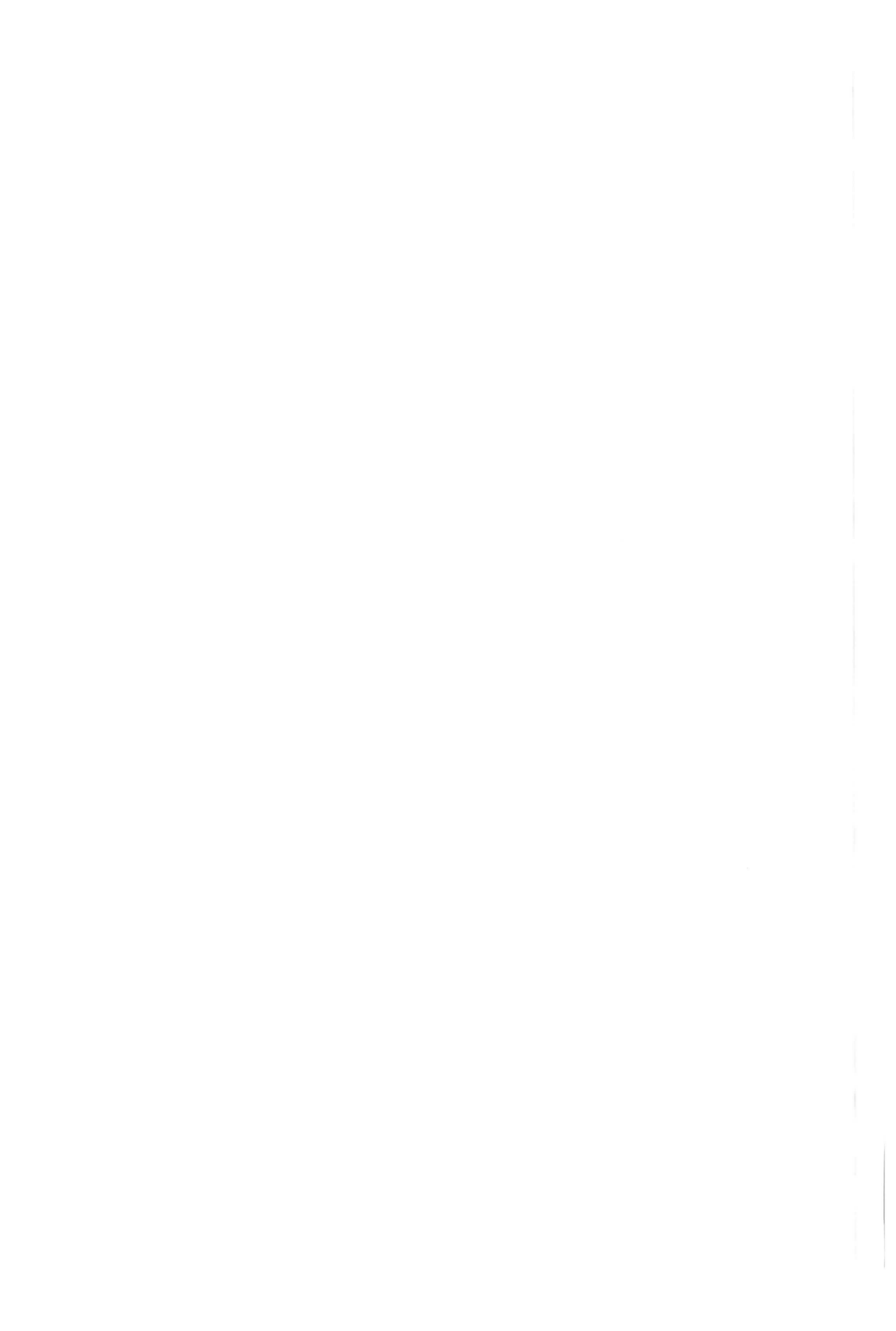
結 語

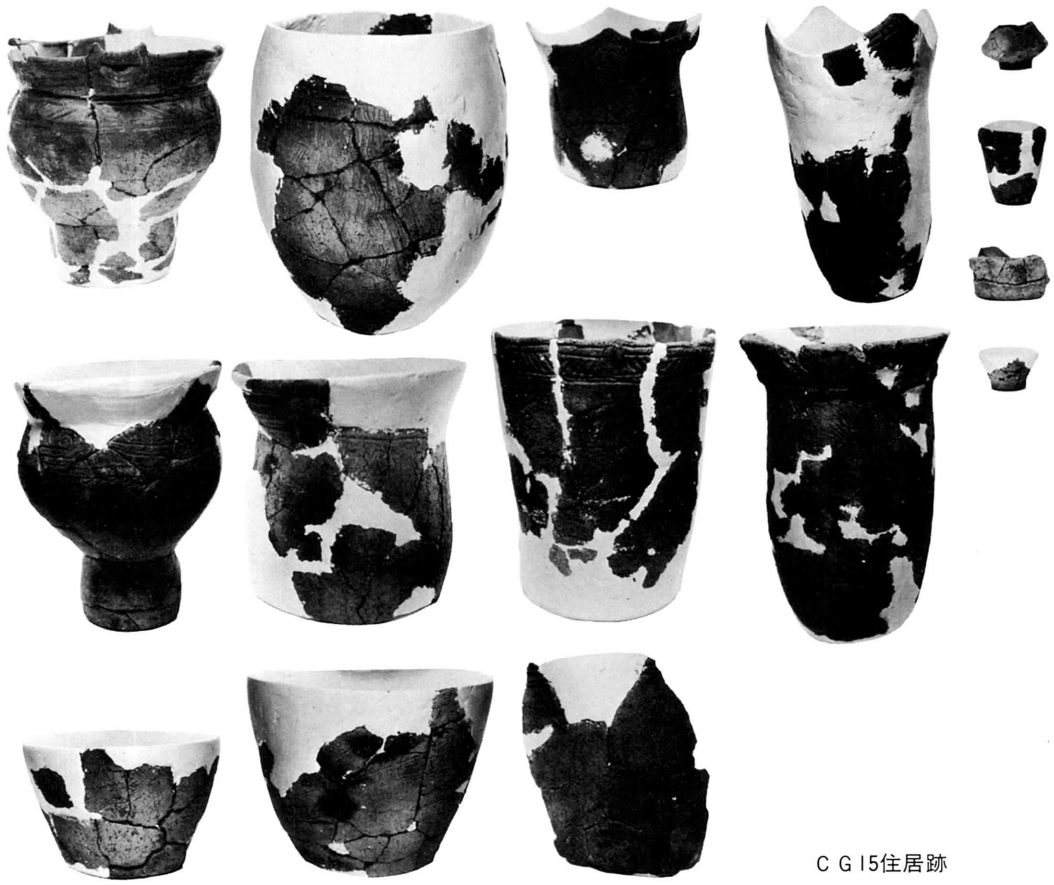
1. 本遺跡は、縄文時代前期末～晩期、奈良時代末期～平安時代、近世以降のそれぞれ集落跡である。
2. 縄文時代の前期末～中期初頭の集落の様相の好資料を提供する。とりわけ大型住居と貯蔵穴のあり方は貴重である。
3. 同じく該期の良好な諸遺物をも提供する。それらは従来不鮮明とされた大木6式・7a式の土器組成内容を明らかにし、さらに細分の見通しをも与えるものである。
4. 古代の集落・遺物については、この地域における該期の良好な類例を増したことになり、従来の見通しを裏づけるものであった。
5. 近世以降の墳墓については、資料蓄積の不足しているこの種遺構に良好な資料追加をなしたものである。
6. さらに、正確な出土層位の確認は行なえなかったが、旧石器と見做しうる石器類の存在は、本地域の該期の遺跡検出の可能性を物語るものといえる。

以 上



写 真 图 版





C G 15住居跡



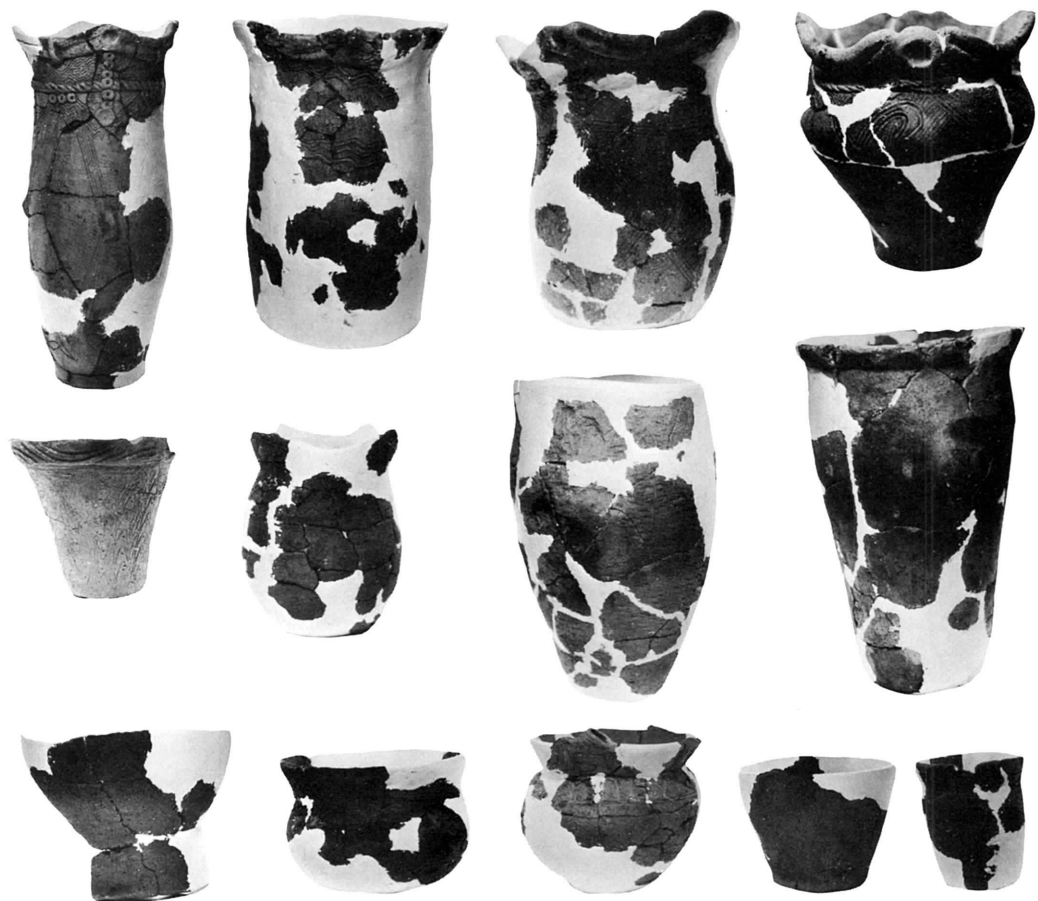
C I 21住居跡



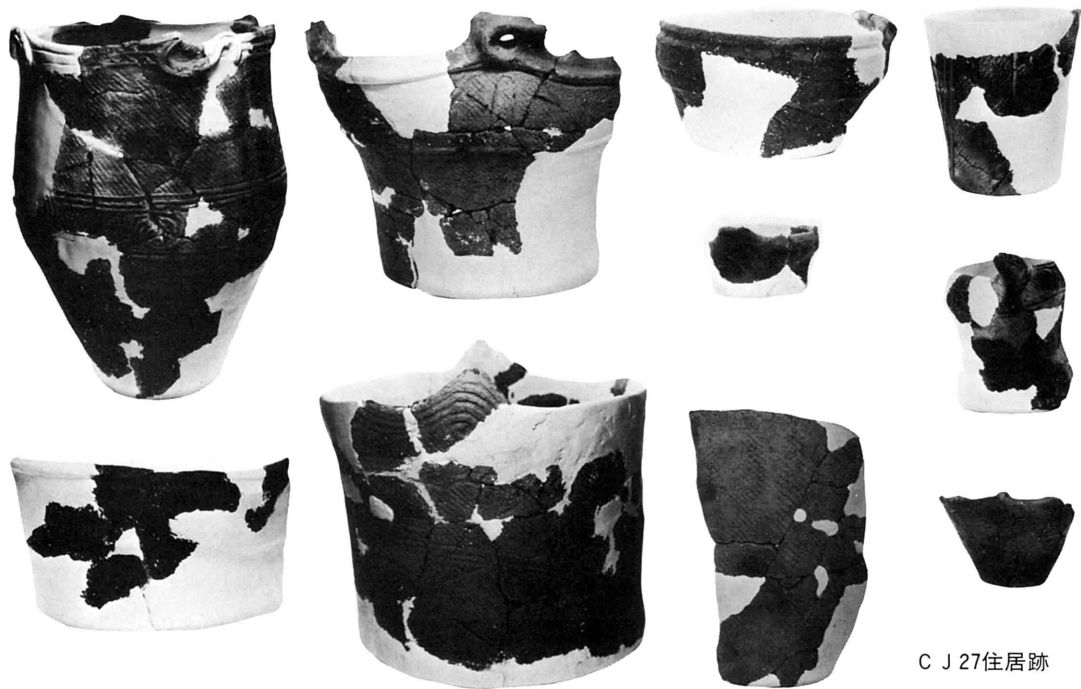
E C 62住居跡

図版 I

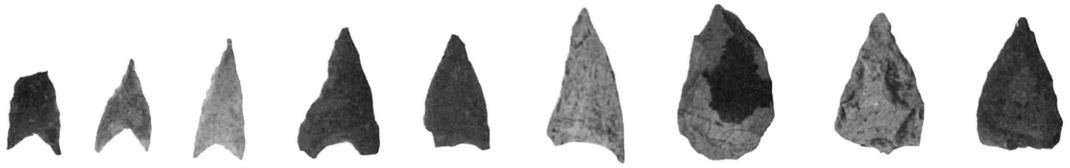
C G 15住居跡・C I 21住居跡・E C 62住居跡出土土器



C J 24住居跡



C J 27住居跡



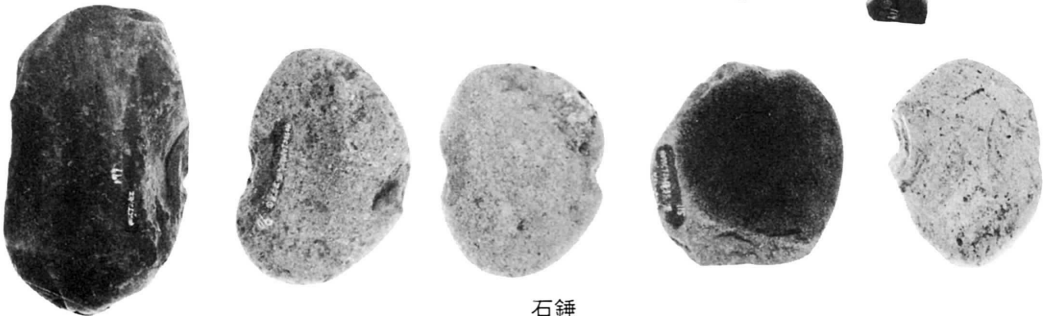
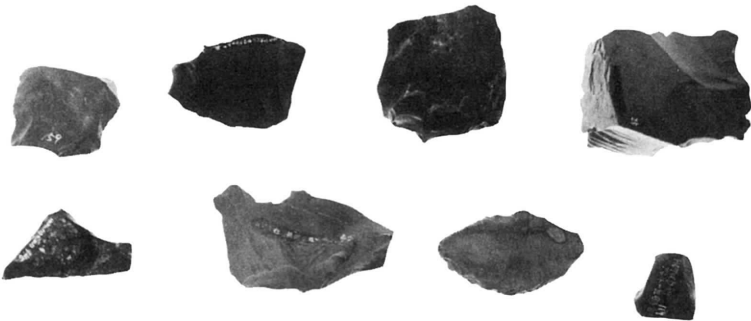
石鏃



石匙

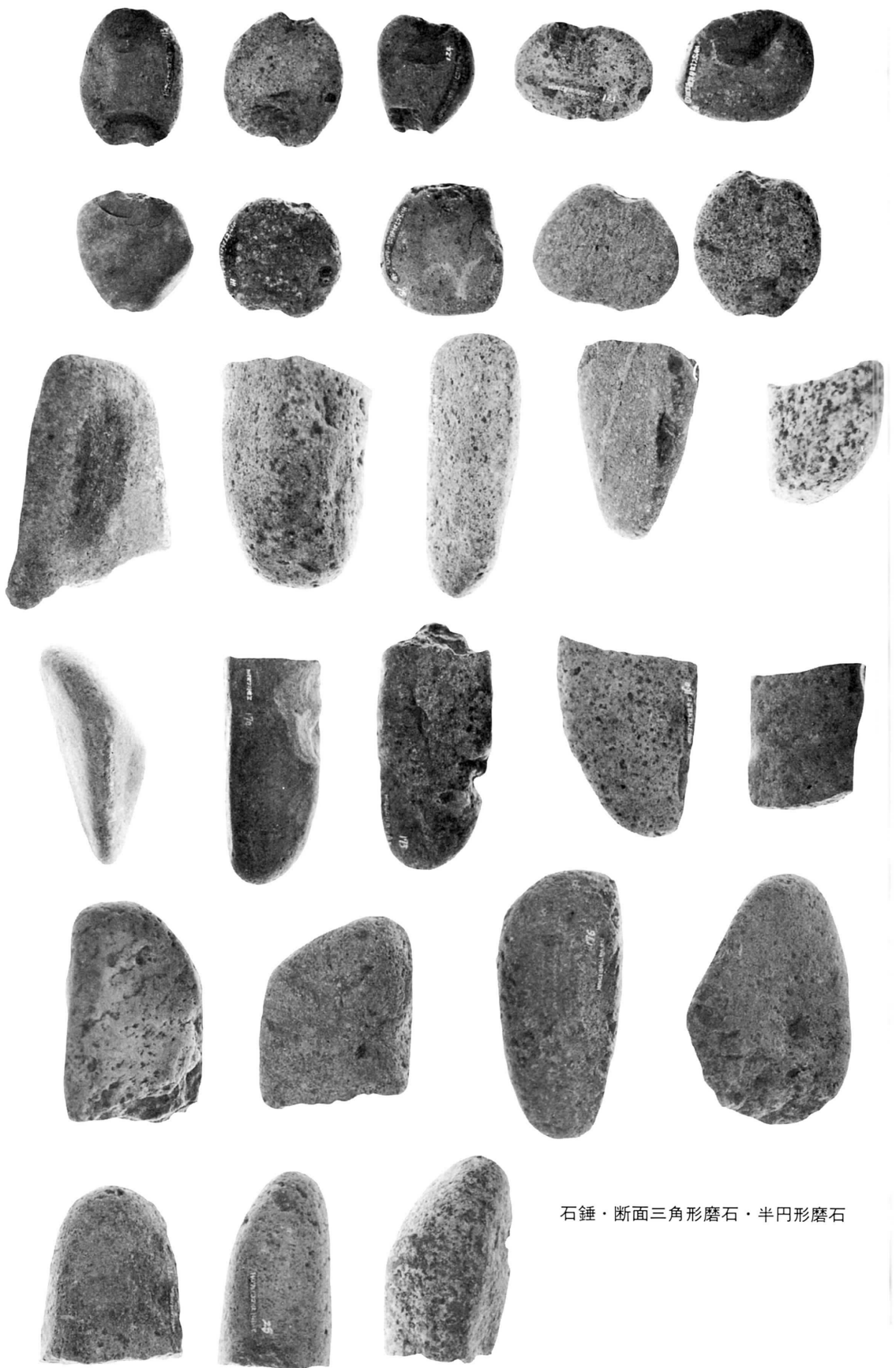


石鐮器

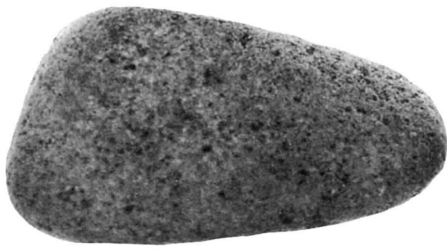


石錘

图版 3 C J 24住居跡出土石器(1)



図版4 C J 24住居跡出土石器 (2)



断面三角形磨石

磨石



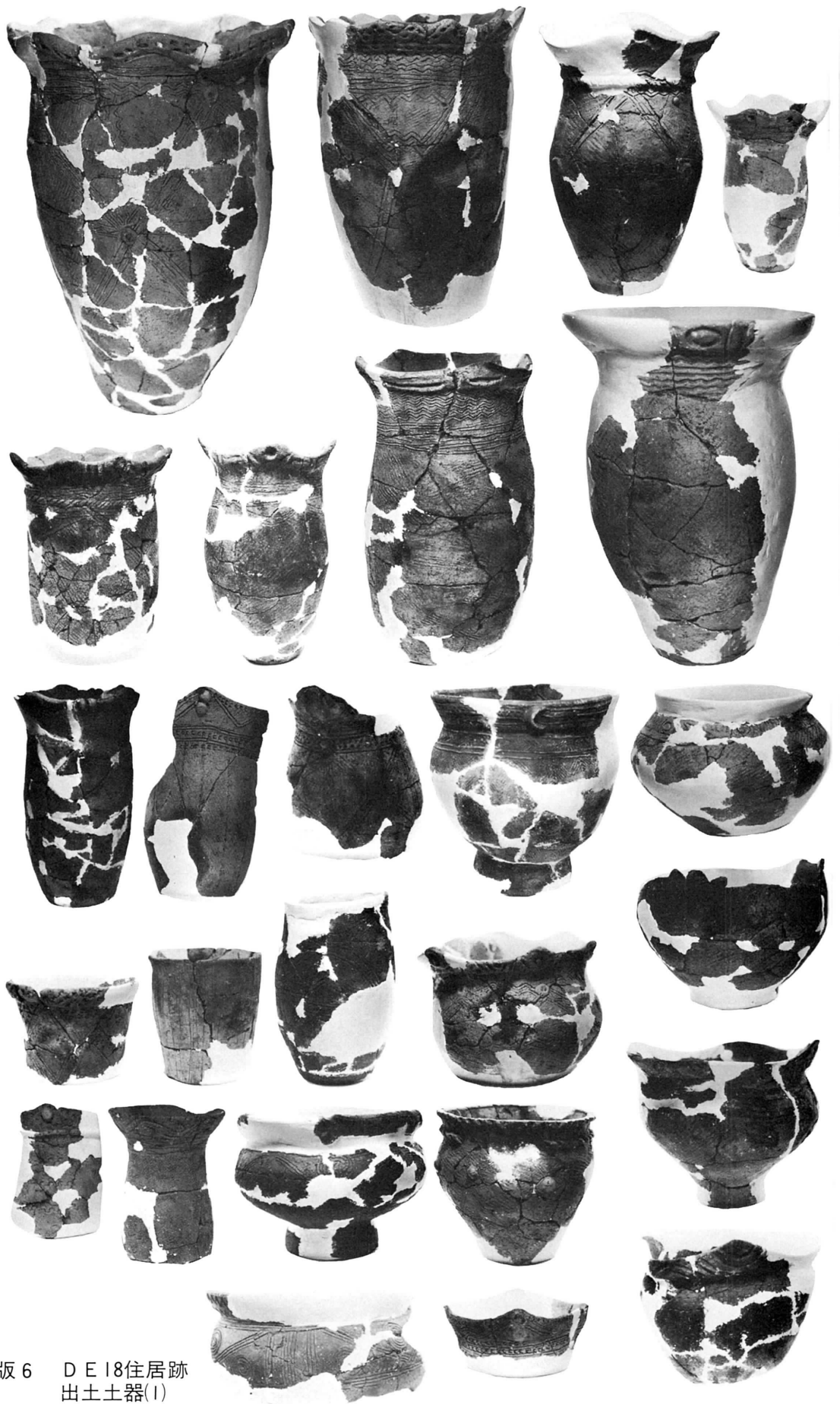
磨石



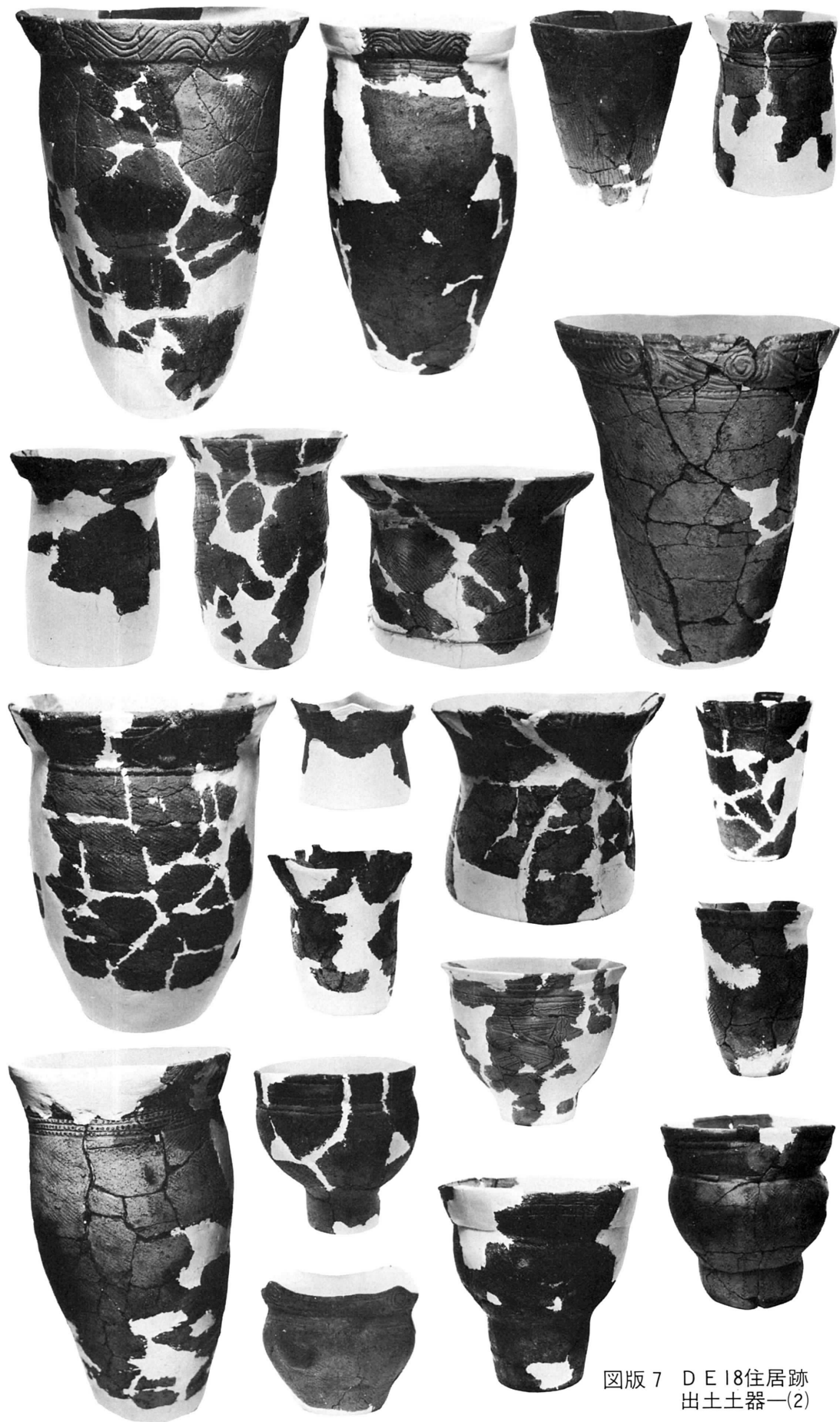
石皿



砥石



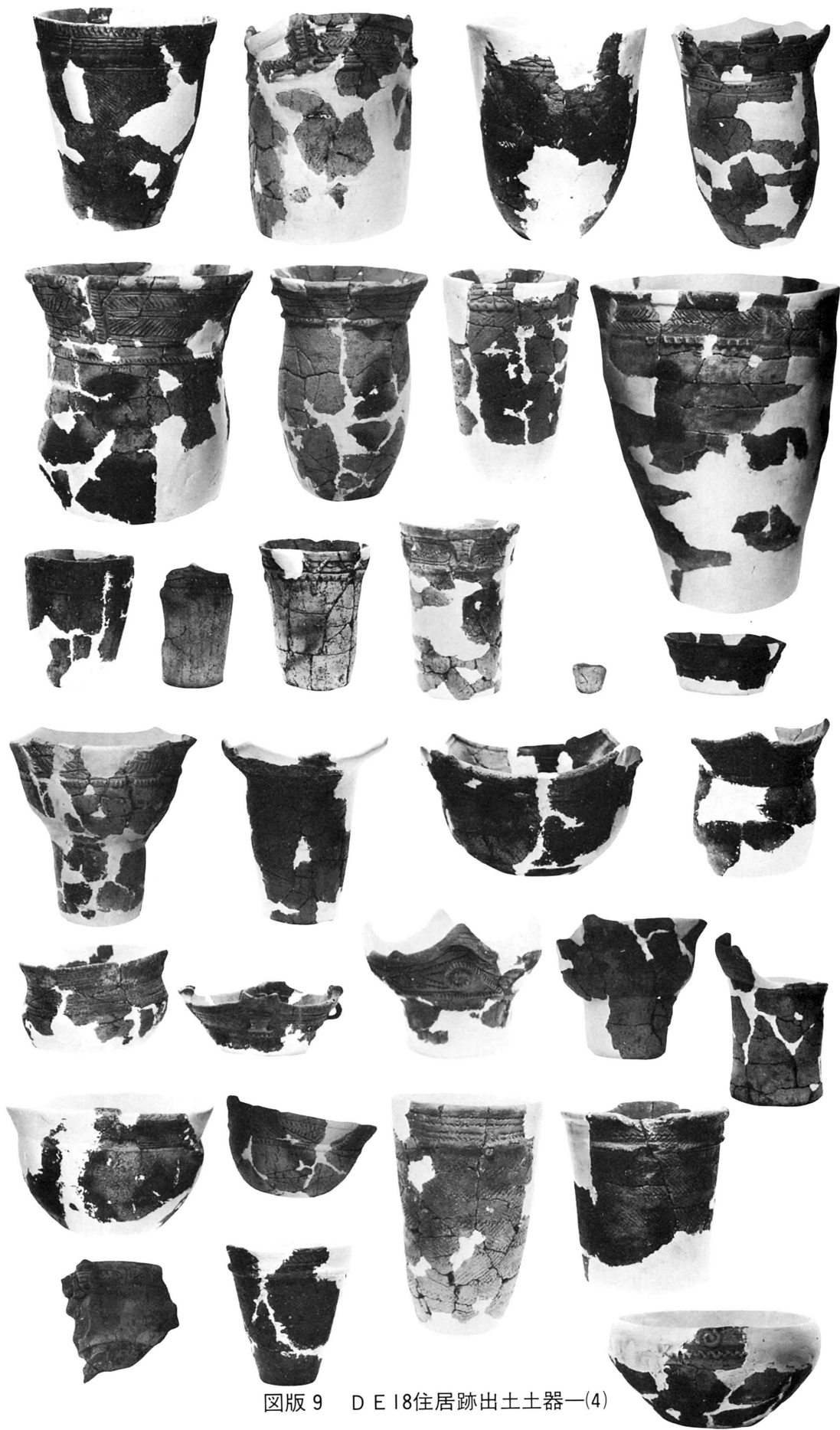
图版 6 DE 18住居跡
出土土器(1)



图版 7 D E 18住居跡
出土土器一(2)



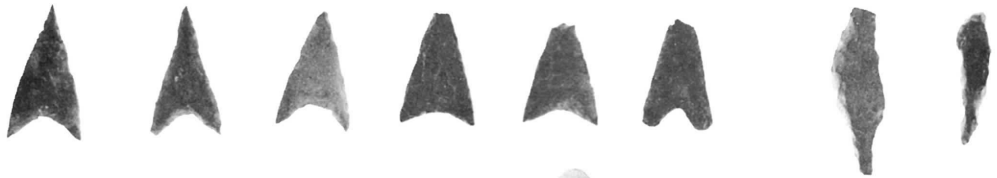
图版 8 DE 18住居跡出土土器一(3)



图版 9 D E 18住居跡出土土器一(4)



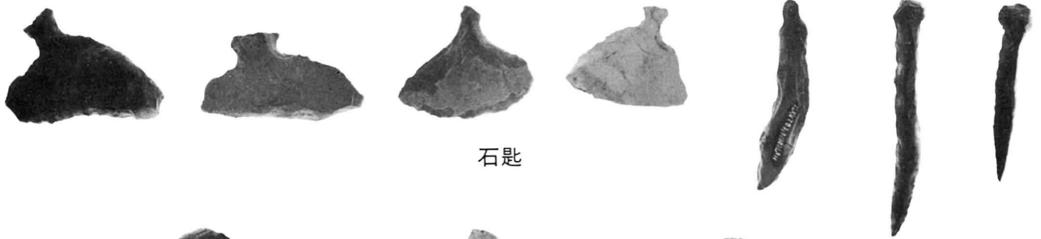
图版10 D E 18住居跡出土土器一(5)



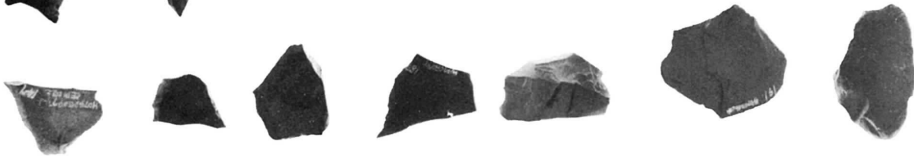
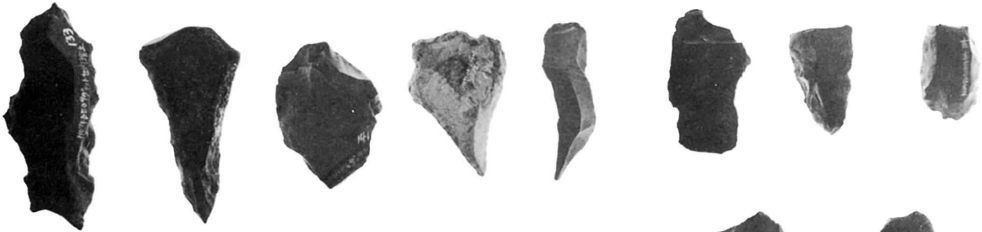
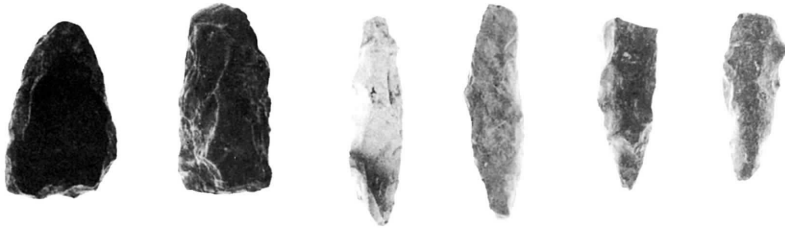
石錐



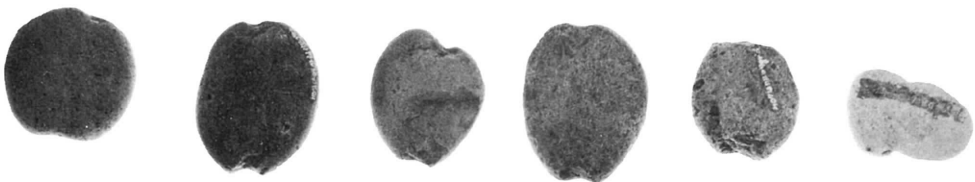
石鏃



石匙

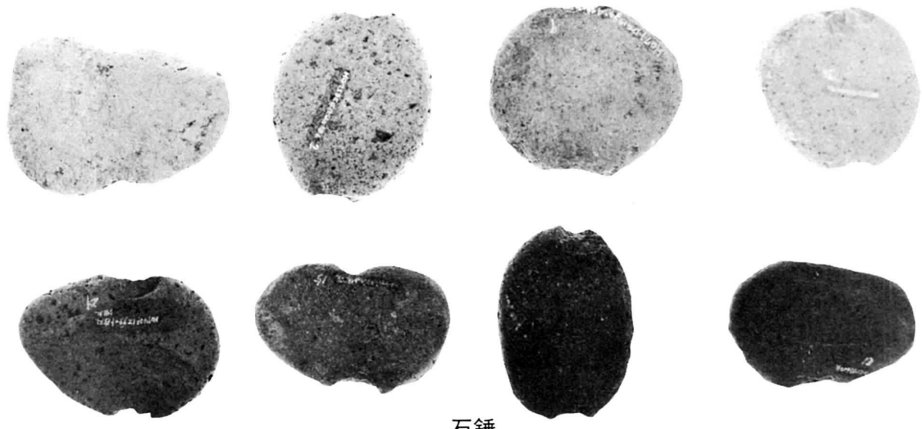


搔器

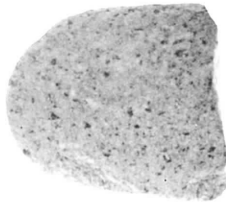
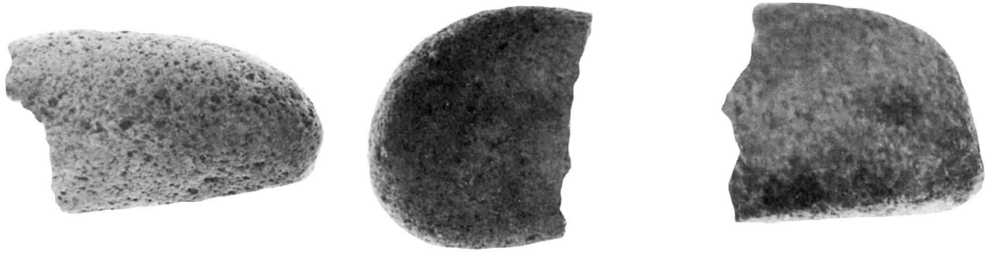


石錘

图版II DE18住居跡出土石器一(1)

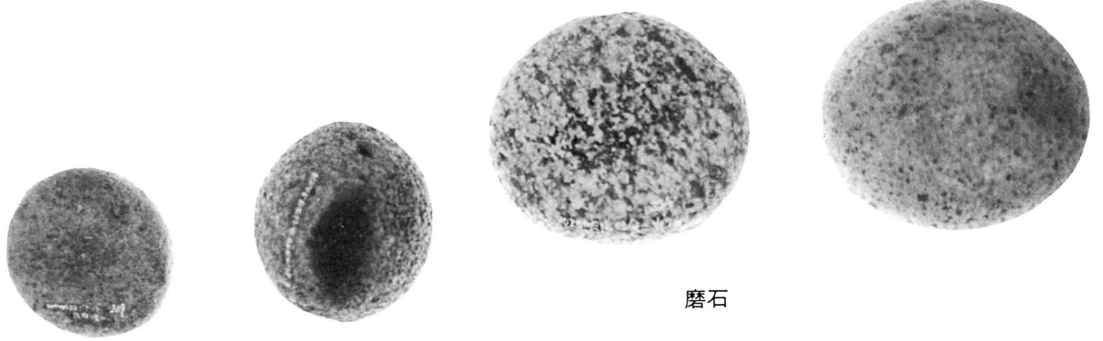


石锤



石斧

断面三角形磨石



磨石



石皿

图版12 D E I 8住居跡出土石器一(2)



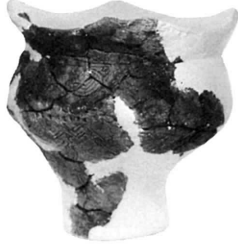
C B 53 P. 1



C G 18 P.



C I 27 f. P. 2



C J 30 f. P.



D A 15 f. P.



D A 24 f. P.



D B 18 f. P.



D B 24 f. P.



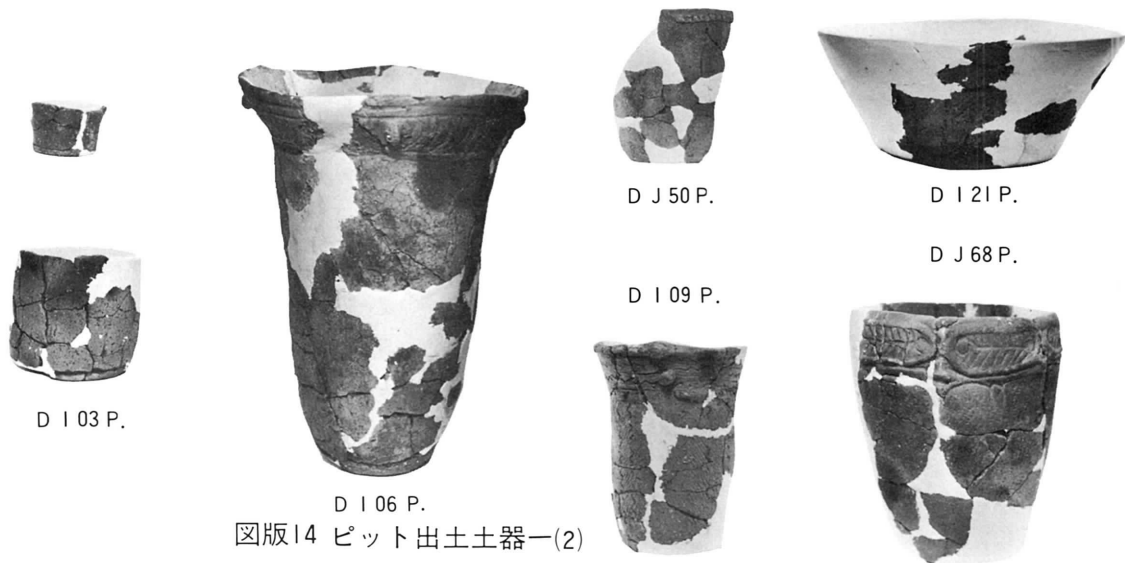


D B 30 f. P.

D G 15 P. I



D G 18 f. P.



D I 03 P.

D J 50 P.

D I 21 P.

D J 68 P.

D I 09 P.

D I 06 P.



E A 03 P. 3.



E A 03 P. 2



No. 1



E B 06 P.

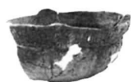
No. 2



E A 59 P.



E B 09 f. P. 2



E B 59 f. P.

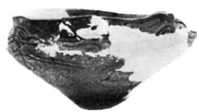


E C 15 P.



No. 1

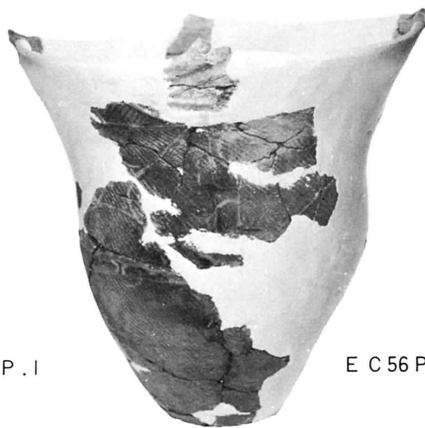
E C 50 f. P. 1



E C 62 f. P.



E C 68 P. 1



E C 56 P. 1



E D15P.3

E D24P.2



E D53P

E D59 f. P.3



E D71P

E E12P.1

d 層



1 E E21P.1

2

E E15P.1 図版16
ピット出土土器一(4)



E E 50 f. P. 1



No. 1



E E 62 P.



E E 65 P. 2



No. 2

E E 68 f. P. 3



E F 27 P. 1



E F 71 f. P. 1



E G 03 P. 2



E G 53 f. P.



E G 65 f. P.



E G 06 f. P. 1



E G 71 f. P.

E J 59 P. 4



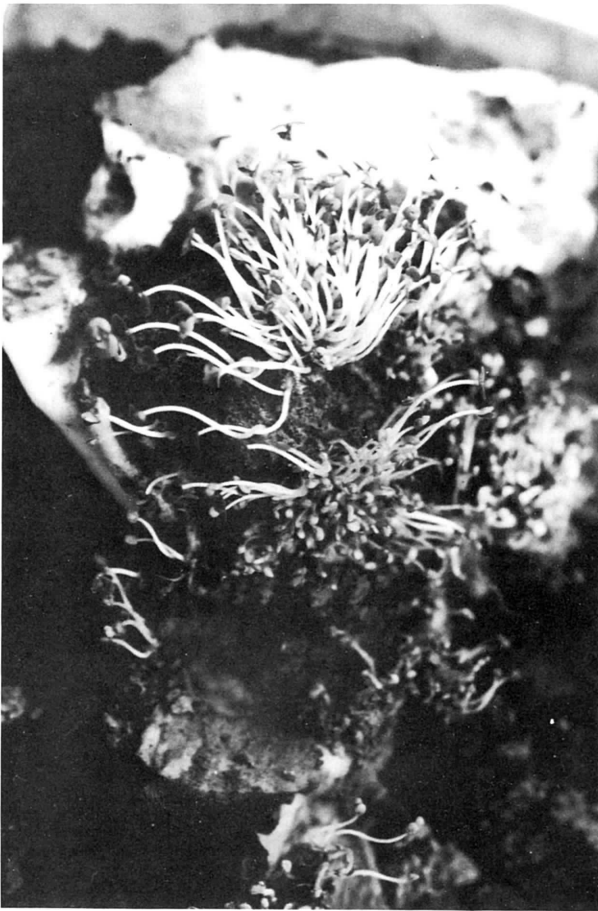
E H 06 P.



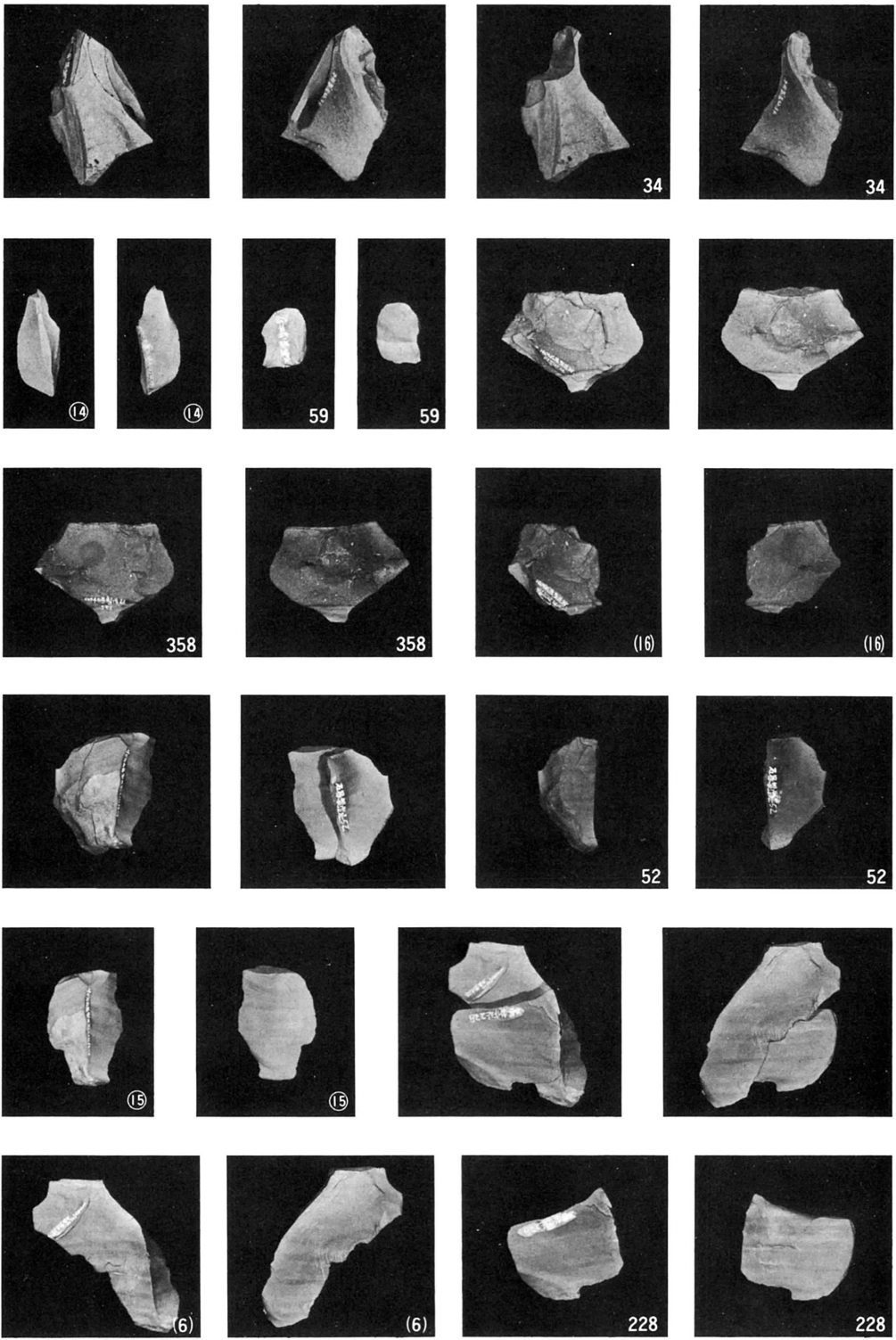
E J 71 P.



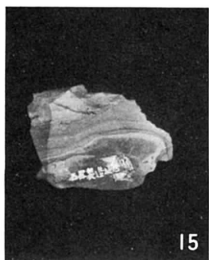
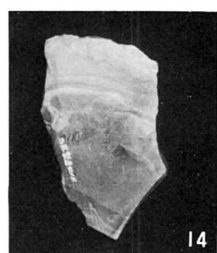
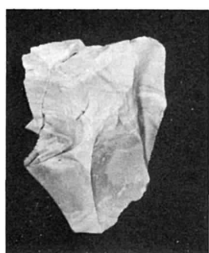
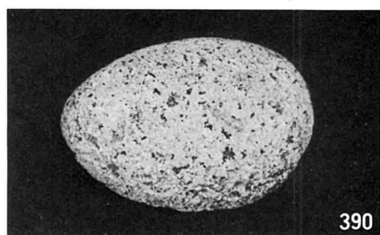
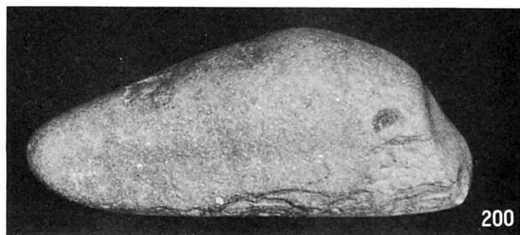
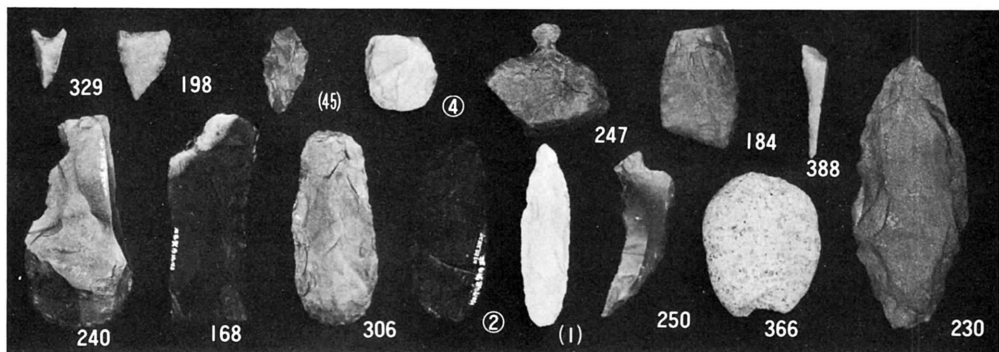
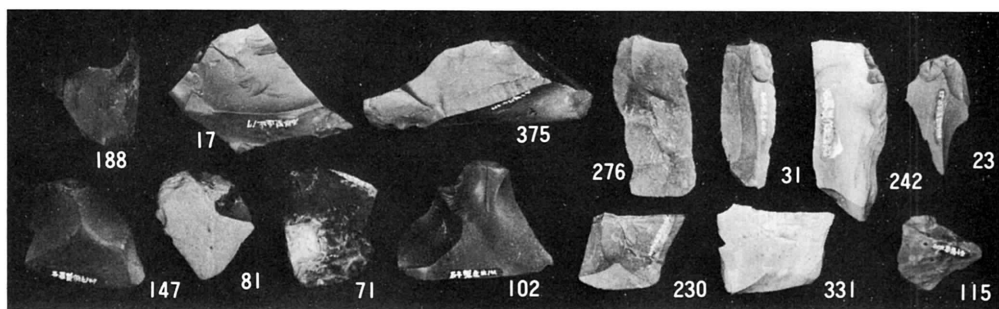
図版17 ピット出土土器一(5)



DD15 f. P. 出土
シソ種実の発芽状況



図版19 石器製造跡出土遺物(接合資料)



图版20 石器製造跡出土遺物



出土地点不明



G A 12G-III



C B 12G-III



C B 15G-II



C B 15G-III



C G 03G-III



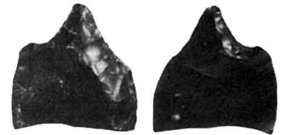
C 121G



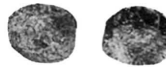
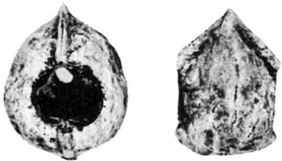
D F 15G



D F 24G No. 1



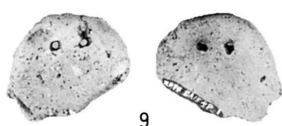
旧石器の可能性をもつ石器類



図版21 包含層出土の遺物・クルミ・モモ



16 ⊕ 24



9



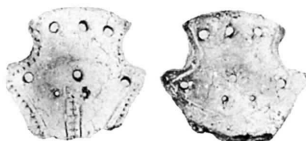
3



104



109



32



4



23



19 ⊕ 29



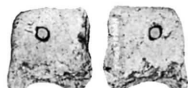
111



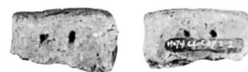
118



36



10



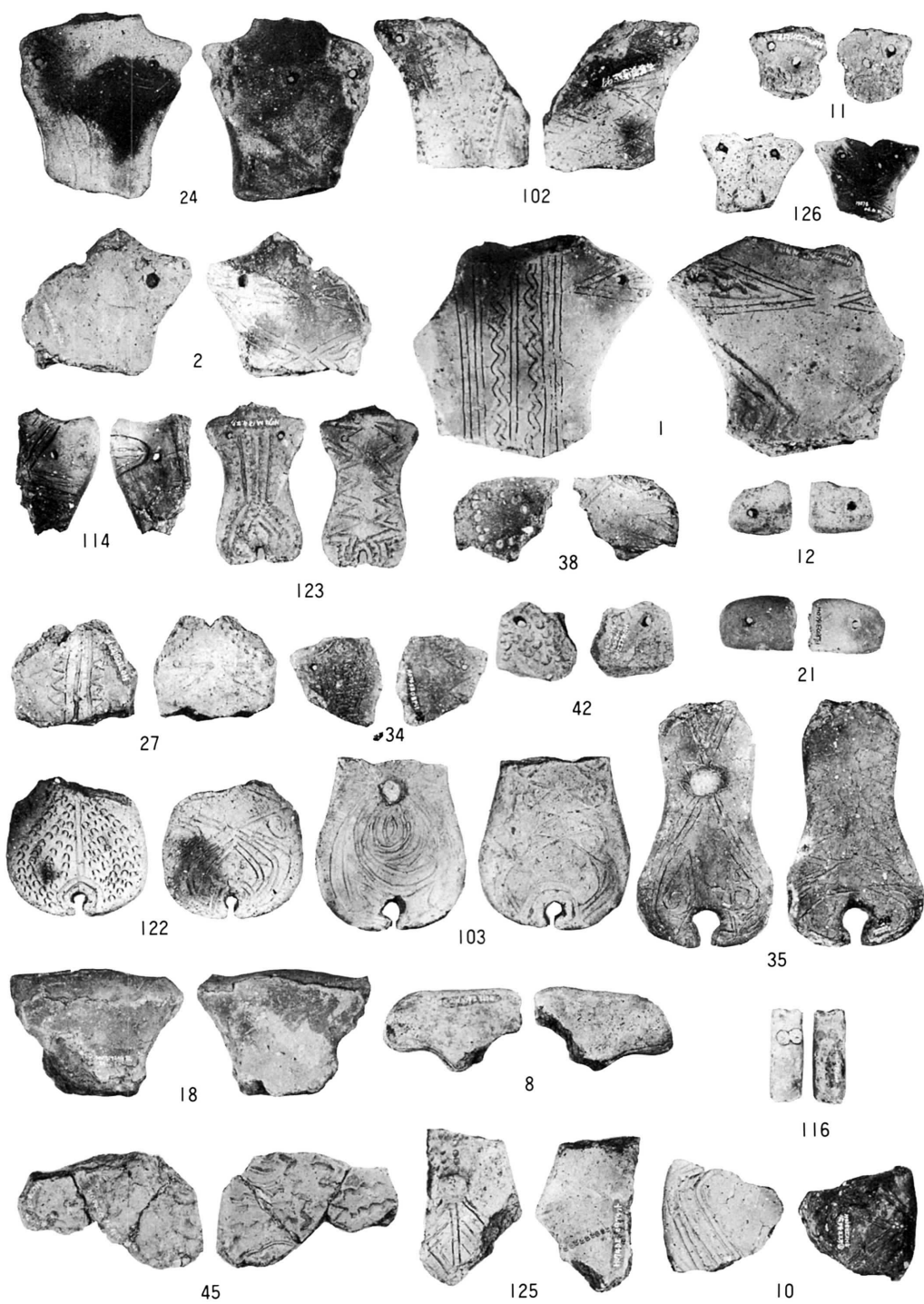
119



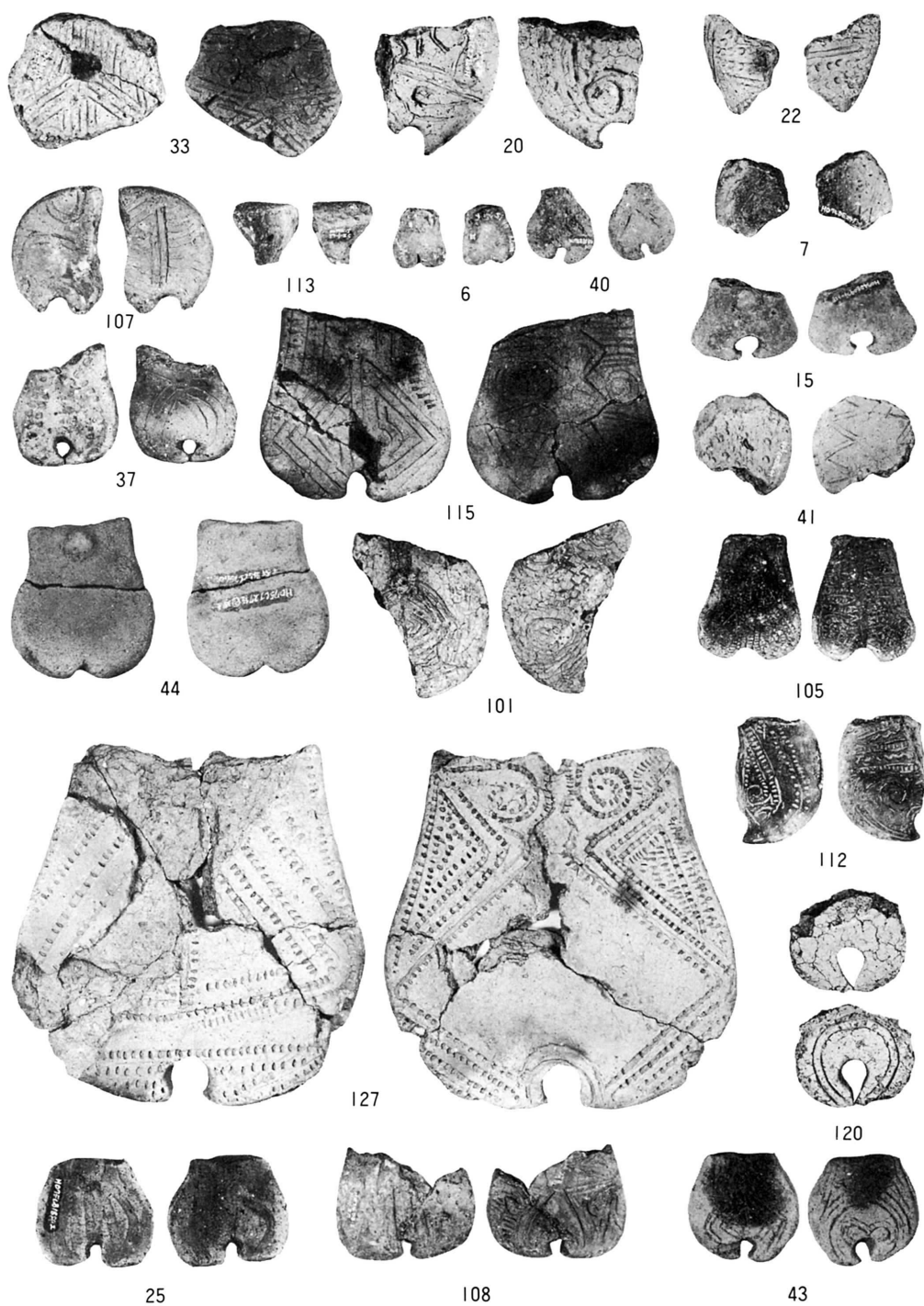
30

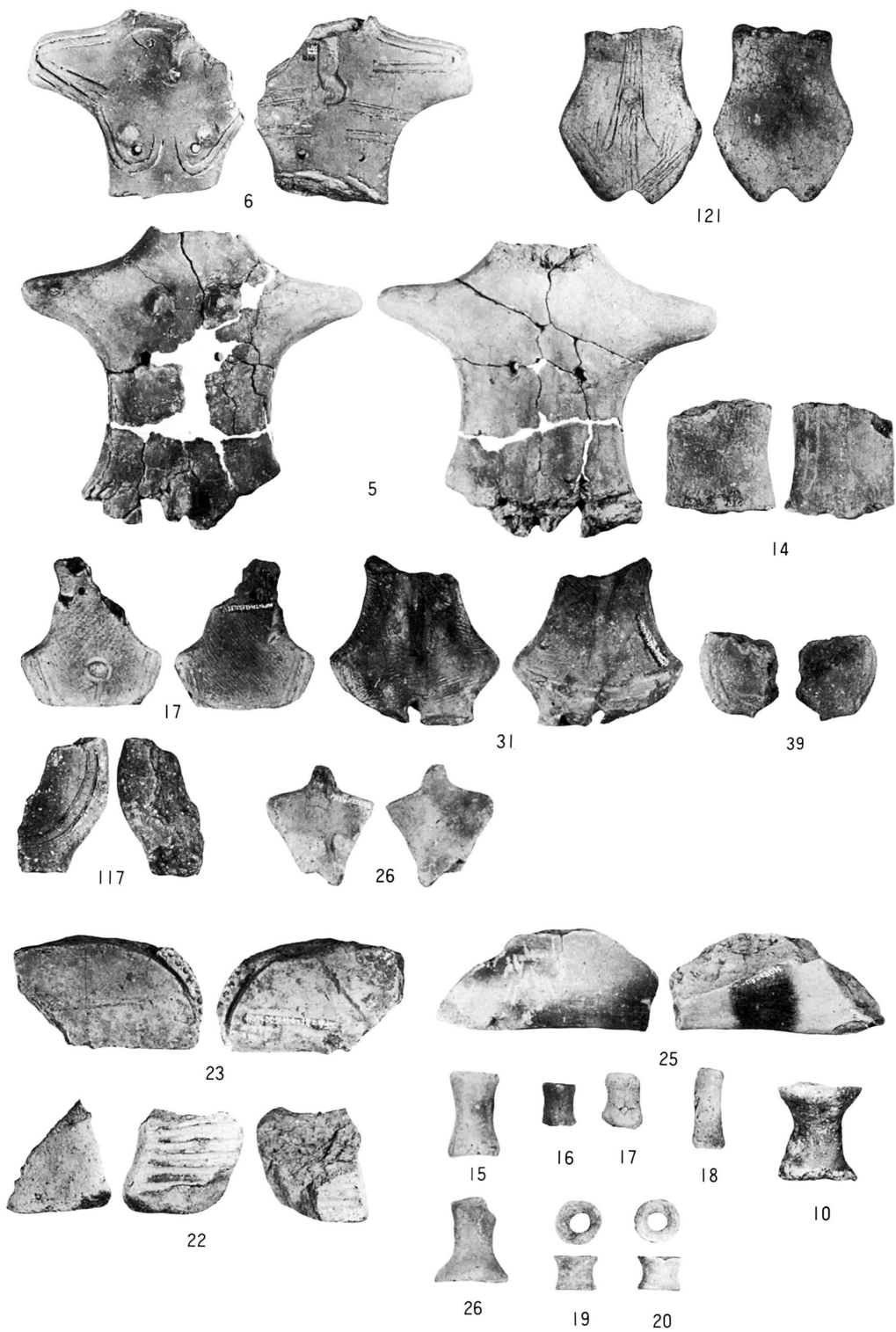


28

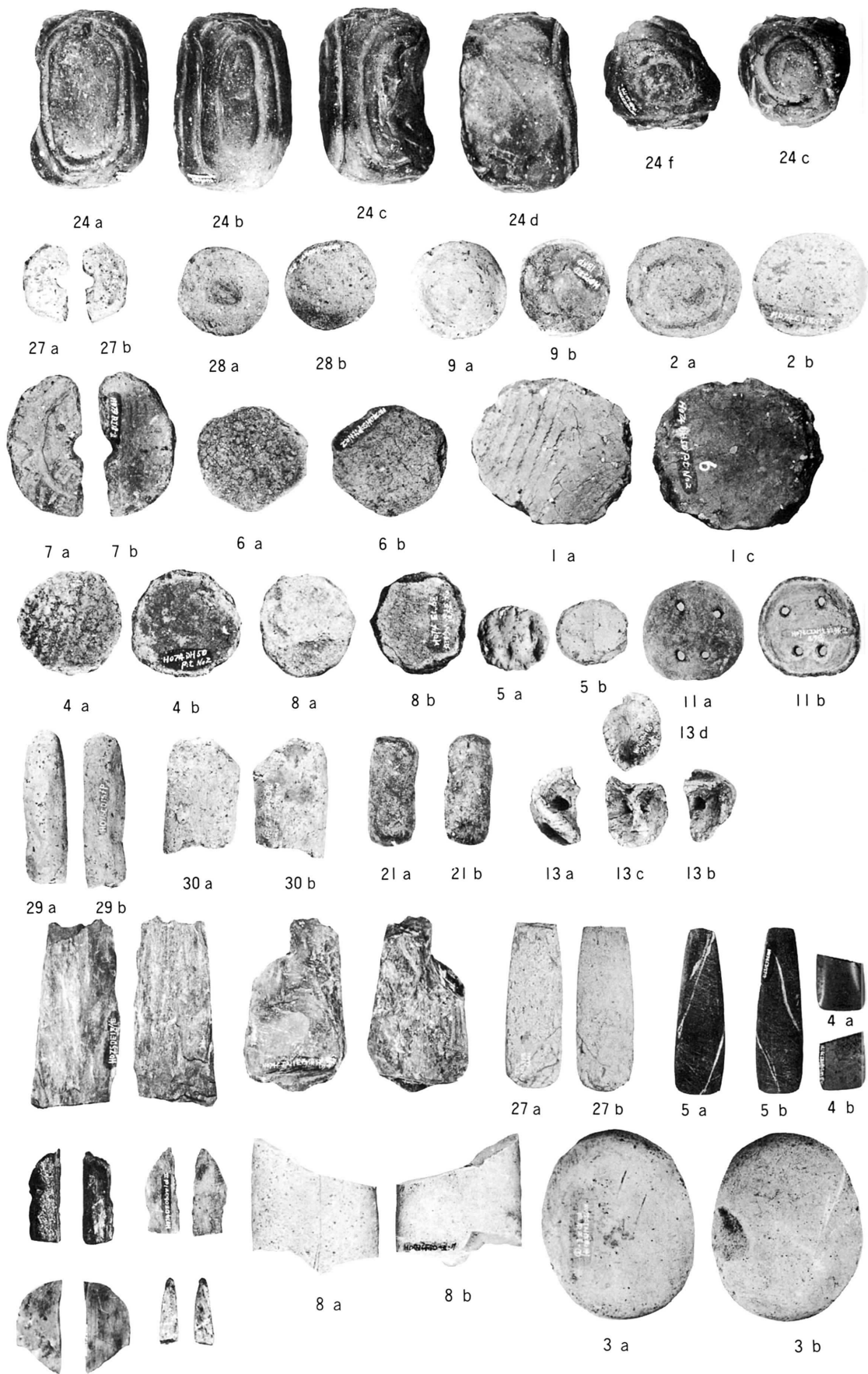


图版23 土偶一(2)

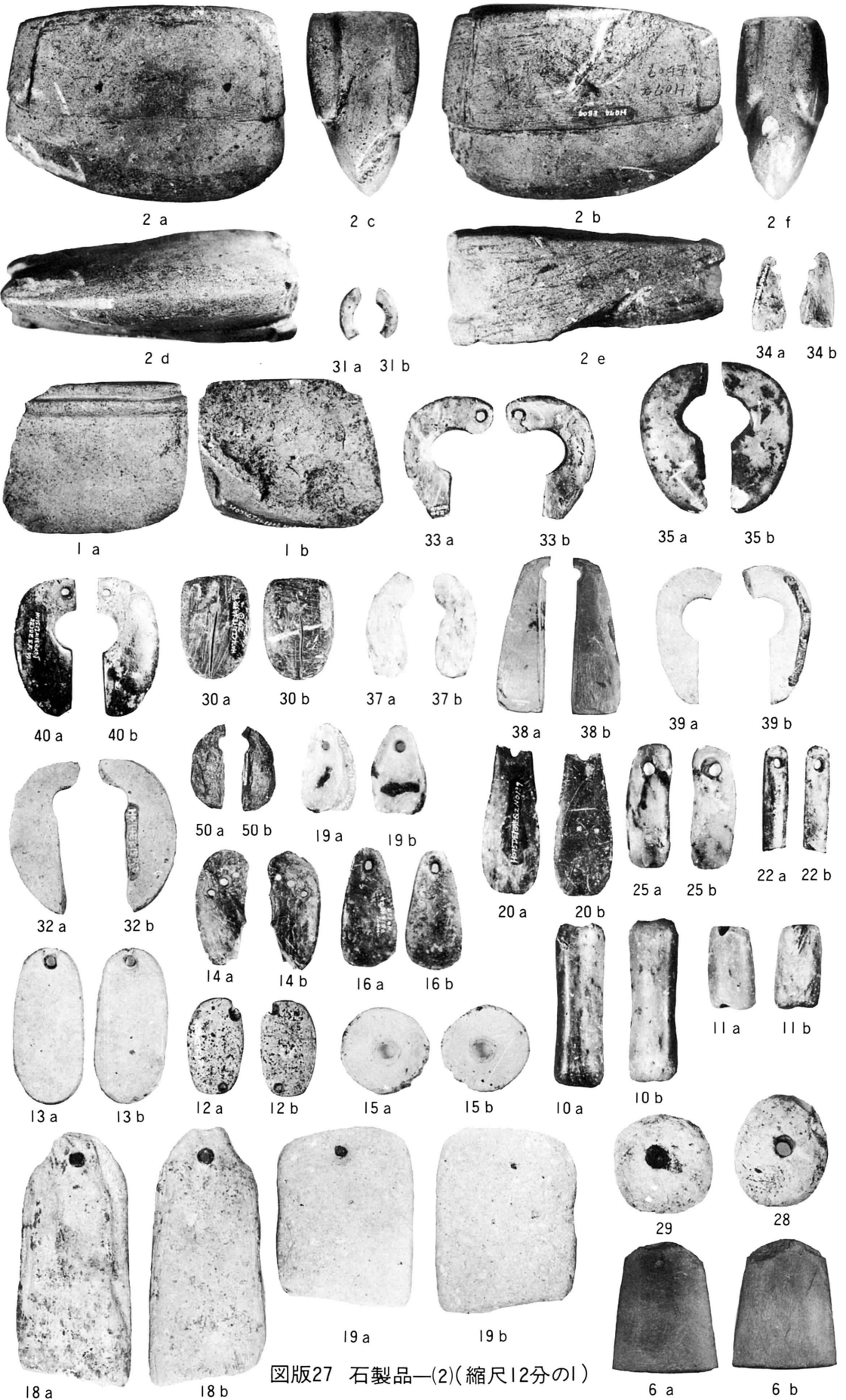




图版25 土偶一(4)·土製品一(1)



図版26 土製品一(2)・石製品一(1)(縮尺2分の1)



図版27 石製品一(2)(縮尺12分の1)



D A 24住居跡



D D 09



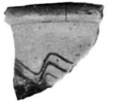
D E 24 b 層ベルト内



D D 18住居跡



D G 24住居跡(カマド)



D H 18住居跡



D J 21住居跡



No. 2

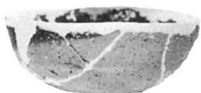


No. 3

D J 27住居跡



E I 50 P.



D J 50住居跡



No. 12



No. 8



(42)



No. 1

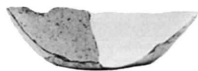
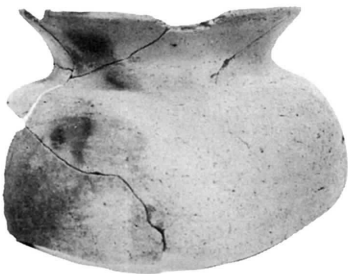
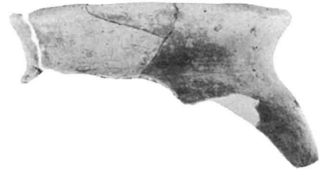
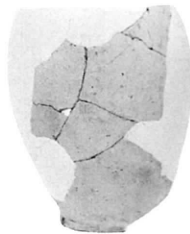


No. 3



No. 10

E A 12住居跡



E A 21住居跡

(須恵器)



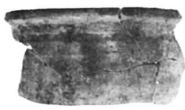
D J 62住居跡



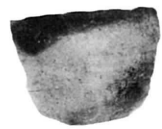
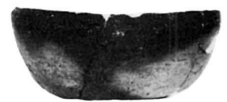
E D 27住居跡



E C 56住居跡



D E 27住居跡 P. I



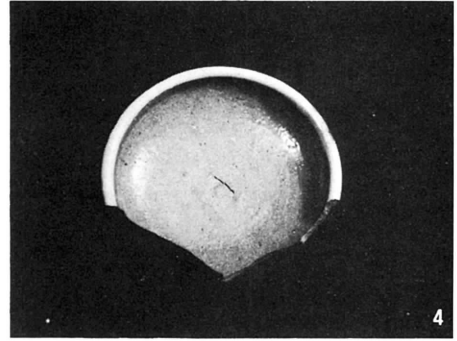
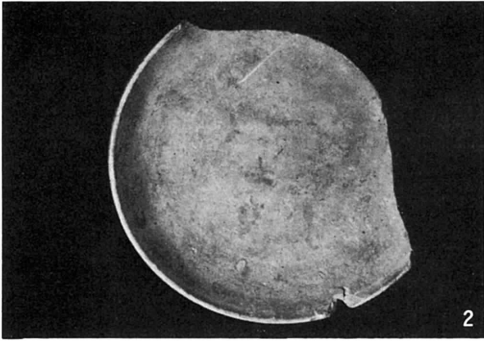
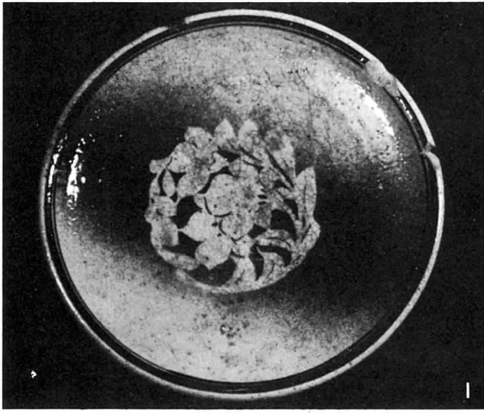
E E 50住居跡



No. 3



E I 62住居跡



5



6



7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18



图版31 近世墳墓出土遺物

岩手県教育委員会事務局文化課職員一覧

(埋蔵文化財関係)

文化課長	熊谷正男	臨時職員	小林三千江
課長補佐(総務)	鎌田良悦		菊池純子
同(文化財)	服部完郎		鈴木優子
庶務係長	鈴木康之		秋葉良子
主事	佐藤伸一郎		黒田アヤ子(10月退職)
同	佐藤貞行		長坂麗子(10月退職)
主任文化財主査	菊地郁雄		伊藤ふく
技師	佐々木勝		及川容子(10月退職)
			前川みどり
			佐々木智子
縦貫自動車道調査班			堀間好子
主任文化財主査	吉田努		寺島憲子
文化財主査	斎藤淳		真田和子
同	昆野靖		細矢節子
同	相原康二		吉田和子
同	八重樫良宏		阿部由美
文化財調査員	狩野敏男		小山田裕子
同	田村壮一		吉嶋登子(1月退職)
主事	石川長喜		佐々木るい子
臨時職員	桜井芳彦		
	高橋生子		
	小西エイ子		
	漆原悦子		
	亀ヶ森恭子(5月退職)		
	藤原周子(6月退職)		
	後藤裕子		
	石田千鶴子		
	村井隆		
	小林史子		
	村上良子		

岩手県文化財調査報告書第70集
東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 XV-2
(江釣子村鳩岡崎遺跡 遺物・要約・分析鑑定結果編)

昭和57年3月発行

発行 岩手県教育委員会
盛岡市内丸10-1 TEL 0196 (51) 3111
印刷 株式会社 杜陵印刷
盛岡市厨川4-2-6 TEL 0196 (41) 8000
